

PADI'S GUIDE TO TEACHING



PADI[®]

PADI's Guide to Teaching

© PADI 2019

Portions of the Appendix of this guide may be reproduced by PADI Members for use in PADI-sanctioned training, but not for resale or personal gain.

No other reproduction is allowed without the express written permission of PADI.

PADIメンバーは、このガイドの付録部分をPADIの認可したトレーニングでの使用に限り複製することができます。しかし、個人の利益を目的にこれを再販したり、複製したりすることはできない。

その他の部分については、PADIからの書面による許可なくして複製することはできない。

Published and distributed by PADI

30151 Tomas

Rancho Santa Margarita, CA 92688-2125 USA

Product No. 79540J-5 (Rev.01/19) Version 1.0

スクーバ・ダイビングは、リスクを伴わない完全に安全な活動にはなり得ない。しかしながら、PADIコースやプログラムに参加するダイバーをトレーニングし、監督するときには、このマニュアルに概説されている理念と講習テクニックを守ることにより、ダイバーや初心者がリスクを管理する方法を学び、そのプロセスにおいて楽しい時間を過ごすための強力な基盤とすることができる。

このマニュアルの使い方

PADIガイド・トゥ・ティーチングは、PADIインストラクター・マニュアルと対になっている。PADIインストラクター・マニュアルが規準をリストしている一方で、PADIガイド・トゥ・ティーチングは、規準についての説明、講習テクニック、規準を満たすためのアプローチを記載している。コースの必要条件を満たすことに関する「ハウツー」情報が載っている。PADIガイド・トゥ・ティーチングの3つのセクションをPADIインストラクター・マニュアルと併せて使って、各PADIコースおよびプログラムを実施する。

PADIコース／プログラムを教える準備をしているとき、特に定期的には実施していないもの場合には、このマニュアルがトレーニングセッションとダイブの計画を立てるのに役立つ。ここには、学習障害がある生徒ダイバーや、トレーニングを中断していた生徒ダイバーが戻ってきてトレーニングを再開する場合など、特別な状況に対する対処法についてのガイダンスも載っている。どのような情報が載っているかを熟知することにより、便利な指導ツールとして頻繁に有効活用できるようになる。

PADIガイド・トゥ・ティーチングはインストラクター開発プログラムで使い始め、インストラクターとして長く使うことになるものである。その内容と記載されている情報の探し方は以下の通りである。

講習テクニック

このセクションの大部分は、PADIの中心的なコースとプログラムの「実施方法とスキルについての推奨事項」で構成されている。各コース／プログラムの「概要」の後に、「総合的アドバイス」、「順序についての注意事項」、スキルを教える限定水域とオープンウォーター・ダイブを実施する場合の具体的な指示が記載されている。

さらに2つのサブセクションがあり、特別な状況での講習テクニックと一般的注意事項、時間と資源を最大限に活用するための準備に関するアドバイスなどが記載されている。

理念とアプローチ

このセクションは、PADI組織とPADIダイバー教育システムについて述べている部分である。また、リスク管理に対するPADIのアプローチと、クオリティ・マネジメント／アシュアランス／表彰制度についても述べている。さらに、ダイビングリーダーの育成に関する情報、ならびに指導アプローチと理念に関するその他の重要参考資料が入っている。

メンバーシップ手続き

PADIリージョナル・ヘッドクォーター（地域のオフィス）に認定カードをオーダーするときの手順など、手続きに関する一般情報を確認する必要がある場合には、このセクションを参照する。

目次

このマニュアルの使い方	3
講習テクニック – 実施方法とスキルについての推奨事項	7
オープン・ウォーター・ダイバー・コース – 実施方法とスキルについての推奨事項	9
概要 – 限定水域ダイブ	9
限定水域の実施方法とテクニックについての推奨事項	12
概要 – オープンウォーター・ダイブ	30
オープンウォーターの実施方法とテクニックについての推奨事項	33
アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・コース	
– 実施方法とスキルについての推奨事項	45
概要	45
Thinking Like a Diverのディスカッション・ポイント	47
アドベンチャー・ダイブの実施方法とテクニックについての推奨事項	49
コアダイブ	49
エレクティブ・ダイブ	51
レスキュー・ダイバー・コース – 実施方法とスキルについての推奨事項	57
概要	57
レスキュー課題の実施方法とテクニックについての推奨事項	61
レスキュー・レビュー	68
レスキューシナリオの実施方法とテクニックについての推奨事項	69
ダイブマスター・コース – 実施方法とスキルについての推奨事項	71
概要	71
ダイブマスター水中スキル開発の実施方法とテクニックについての推奨事項	76
ダイブマスター実践応用の実施方法とテクニックについての推奨事項	79
ディスカバー・スクーバ・ダイビング – 実施方法と推奨事項	87
概要	87
スキルの紹介	88
海の限定水域とオープンウォーターにおけるコントロールと監督	89
ディスカバー・スクーバ・ダイビング・リーダー	90
PADIシールチーム – 実施方法とスキルについての推奨事項	91
概要	91
アクアミッションの実施方法とテクニックについての推奨事項	92

ReActivateプログラム – 実施方法と推奨事項	107
概要	107
水中スキルについての一般的注意事項	107
ディスカバー・スノーケリング – 実施方法と推奨事項	109
概要	109
ディスカバー・スノーケリングの実施方法とテクニックについての推奨事項	111
ディスカバー・ローカル・ダイビング – 実施方法と推奨事項	112
概要	112
総合的アドバイス	112
講習テクニック – 一般的注意事項	113
知識、スキル、準備を評価する	114
環境保護	114
ドライスーツの使い方	114
エンリッチド・エアの使用	115
器材に関する注意事項	115
トレーニングの中断	115
ナレッジレビュー	116
学習障害	116
ダイブのログ付け	116
ダイビングに適した健康	117
身体障害	118
委託照会	120
シグナルチューブ (水面マーカーブイ)	121
講習テクニック – 準備	123
認定アシスタント	124
コースのリンク	124
マルチレベル・トレーニング	125
理念とアプローチ	127
PADIの使命	128
PADIの環境とコミュニティへの保護	130
PADIの果たすべき任務	131
PADIダイバー教育システム	135
達成ベースの学習	136

法的責任とリスク・マネージメント	137
自分の健康と安全	137
規準と指導システムの役割	138
事務処理の役割(書類作成)	138
リスク・マネージメントにおける保険の役割	139
法的リスクとダイビング・プロフェッショナル	140
クオリティ・マネージメント／アシュアランス／表彰制度	144
概要	144
クオリティ・マネージメント・フローチャート	145
ダイビングリーダーの育成	148
参考資料	151
PADIリテイル&リゾート・アソシエーション・メンバーシップ	151
Affective Instruction Article	155
PADIダイブセンター&リゾートのための児童保護	160
ISO規格とPADIコース	166
メンバーシップ手続き	167
認定カード申請	168
申請手続き	171

講習テクニック

実施方法とスキルについての推奨事項



実施方法とスキルについての推奨事項

このセクションでは、PADIコースのスキル達成条件を満たせるよう、インストラクターが生徒ダイバーを手助けする際に役立つテクニックと推奨事項について述べる。達成条件を満たすのに用いることのできるテクニックは必ずしも一つだけではなく、いくつか異なる方法を使える場合もあるため、ここで述べるテクニックは、生徒ダイバーを目標へ向けて導くためのアドバイスである。独創性と自分独自の講習スタイルを使って、生徒ダイバーを指導することが各インストラクターに求められる。

ここで述べる推奨事項は、PADIインストラクター・マニュアルに規定されているPADIダイバー・コース規準を直接的にサポートするものである(ただし、すべての規準が網羅されているわけではない)。したがって、特定のコース達成条件については、PADIインストラクター・マニュアルを参照することが大切である。

オープン・ウォーター・ダイバー・コース 実施方法とスキルについての推奨事項

PADIオープン・ウォーター・ダイバー・コースは、パディと一緒に監督者なしでダイビングをするのに必要な基本的知識とスキルを生徒ダイバーに教えるコースである。コースの計画、準備、実施にあたっては、生徒ダイバー、スタッフ、そして自分自身の安全を最優先することがインストラクターの主な目的である。

概要 — 限定水域ダイブ

限定水域で、生徒ダイバーは比較的コントロールされた環境で基本的なダイブスキルを練習することにより、知識開発で学んだことを応用する。限定水域で教えるにあたっては、生徒ダイバーのモチベーションと熱意を高く保つために、楽しくエキサイティングな経験をさせることに焦点を絞る。限定水域ダイブは、生徒ダイバーが待ち望んでいる楽しさへのドアを開くものであり、これからの学習へ向けての土台を作るものである。限定水域は、生徒ダイバーが自信を培い、能力を身につけ始める場である。

オープン・ウォーター・ダイバー・コースのスキルは、単純なものからスタートして徐々に複雑なものを学ぶという順序になっている。スキルを教えるにあたっては、次の段階へ進む準備ができているかどうか生徒ダイバーのモチベーションに注意し、マスターするまで繰り返し練習させる。

総合的アドバイス

オープンウォーター・ダイブへ向けてのスキルベースを作ることが限定水域ダイブの目的なので、限定水域セッションでは、できる限りオープンウォーター・ダイブをシミュレーションする。

1. **楽しいものにする。**水に入った最初の瞬間から楽しい思いができれば、生徒ダイバーは上手に学習できるようになり、学習のスピードが上がり、難題にも熱意を持って取り組むようになり、自信を持ってダイビングできるようになる。どうすれば楽しいものにできるかは、インストラクターの個人的なスタイルによる。カメラを渡して「ミニダイブ(実践応用ダイブ)」のときに写真を撮って遊ぶ、誰かに限定水域ダイブのビデオを撮ってもらって後で見るなど、ちょっとしたアイデアが生徒ダイバーにやる気を起こさせる。
2. **オープンウォーター・ダイブの正しい習慣が身につくよう、インストラクターはその手助けをしているのだと生徒ダイバーに伝える。**その目的に焦点を絞ることにより、生徒ダイバーは積極的に学習できるようになる。「海はプールほど平らではないし、穏やかではないので、マスクとスノーケルは外さない習慣を身につけましょう」といったようなアドバイスのほうが、マスクとスノーケルは外すなどと言うだけの指示より、学習にとってははるかに効果的である。また、上手に浮力コントロールができるようになってきたら、水底にひざをついた姿勢ではなく、中層に浮いている姿勢や、フィンの先端を水底にそっと当てているだけの姿勢でスキルを練習するよう生徒ダイバーに指示する。そうすることで、練習にリアル感が加わり、自信がつき、正しいダイビング習慣が身につく。
3. **環境を守ることの大切さを強調する。**生徒ダイバーが新しいスキルをマスターするのに合わせて、ダイバーと環境を結び付けて考えるという視点にも焦点を当てる。水中環境を守る方法について話し合い、スキルをマスターすることと環境に優しいダイビング習慣がどう関連しているかについて説明する。
4. **オープンウォーターで使う器材を使用する。**器材に慣れさせることが目的である。オープンウォーターがフード付きのフルスーツを必要とするコンディションの場合には、薄手のものなどで始めて最初の負担を減らし、限定水域ダイブ3までにフル器材になるよう負担を増やしていく。
5. **パディ・システムとエア・マネージメントを徹底させる。**常にパディに手の届く範囲にいるよう生徒ダイバーに指示する。パディと「離ればなれ」になった回数を記録し、回数がいちばん少なかったパディチームに賞品を出すゲー

ムなど、楽しく練習するためのアイデアを考える。また、生徒ダイバーは自分にどのくらい空気が残っているか、インストラクターに聞かれたときに残圧計を見なくても、いつでも誤差が20bar/300psiの範囲内で答えることができなければならない。最も正確に残圧を報告した生徒ダイバーに賞品を出すなど、楽しい方法でエア・マネジメントが身に付くようにする。

6. 練習と体で覚えこむこと(マスタリー)に十分な時間をかける。十分な時間があれば、生徒ダイバーはリラックスして楽しく練習できる。リラックスしていれば、学習効率もアップする。時間ベースではなく、パフォーマンス・ベースの学習にする。各スキルに関して、問題なくできるか、もっと練習が必要か、「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」に書くよう生徒ダイバーに指示する。1回ごとでもよいが、習ったスキルに関して休憩中にまとめて書かせたほうが効率的である。他の生徒ダイバーの前で、自分にはもっと練習が必要だと言うのは嫌だという人は、このスレートを使うことで、もっと練習したい気持ちがあることをインストラクターに伝えることができる。様子を見てスレートの内容をチェックし、必要に応じて追加練習を実施する。
7. ある程度、生徒ダイバーの自由にさせる。インストラクターが責任を負う必要があるのは言うまでもないが、どうしたいか自分で決めさせたほうが、生徒ダイバーは効率よく学習し、自信がつくようになる。生徒ダイバーがスキルを修了したら、次に進む前に、もっと練習したいか生徒ダイバーに聞く。これは、もっと練習したい生徒ダイバーがいることを前提としたアプローチで、自信がつく前に次に進まなければならないという周囲からのプレッシャーを減らすことができる。各限定水域ダイブを終了する前に、上がってもよいか生徒ダイバーに聞く。必要に応じてセッションを延長できるよう、十分な時間を見込んでおく。
8. ミニダイブ(実践応用ダイブ)を実施する。ミニダイブは限定水域ダイブ5で必修だが、スキル習得をさらに強化し、楽しさを高めることを目的に、限定水域ダイブ1の後であればいつでも実施できる。ミニダイブを計画するときには、ビーチダイブをシミュレーションするのか、大型または小型のボートからダイビングするのかなど、生徒ダイバーに選ばせる。

順序についての注意事項

1. 生徒ダイバーは、ひとつの限定水域ダイブの達成条件をすべてマスターしてから、次の限定水域ダイブへ進む。順序通りであれば、1回のセッションで複数の限定水域ダイブを実施してもよい。ダイブの中でのスキルの順序を入れ替えることはできる。
2. 限定水域ダイブ1の前に、生徒ダイバーはディスカバー・スクーバ・ダイビングのブリーフィングか知識開発セッション1を修了しなければならない。限定水域ダイブ1の前にディスカバー・スクーバ・ダイビングのブリーフィングを行ない、後で知識開発セッション1を実施すれば、生徒ダイバーにできるだけ早い段階でダイビングの最初の一步を経験させてあげることができ、モチベーションを高く保つことができる。
3. 限定水域ダイブ2～5については、知識開発セッションは限定水域ダイブの前でも後でもどちらでもよいが、前に行なうほうが推奨される。
4. ダイブ・フレキシブル・スキルの中には、どの限定水域ダイブで実施すべきか特に指定されていないものがある。これらについては、いつ行なうのがコース運営上最も効率的かに基づき、インストラクターが決める。ただし、以下の条件がある:
 - a. 生徒ダイバーは、オープンウォーター・ダイブ2の前に、水泳具を使用せずに10分間の立ち泳ぎ/フロートを行なう。
 - b. 限定水域ダイブ3修了までに、スクーバ・ユニットのセッティング/取り外しを3回以上正しく行なう。
 - c. 限定水域ダイブ3修了までに、使用後のスクーバ器材の正しい手入れ方法をデモンストレーションする。
 - d. 限定水域ダイブ5修了までに、スクーバ・ユニットのセッティング/取り外しを5回以上正しく行なう。
 - e. スキン・ダイビング・スキルは、限定水域2、3、4、または5で行なう。

- f. エマージェンシー・ウエイト・ドロップは、限定水域またはオープンウォーターのいずれかのダイブで行なう。
- g. PADIスクーバ・ダイバーの生徒ダイバーは、限定水域ダイブ3修了までに、パワー・インフレーターから中圧ホースを外すスキルと、ウエイト・システムの脱着スキルを修了しなければならない。
- h. PADIスクーバ・ダイバーの生徒ダイバーは、オープンウォーター・ダイブ2修了までに、スノーケル／レギュレーター交換、足がつったときの治し方、シグナルチューブ／DSMBの使い方、エマージェンシー・ウエイト・ドロップを修了しなければならない。

コース進行に伴って、限定水域ダイブを修了したかどうか、特にダイブ・フレキシブル・スキルをいつ行なったか、きちんと記録することが重要である。「スチューデント・レコード・ファイル／コース・レコード&委託照会書」を使って、ダイブとスキルの修了日を記録する。特に、他のインストラクターとチームを組んで教えている場合には、生徒ダイバーが何を修了したか、一目でわかるようにしておく必要がある。

限定水域の実施方法とテクニックについての推奨事項

最初にスキルを説明してデモンストレーションし、次に、生徒ダイバーがスキルに慣れて達成条件を満たすまで練習させる。

水中能力評価

生徒ダイバーに10分間の立ち泳ぎ／フロートとノンストップ水泳をさせること目的は、適度な泳力があるかどうかを見るためである。必要であれば、生徒ダイバーは保護スーツを着用してもよいが、その場合には、中性浮力になる分のウエイトをつける。

比較的体力がない人や水が苦手な人には、トレーニング・ダイブの前に、レッスンや練習を通して水に慣れるようアドバイスする。水中能力が不十分な人には、安心してオープンウォーター・ダイブに参加できるよう、スキルを練習して強化するようアドバイスする。

器材の準備と手入れ

コース全体を通して、器材のセットアップと取り外しを繰り返し練習させる。練習は、限定水域ダイブのときでもよいし、知識開発セッションのときでもよいし、その両方で行なうのもよい。

まず、インストラクターが器材のセットアップ／取り外しをやってみせて、それから生徒ダイバーに2回続けて練習させる。後はタイミングを見計らって練習を行なって達成条件を満たす。もちろん練習の回数は、規定されている最小限の回数を超えてもよい。時間があって、人数などの運営上可能であれば、ミニダイブでも器材のセットアップと取り外しを行なう。

器材を不必要に引きずって水中環境にダメージを与えないよう、正しいセッティング方法を生徒ダイバーに見せる。限定水域ダイブの最初から最後まで器材をぶらぶらさせない流線形を保ち、オープンウォーターで要求される環境を大切にす姿勢をシミュレーションすることが目的である。

限定水域または知識開発セッションの一環として、ダイビング器材の正しい洗い方と手入れ方法を生徒ダイバーにデモンストレーションさせる。顧客サービスの一環として、トレーニング用／レンタル用器材の洗いとメンテナンスを生徒ダイバーではなくダイブセンターで行なっているところが多いが、それはトレーニングと矛盾するものではない。器材を取り外してダストキャップを元どおりにかぶせるなど、洗い方とメンテナンス方法を生徒ダイバーにシミュレーションさせればよい。手入れ方法を動作と言葉で説明させる。

スキン・ダイビング・スキル

スキン・ダイビング・スキルはどの限定水域ダイブで実施してもよい。このスキルは、PADIダイブマスターとアシスタント・インストラクターが単独で教えることができる。

サーフェスダイブ — 生徒ダイバーはスキン・ダイビング器材を装着し、深い場所で、上半身を曲げて頭から水に入りながら両足を水面の上に伸ばすように高く上げるというサーフェスダイブを行なう。身体障害者の場合は、障害を補う別の方法を使ってもよい。楽に潜降するための正しい姿勢を強調する。上を見上げ、手を伸ばしながら水面へ戻るという手順を忘れないよう生徒ダイバーに注意する。バディごとに、ひとりが水面にいてもうひとりが潜るというワンアップ・ワンダウンを練習する。

息こらえテクニック — リラックスして横隔膜から呼吸する方法（腹式呼吸法）を説明し、デモンストレーションする。腹部がどのように上下するか生徒ダイバーに示す。しばらくの間リラックスして呼吸し、それから深く息を吸い、息を止めて潜るよう生徒ダイバーに指示する。

スノーケル・クリア — スノーケルのデザインに応じて、ディスプレイメント法かブラスト法を使用するスノーケル・クリアを生徒ダイバーに練習させる。さまざまな形状のスノーケルを見せ、両方のスノーケル・クリア方法を教えるのがよい。

オプションのスキン・ミニダイブ — 4つのサイクルを組み合わせてゲームにする。

1. 25メートル／ヤード水面スノーケル水泳
2. サーフェスダイブ - ひとりが水面、もうひとりが潜る
3. 15メートル／50フィート水中水泳
4. 浮上してスノーケル・クリア

パワー・インフレーターから中圧ホースを外す

パワー・インフレーターボタンが引っかかって元に戻らなくなってしまったというトラブルに、BCDから中圧ホースを外すことで対応する。シミュレーションとして、一方の手でパワー・インフレーターボタンを押しながら、もう一方の手でホースを外す。中圧ホースを外す動作を妨げない握り方で握る。このパワー・インフレーターボタンを押す動作は、インストラクターか生徒ダイバーのどちらかが行なってもよい。手早くリリースできるようホースをコネクター側へ押し、BCDから空気を排出して、プラス浮力になりすぎないようにすることを強調する。このスキルは、浅い場所の水面または水中で行なう。練習が終わったら、ホースを元通りにつなぐよう生徒ダイバーに言う。

緩んだシリンダー・バンド

バディのスクーバキットのシリンダー・バンドをリリースし、締め直す方法がわかっているかどうか、生徒ダイバーに確認する。このスキルは、できれば足がつかない深さの水面か、水中で実施する。水面と水中の両方で練習させるほうがよいが、必修はいずれか一方のみである。

スキルを水面で行なう場合には、生徒ダイバーが浮いていて、水底に立っているのではないことを確認する。緩んだシリンダー・バンドを締め直すシミュレーションとして、生徒ダイバーはそれぞれのバディの緩んだバンドの後ろ側に回り、最初にバンドをリリースし、それから強く締め直す。浮力を確保し、スノーケルかレギュレーターを使って呼吸し、バンドが緩んだほうのダイバーはプールのラダー、プールサイド、フロートなどにつかまって身体を支え、必要であればスクーバキットを脱いで、バンドをリリースして締め直すのを最小限の範囲内で手伝うなど、協力して姿勢を安定させることを強調する。

水中で行なう場合には、バンドが緩んだほうのダイバーが傷つきやすい生物などがいない水底に腹ばいになるか、プールラダーやラインなどをつかめば姿勢が安定することを強調する。

ウエイト・システム脱着 (水面)

足がつかない深さの水面で、ウエイト・システムを脱着する。このスキルは、ウエイト・チェックおよび調整と一緒に行なうことができる。無理なく安全にできるよう、スノーケルまたはレギュレーターで呼吸しながら行なうよう生徒ダイバーに指示する。各自の器材に最も適した方法を使う。

ウエイト一体型BCDの場合には、まずポケットをひとつ脱着し、次に別のポケットで同じことをするというように、ひとつずつポケットを脱着する。フルに膨らんだBCDにウエイト・ポケットを戻すのは難しく、やや空気を抜いたほうが楽にできる。ポケットを元の位置に戻すのに、必要であればバディが手伝ってもよい。

ウエイト・ベルトの場合には、生徒ダイバーはウエイト・ベルトを脱着する。注意事項として、スノーケルまたはレギュレーターをくわえたまま、ベルトを落とさないようしっかりと握り、前かがみになってウエイトの重さが腰に乗るようにし、手探りでバックルを外し、ベルトを引っ張り出して身体から離し、身体を回転させるかベルトをループ状に持って再び巻き付け、手探りでバックルを締めるという手順を確認する。

エマージェンシー・ウエイト・ドロップ

このスキルは、足がつかない深さの限定水域またはオープンウォーター（または練習量を増やすために両方）で実施する。緊急時をシミュレーションして素早くウエイトを外して捨てると、突然浮力が増すことを生徒ダイバーに経験させることが、このスキルの全般的な目的である。

まず始めに、生徒ダイバーに適切なウエイト量になるよう調整してもらい、レギュレーターが所定の位置にあり、生徒ダイバーが自分の目の高さの位置で浮いていることを確認する。生徒ダイバーは、BCDに空気が入ってなくても、そっとキックすれば（または手で水をかけば）水面に浮いていられる状態であることを確認する。このスキルは、水面で1:1で行なう。レギュレーターから呼吸しながらBCDから空気をすべて抜き、クイック・リリース・システムを使ってウエイトをリリースし、引っ張り出して落とすと、突然プラス浮力になることを生徒ダイバーに経験させる。複数のウエイト・システムやポケットを使っている場合には、必ずしもウエイトを全部落とす必要はなく、プラス浮力になる量を落とすだけでよい。ウエイト・ベルトの場合には、ベルトを引っ張り出して身体から離してから落とすように指示する。

緊急時をシミュレーションして、その通りにウエイトを落とすよう生徒ダイバーに指示する。ただし、プールの底を傷つけたり、生き物が生息している水底に落としたりしないよう、あるいは深い水底からウエイトを回収しなくてすむように、以下の方法を含めて、緊急時にウエイトをリリースする方法を変えずに達成条件を満たす方法があれば、それを用いてもよい。

- 細めのラインをウエイト・ベルトやウエイト・ポケットに結び付け、さらにブイやラダーなどに結び付けて、ウエイトが水底に沈まないようにする。
- 生徒ダイバーの動作を妨げないように注意しながら、インストラクターまたはアシスタントがリリースされたウエイト・システムをキャッチする。（例：バスケットを使うなど）ウエイト・システムを手渡すよう生徒ダイバーに指示するのは禁止である。実際の緊急時に、そのようなことはしないからである。

どの方法を使うのであれ、ウエイトをリリースする前に、生徒ダイバーの下に他のダイバーや生物がいないことを確認する必要がある。

限定水域ダイブのサンプル・プラン

限定水域ダイブ1

- 器材の準備とマスクの曇り止め
- エントリー、器材とウエイト装着
- プレダイブ・セーフティ・チェック - 指導付き
- 水面でBCDに空気を出し入れ
- 水中で呼吸
- レギュレーター・クリア - 息とパーズ・ボタン
- レギュレーター・リカバリー
- 下半分に水を入れたマスクをクリアする
- バックアップ空気源の使い方
- 潜降と圧平衡
- 水中移動
- ハンドシグナル
- 残圧計の使い方と残圧チェック
- 遊びとスキル練習
- 浮上と浮力の確保
- 水面でBCDにオーラルで空気を入れる
- 水面移動と正しい水面習慣
- エマージェンシー・ウエイト・ドロップ (ダイブ・フレキシブル)
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ

限定水域ダイブ2

- ダイブ・プランニングとエア・マネージメントについての確認
- 器材のセットアップと装着
- プレダイブ・セーフティ・チェック
- ディープウォーター・エントリー
- ウエイト・チェック
- スノーケル呼吸とクリア
- スノーケル／レギュレーター交換
- バディとスノーケル・スイミング
- 中圧ホースを外す (ダイブ・フレキシブル)
- 緩んだシリンダー・バンド (ダイブ・フレキシブル)
- ファイブ・ポイント潜降
- 中性浮力
- 全部に水を入れたマスクをクリアする
- マスクを取り外し、元通り装着し、クリアする
- マスクなし呼吸
- エア切れの練習
- 20bar／300psi以内のエア・マネージメント
- 遊びとスキル練習
- ファイブ・ポイント浮上
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ

限定水域ダイブ3

- 器材のセットアップ、装着、プレダイブ・セーフティ・チェック
- ディープウォーター・エントリー
- ウエイト・チェックと調整
- 水面でウエイト・システム脱着 (ダイブ・フレキシブル)
- 足がつったときの治し方
- 視標のある自由潜降
- ホバリング
- トリムとウエイト位置調整
- エア切れ／バックアップ空気源の使い方 (与える役／もらう役)、水中移動、浮上
- コントロールされた緊急スイミング・アセント
- 20bar／300psi以内のエア・マネージメント
- 遊びとスキル練習
- ファイブ・ポイント浮上
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ

限定水域ダイブ4

- 器材のセットアップ、装着、プレダイブ・セーフティ・チェック
- エントリー
- ウエイトとトリムチェック
- 疲労ダイバー曳行
- 水面でスクーバキット脱着
- 潜降 - 水底に接触する前に停止
- 傷つきやすい生物がいる水底の上を水中移動
- ホバリング - BCDにオーラルで空気を入れる
- フリーフローしているレギュレーターから呼吸
- マスクなしで水中移動
- 20bar／300psi以内のエア・マネージメント
- 遊びとスキル練習
- 水底に接触せずに浮上
- スキン・ダイビング・スキル (ダイブ・フレキシブル)
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ

限定水域ダイブ5

- 器材のセットアップ、装着、プレダイブ・セーフティ・チェック
- エントリー
- 水中でスクーバキット脱着
- 水中でウエイト・システム脱着
- ミニダイブ
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ

限定水域ダイブ1

水面

器材の準備 — 器材セッティング／取り外しの練習計画に従って、前もってスクーバキットをセッティングしておくか、生徒ダイバーに練習させる。

マスクの曇り止め — 水際で各種の方法を説明する。

エントリー — スクーバ器材を装着しないで浅い場所にエントリーする。

器材の装着と調節 — スクーバキットの装着と調整方法に加えて、器材の正しい装着テクニック（背筋を伸ばし、足を使って持ち上げる）をデモンストレーションする。ホースなどがブラブラしないよう、すべてのものをきちんと固定する必要性を強調する。パディ同士で互いに協力し、スタッフが手を貸して、浅い場所に立った状態で器材を装着させる。マスク、フィン、スノーケル、ウエイト・ベルトなどが正しくフィットしていることを確認する。

プレダイブ・セーフティ・チェック — 各生徒ダイバーとプレダイブ・チェックを行なう。プレダイブ・チェックの詳細については、後のセッションで学習し、練習することになると説明する。ここでは主として、プレダイブ・チェックの概要を手短かに説明しながら、その重要性を強調する。

水面でBCDに空気を出し入れ — 浅い場所で、パワー・インフレーターを使ってBCDの機能をデモンストレーションする。また、完全に空気を抜くときの正しい身体の位置をデモンストレーションし、生徒ダイバーに練習させる。水面にいるときはBCDに空気を入れて膨らませておき、浮上してきたときにも必ず膨らませる習慣を身につける必要があることを説明する。

浅い水中

水中で呼吸 — 浅い場所で生徒ダイバーに膝をつかせるか座らせて、ゆっくりと深く呼吸させる。次の練習に進む前に、十分な時間を与えてレギュレーターから呼吸することに慣れさせる。多くの生徒ダイバーにとって、これは新しい感覚である。この感覚を楽しむ時間を与える。

レギュレーター・クリア — 息でクリアする方法とページ・ボタンを使う方法の両方を生徒ダイバーに練習させる。レギュレーターが口に入っていないときには、必ず息を吐き続けていることが大切である点を強調する（アーと声を出すなど、息を吐き続けて気道を開放する）。クリア後の最初の呼吸は慎重に行ない、舌を使って口の中に水が入らないようにガードする正しい気道コントロールについて説明する。

レギュレーター・リカバリー — 腕を回す方法と手を伸ばして取る方法の両方をデモンストレーションし、練習させる。セカンド・ステージを探す場合の正しい身体の位置を強調する。この練習は、レギュレーター・クリアと組み合わせて行なってもよい。スキルの目的はダイバーがあらゆる状況でも、レギュレーター・リカバリーできることである。ダイバーがトリム、水平ポジション（もしくはサイドマウント構成）だった場合は、レギュレーターは肩から回して取るのではなく彼らの体の前にすでにあるかもしれないので、そのほうがレギュレーター・リカバリーが簡単かもしれない。達成条件を満たすために必要な場合は、直立時にトリムが肩の後ろにしかない場合でも、ダイバーに調整装置をより直立した位置と水平位置からリカバリーさせる。水面休息の間、または他の状況下では、ダイバーは肩の後ろからレギュレーターをリカバリーさせる方法を知る必要がある。

マスククリア — 目より下の部分だけに水を入れたマスクをクリアする方法を生徒ダイバーに練習させる。正しい頭の位置（上を見る、ページバルブ付きの場合は下を見る）と、鼻から息を出し続けることを強調する。

バックアップ空気源の使い方 — 静止した状態でバックアップ空気源を見つけて確保し、そこから呼吸する方法を生徒ダイバーに練習させる。インストラクターのバックアップ空気源を使わせるか、生徒ダイバー同士で与える役ともらう役を交互にやらせる。使用しているバックアップ空気源の形態に基づいて手順を説明する。エア切れダイバーが明確な合図を出し、バックアップ空気源を見つけて確保してクリアし、バディ・コンタクトを取り、明確な意思疎通を図り、浮上に備えてBCDのインフレーターを高く持ち上げ、いつでも空気を排出できるように準備するという手順を強調する。

水中

圧平衡と水中移動 — 浅い場所から深い場所へゆっくりと泳いで往復しながら、様々な圧平衡のテクニックについて説明し、生徒ダイバーに練習させる。圧平衡については、十分な練習時間を取っておく。バタ足キックをデモンストレーションし、正しい足／フィン の位置と、ゆっくりとした大きなキック・サイクルを強調する。練習する時間を与える。身体障害者の場合は、特別なキック方法や腕の使い方により、水中を効率的に進む方法を練習させる。

残圧計の使い方 — 水中で、ハンドシグナルを使ってエアがどのくらい残っているか生徒ダイバーに聞き、答えさせる。レッドゾーンもしくはあらかじめ設定しておいたリミットに基づいて、十分なエアが残っているかどうか報告させる。セッションが終わるまで、適度な間隔を置いて残圧計チェックを繰り返す。

ハンドシグナル — ハンドシグナルを使う習慣を身につけさせる。

バディチームで遊びとスキル練習 — 水中にいることを楽しむ、スキルを練習するなどの時間を十分に取る。スキルに関して、問題なくできるか「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」に書くよう生徒ダイバーに指示する。スレートをチェックして、必要に応じてスキル練習をするよう指導する。バディにすぐに手が届く範囲内にいることを強調する。遊びながらスキル練習ができて、水中経験が身につくようなゲームをする。

浮上 — シグナルを出す、ゆっくりと上へ向かって泳ぐ、上を見る／手を伸ばす／身体を回す、水面でBCDに空気を入れるという浮上の手順を生徒ダイバーに練習させる。

足がつかない深さの水面

BCDにオーラルで空気を入れる — 足がつかない深さの水面で、BCDから空気を抜き、それからオーラルで膨らませるよう生徒ダイバーに指示する。息を吸いながら上に向かってキックし、力を抜いて沈みながらBCDにオーラルで空気を入れるという手順を強調する。注意事項として、空気が漏れないよう、入れ終わったらボタンから手を離すという点を確認する。

水面移動と正しい水面習慣 — スノーケルまたはレギュレーターを使って呼吸しながら、水面で顔を下にして泳ぐよう生徒ダイバーに指示する。次のスキル練習で浅い場所や深い場所へ移動するときには、水面移動を練習させながら移動する。マスクは顔につけたままにする、浮上して水面に出たらBCDに空気を入れる、レギュレーターまたはスノーケルは口にくわえたままにするなど、正しい水面習慣をつけることの重要性を強調する。

エキジット — プールを使っている場合には、浅い場所で器材を下ろさせ、エキジットする前にプールの端に置かせる。海の限定水域を使っている場合には、運営上可能であれば、エキジットさせずにそのままオープンウォーター・ダイブ1へ進んでもよい。

器材の取り外しと手入れ — スタッフが対応するか、器材セッティング／取り外しの練習計画に従って、器材の取り外しと手入れ方法を生徒ダイバーに練習させる。器材の正しい装着テクニックを強調する。

デブリーフィング — どの程度達成できたかについて生徒ダイバーに説明し、必要に応じて各自にカウンセリングを行なう。

限定水域ダイブ2

水面

ブリーフィングとダイブ・プランニング — ダイブ・プランを立てるという状況のシミュレーションとして、生徒ダイバーを参加させてブリーフィングを行なう。エントリーとエキジットの方法、潜水時間、深度限界、合図の復習、残圧リミット、緊急手順、潜水目的など、ダイブ・プランのすべての要素を手短かに説明する。説明を聞きながら、これらの点を「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」にメモするよう生徒ダイバーに指示する。ダイブ・プランを立てる習慣を身に付けるよう指導するが、簡潔で要領を得たものにする。長い説明は避ける。

エア・マネージメント — ブリーフィングのときに、ダイビング中にインストラクターが予告なしに突然残圧を聞くことがあることを生徒ダイバーに伝える。これは、インストラクターに聞かれなくても残圧を頻繁にチェックする習慣を身に付けさせることを目的としたもので、残圧を聞かれた生徒ダイバーは、残圧計を見直さずに自分の残圧を予測して報告するが、その誤差は20bar/300psiの範囲内でなければならない。水中で実際にインストラクターが残圧を聞き、生徒ダイバーが値を予測して報告したら、残圧計と一緒にチェックして、誤差が20bar/300psiの範囲内であるかどうか確認する。ダイビング中、インストラクターは生徒ダイバーにランダムに残圧を聞き、誤差20bar/300psiの範囲内で残圧を予測するという目標を達成できているかどうか確認する。コースの進行とともに、常に自分の残圧を把握していることに対する期待が厳しくなることを説明する。

器材の準備 — 前もってスクーバ器材をセッティングしておくか、生徒ダイバーに練習させる。

スクーバ器材の装着 — 予定しているディープウォーター・エントリー方法に応じて、手伝ってもらってスクーバ器材を装着するよう生徒ダイバーに指示する。手伝うのは、できればバディ同士がよい。器材の正しい装着テクニックを強調する。

プレダイブ・セーフティ・チェック — 器材の装着が終わったら、BCD (Begin) OK、ウエイト (With) OK、リリース (Review) OK、エア (And) OK、ファイナル (Friend) OKの順序でプレダイブ・セーフティ・チェックを生徒ダイバーに練習させる。

ディープウォーター・エントリー (推奨方法: ジャイアント・ストライド) — 限定水域ダイブを行なっている場所に最も適したエントリー方法を使用する。歩いて入っていける場所であれば、それでもよい。ジャイアント・ストライドの場合は、バディと打ち合わせして、エントリー・エリアをよく見て確認し、BCDを適度に膨らませ、マスクを手で押さえ、レギュレーターから呼吸し、エントリーしたらOKのサインを出し、速やかに泳いでその場を離れるという手順を強調する。これは、ボートからエントリーする場合によく用いられる方法であることを説明する。

適正ウエイト量 — 足がつかない深さの水面と水中で、中性浮力をとるのに必要な適正ウエイトを知る方法を生徒ダイバーに練習させる。BCDに空気を入れなくて通常の肺の大きさで呼吸を止めて、目の高さで浮くようにする。シリンダーに空気が満タンの状態で行なった場合には、ダイビング中に消費する空気の分のウエイトを加える。通常はシングル・シリンダーで約2キロ/5ポンド (一般的にアルミ製シリンダーの場合)。

スノーケル呼吸とクリア — 浅い場所で、スノーケルに水を入れて息で押し出すブラスト法を生徒ダイバーに練習させる。クリア後、顔を水につけたままスノーケルで呼吸を続けられるよう、スノーケルの正しい位置と正しい気道コントロールの必要性を説明する。

スノーケル/レギュレーター交換 — 浅い場所で、スノーケルとレギュレーター交換を生徒ダイバーに何回か練習させる (スノーケルから2回、レギュレーターから2回呼吸し、少なくとも2回交換する)。クリア方法と、顔を水につけたままにしておく点を強調する。泳ぎながらスノーケル/レギュレーター交換を練習させる。

バディとスノーケル・スイミング — ダイビング・ポイントまで泳ぐ水面移動のシミュレーションとして、50メートル/ヤード以上泳ぐよう生徒ダイバーに指示する。常にバディの近くにいること、正しい身体の位置 (頭を上げてスノーケルに水がかぶらないようにし、両腕は身体の脇につける)、ゆっくりとリラックスしたペース (フィンが水面の下) を保つことが大切である点を強調する。

水中

ファイブ・ポイント潜降 — 深い場所で、ファイブ・ポイント潜降を生徒ダイバーに練習させる。SORTD (S = signal [シグナル]、O = orient yourself [自分の位置を確認]、R = regulator in mouth [レギュレーターをくわえる]、T = time/dive computer check [時間/ダイブ・コンピューターを確認]、D = deflate and equalize [BCDの空気を抜き、耳抜き]) の内容でポイントを覚える方法を教える。注意事項として、耳抜きは早めに頻繁に行ない、バディ・コンタクトを維持し、視標(プールサイド、ライン、その他)を使って潜降をコントロールすることを確認する。主にBCDを使って、必要に応じて少しずつ空気を入れることで潜降をコントロールするよう強調する。

水中での中性浮力 — 息を吸ったり吐いたりしながら、BCDのパワー・インフレーターを使って、コントロールされた形で身体をゆっくりと上下させる方法を生徒ダイバーに練習させる。息を吸うと、フィンの先端または別の接触ポイントを軸にして身体が浮き、吐くと沈む。器材構成によってはピボットが難しいため、これは必修ではない。コントロールされた形で身体をゆっくりと上下させ、肺の容積が変わると浮力がどのような影響を受けるかを経験することが、このスキルの目的である。息を止めてはいけないという点と、規則正しく呼吸しながら浮力を微調整する方法を練習するという点を確認する。

マスク・クリア (全部に水を入れる) — 最初は浅い場所で、次に足がつかない深い場所で、全部に水を入れたマスクをクリアする方法を生徒ダイバーに練習させる。必要であれば、最初は下半分だけに水を入れたマスクをクリアする練習から始める。正しい頭の位置(上を見る、パージバルブ付きの場合は下を見る)と、鼻から息を出し続けることを強調する。できるようになったら、次は実際の状況を考えて、中性浮力を保ちながら、あるいはフィンの先端だけが水底に接触している状態でこのスキルを練習させる。

水中でマスク脱着 — マスクを完全に外してから元どおりに装着し、クリアする方法を生徒ダイバーに練習させる。マスクを正しい位置にする点を強調する。コンタクトレンズをしている生徒ダイバーには、マスクを外している間やマスクに水が入っている間は、目を閉じているよう指示する。この練習は、最初は浅い場所、次に足がつかない深い場所でもう一度行ない、1分間のマスクなし呼吸と組み合わせて行なってもよい。

マスクなし呼吸 — 水中でマスクなしで鼻をつままずに、1分間以上呼吸するよう生徒ダイバーに指示する。気道をコントロールし、鼻から息を出す点を強調する。この練習は、最初は浅い場所で行ない、次に足がつかない深い場所で、マスク脱着スキルと組み合わせてもう一度行なってもよい。

エア切れの練習 — 生徒ダイバーに空気が徐々に吸い込みにくくなる感覚を体験させて、エア切れのシミュレーションをする。どのようなことが起きるか、吸い込みにくくなったときに「エア切れ」の合図を出すということをブリーフィングする。残圧計を見て、エアがどのようにゼロに減っていくか見ているよう生徒ダイバーに言う。まず、生徒ダイバーの前に行き、エア切れが起きているのを生徒ダイバーが感じるまで、ゆっくりとバルブを閉める。シリンダーのバルブから手を離さずに待ち、エア切れの合図が出たら直ちにバルブを開ける。

バディチームで遊びとスキル練習 — 水中にいることを楽しむ、スキルを練習するなどの時間を十分に取る。できれば、これまでに習ったスキルに焦点を当てたミニダイブを実施する(ミニダイブの概要については限定水域ダイブ5を参照)。スキルに関して、問題なくできるか「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」に書くよう生徒ダイバーに指示する。スレートをチェックして、必要に応じてスキル練習をするよう指導する。

ファイブ・ポイント浮上 — 前回の限定水域ダイブでの浮上トレーニングをさらに進めて、バディに合図し、時間/ダイブ・コンピューターを確認し、一方の手を頭上に伸ばし、もう一方でBCDをコントロールし、上を見上げて周囲を見渡し、ゆっくりと上へ向かうというファイブ・ポイント浮上を生徒ダイバーにデモンストレーションさせる。バディ・コンタクトを維持し、水面に出たら浮力を確保する点を強調する。

エキジット — その場所に適したエキジット方法を使う。ラダーがある場合には、ラダーでのエキジットを練習させる。注意事項として、マスクはつけたままにして、レギュレーターを使って呼吸しながら、フィンを外して誰かに手渡すかプールデッキに置き、あるいは自分の手首にかけてラダーを上り、他のダイバーがラダーにいるときには、その真下や後ろ側にはいけないう点を確認する。

器材の取り外しと手入れ — 器材セッティング／取り外しの練習計画に従って、器材の取り外しと手入れ方法を生徒ダイバーに練習させる。

デブリーフィング — どの程度達成できたかについて生徒ダイバーに説明し、必要に応じて各自にカウンセリングを行なう。

限定水域ダイブ3

足がつかない深さの水面

エア・マネージメント — ブリーフィングのときに、ダイビング中にインストラクターまたは認定アシスタントが予告なしに突然残圧を聞くことがあることを生徒ダイバーに伝える。生徒ダイバーが値を予測して報告したら、残圧計と一緒にチェックして、誤差が20bar／300psiの範囲内であるかどうか確認する。生徒ダイバーが予測して報告した残圧の値が間違っていた場合には、少なくとも2回続けて正しく予測できるようになるまで、頻繁に残圧を聞く。

器材のセットアップと装着 — バディ同士で協力しながら、できるだけ自分でやるよう指示する。バディがもう一方のバディに全部やってあげるのは禁止する。この限定水域ダイブが終了するまでに、生徒ダイバーは器材を流線型に正しくまとめ、きちんと固定できることをデモンストレーションしなければならない。器材の正しい装着テクニックを強調する。

プレダイブ・セーフティ・チェック — スタッフからの指示は最小限に抑え、バディチームでプレダイブ・セーフティ・チェックを行なわせる。

ディープウォーター・エントリー (推奨方法: シットイング・バックロール) — 限定水域ダイブを行なっている場所に最も適したエントリー方法を使用する。歩いて入っていける場所であれば、それでもよい。シットイング・バックロールの場合は、バディと打ち合わせし、エントリー・エリアをよく見て確認して、BCDを適度に膨らませ、マスクを手で押さえ、レギュレーターから呼吸し、エントリーしたらOKのサインを出し、速やかに泳いでその場を離れるという手順を強調する。これは、小型のボートや高さがなくて不安定な場所からエントリーする場合によく用いられる方法であることを説明する。

ウエイト調整 — バディチームに分かれて、前の限定水域ダイブに基づいてウエイトをチェックし、必要に応じて調整するよう生徒ダイバーに指示する。インストラクターが監督するが、できる限り自分たちだけでするよう生徒ダイバーに奨励する。

足がつったときの治し方 — ふくらはぎの筋肉がつったときの治し方として、フィンの先端を身体のほうへ引っ張って筋肉を伸ばし、マッサージする方法を練習させる。自分の足がつったときと、バディを手助けするときの両方を練習させる。このスキルは、水面か水中、または練習量を増やすために両方で実施する。

水中

ファイブ・ポイント潜降 (視標のある自由潜降) — バディと一緒にファイブ・ポイント自由潜降をデモンストレーションするよう生徒ダイバーに指示する。注意事項として、耳抜きは早めに頻繁に行ない、バディ・コンタクトを維持し、視標(プールサイド、ライン、その他)を使って潜降をコントロールすることを確認する。主にBCDを使って、必要に応じて少しずつ空気を入れることで潜降をコントロールするよう強調する。

浮力コントロール (ホバリング) — 足がつかない深さの水中で、浮力コントロールだけで30秒間以上ホバリングする方法を生徒ダイバーに練習させる (手やフィンを使わない)。呼吸を止めず、呼吸のコントロールで微調整する点を強調する。ラインなど目安になるものがあつたほうが、身体が浮き上がっているのか沈んでいるのか判断しやすい。このスキルの後は、フィンの先端だけが水底に接触しているほぼ中性浮力の状態で、その後の新しいスキルを練習させるようにする。

トリムとウエイト位置調整 — 中性浮力をとり (前のスキルから続けて)、身体が自然なトリムの形になるのに任せながら、力を抜いてゆっくりと泳ぐよう生徒ダイバーに指示する。生徒ダイバーの姿勢を診断して、楽に泳げて疲れの少ない水平のトリム姿勢になるよう、必要に応じて調整する。例えば、ベルトのウエイト位置を変える、BCDのトリムポケットに少量のウエイトを加える、または減らす、ウエイト・ポケットに入れたウエイトが均一になるよう調整する、シリンダーに少量のウエイトを加える、または減らす、シリンダーの位置を高くする、または低くするなど。器材によっては、水中で最適なトリムにするのが難しい場合がある。必要であれば、セッションが終わってから、次の限定水域ダイブに備えて、ウエイトの位置を最適な状態に調整する。トリムと流線型についての詳細は、PADIピーク・パフォーマンス・ボイヤンシー・スペシャルティ・インストラクター・ガイドを参照。

エア切れ/バックアップ空気源を使って泳いで浮上 — 足がつかない深さの水中で、エアが来なくなったのを感じたら、エア切れの合図を出し、バディのバックアップ空気源を手にとり、呼吸を始めるようにインストラクターが指示した後、生徒ダイバーのバルブを閉める。生徒ダイバーがバディのバックアップ空気源を確保したのを確認したら、バルブを開けてレギュレーターが使えるようにしておく。エアをもらう役がバックアップ空気源を使いながら、深い場所から水面に出るまでにかかる時間のシミュレーションとして、与える役ともらう役が一緒に1分間以上泳ぐ。1分が過ぎたら、浮上速度と浮力をコントロールしながら、2人一緒に浮上する。水面に出たら、エアをもらう役はオーラルでBCDに空気を入れ、エアを与える役はそばでサポートする。

バックアップ空気源を与える — 前のスキルと組み合わせて、役割を交替し、全員が与える役を経験する。

コントロールされた緊急スイミング・アセント (CESA) — 正しいやり方を説明する。セカンド・ステージはくわえたままで、頭を上に向け、いつでもコントロールできるようにBCDの排気ボタンに手を添えて、声を出して息を吐き続ける。最初は浅いところで水平に泳いで練習し、次に、深いほうから浅いほうへ斜めに浮上する。水面に出たら、ウエイトを落とすかBCDにオーラルで空気を入れて浮力を確保しなければならないことを説明する。状況に応じて、どちらか一方か両方を練習させる。

バディチームで遊びとスキル練習 — 水中にいることを楽しむ、スキルを練習するなどの時間を十分に取る。できれば、これまでに習ったスキルに焦点を当てたミニダイブを実施する (ミニダイブの概要については限定水域ダイブ5を参照)。「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」をチェックして、必要に応じてスキル練習をするよう指導する。遊びながらスキル練習ができて、水中経験が身につくようなゲームをする。中性浮力のスキルを練習するのに適した時間で、このスキルは、自分のいる位置をコントロールし、オープンウォーターの環境を守るのに役立つことを強調する。

エキジット — オープンウォーター・ダイブで用いる方法を使って生徒ダイバーをエキジットさせる。

器材の取り外しと手入れ — 生徒ダイバーができるだけ自分で器材の取り外しと手入れを行なうよう指示する。

デブリーフィング — どの程度達成できたかについて生徒ダイバーに説明し、必要に応じて各自にカウンセリングを行なう。

限定水域ダイブ4

足がつかない深さの水面

エア・マネージメント — ブリーフィングのときに、ダイビング中にインストラクターまたは認定アシスタントが予告なしに突然残圧を聞くことがあることを生徒ダイバーに伝える。生徒ダイバーが値を予測して報告したら、残圧計と一緒にチェックして、誤差が20bar／300psiの範囲内であるかどうか確認する。生徒ダイバーが予測して報告した残圧の値が間違っていた場合には、少なくとも2回続けて正しく予測できるようになるまで、頻繁に残圧を聞く。

器材のセットアップ、装着、プレダイブ・セーフティ・チェック — バディ同士で協力しながら、できるだけ自分でやるよう指示する。器材の正しい装着テクニックを強調する。スタッフからの指示は最小限に抑え、バディチームでプレダイブ・セーフティ・チェックをさせる。

エントリー — その場所に適したエントリー方法や特別な方法を使う。器材を装着して、あるいは装着しないで、コントロールされたシットイング・エントリーを練習させるのもよい。器材を装着しない場合には、エントリー後、水中で器材を装着するスキルを練習させる。これにより、水面でスクーバキットを脱着するスキルの前半を満たしたことになる。

ウェイトとトリム調整 — バディチームに分かれて、ウェイトとトリムをチェックし、前の限定水域ダイブでのトリムチェックに基づいて、必要に応じて調整するよう生徒ダイバーに指示する。インストラクターが監督するが、できる限り自分たちだけでするよう生徒ダイバーに奨励する。

疲労ダイバー曳行 — シリンダーのバルブをつかんで曳く方法、フィンプッシュなど、適切な方法でバディを曳行するよう生徒ダイバーに指示する。疲労ダイバーの浮力を確保することが大切である点を強調する。

スクーバキットの脱着 (水面) — 足がつかない深さの水面で、スクーバキットを外して元どおりに装着する方法を生徒ダイバーに練習させる。安全のために、スノーケルをくわえた状態で練習するよう指示する。上着を脱ぎ着するようやり方、上に乗って身体を滑り込ませる方法など、各自の器材に最も適した方法を使う。外したときに身体を支えるサポートとして使えるように、浮力を確保しておく。外した器材から手を離さないよう生徒ダイバーに注意する。必要な場合のみ、バディが手助けしてもよい。生徒ダイバーが器材を装着しないでエントリーし、入ってから器材を装着する場合には、エキジットする前に器材を外せば、スクーバキットの脱着スキルを修了したことになる。

水中

中性浮力 - 傷つきやすい生物がいる環境近くでの潜降、水中移動、浮上 — 潜降、水中移動、浮上スキルを1回の練習に組み合わせて3つの達成条件をカバーしてもよいし、各スキルを別々に修了してもよい。プールなど限定水域の水底であっても、傷つきやすい生物がいる環境であるかのように接するよう生徒ダイバーに指示する。生徒ダイバーはバディチームに分かれて、浮力をコントロールしながらファイブ・ポイント潜降し、水底に接触する前に停止し、そのまま水底に接触せずに一緒に少なくとも10メートル／ヤード泳ぐ。準備ができたなら、浮力をコントロールしながら、水底に接触せずにファイブ・ポイント浮上する。必要に応じて、練習を最初から最後まで、または部分的に繰り返してマスターさせる (体で覚える)。

BCDにオーラルで空気を入れて浮力コントロール (ホバリング) — 足がつかない深さの水中で、BCDから完全に空気を抜き、それからオーラルで空気を入れて中性浮力をとり、少なくとも1分間ホバリングするよう生徒ダイバーに指示する。このスキルは、まず浅い場所で練習してから、深い場所でもう一度練習するのもよい。注意事項として、レギュレーターの手から離さず、レギュレーターをくわえていない間も息を吐き続け、BCDには少しずつ息を吹き込み、BCDに息を吹き込んでいない間は排気ボタンから指を離すという手順を確認する。呼吸を止めず、呼吸のコントロールで微調整する点を強調する。ラインなど目安になるものがあつたほうが、身体が浮き上がっているのか沈んでいるのか判断しやすい。

ドライスーツを使用する生徒ダイバーに対して、最初にBCDにオーラルで空気を入れて浮力コントロールするデモンストレーション(例:フィンピボットなど)をし、もしインフレーターが動かなかったり、故障した場合に生徒ダイバーが膨張する空気を水中でコントロールできるようにする。生徒ダイバーが中性浮力をとれたら、BCDまたはドライスーツのインフレーターの内いずれかを使用してホバリングをデモンストレーションさせる。

フリーフローしているレギュレーターから呼吸 — 生徒ダイバーは、フリーフローしているレギュレーターから少なくとも30秒間呼吸する方法をシミュレーションで練習する。唇でマウスピースをふさいではいけない点を強調する。水を吸い込んでむせないよう、舌を使って口の中に水が入らないようにガードする方法を教える。水面に向かって吹き上がるエアがマスクを押し除けないよう、頭を一方に傾けて練習するよう指示する。スキル練習の前と後に、残圧をチェックするよう生徒ダイバーに言う。

マスクなしで水中移動 — 生徒ダイバーを潜降させ、マスクを外させる。静止した状態で、マスクなしで呼吸するのに慣れるのを待つ。その状態に慣れたら、マスクなしで水中を泳がせる。目は閉じないように言う(ただし、コンタクトを使っている人には、目は閉じたままにするよう注意しておく)。バディ同士交替で、互いをガイドする。

バディチームで遊びとスキル練習 — 水中にいることを楽しむ、スキルを練習するなどの時間を十分に取る。できれば、これまでに習ったスキルに焦点を当てたミニダイブを実施する(ミニダイブの概要については限定水域ダイブ5を参照)。「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」をチェックして、必要に応じてスキル練習をするよう指導する。遊びながらスキル練習ができて、水中経験が身につくようなゲームをする。

エキジット — オープンウォーター・ダイブで用いる方法を使って生徒ダイバーをエキジットさせる。水中でスクーバキットを外してからオープンウォーター・エキジットするのは、水面でスクーバキットを脱着するスキルの半分に該当する。オープンウォーター・エキジットの注意事項として、まずウエイトを外してから器材を外し、必要であればフィンを外すという手順を確認する。よじ登って水から出るか、フィンをキックして上に向かって身体を引き上げ、推進力を利用して水から出る。バディが手助けしてもよい。

器材の取り外しと手入れ — 生徒ダイバーができるだけ自分で器材の取り外しと手入れを行なうよう指示する。

デブリーフィング — どの程度達成できたかについて生徒ダイバーに説明し、必要に応じて各自にカウンセリングを行なう。

限定水域ダイブ5

水中

エア・マネージメント – ブリーフィングのときに、ダイビング中にインストラクターまたは認定アシスタントが予告なしに突然残圧を聞くことがあることを生徒ダイバーに伝える。生徒ダイバーが値を予測して報告したら、残圧計と一緒にチェックして、誤差が20bar/300psiの範囲内であるかどうか確認する。生徒ダイバーが予測して報告した残圧の値が間違っていた場合には、少なくとも2回続けて正しく予測できるようになるまで、頻繁に残圧を聞く。

器材のセットアップ、装着、プレダイブ・セーフティ・チェック – バディチームごとに助けを借りずに器材をセッティングし、装着するよう指示する。器材の正しい装着テクニックを強調する。バディチームでプレダイブ・セーフティ・チェックをさせる。

エントリー – その場所に適したエントリー方法を練習する。

スクーバキットの脱着 (水中) – 各自の器材に最も適した脱着方法を生徒ダイバーに練習させる。注意事項として、レギュレーターをくわえたまま、呼吸のコントロールで安定した姿勢を維持し、BCDに空気を入れすぎないように注意し、スクーバキットから手を離さず、作業はできるだけ手探りで行なうなどの点を確認する。必要な場合のみ、バディが手伝ってもよい。練習が終わったら、器材が正しく装着されているかどうかバディ同士でチェックするよう指示する。

ウエイト・システムの脱着 (水中) – 生徒ダイバーがウエイト一体型のBCDを使っている場合は、水底でウエイトまたはウエイト・ポケットを外してもう一度装着させる。

従来式のウエイト・ベルトを使っている生徒ダイバーには、ウエイト・ベルトを外して元どおりに装着する方法を練習させる。注意事項として、レギュレーターをくわえたまま、ベルトを落とさないようにしっかりと握り、前かがみになってウエイトの重さが腰に乗るようにし、手探りでバックルを外し、ベルトを引っ張り出して身体から離し、身体を回転させるかベルトをループ状に持って再び巻き付け、手探りでバックルを締め、ホースやストラップがベルトに挟まっていないことをチェックするという手順を確認する。必要な場合のみ、バディが手伝ってもよい。

生徒ダイバーがウエイト・ハーネスなど組み直す必要のあるシステムを使っている場合には、浅い場所の水底にウエイトを落とす練習をする。必要であれば、ウエイトを外した後、水から出てシステムを組み直す。

ミニダイブ (実践応用ダイブ) – オープンウォーター・ダイブのシミュレーションとして、バディと一緒にミニダイブのプランを立て、実施するよう生徒ダイバーに指示する。このミニダイブは最後の限定水域セッションの焦点であり、各自の能力をスキルに対する自信へと高めることを目的としている。ミニダイブ中、インストラクターがシミュレーションする緊急事態に対して、これまでのトレーニングで習得したスキルを使って対応するよう生徒ダイバーに指示する。また、傷つきやすい生物がいるというエリアを想定して、しっかりと浮力をコントロールすることで、その場所には接触しないよう指示する。限定オープンウォーターを使っている場合には、場所に応じて、探検してもよい範囲内と深度制限を説明する。

まず、「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」を使って、バディと一緒にミニダイブのプランを立てるよう生徒ダイバーに言う。必要なときにのみ指示を出す。ダイブ・プランには、以下の項目を入れる:

- エントリーとエキジット方法。
- インストラクターが指定する潜水時間と残圧限度 (時間と残圧の両方に注意しなければならないよう、人数に応じた最大限度を使う)。誤差20bar/300psiの範囲内で常に自分の残圧を把握し、指定された時間または残圧に達したら、ダイブ終了の合図を出さなければならないことを説明する。
- 練習したいスキル。

- バディと離ればなれになってしまったときの手順、その他の緊急事態／トラブルについての注意事項。

バディ同士で1度にひとりずつ、交互にスキルを練習するよう言う。静止状態ではなく、泳ぎながらスキルを練習するようアドバイスする。最初から最後まで、互いにいつでもバディに手が届く範囲内にいて、傷つきやすい生物がいると指定されたエリアに気をつけるよう注意する。

ダイビング中、足がつった、エア切れ／エアを分けあう（バックアップ空気源を使用）、レギュレーターのフリーフロー、マスクに水が入った／マスクが外れた、レギュレーターが口から外れた、BCDのインフレーターが故障した、バディとはぐれた、というシチュエーションの中から、インストラクターが少なくともひとつを合図するので、それに対応するよう指示する。合図が出たら、指定されたトラブルを解決するか、シチュエーションに対して適切に対応するよう言う。必ず止まって、考えて、それから行動するのを忘れないよう注意を促す。バディの一方がマスクを装着し直すなどのトラブルに対応している間、もう一方のバディは、実際のオープンウォーター・ダイブであるかのようにそれを見守り、サポートしなければならぬことを説明する。ただし、ミニダイブがトラブル解決の連続になることなく、ダイビングそのものを楽しむ時間ができるよう、指定するシチュエーションの数はひとり当たり最大3つまでとする。

インストラクターは、生徒ダイバーがミニダイブでスキルを練習している様子を監督し、必要に応じてアドバイスを与え、間違っている箇所を修正する。バディと一緒に、楽しみながら限定水域エリアを探検するよう言う。全員を集めて指示を出す必要がある場合や、ダイビングを終了する必要がある場合に備えて、音を出すなど、全員の注意を引く方法を確認しておく。

エキジット — オープンウォーター・ダイブで用いる方法を使って生徒ダイバーをエキジットさせる。

器材の取り外しと手入れ — 自分で器材の取り外しと手入れを行なうよう指示する。

デブリーフィング — どの程度達成できたかについて生徒ダイバーに説明し、必要に応じて各自にカウンセリングを行なう。

よくあるトラブルリスト

1. 準備、装着、調整

- BCDがシリンダーの逆側についている
- シリンダーの取り付け位置が高すぎる、低すぎる、または緩い
- レギュレーターが左右、または前後逆向きにセットされている
- 中圧インフレーターホースが接続されていない、または間違って接続されている
- シリンダーバルブが完全に開いていない
- シリンダーが立てたまま放置されている
- スノーケルが逆側についている
- ストラップ類の調節が不適切、またはねじれている
- ホースがストラップ類の下にはさまっている
- 適切なリフティング・テクニックを使用していない

2. 水面でLPIを使ってBCDの吸気／排気を行なう

- 違うボタンを押す
- 空気の入れ方が少なすぎる／多すぎる
- 排気するときの身体の位置が悪い

3. レギュレーターリカバリーとクリア

- レギュレーターが口に入っていないときに「アー」という声を出していない、または息を吐いていない
- 口から外すべきフリーフローしているレギュレーターをくわえている
- アームスイープ法またはリーチ法でレギュレーターを探すときの身体の位置が不適切
- 間違っただけで払う
- 息を吐いてレギュレーターをクリアできないー吐く息が残っていない
- 気道のコントロールが悪いーページ後の最初の呼吸が不適切

4. マスククリア

- マスクに水を入れるときのコントロールが悪いー水の入れすぎ／少なすぎ
- クリアするときの手または頭の位置が不適切
- 鼻から息を出せない、または口から息を出す
- 息の吐き方が不適切
- マスクが顔から離れすぎ、または顔にぴったりと戻っていない

5. バックアップ空気源の使用ー固定された

- シグナルを出してバディからバックアップ空気源を確保しない
- バックアップ空気源を確保し、固定し、クリアし、そこから呼吸するのが困難

- レギュレーターが口に入っていないときに声を出していない、または息を吐いていない
- バディ同士がしっかりとお互いをホールドしない

6. 潜降と圧平衡

- BCDから空気を抜くときの身体の位置が不適切
- 空気の抜き方が速すぎるー潜降が速すぎる
- 潜降が速すぎて適切に圧平衡できない
- 圧平衡できない
- 水底にぶつかるように着底ー浮力コントロールができていない

7. 水中移動

- ひざが曲がっているーひざでキック
- 足と足首が硬すぎる
- つま先が伸びていない
- キックが小さすぎ、または大きすぎ
- 浮力を確保できず、方向がわからず、深度を保てない
- 過度のアームスイミングー適切ではない場合

8. 残圧計の使い方

- 残圧計を見つけられない
- 残圧計の読み違い／誤表示
- 安定していない残圧計もしくはぶらぶらしている

9. 浮上

- 浮上前にバディ同士でファイブポイントのチェックをしない
- BCDに空気を入れて浮上する
- 浮上スピードが速すぎる
- 浮上の際の身体の位置が不適切ー上を見ない、浮上できない
- 浮力が足りずにスタート時の浮力が確保されていないー水底を蹴るーもしくは浮上中に

10. 水面でBCDにオーラルで空気を入れる

- オーラルでの吸気ではなく違うボタンを押す
- 吸気中に上に向かって蹴らない
- ボタンを離さず、空気が抜けない
- 十分な浮力のための空気を確保できない

11. 器材の取り外し

- ファーストステージを外す前に、ホース内のエアを抜くのを忘れる
- シリンダーのバルブを間違っただけで回す
- シリンダーを立てたまま放置

12. プレダイブ・セーフティ・チェック

- ステップを覚えていない
- バディ同士が協力しない

13. ディープ・ウォーター・エントリー

- エントリーする前に、エントリーポイントをチェックしない
- エントリーするときに、マスクや器材を押さえない
- レギュレーターをくわえない、もしくはウエイトなしでエントリー
- ウエイトなし、もしくは他の器材なしでエントリー
- エントリーの際にバランスを失う
- あまりにも角に近すぎる — 十分に離れてエントリーしなかった
- 浮力が不十分
- OKサインを出さない、またはエントリーポイントから離れない
- ジャイアント・ストライド・エントリーの時にマスク／器材を押さえない
- 水に入るときの身体の位置が不適切、コントロールされたシットイング・エントリーの際にバランスを失う

14. 適正ウエイトとウエイト・チェック

- ウエイトが重過ぎる／軽すぎる
- BCDから完全に排気しない
- チェック中に通常の呼吸をしない

15. スノーケル／レギュレーター交換

- 頭または手の位置が不適切で交換しにくい
- 不十分もしくは不適切な呼気でスノーケルもしくはレギュレーターをクリアできない
- 顔を水から上げてクリアする
- 気道のコントロールが悪い — クリア後の最初の呼吸が不適切

16. 水面移動と正しい水面習慣

- 身体の位置／浮力が不適切で水面で泳ぎにくい
- 頭またはスノーケルの位置が不適切で呼吸しにくい
- マスクを装着できない
- 常にスノーケルもしくはレギュレーターから呼吸できない
- 泳ぎながらバディとの相対的な方向と位置が確認できない

17. ファイブ・ポイント潜降

- 潜降前にバディ同士でファイブポイントをチェックしない
- BCDから空気を抜くときの身体の位置が不適切

- 空気の抜き方が速すぎる — 浮力コントロールできずに潜降が速すぎる
- 潜降が速すぎて適切に圧平衡できない
- 規準に従わない
- 潜降中に浮力のコントロールができない

18. 中性浮力

- BCDへの空気の出し入れが多すぎる／少なすぎる
- BCDから空気を出し入れする前に十分に時間をおかない
- ゆっくり深く呼吸しない — 呼吸コントロール調整
- 手や足を使って水底を押し

19. マスクなし呼吸と水中マスク脱着

- 呼吸のコントロールが悪い — 鼻から水を吸い込む
- マスクを装着したままでいられない、マスクの位置が合っていない
- 脱着時に、髪の毛、フード、ストラップなどがマスクにはさまる
- クリアするときの手または頭の位置が不適切
- 鼻から息を出せない、または口から息を出す
- 息の吐き方が不適切
- マスクが顔から離れすぎ、または顔にぴったりと戻っていない
- マスク装着位置に応じて、見上げたり／下を見たりできない。

20. エア切れ

- シグナルが不適切、または出さない
- 口からレギュレーターが外れている

21. 20bar／300psi以内のエア・マネージメント

- エアがほしいというシグナルが間違っている
- シグナルを出す前に空気源をチェックする
- 20bar／300psi以内になった時に空気源の確保ができない
- 残圧計を再確認せずにぶらぶらさせている

22. 足がつったときの治し方

- 身体の位置が不適切でフィンの先をつかめない
- 水面での浮力が少なすぎる／多すぎる
- フィン先が掴めない
- 水中で適切な体の位置を維持／制御できない

23. LPIを使用したホバリング

- BCDへの空気の出し入れが多すぎる／少なすぎる
- BCDから空気を出し入れする前に十分に時間をおかない

- ゆっくりと深く呼吸しない – 呼吸コントロールを調節
- 手や足を使って位置を維持 – スカーリング

24. 水平スイムとトリム調整

- 中性浮力を保てない
- スイミング能力が低い – ゆっくりリラックスして泳げない

25. エア切れ、空気源でのスイム、浮上

- シグナルが不適切、または出さない
- シグナルを出してバディからバックアップ空気源を確保しない
- レギュレーターが口に入っていないときに声を出していない、または息を吐いていない
- バックアップ空気源を確保、位置、クリアもしくは呼吸が困難
- バディ同士がしっかりとお互いをホールドしない
- 空気を共有しながら効果的に泳ぐには位置が不適切
- 泳いでいる間、浮上中の浮力コントロールができない
- エア切れのダイバーが水面でオーラルでBCDを膨らませない

26. コントロールされた緊急スイミング・アセント

- 泳ぐ際の身体／手の位置が不適切
- レギュレーターを口から外す
- 声を出し続けない
- 泳ぐのが速すぎる／遅すぎる
- 浮力コントロールの欠如

27. 疲労ダイバー曳行

- 浮力が少なすぎ／多すぎて水面で泳ぎにくい
- 曳行する位置が不適切でうまく泳げない
- キックが弱く曳行できない
- 曳行中、疲労ダイバーとコミュニケーションが取れない

28. 水面でスクーバキット脱着

- 浮力が不十分／過剰
- ストラップを見つけてリリースするのが困難
- 外したスクーバキットにつかまっていない、または管理していない
- スクーバキットを正しい位置に戻し、装着し直すのが困難 – からまる

- 元に戻す際にホース類をはさんでしまう
- 元に戻す際にホース類をはさんでいないかチェックできない
- スノーケル、もしくはレギュレーターをくわえてもらえない

29. オーラルを使ったホバリング

- BCDへ出し入れする空気が多すぎる／少なすぎる
- レギュレーターが口に入っていないときに声を出していない、または息を吐いていない
- BCDから空気を出し入れする前に十分な時間をおかない
- ゆっくりと深く呼吸しない – 呼吸コントロールを調節
- 手や足を使って位置を維持 – スカーリング

30. フリーフロー・レギュレーターからの呼吸

- パージボタンを間違ったやり方で、または不適切に押す
- マウスピースの周りを口でふさいでしまう
- 気道のコントロールが悪い – 不注意な呼吸
- 頭の位置が不適切で快適に呼吸できない

31. マスクなし移動

- 呼吸のコントロールが悪い – 鼻から水を吸い込む
- 泳いでいる間の浮力コントロールがうまくとれない
- 方向感覚を失う、または水泳能力が貧弱

32. 水中でスクーバキット脱着

- ストラップを見つけてリリースするのが困難
- スクーバキットを外す際にレギュレーターが口から外れてしまう
- 外したスクーバキットにつかまっていない、または管理していない
- スクーバキットを正しい位置に戻し、装着し直すのが困難 – からまる
- 元に戻す際にホース類をはさんでしまう
- 元に戻す際にホース類をはさんでいないかチェックできない

33. 水中でウエイト・システム脱着

- ウエイト・システムを見つけてリリースし、手で持っているのが困難
- ウエイト・システムを外したときにバランスを失い、身体の位置が不適切
- ウエイト・システムを正しい位置に戻し、装着し直すのが困難

- 元に戻す際にホース類をはさんでしまう
- 元に戻す際にホース類をはさんでいないかチェックできない

34. 水から出る

- 浮力が不十分
- エキジットするのが困難
- 器材を取り外すのが困難
- 間違った順序で器材を取り外す
- 器材を落とす

35. スキン・ダイビングーサーフェスダイブ、スノーケル呼吸とクリア

- ダイブ前の過度な呼吸
- 潜る前の身体／足の位置が不適切
- 浮力がありすぎ
- 潜降中に圧平衡しにくい
- 浮上中の身体／腕の位置が不適切
- スノーケルをクリアできない
- 頭またはスノーケルの位置が不適切で呼吸しにくい
- 顔を水から上げてクリアする
- 気道のコントロールが悪いークリア後の最初の呼吸が不適切

36. 低圧インフレーターを取り外し

- ホースを外すときの手の位置が不適切
- ホースを外せない
- インフレーターを押し続けると過剰なプラス浮力が発生ーBCDから空気が抜けない

37. 緩んだシリンダー・バンドを絞めなおす

- バディのシリンダー・バンドが見たことがない／わからないので絞め直せない
- シリンダー・バンドを操作する際の体の位置が悪い／不安定
- シリンダー・バンドを絞め直せない
- 水面で行なう場合、プラス浮力が確保できない
- バディとの連携／調整の欠如

38. 水面でウエイト・システム脱着

- 浮力が不十分
- ウエイト・システムを見つけてリリースし、手で持っているのが困難
- ウエイト・システムを外したときにバランスを失い、身体的位置が不適切
- ウエイト・システムを正しい位置に戻し、装着し直すのが困難
- 元に戻す際にホース類をはさんでしまう
- 元に戻す際にホース類をはさんでいないかチェックできない

39. エマージェンシー・ウエイト・ドロップ

- スタート時の浮力が大きすぎる
- ウエイト・システムを見つける、捨てるのが困難
- ウエイトを離す際に安全に／遠くに落としていない
- ウエイトを捨てる前に周りをチェックしていない

概要 — オープンウォーター・ダイブ

オープンウォーター・ダイブは、生徒ダイバーをオープンウォーターの世界に手ほどきするもので、生徒ダイバーは、知識開発セッションと限定水域ダイブで学んだ事柄を組み合わせることで応用することになる。ここで学んだスキルは生徒ダイバーがすでに限定水域で練習したものであるが、新たな環境上の要素やコンディションが存在することにより、オープンウォーター・ダイブはコースにおける最も重要な部分になっている。

オープンウォーター・ダイブでは、正しい判断、浮力コントロール、水中世界に対する認識、残圧、深度、時間のチェック、浮上と潜降など、ダイビングをするときに必ず用いる必要不可欠なスキルを応用するよう指導する。生徒ダイバーは、マスクに入った水を外に出す、レギュレーターをリカバリーする、エア切れの緊急事態に対応するなど、トラブルに対処するスキルをデモンストレーションする中で自信を培っていく。

多くの生徒ダイバーにとって、このオープンウォーター・ダイブはダイビングが持つ冒険性と興奮への第一歩となるものであるため、慎重にリスク評価を行なって、生徒ダイバーのスキルレベルに合わせた適切な判断をするだけでなく、もっとやってみようという気持ちにさせる楽しい経験にすることが大切である。

総合的アドバイス

オープンウォーター・ダイブは、計画を立て、全体を構成し、観察するというプロセスで準備する。さまざまな要素を検討して適切なコントロールを維持し、各ダイブの最初から最後まで継続的にリスクを評価する必要がある。利用可能なサポート、生徒ダイバーの準備態勢、必要器材、環境条件など、すべての要素を検討しなければならない。細部まで注意を払うことにより、リスクを最小限に抑えながら、全員にとって楽しい経験にすることができる。

1. 場所の選択 — 生徒ダイバーを監督しやすい適度な深さと地形のダイビング・ポイントを選ぶ。生徒ダイバーの力量に適して、認定後に初心者ダイバーが行くような場所を代表している環境がベストである。認定を受けたばかりの初心者ダイバーは、自分がトレーニングを受けた場所へダイビングに行くことが多い。
2. 場所についての情報 — ダイビング・ポイントへの道順、地図、エリアに関する一般情報、携帯品（日焼け止め、服装、昼食など）、トレーニングにかかるおおよその時間、帰宅予定時間などの情報を生徒ダイバーに提供する。
3. スタッフ — 十分な数の認定アシスタントを準備し、セッション中の各自の役割について詳しくブリーフィングする。緊急の場合の手順を全員に徹底し、緊急用器材の保管場所を知っているかどうか確認する。
4. 器材 — インストラクター、スタッフ、生徒ダイバーが、それぞれに必要なダイビング器材と安全装備をすべて持っていることを確認する。スキルを実施し、コントロールを強化するのに十分な水面用サポート・ステーションとラインがあることも確認する。水面フロートとラインを使用する場合には、水中生物にダメージを与えないよう、フロートをアンカリングする方法と場所に注意する。生徒ダイバーが誤って環境を傷つけてしまうことのないような場所に設置する。
5. コンディションの評価とダイブ・プランニング — 潜水計画に生徒ダイバーも参加させて、「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」を使ってダイビングの詳細を記録するよう指示する。コンディションを評価する方法を教え、ダイビングを実施すべきかどうかや、判断するにあたってどのような要素を検討する必要があるかなどに関して、正しい判断力を身に付ける練習をスタートする。安全を優先して、十分に用心した上で賢明な判断をする。ダイビングを中止したら生徒ダイバーはがっかりするかもしれないが、そのことから生徒ダイバーは大切なことを学習する。つまり、コンディションが適していないときには、ダイビングするのをあきらめるというレッスンでもある。

6. 生徒ダイバーのストレスの徴候に注意する — 生徒ダイバーには経験がないので、疲れたり寒くなったりするのが早く、不安も大きい。自分にとっては日常なことでも、生徒ダイバーにとっては簡単なことでもなければ、わかりきったことでもない。プレッシャーを与えたり、さらにストレスを加えたりしないよう注意しながら、適切にサポートし、励ます。個々の安心感のレベルに配慮する。
7. オープンウォーター・コントロール — 水中にいる間は、生徒ダイバーを効果的にコントロールできる手段を用いる。必要に応じてただちに対応できるよう、常に生徒ダイバーのすぐ近くにいるようにする。全員を見渡すことができ、いつでも手が届く位置に自分とアシスタントを配置する。生徒ダイバーの注意を引くのに使う音の出るシグナル器材を見せて、水中でその音を聞いたなら、すぐにインストラクターのほうを見て指示に従うよう説明する。
8. 模範 — 生徒ダイバーに模範を示すときには、はっきりとわかりやすく行なう。生徒ダイバーはインストラクターの説明を耳で聞いて学習するのと同じくらいに、やり方を目で見ることによっても学習するため、正しいやり方というものを生徒ダイバーにわかりやすく見せる工夫をしなければならない。
9. 楽しさ — トレーニングが生徒ダイバーにとって楽しい経験になるよう工夫する。おもしろい生き物や特徴的な生態に出会ったら、指し示して教えてあげる。ユニークな生き物に遭遇したら、練習を中断してウォッチングする。スキル練習を分散させて、ダイビング・ポイントを探検する時間をできるだけ作る。楽しい思いをしないと、生徒ダイバーはダイビングを続けない。
10. 環境保護 — 水中世界を保護することについての正しい認識を強調する。環境を大切にしている具体的な方法について話し合い、ダイビング中やダイビングの前後に、地域で実践されている環境保護の取り組みについて教える。
11. エクスカーション・ダイブ — エクスカーション・ダイブを加えることで、潜ることの焦点が、スキル練習からダイビングそのものや水中を探検することへ移るので、生徒ダイバーはダイビング経験を積み、安心感のレベルを高めながら、リラックスしてのんびりと楽しむことができる。オープン・ウォーター・ダイバー・コースの人数比と監督条件に従って実施する。
12. ログ付け — 各自の紙版またはデジタル版のログブックにダイブの記録を記入するよう生徒ダイバーに指示し、インストラクターはそれぞれに署名するか確認する。生徒ダイバーにインストラクターのログブックに署名させるかデジタル上の署名をさせることで例を示す。

順序についての注意事項

1. 生徒ダイバーは、ひとつのオープンウォーター・ダイブの達成条件をすべてマスターしてから、次のオープンウォーター・ダイブへ進む。何らかの理由で（エアが少なくなる、寒くなるなど）、1回のダイブで指定されているスキルを一部完了できなかった場合には、次のダイブで最初のスキルとして行なってもよい。生徒ダイバーへの負担が多くなりすぎることが問題になる場合には、次のオープンウォーター・ダイブの前に、別途にダイブを行なって未完了のスキルを修了する。
2. オープンウォーター・ダイブ1の前に、生徒ダイバーは以下の参加前オプションのいずれかひとつを満たさなければならない
 - オプション1 – PADIインストラクターによるディスカバー・スクーバ・ダイビングのブリーフィングと限定水域ダイブ1を修了する（ディスカバー・スクーバ・ダイビングの監督条件と人数比に従う）。
 - オプション2 – オープン・ウォーター・ダイバー・コースの知識開発セッション1（クイズを含む）と限定水域ダイブ1を修了する（ディスカバー・スクーバ・ダイビングの監督条件と人数比に従う）。
 - オプション3 – オープン・ウォーター・ダイバー・コースの知識開発セッション1～3と限定水域ダイブ1～3を修了する。
3. オープンウォーター・ダイブ2の前に、生徒ダイバーは知識開発セッション1～3（クイズを含む）、限定水域ダイブ1～3、水泳具を使用せずに10分間の立ち泳ぎ／フロートを修了する。

4. オープンウォーター・ダイブ3と4の前に、生徒ダイバーはすべての知識開発セッション (クイズを含む) とすべての限定水域ダイブを修了する。
5. 認定を受ける前に、生徒ダイバーは200メートル／ヤードのノンストップスイム、またはマスク、フィン、スノーケルを使って300メートル／ヤードのスイム、およびファイナル・エグザムを修了する。
6. オープンウォーター・ダイブ1後、生徒ダイバーはいつでもエクスカージョン・ダイブに参加できる

オープンウォーターの実施方法とテクニックについての推奨事項

ダイブ・フレキシブル・スキル

ダイブ・フレキシブル・スキルは、インストラクターの判断で、どのオープンウォーター・ダイブで行なってもよい(水中コンパス・ナビゲーションとコントロールされた緊急スイミング・アセントを除く)。ただし、水面コンパス移動と水中コンパス・ナビゲーション、シグナルチューブの使い方、エマージェンシー・ウエイト・ドロップを除いて、生徒ダイバーがこれらのスキルを限定水域ダイブでマスターしていることが前提条件となる。

次の水面スキルはPADIアシスタント・インストラクターが評価を行なうことができる:

足がつったときの治し方 — 自分でフィンの先端を引っ張ってふくらはぎの筋肉をストレッチする方法と、バディにフィンをしっかりとホールドしてもらい、それに足を押し付けるようにしてふくらはぎの筋肉をストレッチするという方法を生徒ダイバーに練習させる。このスキルはPADIスクーバ・ダイバーの認定条件である。

疲労ダイバー曳行 — スクーバキットを装着した状態で、シリンダーのバルブをつかんで曳く方法、フィンプッシュなど適切な方法を使って、交互に疲れたバディを手助けする練習をする。可能であれば、フロートへ往復する水面移動のときに実施するのがよい。このスキルはPADIスクーバ・ダイバーの認定条件である。

シグナルチューブ／DSMB*の使い方 — 実際に使用するシグナルチューブの膨らませ方を、生徒ダイバーが知っていることを確認する。水中で、シグナルチューブをコントロールしながら、適切な方法を用いて膨らませるよう各生徒ダイバーに指示する。通常、このスキルはダイビングを終えて浮上するときに実施するのが最も都合がよい。各自がシグナルチューブを携帯したほうがよいが、バディチームごとに少なくともひとつは必要である。

DSMB (Delayed Surface Marker Buoys／水面下で膨らませて打ち上げるタイプの水面マーカースイブ) の使用が一般的な習慣になっている地域では、傷つきやすい生物のいない水底などにつかまって静止状態で、最大12メートル／40フィートの深さ(それより浅いほうが望ましい)からDSMBを打ち上げるよう生徒ダイバーに指示する。各自が使用するDSMBについて、使い方を知っていることを確かめ、ダイビングを始める前に手順を確認させる。バックアップ空気源を使う、息を吹き込む、専用のインフレーターを使うなど、それぞれのDSMBに適した方法で膨らませるよう指示する。注意事項として、リールをしっかりとホールドし、絡まらないよう、ラインをピンと張った状態に保つよう言う。通常、このスキルはダイビングを終えて浮上するときに実施するのが最も都合がよい。そうすれば、DSMBのラインに沿って水面に出ることができる。オープンウォーターでDSMBの使い方をデモンストレーションさせる前に、限定水域で練習させたほうがよい。

このスキルはPADIスクーバ・ダイバーの認定条件である。

* 例外: 水面下でDSMBを膨らませるのは、アシスタント・インストラクターではなく、インストラクターが評価しなければならない。

直線水面コンパス移動 — 水中でコンパスを使う前に、まずブリーフィングのときに陸上で練習させる。行きの方向と、その逆になる帰りの方向のセット方法を説明する。体をコンパスのセンターラインと合わせ、直線をナビゲーション中は、コンパスを上から見下ろすのではなく、コンパス越しに前方を見るという点を強調する。

水中に入ったら、コンパスを見るバディが先頭になって、前もって決めておいた方向で、フロートなど目標物に向かって泳ぐ。泳ぐ距離は、あらかじめ決めておいた回数のキック・サイクルで見積もり、練習中は顔を上げて位置を確認してはいけない。50メートル／ヤードを泳いだら、もう一方のバディ(コンパスを使っていないほう)が合図をし、役割を交替して、逆方向をスタート地点へ向かってナビゲーションして戻る。ダイバー各自がコンパスを持ったほうがよいが、少なくともバディチームごとにひとつは必要である。

スノーケル／レギュレーター交換 — ブラスト法でスノーケル・クリアを行ないながら、レギュレーターとスノーケルを交換するよう生徒ダイバーに指示する。また、泳ぎながらスノーケル／レギュレーター交換を練習させる。

ウエイト・システムとスクーバキット脱着 (水面) — このスキルは、エントリーとエキジットのときに行なって達成条件を満たすという形をとることができる。生徒ダイバーはスクーバキットとウエイト・システムをつけずに水に入る。バディかアシスタントがスクーバ・ユニットを手渡し、水に入った状態で装着する。次に、BCD一体型でない場合には、ウエイト・システムで同じことを行なう。ダイブが終わったら、まずウエイト・システムを外し、上にいる人に手渡す。次に、スクーバキットを外し、上にいる人に手渡す。フィンが練習の最後まで外さない。

もうひとつの方法として、フロートまたはボートのすぐ脇の水面で、スクーバ・ユニットとウエイト・システムの脱着を行なう。

エマージェンシー・ウエイト・ドロップ — このスキルは限定水域またはオープンウォーター、または練習量を増やすために両方で実施する。生徒ダイバーがそれぞれ適切なウエイト量になっていて、BCDに空気が入っていても、そっとキックすれば (または手で水をかけば) 水面に浮いていられる状態であることを確認する。このスキルは、水面で1:1で行なう。レギュレーターから呼吸しながらBCDから空気を抜き、クイック・リリース・システムを使ってウエイトをリリースし、引っ張り出して落とすと、突然プラス浮力になることを生徒ダイバーに経験させる。複数のウエイト・システムやポケットを使っている場合には、必ずしもウエイトを全部落とす必要はなく、プラス浮力になる量を落とすだけでよい。ウエイト・ベルトの場合には、ベルトを引っ張り出して身体から離してから落とすように指示する。

緊急時をシミュレーションして、その通りにウエイトを落とすよう生徒ダイバーに指示する。ただし、プールの底や生物がいる水底を傷つけないよう、あるいは深い水底からウエイトを回収しなくて済むように、以下の方法を含めて、他に達成条件を満たす方法があれば、それを用いてもよい。

- 細めのラインをウエイトとウエイト・ポケットに結び付け、さらにブイに結び付けて、ウエイトが水底に沈まないようにする。
- 生徒ダイバーの動作を妨げないように注意しながら、インストラクターまたはアシスタントがリリースされたウエイト・システムをキャッチする。ウエイト・システムを手渡すよう生徒ダイバーに指示するのは禁止である。実際の緊急時に、そのようなことはしないからである。

どの方法を使うのであれ、ウエイトをリリースする前に、生徒ダイバーの下に他のダイバーや生物がいないことを確認する必要がある。

次のスキルはインストラクターが水中で評価する:

水中コンパス・ナビゲーション — 水面コンパス移動と同様に、まず陸上でナビゲーションを練習したほうが、簡単に効率的に学習できるようになる。この練習は、潜降ラインやアンカーラインなど固定されている目標地点からスタートする。バディチームにインストラクターまたは認定アシスタントが1:2の比率で付き添い、前もって決めておいた方向に向かってスタート地点から指定の回数のキック・サイクル (10~20回) をナビゲーションし、方向転換して逆方向をスタート地点まで戻る。水底に沿って進ませれば、コンパス以外の視標になる。戻ってきてスタート地点が見つからなかった場合には、浮上してスタート地点を探し、ナビゲーションが正確だったかどうかを判断させる。各ダイバーが正確に往復ナビゲーションできなければならない。このスキルは、オープンウォーター・ダイブ2、3、または4でのみ実施する。



コントロールされた緊急スイミング・アセント (CESA) — コントロールされた緊急スイミング・アセントは、PADIインストラクター・マニュアルに記載されている詳細ガイドラインを使って実施する。事前に陸上で練習し、正しい姿勢などを教える。うねりや流れなど、水の動きが激しい場所で実施するのは避ける。生徒ダイバーが水のコンディションに慣れるのを待ってから実施する。浮上を開始する前に、生徒ダイバーの中性浮力がとれていることを確認する。ラインを手で握る方法と、足を巻きつける方法のどちらでもよい。イラストを参照のこと。浮上を中止する必要が生じた場合に備えて、ラインを使っていつでもコントロールできるようにしておく。

身体障害があつて、フィンをキックして浮上を開始できないダイバーは、別の方法を使ってもよい (例えば、腕で押す、腕で水をかく)。ただし、オーラルパワー・インフレーターを使ってBCDを膨らませたり、バディが手助けしたりするのは、このスキルの目的を達成したことにならない (エア切れの状況に独力で対処することが、このスキルの意図である)。これは複雑なスキルなので、生徒ダイバーをよく観察して、落ち着いてリラックスした様子になるのを待ってから実施する。

このスキルは、オープンウォーター・ダイブ2、3、または4でのみ実施する。人数などの条件によっては、ダイビングを終えて浮上するときはこのスキルを実施してもよい。



オープンウォーター・ダイブのサンプル・プラン

オープンウォーター・ダイブ1

- ブリーフィングとハンドシグナルの復習
- ダイビング前に環境に慣れさせる
- 器材のセットアップと装着
- プレダイブ・セーフティ・チェック
- エントリー – プラス浮力
- ウェイトのチェックと調整
- スノーケル/レギュレーター交換 (ダイブ・フレキシブル)
- コントロールされた潜降
- トリムチェック
- 下半分に水を入れたマスクをクリアする
- レギュレーター・リカバリーとクリア
- 水中ツアー
- 残圧チェック
- 浮上
- エマージェンシー・ウェイト・ドロップ (ダイブ・フレキシブル)
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ
- デブリーフィングとログ付け

オープンウォーター・ダイブ2

- ダイブ・プランニングとブリーフィング
- 器材のセットアップと装着
- プレダイブ・セーフティ・チェック
- エントリーと正しい水面習慣
- ウェイトとトリムチェック
- 水面でBCDにオーラルで空気を入れる
- 足がったときの治し方 (ダイブ・フレキシブル)
- 疲労ダイバー曳行 (ダイブ・フレキシブル)
- コントロールされた潜降
- 中性浮力
- 全部に水を入れたマスクをクリアする
- バックアップ空気源の使い方 (与える役/もらう役) と浮上
- 水中ツアー – 水底に接触しないようにして、バディから離れないようにする
- 20bar/300psi以内のエア・マネージメントと残圧の報告
- ファイブ・ポイント浮上 – できれば安全停止
- シグナルチューブの使い方 (ダイブ・フレキシブル)
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ
- デブリーフィングとログ付け

オープンウォーター・ダイブ3

- ダイブ・プランニングとブリーフィング
- 器材のセットアップと装着
- プレダイブ・セーフティ・チェック
- エントリーと正しい水面習慣
- ウェイトとトリムチェック
- 水面でウェイト・システムとスクーバキット脱着 (ダイブ・フレキシブル)
- 直線水面コンパス移動 (ダイブ・フレキシブル)
- 視標のある自由潜降
- ホバリング – BCDにオーラルで空気を入れる
- マスクの脱着
- 水中コンパス・ナビゲーション (ダイブ・フレキシブル)
- コントロールされた緊急スイミング・アセント (ダイブ・フレキシブル)
- 水中ツアー – 水底に接触しないようにして、バディから離れないようにする
- 20bar/300psi以内のエア・マネージメントと残圧の報告
- ファイブ・ポイント浮上 – できれば安全停止
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ
- デブリーフィングとログ付け

オープンウォーター・ダイブ4

- ダイブ・プランニング・スレートを使ってダイブ・プランを立てる
- 器材のセットアップと装着
- プレダイブ・セーフティ・チェック
- エントリーと正しい水面習慣
- ウェイトとトリムチェック
- 視標のない自由潜降
- バディチームで水中ツアー – 水底に接触しないようにして、バディから離れないようにする
- 20bar/300psi以内のエア・マネージメントとターン・プレッシャー/浮上開始時残圧の合図
- ファイブ・ポイント浮上と安全停止
- エキジット
- 器材の取り外しと手入れ
- デブリーフィングとログ付け

オープンウォーター・ダイブ1

水面

ブリーフィング — どのようなものを見ることができるか、どこでどのようにエントリーして潜降し、浮上してエキジットするかなどを含めて、ダイビングについて最初から最後まで説明する。何らかの判断やアドバイスをするときには、なぜそのように判断するのか、どのようにコンディションを評価すればよいかなどについて説明して、オープンウォーター・ダイブの計画を立てる能力の育成を開始する。「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」を使って、ターン・プレッシャーなど細かい事柄をメモしておくよう指示する。生徒ダイバーが限定水域ダイブ1を修了しただけの場合には、「OK」、「何か変だ」、「耳が抜けません」、「エアがない」、「浮上」、「バディと一緒に」のハンドシグナルを復習したほうがよい。残圧チェックついて、インストラクターがどのように聞いてくるかと、聞かれたらどのように答えればよいかを復習する。さらに、水中で生徒ダイバーの注意を引くのに使う音の出るシグナル器材を見せてデモンストレーションする。これは、このダイブとこれ以降のダイブでの重要なコントロール手段になるものである。

ダイビングの前に環境に慣れさせる — 可能であれば、最初のオープンウォーター・ダイブの前に、保護スーツを着てマスク、フィン、スノーケルをつけて水に入らせ（ウエイトはなし）、少し遊んで水温やコンディションに慣れさせる。

器材の準備と装着 — 生徒ダイバーがまだ限定水域ダイブ1しか修了していない場合には、スクーバキットをセッティングして装着するのにスタッフの手助けが必要である。限定水域3まで修了している場合には、できるだけ自分で器材をセッティングし、バディと協力して装着するよう指示する。器材の正しい装着テクニックを強調する。

プレダイブ・セーフティ・チェック — 生徒ダイバーがまだ限定水域ダイブ1しか修了していない場合には、プレダイブ・セーフティ・チェックをリハーサルさせる。限定水域3まで修了している場合には、スタッフからの指示は最小限に抑え、バディチームでプレダイブ・セーフティ・チェックを行なわせる。

ウエイトのチェックと調整 — ウエイトを正しくセッティングできるよう生徒ダイバーを手助けする。まず、必要なウエイト量を見積もる。特に、淡水から海水へ移るときや、生徒ダイバーが前回より厚手の保護スーツを着用している場合には注意が必要である。できれば、浅い場所で浮力チェックを行なう。BCDに空気を入れ、浮力を確保した状態で水に入るよう生徒ダイバーに指示する。レギュレーターをくわえ、BCDから空気を抜き、普通に呼吸し、目の位置までしゃがんで足を水底から離し、手は動かさないように言う。適正ウエイトであれば、目の位置で浮く。必要に応じてウエイトを加減し、浮力を再チェックする。ウエイトを追加して、潜水中に空気を消費することで生じる重さの変化（浮いてくる）を相殺する。通常はシリンダー1本で約2キロ／5ポンドである（アルミ製シリンダーの場合）。予備のウエイトは、手に持つかフロートに準備しておく。

足がつかない場所で浮力チェックを行わなければならない場合は、十分に配慮する。必ずインストラクターがそばにいて、オーバーウエイト気味の生徒ダイバーが沈み過ぎないように注意する。

時として、「適正」ウエイトなのに浮き気味になってしまう生徒ダイバーがいる。不安感による通常と違う呼吸（肺の体積が大きくなる）といったような要素が原因である。不安の原因を探り、解消できるよう手助けする。ダイビング中に必要が生じたらいつでも調整できるよう、予備のウエイトを数個手元に用意しておく。

水中

コントロールされた潜降 — 水底の地形に沿って潜降させるか、ラインを使って潜降させる。ラインは、岸からトレーニング・エリアまで水底に沿って張ったライン、ボートのアンカーライン、垂直の潜降ラインなどを利用する。生徒ダイバーがまだ限定水域ダイブ1しか修了していない場合には、水に入る前に、ファイブ・ポイント潜降をリハーサルさせる。限定水域ダイブ3まで修了している場合には、次のようにバディと一緒にファイブ・ポイント潜降をするよう指示する。(1) バディに潜降の意志を合図し、(2) 水面にあるものを視標にして方向感覚を確認し、(3) スノーケルを外してレギュレーターのマウスピースをくわえ、(4) 時間／ダイブ・コンピューターを確認し、(5) BCDの空気を抜いて潜降を開始する。

注意事項: 方向感覚を失わないよう頭を上にして潜降し、早めに頻繁に圧平衡を行ない、圧平衡できないときには水底または潜降ラインを使って潜降を中止し、ゆっくりと潜降し、水底の砂を巻き上げたり、生物にダメージを与えたりしないよう注意するという点を確認する。

トリムチェック — 傷つきやすい生物などがいない水底の上を泳ぐよう生徒ダイバーに指示し、トリムをチェックする。例えば、器材は身体に合わせてきちんと調整されていないと確認する。スクーバキットは背中にしっかりと乗っていて、ホースや小物類がきちんと固定されていることを確認する。また、生徒ダイバーが楽に水平の姿勢を維持できているかどうかを確認する。必要に応じて調整する。水中では調整できない器材の場合には、次の限定水域ダイブまたはオープンウォーター・ダイブの前においておくべき調整を書き留め、デブリーフィングのときに、調整が必要であることについて話し合う。

マスククリア — 下半分に水を入れたマスクをクリアするよう生徒ダイバーに指示する。マスクに水を入れるとき、特に水が冷たい場所では水温に慣れるまでしっかりとコントロールし、フードをかぶっている場合には、マスクの縁がフードにかからないように注意する必要がある点を強調する。コンタクトレンズをしている生徒ダイバーには、マスクに水が入っている間は目を閉じているよう指示する。

レギュレーター・リカバリーとクリア — 好きなやり方でセカンド・ステージをリカバリーしてクリアするよう生徒ダイバーに指示する。セカンド・ステージを見つけるのに手間取った場合に備えて、インストラクターは自分のバックアップ空気源を手元に準備しておく。

水中ツアー — 生徒ダイバーは、身体の動き、方向、姿勢のコントロール、バディ・コンタクトとコミュニケーション、残圧チェック、水中世界の様子を認識するなど、水中ツアーをしている間に多くのことを学習する。頻繁に残圧チェックを行ない、常にバディの近くにいるよう注意を促す。このレベルの生徒ダイバーは水底に接触しがちであることを考えて、傷つきやすい生物が生息している場所は避ける。場合によっては、浮力コントロールを手助けするか、BCDを使うよう合図を出す必要がある。水中生物やその場所の見所、初心者が見逃しがちな小さなものなどを指し示して教える。この水中ツアーはインストラクターが直接に監督しなければならない。

浮上 — 可能であれば、水底の地形か、斜めに張ったラインに沿って浅い場所へ浮上させる。生徒ダイバーがまだ限定水域ダイブ1しか修了していない場合には、浮上中に中性浮力を維持できるよう手助けする。限定水域ダイブ3まで修了している場合には、次のようにバディと一緒にファイブ・ポイント浮上を行なうよう指示する。(1) バディに合図を出す、(2) 時間／ダイブ・コンピューターを確認する、(3) 右手を頭上に伸ばし、排気ボタンに指を添えて左手でBCDのパワー・インフレーターを持ち、(4) 上を見上げて周囲を見回しながら、(5) ゆっくりと浮上する。ボートの往来がある場所では、音に注意し、障害物などがいないかどうか頭上をよく見ながら水面に出る。

水面に出たら、ただちにBCDに空気を入れて浮力を確保し、マスクは顔につけたままにして、水から出るまで、あるいは歩けるくらい浅い場所に来るまで、スノーケルまたはレギュレーターで呼吸するという正しい水面習慣を身に付けるよう注意を促す。

オープンウォーター・ダイブ2

水面

ダイブ・プランを立てる — 生徒ダイバーをダイブ・プランニングのプロセスに参加させて、コンディションを評価する方法を教え、エントリーとエキジットの方法と場所、バディとはぐれてしまった場合にどうするか、予定しているコース、環境保護の習慣、危険になる恐れのあるもの、戻り始めるターン・プレッシャーなどについて話し合い、特にこれが反復ダイビングの場合には、深度と潜水時間制限について打ち合わせる。知識開発セクション4を修了していれば、ダイブ・コンピューターまたはRDPを使って潜水時間の計画を立てるよう指示する。注意事項として、常に誤差20bar/300psiの範囲内で自分の残圧を把握し、あらかじめ打ち合わせておいたターン・プレッシャーや浮上用に残しておく予定残圧に達したら、必ず合図するよう念を押して伝える。ダイビング中に確認できるよう、「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」にダイブ・プランのデータをメモしておくよう指示する。

器材の準備と装着 — スタッフがほとんど手助けしないで、生徒ダイバーに各自の器材をセッティングさせる。一方のバディがもう一方のバディに全部やってあげるのは禁止だが、バディが互いに協力して器材を装着し、調整するのは奨励する。器材の正しい装着テクニックを強調する。

プレダイブ・セーフティ・チェック — バディチームごとにプレダイブ・セーフティ・チェックを行ない、スタッフが確認する。

ウェイト量とトリム調整 — 最初のダイブと同様に、どのくらいのウェイトが必要かチェックし、トリムを調整するのを手伝う。特に再調整が必要ない場合には、クイックチェックで十分である。レギュレーターをくわえ、BCDから空気を抜き、動かずに普通に呼吸するよう生徒ダイバーに指示する。必要に応じてウェイトの重さを調整する。

水面でBCDにオーラルで空気を入れる — まず水面でBCDから空気を抜き、それからオーラルで空気を入れて膨らませるよう生徒ダイバーに指示する。注意事項として、息を吸いながら上に向かってキックし、力を抜いてBCDに息を吹き込み、入れ終わったらボタンから手を離すという点を確認する。

水中

コントロールされた潜降 — 水底の地形に沿って潜降させるか、ラインを使って潜降させる。ラインは、岸からトレーニングエリアまで水底に沿って張ったライン、ボートのアンカーライン、垂直の潜降ラインなどを利用する。バディチームで、次のようにファイブ・ポイント潜降をするよう指示する。(1) バディに潜降の意志を合図し、(2) 水面にあるものを視標にして方向感覚を確認し、(3) スノーケルを外してレギュレーターのマウスピースをくわえ、(4) 時間またはダイブ・コンピューターを確認し、(5) BCDの空気を抜いて潜降を開始する。

注意事項: 方向感覚を失わないよう頭を上にして潜降し、早めに頻繁に圧平衡を行ない、圧平衡できないときには水底または潜降ラインを使って潜降を中止し、ゆっくりと潜降し、水底の砂を巻き上げたり、生物にダメージを与えたりしないよう注意するよう指導する。

中性浮力 — パワー・インフレーターを使って中性浮力をとるよう生徒ダイバーに指示する。できるだけ水底を巻き上げない場所を選んで練習し、傷つきやすい生物にぶつからないよう注意する。ウェットスーツが深さで圧縮されるため、もっとエアを使う必要があるかもしれないことを生徒ダイバーに説明する。

マスククリア — マスク全部に水を入れてクリアするよう生徒ダイバーに指示する。特に水が冷たい場所では、コントロールしながらマスクに水を入れる必要のある点を強調する。コンタクトレンズをしている生徒ダイバーには、マスクに水が入っている間は目を閉じているよう念を押す。実際の状況を考えて、中性浮力を保ちながら、あるいはフィンの先端だけが水底に接触している状態でこのスキルをデモンストレーションさせる。

バックアップ空気源の使用 — ブリーフィングのときに、バックアップ空気源の使い方やバディとの位置関係を練習させる。与える側がメインのレギュレーターから呼吸するか、バックアップのレギュレーターから呼吸するかは器材構成によって異なり、バディ同士、互いのシステムがどのように機能するかを知っておく必要がある。バックアップ空気源を逆さに持って使うと、水を吸い込んでしまうことがあるため、どちらが上か生徒ダイバーが知っているかどうかを確かめる。

まず、「エアがない」のサインを出すところから練習をスタートする。エアをもらう側が相手のバックアップ空気源のセカンド・ステージをとって使い始めるが、与える側がメインのセカンド・ステージを相手に使わせなければならない形状の場合には、エアをもらう側が「エアが欲しい」のサインを出し、与える側はメインを相手に手渡し、自分はバックアップに切り換える。互いにバディ・コンタクトをとって落ち着いたら、練習をストップし、次は与える側ともらう側の役割を交替してもう一度行なう。

バックアップ空気源を使って浮上 — このスキルはバックアップ空気源の使用と組み合わせることができ、役割を交替したら浮上するよう生徒ダイバーに指示する。バックアップ空気源を使いながらの浮上は、バディチームごとに1回でよい。また、オープンウォーター・ダイブ1でファイブ・ポイント浮上の達成条件を満たしているのであれば、そのまま生徒ダイバーを浮上させてもよい。

まず、「エアがない」のサインを出すところから練習をスタートする。エアをもらう側が相手のバックアップ空気源のセカンド・ステージをとって使い始めるか、与える側がメインのセカンド・ステージを相手に使わせなければならない形状の場合には、与える側はメインを相手に手渡し、自分はバックアップに切り換える。互いにバディ・コンタクトをとって落ち着いたら、練習をストップし、次は与える側ともらう側の役割を交替してもう一度行なう。

注意事項: 浮力をコントロールして通常の浮上速度を維持し、ボートの往来がある場所では音に注意し、障害物などがないかどうか頭上をよく見て、何か問題が起きたら自分のレギュレーターに戻り、水面に出たら、エアがなくてバディからエアをもらっているという状況のシミュレーションとして、エアをもらっている側はオーラルでBCDに空気を入れる。

水中ツアー — 生徒ダイバーは前回のダイブに続いて、浮力コントロールと効率的な流線形、バディ・コンタクトとコミュニケーション、残圧チェック、水中世界の様子を認識するなど、多くのことを学習する。水中生物やその場所の見所などを指し示して教える。ランダムに残圧チェックを実施して、生徒ダイバーが誤差20bar/300psiの範囲内で常に自分の残圧を把握していることを確認する。常にバディの近くにいる、傷つきやすい生物には触れないよう注意を促す。

ファイブ・ポイント浮上 — 浮上中は、浮力コントロール、適切な浮上速度、バディ・コンタクトを維持することに重点を置く。水底の地形やラインなど、浮上速度を見積もってコントロールするのに役立つ視標に沿って浮上させる。次のようにバディと一緒にファイブ・ポイント浮上を行なうよう指示する。(1) バディに合図を出す、(2) 時間/ダイブ・コンピューターを確認する、(3) 右手を頭上に伸ばし、排気ボタンに指を添えて左手でBCDのパワー・インフレーターを持ち、(4) 上を見上げて周囲を見回しながら、(5) ゆっくりと浮上する。できれば、5メートル/15フィートで3分間の安全停止をさせる。ボートの往来がある場所では、音に注意し、障害物などがないかどうか頭上をよく見ながら水面に出よう生徒ダイバーに念を押す。

オープンウォーター・ダイブ1でファイブ・ポイント浮上の達成条件を満たしているのであれば、バックアップ空気源を使って浮上を最後のスキルとして実施し、そのまま生徒ダイバーを浮上させてもよい。

水面に出たら、ただちにBCDに空気を入れて浮力を確保し、マスクは顔につけたままにして、水から出るまで、あるいは歩けるくらい浅い場所に来るまで、スノーケルまたはレギュレーターで呼吸するという正しい水面習慣を身に付けるよう注意を促す。

オープンウォーター・ダイブ3

水面

ダイブ・プランを立てる — ダイビング・ポイントについてのインストラクターの説明に基づいて、「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」を使ってダイブ・プランを立てるよう生徒ダイバーに指示する。コンディション、エントリーとエキジットの方法と場所、バディとはぐれてしまった場合にするか、予定しているコース、環境保護の習慣、危険になる恐れのあるもの、戻り始めるターン・プレッシャーと浮上開始時残圧について打ち合わせをし、ダイブ・コンピューターまたはRDPを使って深度と潜水時間の計画を立てるよう指示する。生徒ダイバーのスキルに見合うよう、必要に応じてダイブ・プランを調整する。ダイビング中に確認できるよう、スレートにダイブ・プランのデータをメモしておくよう指示する。

注意事項として、常に誤差20bar／300psiの範囲内で自分の残圧を把握し、あらかじめ打ち合わせておいたターン・プレッシャーや浮上用に残しておく予定残圧に達したら、必ず合図するという点を確認する。

器材の準備と装着 — スタッフがほとんど手助けしないで、生徒ダイバーに各自の器材をセッティングさせる。バディが互いに協力して器材を装着し、調整するのは奨励する。器材の正しい装着テクニックを強調する。

プレダイブ・セーフティ・チェック — バディチームごとにプレダイブ・セーフティ・チェックを行ない、スタッフが確認する。

ウェイト量とトリム調整 — 前回のダイブと異なる場合には、どのくらいのウェイトが必要かチェックし、トリムを調整するのを手伝う。クイックチェックとして、レギュレーターをくわえ、BCDから空気を抜き、動かずに普通に呼吸するよう生徒ダイバーに指示する。必要に応じてウェイトの重さを調整する。

水中

視標のある自由潜降 — ファイブ・ポイント方法を使って潜降を開始するよう生徒ダイバーに指示する。注意事項として、潜降中はラインなど固定された目標物を視標として使って浮力をコントロールすることを忘れてはならないという点を確認する。トラブルが起きて身体を支える必要が生じたのでない限り、ラインにはつかまらないと言う。常にバディと一緒にいて、早目に頻繁に圧平衡を行ない、潜降しながら適切な浮力を維持できるよう、少しずつ頻繁にBCDに空気を入れるという点に注意する。

中性浮力 — BCDにオーラルで空気を入れて中性浮力をとり、キックしたり手で水をかいたりせずにホバリングするよう生徒ダイバーに指示する。スキル練習中に水底を巻き上げてしまう恐れが少なく、流れに身体が揺られて傷つきやすい生物などに間違っただつつかってしまうようなことがない場所を選び、ラインなど目に見える視標の近くに生徒ダイバーを配置する。深さでウェットスーツが圧縮されるため、もっとエアを使う必要があるかもしれないことを生徒ダイバーに説明する。生徒ダイバーが気付かずに浮上し始めた場合に備えて、いつでも止められるよう近くで見守る。マスターさせるのが目的なので、このスキルに時間制限はない。

マスクの脱着とクリア — ゆっくりとマスクに水を入れ、水温に慣れてからマスクを外すよう生徒ダイバーに指示する。フードをかぶっている場合には、マスクの縁がフードにかからないように注意すると言う。コンタクトレンズをしている生徒ダイバーには、マスクに水が入っている間は目を閉じているよう指示する。実際の状況を考えて、中性浮力を保ちながら、あるいはフィンの先端だけが水底に接触している状態でこのスキルを練習させる。

水中ツアー — 生徒ダイバーは前回のダイブに続いて、浮力コントロールと効率的な流線形、バディ・コンタクトとコミュニケーション、残圧チェック、水中世界の様子を認識するなど、多くのことを学習する。水中生物やその場所の見所などを指し示して教える。ランダムに残圧チェックを実施して、生徒ダイバーが誤差20bar／300psiの範囲内で常に自分の残圧を把握していることを確認する。常にバディの近くにいる、傷つきやすい生物に触れないよう注意を促す。

ファイブ・ポイント浮上 — 浮上中は、浮力コントロール、適切な浮上速度、バディ・コンタクトを維持することに重点を置く。水底の地形やラインなど、浮上速度を見積もってコントロールするのに役立つ視標に沿って浮上させる。次のようにバディと一緒にファイブ・ポイント浮上を行なうよう指示する。(1) バディに合図を出す、(2) 時間／ダイブ・コンピューターを確認する、(3) 右手を頭上に伸ばし、排気ボタンに指を添えて左手でBCDのパワー・インフレーターを持ち、(4) 上を見上げて周囲を見回しながら、(5) ゆっくりと浮上する。できれば、5メートル／15フィートで3分間の安全停止をさせる。ボートの往来がある場所では、音に注意し、障害物などがないかどうか頭上をよく見ながら水面に出よう生徒ダイバーに念を押す。

水面に出たら、ただちにBCDに空気を入れて浮力を確保し、マスクは顔につけたままにして、水から出るまで、あるいは歩けるくらい浅い場所に来るまで、スノーケルまたはレギュレーターで呼吸するという正しい水面習慣を身に付けるよう注意を促す。

オープンウォーター・ダイブ4

水面

ダイブ・プランを立てる — 限定水域のミニダイブのプランを立てたときと同様に、ダイビング・ポイントについてのインストラクターの説明に基づいて、「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」を使ってダイブ・プランを立てるよう生徒ダイバーに指示する。全員が一緒に行動するのであれば、グループとしてダイブ・プランを立てる。バディチームごとに行動するというダイブ・プランを立てる場合には、インストラクターまたは認定アシスタントが付き添う。

PADIオープン・ウォーター・ダイバーに見合ったダイブ・プランを立て、プランどおりに実施する能力と自信を身に付けたエントリー・レベルの認定ダイバーに育てることが目的である。生徒ダイバーは、コンディションを評価し、エントリーとエキジットの方法と場所、バディとはぐれてしまった場合にどうするか、予定しているコース、環境保護の習慣、危険になる恐れのあるもの、戻り始めるターン・プレッシャーと浮上開始時残圧、安全停止などについて打ち合わせし、ダイブ・コンピューターまたはRDPを使って深度と潜水時間の計画を立てる。運営上や安全上の理由から必要がある場合のみ、アドバイスするか修正する。ダイビング中に確認できるよう、生徒ダイバーが各自のスレートにダイブ・プランのデータをメモしたことを確認する。

注意事項として、誤差20bar／300psiの範囲内で常に自分の残圧を把握し、戻り始めるターン・プレッシャーと浮上開始時残圧、あるいは潜水時間制限に関して、絶対にダイブ・プランに従わなければならないという点を確認する。また、水中で生徒ダイバーの注意を引くのに使う音の出るシグナル器材について確認する。何らかの理由で、ダイビング中に生徒ダイバーの注意を引き、指示を出す必要が生じた場合、これは重要なコントロール手段になる。

器材の準備と装着 — ほとんど手助けなしで器材をセッティングするよう生徒ダイバーに指示する。器材の正しい装着テクニックを使って、バディ同士で助け合いながら器材を装着し、調整するよう言う。

プレダイブ・セーフティ・チェック — バディチームごとにプレダイブ・セーフティ・チェックを行ない、スタッフが確認する。

ウェイト量とトリム調整 — バディ同士でクイックチェックを行ない、必要に応じて調整するよう生徒ダイバーに指示する。

水中

視標のない自由潜降 — 潜降速度をコントロールしながら、バディチームで潜降するよう指示する。ダイブ・コンピューター／深度計を使い、バディ同士が互いを見るのはよいが、近くにある静止した視標を潜降の目安に使ってはならない。視標ラインが近くにある場合には、逆方向を向いてラインを見ないようにさせる。潜降中はインストラクターと一緒にいるが、潜降速度は自分でコントロールするよう生徒ダイバーに指示する。単にインストラクターの速度に合わせるのではなく、自分でコントロールさせる。

水中ツアー — クラス全員をグループとして一緒に行動させるか、バディチームごとに行動させ、インストラクターまたは認定アシスタントが付き添う（人数比1:2）。生徒ダイバーはそれぞれのダイブ・プランに従って潜っているので、必要に応じてサポートすることが、ここでのインストラクターの役割となる。ダイビング・ポイントとコンディションに応じて、生徒ダイバーが先導してもよいし、インストラクターがコースをガイドしてもよい。コントロールを維持しながら、できる限り自主的に行動させる。インストラクターは、浮力コントロールと効率的な流線形、バディ・コンタクトとコミュニケーション、残圧と潜水時間のチェック、基本的なナビゲーション、水中世界に対する認識などに関して生徒ダイバーを監督し、しっかりと達成できているかどうか評価する。生徒ダイバーは、あらかじめ打ち合わせたターン・プレッシャーまたは時間になったとき、浮上開始時残圧または潜水時間制限に達したときに、適切な行動をとらなければならない。

ファイブ・ポイント浮上と安全停止 — 浮上中は、浮力コントロール、適切な浮上速度、バディ・コンタクトを維持することに重点を置く。バディと一緒にファイブ・ポイント浮上して、5メートル／15フィートで安全停止をするよう生徒ダイバーに指示する。安全停止は必修。インストラクターがオープンウォーター・ダイブ1、2、または3で安全停止を実施し、評価が済んでいる場合には、ここでの安全停止については認定アシスタントが評価してもよい。注意事項として、ボートの往来がある場所では、音に注意し、障害物などがないかどうか頭上をよく見ながら水面に出よう生徒ダイバーに言う。

水面に出たら、ただちにBCDに空気を入れて浮力を確保し、マスクは顔につけたままにして、水から出るまで、あるいは歩けるくらい浅い場所に来るまで、スノーケルまたはレギュレーターで呼吸するという正しい水面習慣が身に付いているかどうか評価する。

アドヴァンスド・オープン・ ウォーター・ダイバー・コース

実施方法とスキルについての推奨事項

概要

PADIアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・プログラムは、各ダイバーが興味を持っているダイビングの分野を追求し、さらに経験を得るための手段を体系的に提供するプログラムである。いったん基本的なスキルが身に付けば、新しいスキルに挑戦したり、見たことのない生き物を見たり、いつもとは違う場所で潜ったり、新しい冒険を体験したりしてみたいという希望が出てくる。

ダイバーはダイビング教育を続けるにあたって、便利さと柔軟性を求めるため、このプログラムでは、生徒ダイバーは自分が興味を覚えるダイブを選び、PADIインストラクターの指導の下でさまざまなダイビング活動を試してみることができる。

アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・プログラムは、アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバーと、アドベンチャー・ダイバーの2つのコースで構成されている。

アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバーは、様々なタイプのダイビングや環境と他の3つのアドベンチャー・ダイブに幅広く適用することができるアンダーウォーター・ナビゲーションとディープ・アドベンチャー・ダイブが含まれる。ダイバーはインストラクターの指導の下、各自の興味に沿ったコースを選択する。

ダイバーはいずれかの3つのアドベンチャー・ダイブを完了することにより、アドベンチャー・ダイバーを修了することになる。このレベルは少しずつ前進することを希望したり、時間に限りのある初心者のダイバーに対応している。

各アドベンチャー・ダイブは関連するPADIスペシャルティ・ダイバー・コース (スペシャルティ・インストラクターの裁量による) に向けてのクレジットとなり、生徒ダイバーがトレーニングを継続する動機付けとなる。アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・プログラムは、PADIスペシャルティ・コースだけでなく、各種のアドベンチャー・ダイブで身に付けるスキルをベースにしている他のPADIコースの参加前条件を満たすという意味も含めて、その後のトレーニングの基礎となるものである。

総合的アドバイス

1. 他のPADIコースやプログラムと同様に、アドベンチャー・ダイブの計画、準備、実施にあたっては、ダイバーの安全が最優先事項である。
2. ダイバーの評価 – PADIインストラクター・マニュアルの中の「一般規準と手続き」の「トレーニング規準」セクションに規定されているように、継続教育コースの場合には、生徒ダイバーの水中スキルとダイビングについての知識を評価する。トレーニングをスタートする前に、必要に応じてスキルと知識を補習する。より深くダイブするダイバーやオーバーヘッド環境でのダイブをするダイバーにはより高いレベルの水中スキルとダイビングについての知識が必要となる。疑問がある場合は、常に用心深くなる必要がある。
3. ダイブのオプション – 生徒ダイバーはトレーニングを開始するにあたって、インストラクターのアドバイスを受けて、自分が興味を持っている分野を選択する。できるだけ多くのアドベンチャー・ダイブを提供するのが理想だが、地形的な条件やインストラクターの資格状況や使える器材の制約から、どのダイブが提供できるかが限られる場合もある。生徒ダイバーの希望に添えるよう、ツアーなどで他のダイビングエリアへ行ったときに別の種類のアドベンチャー・ダイブができるというオプションを提供するのがベストである。提供できるアドベンチャー・ダイブの種類を増やすため、トレーニングを継続する必要がある。

4. 知識開発 — 各アドベンチャー・ダイブに必要な知識を学習する方法はいくつかある。第一は、PADIアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マニュアル（紙版）または、eラーニングのナレッジレビューを含む関連する部分を修了することである。第二は、ダイブ前に自習する時間がない場合にはプレダイブ・ブリーフィングか質疑応答セッションで必要な事柄をインストラクターが生徒ダイバーに教えるという方法である。ダイバーはこのセクションとナレッジレビューをダイブの後に修了するが、インストラクターがアドベンチャー・ダイブ修了のクレジットを出す前に学習することになる。理想としては、Thinking Like A Diver（経験豊富なダイバーの視点で物事を考える）知識開発セクションを最初のアドベンチャー・ダイブよりも前に実施したほうがよいが、認定の前までに修了していればよい。
5. 特別な状況 — PADIアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバーの教材には、いくつかのスペシャルティ活動についての情報が含まれていないため、これらについては、生徒ダイバーは別の手段で学習しなければならない：
 - PADIスペシャルティ・ダイバー・コース教材／AWARE教材とナレッジレビューを使い、各自学習する。
 - 生徒ダイバー用の教材にはないアドベンチャー・ダイブのスペシャルティ・インストラクター・ガイドを使った、インストラクターによるプレゼンテーションに参加する。この方法は生徒ダイバーの使用言語での教材が提供できないときにも使う。
6. 特殊器材 — アドベンチャー・ダイブでは特殊器材が必要な場合が多いため、インストラクター、スタッフ、生徒ダイバー全員が、ダイブを実施するのに必要な器材を持っていることを確認する。ダイブ前に、チェックリストを使って器材を確認する。新しい器材については、取り付け方や設定方法を生徒ダイバーに教える。必要な指導用器材がすべて入ったアドベンチャー・ダイブ・キットを準備しておくのがよい。例えば、ナイト・アドベンチャー・ダイブ・キットには、水面ライト／ビーチライト、予備のマーカーライト、予備の水中ライト、予備の電池、コンパスなどを入れておく。
7. プレダイブ・セッション — オープンウォーター・ダイブの前に、アドベンチャー・ダイブで使用する新しいツールの使い方を練習したり、新しいテクニックを試したりする実践的なプレダイブ・トレーニング・セッションを行なうことが推奨される。このセッションは、陸上でのリハーサル、限定水域ダイブ、あるいはその両方を組み合わせて行なう。新しい発見、最大限の練習、そして楽しさを盛り込んだ内容のセッションにする。時間や運営上可能であれば、それぞれのアドベンチャー・ダイブで以下の（あるいは同様の）セッションを行なう：
 - 身近なエリアに生息している魚、水中生物、生態系に関するスライドやビデオを上映する - 魚の見分け方、アンダーウォーター・ナチュラリスト・ダイブ
 - ロープの結び方、ラインの扱い方 - ボート・ダイブ、ディープ・ダイブ、サーチ&リカバリー・ダイブ
 - コンパスの使い方 - アンダーウォーター・ナビゲーション・ダイブ、サーチ&リカバリー・ダイブ
 - サーチパターンの練習 - サーチ&リカバリー・ダイブ
 - リフトバッグの使い方 - サーチ&リカバリー・ダイブ
 - ドライスーツの準備と使い方 - ドライスーツ・ダイブ
 - 水中ライトの準備と使い方 - ナイト・ダイブ
 - 水中カメラの準備と使い方 - デジタル・アンダーウォーター・イメージング・ダイブ
8. 場所の選択 — 各アドベンチャー・ダイブに適していて、すべての達成条件を満たせる場所を選ぶ。生徒ダイバーと複数のアドベンチャー・ダイブを行なう場合には、できる限り多彩なトレーニング場所を使用する。インストラクターの指導の下で様々なダイビングポイントを経験することが、生徒ダイバーがトレーニングを継続する理由のひとつだからである。生徒ダイバーのスキルレベルに適したダイビングポイントとコンディションを選ぶようにする。

9. 環境への配慮 – すべてのアドベンチャー・ダイブにおいて、水中生物へのダメージを避けるため、環境への配慮と浮力のコントロールを維持することをダイバーに注意する。Project AWAREの「海の惑星を守るダイバーのための10のヒント」を参考にす。模範になる例を設定する。
10. すべてのダイバーにThinking Like a Diverの再確認をする (Thinking Like a Diverのディスカッション・ポイントを見る)。PADIアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・インストラクター・スレートをダイブの場所で参照する。
11. 生徒ダイバーが、プレダイブ・プランニングやダイブの情報、水中での記録をとるために、アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス (多目的) データキャリアを使うようにする。
12. トレーニングを記録する – 生徒ダイバーのログブックに署名して、アドベンチャー・ダイブを修了したことを記録する。PADIアドベンチャー・ダイブ・トレーニング・レコードも、アドベンチャー・ダイブを修了したことの証明として使用することができる。

順序についての注意事項

ディープ・ダイブとアンダーウォーター・ナビゲーション・ダイブを含む5回のダイブを2日間で修了するスケジュールを組めば、PADIアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー認定を取得できる。また、1ヶ月間に渡って様々なアドベンチャー・ダイブを別々に実施するというスケジュールを組むことも可能である。

コンディションなどの条件がよければ、1日に3回のアドベンチャー・ダイブを実施することができ、生徒ダイバーはPADIアドベンチャー・ダイバー認定を取得できる。そのうちのひとつがアンダーウォーター・ナビゲーション・ダイブであれば、アドベンチャー・ダイバーはレスキュー・ダイバー・コースをスタートする資格を得る。

Thinking Like a Diverのディスカッション・ポイント

PADIアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・プログラムの中でのThinking Like a Diverの目的はダイバーが初期のレベルのコースで手順や基礎の学習を構築することである。インストラクターの仕事は、ダイバーが毎回のダイブを準備し、実施する度にダイバーの考え方を膨らませることであり、彼らのダイビングをより経験のあるダイバーのように近づけることである。アドベンチャー・ダイブの前に、その時のダイブに応じた実用的な例を挙げ、原則を思い出させる。ブリーフィングの中で、ダイバーがダイブの前とダイブの最中にどう考え行動すべきかを明確に提示する。ダイブの後に、ダイバーにこれらのことを確認する。インストラクターの提案がアドベンチャー・ダイブの方針、その地域でのダイブ、そしてすべてのダイバーにあてはまる広範囲での安全の原理に直接関係してくる。

ブリーフィングでは次のことを注意事項に含める:

- アドベンチャー・ダイブに関連する最初の目的 (復路の安全) と第二の目的。
- ダイブ・プランニング – 最大深度、最大時間、ターン・プレッシャー、予備と浮上開始時残圧の計画。ダイブ中にダイブリミットを確認できるよう、アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス (多目的) データキャリアに記録させる。
- 状況の認識 – ガスの管理、激しい動きによるガスの消費、深度、バディ、ナビゲーション、器材、危険箇所、環境など
- すべきことの管理 – ダイブ・ファースト、シチュエーション・セカンド、コミュニケーション・サード
- よい習慣を練習 – 例: プレダイブ・セーフティ・チェック、マスクをしてスノーケルかレギュレーターを口にくわえる。水面で浮力を維持し、慎重にダイビングする。

率直な気持ちを導き出す対話型のデブリーフィングを行なう。これはダイバーの精神的な応用能力を育成し、ダイバーがただ単純な返事をするのを避けることができる。ダイバーが「はい」または「いいえ」で答えられるような質問は避ける。デブリーフィングをインタビューのようにとらえ、ダイバーの反応を見ながら質問事項を調整する。

ダイバーと対話するような質問:

1. ガス・プランニングは何をベースにしましたか?その結果はどうでしたか?
 - いつダイブを開始しましたか?なぜですか?
 - 予備の残圧はどのくらい残っていましたか?
2. 周囲の状況(波、潮流、視界、危険)に関してどのような判断をしましたか?
 - あなたとパディはこのことに関してどのようにコミュニケーションしましたか?
 - どのようなことを想定していて、どのようなことが想定外でしたか?
3. エントリー／エキジットまでのナビゲーションはどうでしたか?
4. このダイブにおいて優先事項をどのように行なったかの例は何ですか?(ダイブ・ファースト、シチュエーション・セカンド、コミュニケーション・サード)
5. どのようなよいダイブの習慣を練習し、あなたのチームで見ることができましたか?
6. もしこのダイブをもう一度するとしたら何をどのように変えますか?
7. このダイブから何を学びましたか?

アドベンチャー・ダイブの実施方法と テクニックについての推奨事項

PADIアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバーの教材を使用するすべてのアドベンチャー・ダイバーに次の推奨事項を使用する。他のアドベンチャー・ダイバーには、PADIスペシャルティ・コース・インストラクター・ガイドに関連付けられている推奨事項を利用する。

最初にスキルを説明してデモンストレーションし、次に、生徒ダイバーがスキルに慣れて達成条件を満たすまで練習させる。

コアダイブ

ディープ・アドベンチャー・ダイブ

1. その生徒ダイバーと一緒に最近潜ったことがない場合には、ダイブに備えて生徒ダイバーの知識を確認し、オープンウォーターで深い場所へ行く前に、ディープ・ダイブを修了するのに前もって必要なスキルがあるかどうか、水中で評価する。評価では、浮力コントロール能力、残圧計やダイブ・コンピューター、深度計などの表示の意味を理解しているなどを含むダイビング器材に関する知識、水中で明確にコミュニケーションできる能力をチェックする。この前評価は、別途の限定水域セッションとして実施するか、ディープ・ダイブをスタートするときに行なう。深場へ行く前であれば、どちらでもよい。
2. 1:8の人数比で直接的に生徒ダイバーを監督する。認定アシスタントを使っても、この人数比を増やすことはできない。生徒ダイバーに直接的に目を配って対応する能力に影響が及ぶようなコンディションの場合には、人数比を減らす。必要であれば、自分か認定アシスタントがすぐに手を伸ばして生徒ダイバーへアシストできる位置に自分自身を配置する。ダイブを先導し、個々の生徒ダイバーをアシストするために短い時間だけ目を離す以外、生徒ダイバー全員に目を配り続ける。
3. 深度18～30メートル／60～100フィートの間でダイブを実施する。ジュニア・ダイバー（12～14歳）の最大深度は21メートル／70フィート。
4. 適切な判断を用いて、達成条件を満たすのに適していて、生徒ダイバーのスキルと安心感のレベルに見合ったダイビングポイントを選ぶ。同様に、選んだ深度が適切かどうかを確認する。ダイバーの学習や安心感を阻害するような深度でディープ・ダイブを実施しても、得られるものはほとんどない。
5. バディと共にダイバーにターン・プレッシャー、浮上開始時残圧、予備の残圧を含むガスの管理をし、ダイブ時間の設定を計画させる。ダイバーは個々のダイブ・コンピューター、またはレクリエーション・ダイブプランナーを使い、計画の限界内でダイブを行なわなくてはならない。
6. 水面フロート、目標ライン、緊急減圧用呼吸器材を準備するのを手伝うよう生徒ダイバーに指示する。
7. ディープ・ダイビングの性質上、ハイポサーミア（体温低下）、窒素酔い、深い水中での浮力コントロール、不安やストレスといったようなトラブルが生じる恐れがあることに注意し、すぐに対処できるよう準備を整えておく必要がある。
8. 認定アシスタントに水中活動を補佐させる。例えば、最初のバディチームと一緒に目標ラインに沿って潜降させ、他のチームが潜降してくる間、アシスタントは水底で待っている生徒ダイバーに目を配る。もうひとりのアシスタントにボートや浜に残ってもらい、エントリー時とエキジット時の人数管理や、生徒ダイバーの手助けをするなどの補佐をさせる。

9. 可能であれば、目で確認したり手で触れることのできる目標ラインを使って潜降と浮上を行なう。これは、中層にいるときの不安感を少なくするのも役立つ。
10. ダイブ・コンピューター（深度計）を比較する練習には、ダイブ・コンピューター、毛細管式深度計、異なるタイプのブルドン管式深度計など、できる限り多くの種類の深度計を持って行く。ダイバーのアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス（多目的）データキャリアに深度計の比較を記録させる。
11. 色の変化の比較には、陸上と水中での色の変化がよくわかるよう、赤、オレンジ、ピンク、または黄色の物体を使用する。ダイバーのアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス（多目的）データキャリアのカラーチャートを使用する。
12. 可能であれば、ウエイトをつけてボートからぶら下げたラインか安全停止バー、または係留／アンカーラインにつかまって安全停止をする。安全停止の場所までゆっくりと浮上し、安全停止が終わったら、水面までゆっくりと浮上するよう強調して指導する。ボートの往来がある場所では、音に注意し、障害物などがないかどうか頭上をよく見ながら水面に出よう言う。

アンダーウォーター・ナビゲーション・アドベンチャー・ダイブ

1. このダイブに推奨される深度は6～9メートル／20～30フィート。
2. 30メートル／100フィートのラインと必要なナビゲーションブイを設置するよう認定アシスタントに指示する。認定アシスタントは、生徒ダイバーのダイビング前後の作業を手助けし、ナビゲーション練習中のバディチームを監督する役割を果たすこともできる。
3. コンパスの持ち方、方位と逆方位の取り方、ベゼルの操作方法、泳ぎながらコンパスを水平に保つ方法を復習する。ダイバーが電子コンパスを使用している場合は、セットの仕方、使用方法を復習する。
4. 陸上（またはボートのデッキ上）で、コンパスの使い方とナビゲーションのパターン練習として、直線往復と四角形パターンのコンパスコースを歩いてみる。
5. 状況によっては、各バディチームに色をついたブイとラインを渡し（DSMBまたは色をつけた小さなプラスチックのボトルなど）、水面から生徒ダイバーの動きを監督するほうがよい場合がある。ブイを目で追って、各バディチームがサーチパターンを正確に実行しているかどうか確認する。必要であれば、認定アシスタントを各バディチームに同行させる。
6. 距離の測定には、バディチームごとにコースの一方の端からスタートし、普通のリラックスしたペースで泳ぎながら、コースのもう一方の端まで泳ぐのに必要なキックサイクルの回数を数える。アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス（多目的）データキャリアにキック回数を書き込む。次は方向を変えて、スタート地点まで戻るのに必要な時間を測定し、時間を書き込む。
7. ナチュラル・ナビゲーションには、スタート地点からおよそ30～90メートル／100～300フィートの地点を設定し、ブイでマーキングする。バディの一方に距離を測定するよう指示し、もう一方のバディには、帰路の際に目印になりそうな特徴ある地形を探して記録するよう指示する。目標地点に到着したら、スタート地点に戻る。方向を確認する必要があるときのみ浮上する。
8. コンパス・ナビゲーションには、スタート地点からおよそ30～90メートル／100～300フィートの地点を設定し、ブイでマーキングする。ナビゲーター役のバディに、水面でコンパスを目標ブイに合わせるよう指示する。もう一方のバディには、距離を測定するよう指示する。バディチームごとに潜降し、コンパスを見ながらあらかじめ決めておいた距離を泳ぐ。ナビゲーター役は浮上せずにコンパスを逆方向に合わせ、スタート地点へ戻る。スタート地点の6メートル／20フィート以内に戻れたら、バディ同士で役割を交代してもう一度練習する。6メートル／20フィート以内に戻れなかった場合には、達成条件を満たせるまで練習を繰り返す。ダイバーにアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス（多目的）データキャリアに記録させる。

9. 四角形ナビゲーションには、あらかじめ決めておいた方向へ向かっておよそ30メートル／100フィートの距離を泳ぐようバディチームに指示する。バディの一方がコンパスを使ってナビゲーションし、もう一方が距離を測定する。地形と深度に応じて、長方形のパターンをナビゲーションするのもよい。四角形の一辺を泳いだら、90度方向転換し、さらに30メートル／100フィート泳ぐ。3回方向転換してスタート地点の8メートル／25フィート以内に戻れたら、バディ同士で役割を交代し、もう一度練習する。8メートル／25フィート以内に戻れなかった場合には、全員が達成条件を満たせるまで練習を繰り返す。ダイバーにアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス(多目的) データキャリアに方向を記入させる。
10. チャレンジ性を高め、より楽しい内容にするために、正確なナビゲーションを行なったチームに賞品を出したり、水面に出て方向を確認することなくゴールに最も近い位置まで戻った生徒ダイバーを表彰するなどの工夫をする。
11. このアドベンチャー・ダイブは、器材を流線形に保って正しい姿勢で泳ぎ、中性浮力を維持することに重点を置いて実施する。

エレクトティブ・ダイブ

アルティチュード・アドベンチャー・ダイブ

1. 高所でのノンストップ・リミット、潜降と浮上の検討事項、浮力コントロールについて復習する。アルティチュード・ダイバー・スペシャルティ・コースを受ける必要性を強調する。
2. 海拔300～2,400メートル／1,000～8,000フィートの場所でアルティチュード・ダイブを実施する場合には、潜水地に到着後6時間待ってからダイビングを開始する。2,400～3,000メートル／8,000～10,000フィートの場所で行なう場合には、ダイビング開始まで少なくとも6時間は待機しなければならない。
3. アルティチュード・ダイビングの性質上、ハイポサーミア(体温低下)やハイポキシア(低酸素症)など、高い標高と低い気温が原因のトラブルが生じる恐れがあることに注意する。
4. アルティチュード・ダイブ後に山道を登って帰るなど、生徒ダイバーがさらに高い標高へ車で移動しなければならない場合には、ダイビング後の飛行機搭乗のガイドラインに従って計画を立てる。
5. 浮上速度は1分間に9メートル／30フィート(もしくはコンピューターの表示する最高値)を超えてはならない。また、水面に出る前に必ず安全停止をする。安全停止の深度(理論深度)は潜水地の標高によって決まる。
6. 深度下で深度計を比較する練習には、ダイブ・コンピューター、毛細管式深度計、異なるタイプのブルドン管式深度計など、できる限り多くの種類の深度計を持って行く。
7. 生徒ダイバーがいつもより厚い保護スーツを使っている場合や、淡水でダイビングをしたことがないという場合には、浮力チェックを行なってウエイト量を調節するよう指示する。

ボート・アドベンチャー・ダイブ

1. ボート・ダイビングには、小型のゴムボートからダイブクルーズ用の大型チャーター船まで、様々な種類のボートが使用される。このアドベンチャー・ダイブを行なうにあたっては、生徒ダイバーがトレーニング修了後に利用する可能性が高い種類のボートを使うのが望ましい。
2. このアドベンチャー・ダイブで使用するボートについて生徒ダイバーに説明し、ボート・ダイビングの正しいエチケット、一般的な用語、ボート・ダイビングでのエントリーとエキジット方法、ボート・ダイビングに関する法律や条例(係留／アンカーラインに関する規制を含む)、ボートに搭載されている安全／緊急用設備について話し合う。
3. 船酔いのトラブルに注意する。

4. 使用するボートで可能であり、許可されれば、クルーを邪魔しないように注意しながら、ロープを結ぶ、アンカリング、無線、接岸、ダイブフラッグを揚げるなど、基本的な作業を生徒ダイバーに見せる。
5. ダイバーに、ダイビング終了時にどのようにして浮上ポイントに戻るかを説明する。状況によりこれが係留／アンカーライン、コンパスの方向、相互コンパスの方向の海流に向かって泳ぐことの開始となる。他のナビゲーションの方法として、ナチュラル・ナビゲーションなどが予定したエキジットエリアへ戻る目的に適用できる。
6. 生徒ダイバーがシグナルチューブまたはDSMB (ディレイドサーフェスマーカーブイ) の使用方法を知っているか確認する。浮上用シグナルチューブのスキルは、浮上した後、ダイブの最後に実施するのが最も便利である。DSMBを使用する標準的なエリアで、ダイバーは12メートル／40フィート以下 (浅いほうがよい) の深度で静止した位置で練習する。ダイバーにリールをしっかり持ち、ラインを張ることで、もつれを防ぐことができることを注意する。
7. 可能であれば、ボートからぶら下げたウエイトを付けたライン、安全停止用のバー、または係留／アンカーラインを使って安全停止を行なうよう生徒ダイバーに指示する。

デジタル・アンダーウォーター・イメージング・アドベンチャー・ダイブ

1. ダイブ前に、手本にするサンプル写真を生徒ダイバーに見せる。ライティング、アングル、フォーカスなどについて、それと同じようなショットを再現してみるように言う。
2. カメラの組み立て、ハウジングへの入れ方、テスト方法について説明する。
3. ダイビング前後の作業を手伝うよう認定アシスタントに指示する。アシスタントは、カメラの準備を手伝う、イメージの被写体になる、生徒ダイバーのエントリーとエキジットを監督するなどの役割を果たすことができる。
4. 光と潜水時間を考慮して、浅場で写真を撮る。ダイバーは、10分ではなく60分間写真を撮ることができれば多くを学べる。
5. できる限り透視度のよい場所で潜る。コンディションに合わせて、撮影方法を調整するよう生徒ダイバーにアドバイスする。
6. 静止画、または動画の被写体として、多様な水生生物や被写体がある興味深い場所を選ぶ。
7. 環境に優しい撮影方法を教える。環境保護の意識を持ち、生物にダメージを与えないよう、正しい浮力コントロールを行なうことの大切さを伝える。インストラクターが自ら模範を示す。

ドリフト・アドベンチャー・ダイブ

1. ドリフト・ダイブはボートを使って行なうのが最も一般的で簡単な方法であるため、その例にならうのが望ましい。
2. エントリーとエキジット、潜降と浮上のテクニックを説明する。最初から最後までバディコンタクトと中性浮力を維持することの大切さを強調して伝える。
3. その地域で最も一般的な手順 (曳行フロート、フロートなし、DSMB) を使用する。ドリフト・ダイビングをするときには、水中にダイバーがいることを付近のボートに知らせ、ラインはダイバーが潜降、浮上、安全停止を行なう際の目標物になるため、環境に適した、かなり目立つフロートとラインを使用する。
4. 認定アシスタントに生徒ダイバーの監督を手伝わせる。アシスタントのひとりにフロートとラインの取り扱いを任せる。

ドライスーツ・アドベンチャー・ダイブ

1. 初めてドライスーツを使う生徒ダイバーには、アドベンチャー・ダイブを実施する前に、限定水域でドライスーツについてのオリエンテーションを行なう。使い方、適正ウエイト量や浮力の調節方法に焦点を絞って教える。
2. インストラクターは1:8、認定アシスタントの場合は1:4の最大人数比で生徒ダイバーに同行する。
3. 生徒ダイバーはBCDを装着しなければならない。
4. パディが使用しているドライスーツシステムの使い方を確認するよう指示する (特に、空気の入れ方と抜き方)。
5. 水温とドライスーツのタイプに合わせてインナーウェアを選ぶ。生徒ダイバーが各自着用しているインナーウェアをチェックして、保温性が適切かどうか確認する。
6. ウエイトの重さを正しく調節することの重要性を強調する。ダイブ終了時、深度5メートル／15フィートで安全停止ができる重さでなければならない。
7. ダイバーは水中で浮力をコントロールするために、スーツのタイプ、メーカーの奨励、個人的な好みなどにより、自分のスーツのみを使用するか、スーツスクイズを防ぐ程度の気体をスーツ内に入れるだけで浮力コントロールはBCDで行なう。
8. 潜降時にドライスーツのスクイズを防止する方法をアドバイスする。スーツ内のガスの量を調節して浮力をコントロールし、快適さを保つという点に注意を促す。
9. 水面でのスクーバユニットとウエイト・システムの脱着スキルを実施する場合には、ドライスーツ内のガスをできるだけ少なくしておいたほうが脱着しやすいことを説明する。

魚の見分け方アドベンチャー・ダイブ

1. 魚の見分け方ダイブは、身近なエリアで見ることのできる一般的な魚の科および種類をダイバーに知ってもらうことを目的としたコースである。
 - a. 生徒ダイバーが以前にフィッシュウォッチングをした経験がある場合には、このダイブで、REEF Fish Survey project (REEF魚類調査プロジェクト) といったような研究機関に提出できる内容の調査データを収集することに焦点を絞る。
 - b. 生徒ダイバーにフィッシュウォッチングの経験がほとんどない場合には、魚の見分け方の基本的なテクニックに焦点を絞る。
2. 身近なエリアで見ることのできる魚を紹介する。出会う確率の高い魚の写真やビデオを見せ、図鑑などの資料も揃えておく。
3. 魚の図鑑スレートやフィールドガイドがあれば、それを持ってダイビングするように生徒ダイバーに言う。また、すぐに参照できるよう図鑑などを準備しておく。そうすれば、観察したものが正しかったどうか、すぐに確認することができる。
4. 中性浮力を維持する、不必要にさわらない、器材類はぶらぶらさせずにしっかりと固定する、ゆっくりと動いて水中の生き物を脅かすことを避けるなど、生き物に対して責任ある接し方をするよう生徒ダイバーに注意を促す。
5. 認定アシスタントに、生徒ダイバーが特定の魚を探したり、名前を調べたり、ユニークな行動やおもしろい生態を発見するのを手伝わせる。

ナイト・アドベンチャー・ダイブ

1. このダイブは、日没から日の出までの間に実施する。太陽が沈まない季節がある地域では、最も暗い時間帯に実施する。
2. 1:8の最大人数比で直接的に監督するか、認定アシスタントが1:4の最大人数比で監督する。推奨最大深度は18メートル／60フィート。
3. 生徒ダイバーは、各自が水中ライトとホイッスルを携帯しなければならない。また、各自がバックアップ用の水中ライトとケミカルライト／マーカ―も携帯することが望ましい。
4. 可能であれば、生徒ダイバーが日中にダイビングしたことがある場所で潜る。これは生徒ダイバーの不安感を少なくし、ナビゲーションに役立つ。
5. 生徒ダイバーと一緒に潜水計画を立て、方向指示用に浜やボートに置く水面ライトや水中ライト（ケミカルライト、ストロボビーコンなど）の設置を手伝わせる。
6. ナイト・ダイビングの性質上、器材の準備、生徒ダイバーが感じる不安やストレスに十分に注意を払う必要がある。素早く対応する態勢を整えておく。
7. 夜の環境が水中の生き物の行動にどのような影響を与えるか観察し、日中には見られない現象を探してみるよう指導する。
8. ダイバーにあらかじめ決めておいた場所へコンパス／自然の目標物を使ってナビゲーションし、スタート地点へ戻ってくる方法を説明する。ダイバーに直線コースと岸辺（または船着き場）の逆方向を歩くことによりコンパスの使い方を練習させる。ダイバーにコンパスの向きとキックサイクルまたは目的地までの時間をアドヴァンスト・オープン・ウォーター・マルチパーパス（多目的）データキャリアにメモさせる。
9. 可能であれば、手で触れて目で確認できる目標物を使って潜降する。ライトを下に向け、水底に注意しながら沈泥を巻き上げないテクニックを使うよう生徒ダイバーに指示する（中性浮力をとり、フィンの動きをコントロールする）。

ピーク・パフォーマンス・ボイアンシー・アドベンチャー・ダイブ

1. 深度が浅いほうが浮力の変化がはっきりとわかるため、ピーク・パフォーマンス・ボイアンシー・ダイブに推奨される深度は9～12メートル／30～40フィートである。そのくらいの深度のほうが、浮力調節の練習になる。
2. このダイブを実施する場所としては、生徒ダイバーがウエイトを調節しながら簡単にエントリー／エキジットできるポイントを選ぶ。ボート、栈橋や埠頭の付近、浮栈橋などを利用すれば、ウエイトの重さを様々に変えて試してみるのに便利である。
3. 試着用、に、さまざまなウエイト・システム、浮力に関連したアクセサリ類、BCDを用意しておく。正しいウエイトの位置、配分、締め方、緊急時のリリースと捨て方に重点を置いて説明する。
4. PADIベーシック・ウエイト・ガイドラインを参考にして、ダイブに必要なウエイト量を生徒ダイバー各自に見積もらせる。ダイバーにウエイトの配分とダイブの前と後のウエイトをアドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス（多目的）データキャリアにメモさせる。
5. ダイビング中に浮力コントロールができていいる姿をイメージするよう生徒ダイバーに指導する。
6. オープンサーキットの場合は呼吸のコントロールを使って深度を微調整し、さまざまな姿勢でホバリングを練習するよう指示する。
7. 環境保護に浮力コントロールがいかに大切かを強調して伝え、浮力ゲームを盛り込んでダイブをできるだけ楽しいものにする。例えば、中層に設置した障害物に触れずにくぐり抜ける。生物をじゃませずに、指1本で身体を押してその場から離れる方法を練習する。最小限の手足の動きだけで前後に動く動作を練習する。

サーチ&リカバリー・アドベンチャー・ダイブ

1. このダイブに推奨される深度は6~9メートル／20~30フィート。
2. このダイブでは、器材の準備と前もって計画を立てることが重要である。回収可能な物体を用意し、あらかじめ設定したサーチエリア内で設置する場所を調査する。
3. 陸上かボートの上で、次の練習を行なう：
 - 円形ロープ・サーチパターンを歩いて練習する。ひとりが「支点役」になり、もうひとりが「サーチ役」になる。
 - 「U字」サーチパターンを練習し、パターンの各辺を泳ぐのに必要なおよその時間／キックサイクルを見積もる。ひとりが「ナビゲーター役」になり、もうひとりが「サーチ役」になる。
 - バウライン、ツーフヒッチ、シートバンドの結び方を練習する。ダイバーにアドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス (多目的) データキャリアの結び方の図を参照するか、PADI Appの結び方のビデオにアクセスさせる。
 - これから検索して回収する物体に似たものを使って結び方を練習する。
4. 最初のスキル練習には、手で水面まで持って来られる程度の小さな搜索物を使用する (コイン、サングラス、食器類などで、大きさは水中の透視度による)。2回目のスキル練習には、リフトバッグを使って引き上げる練習用に、最初のときより大きくて重い搜索物を使用する (砂などを入れたバケツ、レンガ、コンクリートブロック、小型のアンカー、ウエイト・ベルト、エンジン部品など11キロ／25ポンド程度のもの)。
5. 生徒ダイバーが現場に到着する前に大小の搜索物を設置するか、生徒ダイバーがダイビング前の準備を行なっている間に、認定アシスタントに搜索物を設置させる。認定アシスタントは、生徒ダイバーのダイビング前後の作業を手助けし、バディチームがサーチパターンに沿って搜索物を探して水底から引き上げる作業を監督する役割を果たすことができる。また、生徒ダイバーが見つけなかった搜索物を回収するようアシスタントに指示し、水底に置き去りしないようにする。
6. バディチームごとに、およそ15×15メートル／50×50フィートのエリアにあらかじめ設置しておいた小さな物体を探して回収する。バディチームはサーチエリアをブイでマーキングし、円形ロープ・サーチパターンを使って小さな物体を搜索する。
7. バディチームごとに、およそ30×30メートル／100×100フィートのエリアにあらかじめ設置しておいた大きい物体を探して回収する。バディチームはサーチエリアをブイでマーキングし、「U字」サーチパターンを使って物体を搜索する。
8. ダイバーの第一と第二の目的に注意を払い、状況判断を適用させることを強調する。これはダイバーがダイブリミットに到達した場合、搜索物が見つかっていなくても搜索を中止する必要があるということである。
9. 状況によっては、各バディチームに色のついたブイとラインを渡し (DSMBまたは色をつけた小さなプラスチックのボトルなど)、水面から生徒ダイバーの動きを監督するほうがよい場合がある。ブイを目で追って、各バディチームがサーチパターンを正確に実行しているかどうか確認する。
10. 練習した結び方でリフトバッグを結索し、物体を水面まで引き上げる方法を各生徒ダイバーに練習させる。

アンダーウォーター・ナチュラリスト・アドベンチャー・ダイブ

1. 図鑑などの資料を見て、身近なエリアでどんな種類の生き物を見ることができるか準備しておくよう生徒ダイバーに指示する。水中生物の図鑑スレートなどがあれば携帯し、見たものをスレートにスケッチして後で調べる。
2. ダイブ中は、行動を静かに観察するなど生物に対して責任ある接し方をし、中性浮力を維持して着底しないよう気をつける。ホース類はブラブラさせずに固定し、生き物を脅かすことを避け、ゆっくりと動くよう生徒ダイバーに注意を促す。
3. 認定アシスタントには、生徒ダイバーと一緒に生き物を探し、名前を確認する、ユニークな習性や、生き物同士のおもしろい相互関係を教えるなどの手伝いをさせる。
4. バディチームは、少なくとも2種類の水中植物を探し、名前を確認する（淡水の場合は1種類）。植物は藻類でも顕花植物でもどちらでもよい。
5. バディチームは、カイメン、サンゴ、イソギンチャク、クラゲ、イソメ、ゴカイの類、巻貝、二枚貝、タコ、イカ、ロブスター、カニ、エビ、ザリガニ、ヒトデ、ウニ、ナマコ、蛇尾類、ホヤなど、少なくとも4種類の水中無脊椎動物を探し、名前を確認し、観察する（淡水の場合は1種類）。
6. バディチームは、魚類（例、サメ、エイ）、爬虫類（例、カメ）、両生類（例、カエル）、哺乳類（例、アザラシ、マナティ）など、少なくとも5種類の水中無脊椎動物を探し、名前を確認し、観察する（淡水の場合は2種類）。

レック・アドベンチャー・ダイブ

1. 1:8の最大人数比で直接的に監督するか、認定アシスタントが1:4の最大人数比で監督する。
2. このダイブではレック・ペネトレーションを行ってはならない。
3. レックの背景に関する情報を生徒ダイバーに提示する（沈没した年月日、何に使われていたか、歴史的な重要性など）。また、レックの大きさ、構造、特徴、深度、危険とその防止方法などについて話し合う。
4. レック・ダイビングに関わる法律や条例について話し合う。
5. レックの外観についての概要を説明する。レック・ダイビングの基本的なテクニックを練習させる。生徒ダイバーがレックを探検し、ナビゲーションするのを監督する。ダイバーにレックの特徴や危険個所について、アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・マルチパーパス（多目的）データキャリアにメモさせる。

レスキュー・ダイバー・コース

実施方法とスキルについての推奨事項

概要

PADIレスキュー・ダイバー・コースは、ダイバーの知識や経験を広げる上で、中心となる必要不可欠なステップである。レスキュー・ダイバー・コースでは、自分自身のことだけ考えていればよいというダイビングから視野を広げ、他のダイバーの安全も考えるダイビングを習得する。PADIレスキュー・ダイバー認定が、PADIのリーダーシップ・トレーニングへの参加前条件となっているのもこの理由による。

レスキュー・ダイバー・トレーニングは、ダイバーがPADIオープン・ウォーター・ダイバー・コースで学んだ事故防止や緊急事態へ対応する基本的スキルをさらに広げる。レスキュー・ダイバー・レベルのダイバーは、緊急時に人を手助けするために、より複雑なダイビングの緊急事態に対応し、応急手当を行なう方法を学ぶ心構えができています。このコースは、実施方法、内容、アプローチ方法などすべてにおいて実践的で、同時に生徒ダイバーへの要求も多いコースである。レスキュー・トレーニングが実際に役立つ状況は深刻かもしれないが、コース自体は楽しく、ダイバーの自信を育てる内容である。

PADIレスキュー・ダイバー・コースは、ある任務を達成するための方法が一つしかないという状況はほとんどないという考え方を重視している。レスキューのやり方に「これが絶対に正しい」という方法はなく、状況に応じて、さまざまな選択肢から救助者がその方法を選択する。このコースでは、レスキューに対して柔軟なアプローチをとる。例えば、救助者の体格や体力、環境の要因などから、どのようなレスキュー・テクニックが最も効果的か判断する。

レスキュー課題とシナリオは基本的なスキルを育成するものであり、さまざまなテクニックを試してみること、自分の長所を利用する方法を習得すること、自分の限界を認識すること、そういった緊急時によく考えることの重要性を生徒ダイバーに指導する。生徒ダイバーは、緊急事態に対応するにはどのような選択肢が使えるかまず考えてから、状況に適した最善の方法で行動することの重要性を学ぶ。

総合的アドバイス

1. 他のPADIコースやプログラムと同様に、レスキュー・トレーニングの計画、準備、実施にあたっては、ダイバーの安全が最優先事項である。
2. レスキュー課題とシナリオはすべてオープンウォーターで実施されるが、基本的なスキルを見につけるために、最初のトレーニングは限定水域で実施するほうがよい。オープンウォーターでレスキュー課題を実施するときには、流れ、波、水温、透視度などコンディションがよくないために、基本的スキルが習得できないというような状況は避ける。コースの進行に合わせて、より難しいコンディションに対応させるようにする。
3. その地域にある異なるタイプのダイビング環境を代表するようなさまざまな場所でトレーニングを行なう。例えば、ボート・ダイビングがポピュラーな地域なら、少なくとも1回はボートを使ってセッションを行なう。
4. 知識開発の前に、セルフレスキュー・スキル練習でコースをスタートすることができる。さらにレスキュー課題1および2へ進み、PADIレスキュー・ダイバー・マニュアルとビデオに記載されている内容をブリーフィングする。このアプローチは、積極的に自習し、楽しみながらコースを受けたいという強いモチベーションになる。
5. レスキューには、知識とモータースキルの予測できない現実の状況に応用することが求められるため、行動する前に、とまって考えることの重要性を強調する。個々の長所や弱点に合わせて、必要に応じてテクニックを変えるよう指導する。

6. スキル練習の進行に合わせて、器材を変えるなどバリエーションを加えていく(例えば、手袋とフードを追加する、異なる体格の人を事故者ダイバーにするなど)。生徒ダイバーをいたずらに困らせるようなバリエーションではなく、状況に合わせて応用することの大切さを教えることにより、能力の幅を徐々に広げていくようなものでなければならない。バリエーションを特に発表する必要はなく、生徒ダイバーがスキルをマスターするのに合わせて追加していただければよい。そうすることにより、生徒ダイバーは行動する前に状況を分析し、考えることを学ぶ。
7. よい「事故者」であることの大切さを生徒ダイバーに説明する。レスキューが成功するかどうかは、疲労しているのか、負傷しているのか、困っているのか、パニックになっているのか、意識を失っているのかなど、ダイバーの様子を判断し、見分ける救助者の能力に左右される。相違点、類似点、助けを必要としているダイバーが直面している危険などに対する生徒ダイバーの理解を深めるには、トレーニングセッションで「事故者」を演じさせるのがベストである。
8. 生徒ダイバーはレスキュー課題とシナリオで、ポケットマスク、ファーストエイドキット、酸素ユニットなど、さまざまな種類のレスキュー器材を使用する。全員が十分に時間をかけて器材の使い方を練習できるように、それぞれ複数を用意しておく。
9. シナリオは、無理のない計画と安全確保の範囲内で、できる限り現実的なものにする。スタッフは、救急隊の電話に出る役や、事故者が呼吸をしているか、していないか生徒ダイバーに伝える役など、シミュレーションに欠けている部分を補うだけの役割にして、指導は最小限にする。以下の点を検討する：
 - 「レスキュー・トレーニング実施中。助けを呼んでいるのは練習です」と書いた紙を掲示する。こうすることで、生徒ダイバーは水中から本気になって助けを呼ぶことができる。
 - 地元の緊急医療サービスや救急隊に連絡しておく。前もって日程を計画すれば、自分たちの練習のために実習に参加してくれることもよくある。これは特に、実際の緊急事態に出会うことが少ない小規模の地域に言える。

順序についての注意事項

1. レスキュー課題はそれぞれその前に学んだスキルをベースにしているため、生徒ダイバーは各レスキュー課題の達成条件を、順序通りにすべて満たさなければならない。
2. エマージェンシー・ファースト・レスポンス一次ケアと二次ケアのトレーニングをレスキュー・ダイバー・コースに組み込む場合には、人工呼吸法を練習する「レスキュー課題7 - 水面で反応のないダイバー」の前に修了するのがベストである。
3. PADIエマージェンシー・オキシジェン・プロバイダー・コースをレスキュー・ダイバー・コースに組み込む場合には、「レスキュー課題9 - 圧力関連事故のファーストエイドと酸素供給」の代わりに、エマージェンシー・オキシジェン・プロバイダーのスキル開発セッションを使用する。
4. 生徒ダイバーは、レスキューシナリオ1の前にレスキュー課題1～6、レスキューシナリオ2の前にレスキュー課題7～10を修了しなければならない。

レスキュー・ダイバー・コース サンプルスケジュール

これは、順序の必要条件に沿ってPADIレスキュー・ダイバー・コースを実施する場合のサンプルスケジュールである。これを参考にして、運営手順や生徒ダイバーのニーズに合ったスケジュールを作成する。

スケジュール1

1日目

事前の学習 – 生徒ダイバーはレスキュー・ダイバー・マニュアルのセクション1を読み、レスキュー・ダイバーDVDのセクション1を見て、ナレッジレビューを修了する。

歓迎／イントロダクションと知識開発1 – ナレッジレビューの確認。レスキュー・ダイバー・プリスク립ティブ・レッスンガイド (PLG 使って補足する。

レスキュー 課題 (知識開発1の前に実施してもよい)

セルフレスキューの復習

課題1 – 疲労ダイバー

課題2 – パニックダイバー

EFR一次ケア (CPR) と二次ケア (ファーストエイド) コース

2日目

事前の学習 – マニュアルとDVD、セクション2

知識開発2

レスキュー課題3 – 浜／ボート／栈橋からの対応 (反応があるダイバー)

3日目

事前の学習 – マニュアルとDVD、セクション3

知識開発3

レスキュー課題

課題4 – 水中でトラブルに遭遇しているダイバー

課題5 – 行方不明ダイバー

緊急アシストプラン – 作成した計画内容を検討する

4日目

事前の学習 – マニュアルとDVD、セクション4

知識開発4

レスキュー課題

課題6 – 反応のないダイバーを浮上させる

課題7 – 水面で反応のないダイバー

5日目

事前の学習 – マニュアルとDVD、セクション5

知識開発5

レスキュー・ダイバー・エグザムの管理

レスキュー課題

課題8 – 反応のないダイバーをエキジットさせる

課題9 – 圧力に関連する事故のファーストエイドと酸素供給 (またはPADIエマージェンシー・オキシジェン・プロバイダー・コースのスキル開発)

課題10 – 浜／ボートからの対応 (反応のないダイバー)

レスキュー・シナリオ1 – 水中で反応のないダイバー

レスキュー・シナリオ2 – 水面で反応のないダイバー

スケジュール2

事前の学習 – 生徒ダイバーはレスキュー・ダイバー・マニュアルをすべて読み、レスキュー・ダイバーDVDを見て、ナレッジレビューを修了する。

EFR一次ケア (CPR) と二次ケア (ファーストエイド) コース

歓迎／イントロダクションと知識開発 – ナレッジレビューの確認。レスキュー・ダイバー・プリスク립ティブ・レッスンガイド (PLG) を使って補足する。

レスキュー・ダイバー・エグザムの管理

レスキュー課題 – セルフレスキューの復習と課題1～10

緊急アシストプラン – 作成した計画内容を検討する

レスキュー・シナリオ1 – 水中で反応のないダイバー

レスキュー・シナリオ2 – 水面で反応のないダイバー

スケジュール3

事前の学習 – ダイバーはレスキュー・ダイバー・マニュアルの1～3章を読み、レスキュー・ダイバーDVDのセクション1～3を見て、ナレッジレビューを修了する。

EFR一次ケア (CPR) と二次ケア (ファーストエイド) コース

歓迎／イントロダクションと知識開発 – ナレッジレビュー1～3の確認。レスキュー・ダイバー・プリスク립ティブ・レッスンガイド (PLG) を使って補足する。

レスキュー課題

セルフレスキューの復習

課題1 – 疲労ダイバー

課題2 – パニックダイバー

課題3 – 浜／ボート／栈橋からの対応 (反応があるダイバー)

課題4 – 水中でトラブルに遭遇しているダイバー

課題5 – 行方不明ダイバー

課題6 – 反応のないダイバーを浮上させる

緊急アシストプラン – 作成した計画内容を検討する

レスキュー・シナリオ1 – 水中で反応のないダイバー

事前の学習 – ダイバーはレスキュー・ダイバー・マニュアルの4～5章を読み、レスキュー・ダイバーDVDのセクション4～5を見て、ナレッジレビューを修了する。

レスキュー・ダイバー・エグザムの管理

レスキュー課題

課題7 – 水面で反応のないダイバー

課題8 – 反応のないダイバーをエキジットさせる

課題9 – 圧力に関連する事故のファーストエイドと酸素供給 (またはPADIエマージェンシー・オキシジェン・プロバイダー・コースのスキル開発)

課題10 – 浜／ボートからの対応 (反応のないダイバー)

レスキュー・シナリオ2 – 水面で反応のないダイバー

レスキュー課題の実施方法とテクニックについての推奨事項

最初にスキルを説明してデモンストレーションし、次に、生徒ダイバーがスキルに慣れて達成条件を満たすまで手順を練習させる。PADIレスキュー・ダイバー・マニュアルに記載されている詳しいテクニック内容、写真、イラストを参照する。

セルフレスキュー・レビュー

足のつりを治す – フィンの先端を身体のほうへ引っ張って、ふくらはぎのつった筋肉を伸ばす。

水面で浮力を確保する – 生徒ダイバーは、BCDにパワー・インフレーターとオーラルの両方を使って空気を入れて浮力を確保し、ウエイト・ベルト／ウエイト・システムをリリースして水面で浮力を確保する方法をデモンストレーションする。可能であれば実際にウエイトを使って練習するが、プールの底に傷をつけたり、ウエイトをなくしたりしたくない場合は、ウエイトを少なめにするか、ウエイトなしで練習する。

気道コントロール – スノーケルからレギュレーターに交換して、多少の水が残っていても呼吸する練習をする。

バックアップ空気源を使用する – 静止した状態で、ボディのバックアップ空気源を見つけて確保し、呼吸する。次に、バックアップ空気源を使用しながら一緒に泳ぐ。役割を交換して、各生徒ダイバーがそれぞれ与える役ともらう役を練習し、さらにバックアップ空気源で呼吸をしながら浮上する練習をする。ポニーボトルや浮上用シリンダーのような独立式のバックアップ空気源の使い方も復習する。

ヴァーティゴに対処する – ヴァーティゴのシミュレーションとして、水中で目を閉じ、潜降ラインなど静止しているものをつかんで方向感覚を取り戻す。

レスキュー課題1 – 疲労ダイバー

アプローチ – 救助者は、必ず少なくともマスク、フィン、スノーケルを装着する。マスクを装着してフィンを履き、水に入るまでの間、別の人に事故者から目を離さないよう言う。頭を上げて泳ぎながら事故者の様子を観察し、しっかりと救助できるよう、十分な体力を残して事故者がいる場所まで泳ぎ着く程度のペースでアプローチする。

状況判断 – 事故者の近くまで泳ぎ着いたら、まだ手が届かないあたりでいったん立ち止まり、事故者の精神状態（パニックしているかしていないか）を判断する。BCDのインフレーターの種類と場所を確認し、命令的な口調で明確かつ簡潔な指示を与え（「BCDに空気を入れなさい!」、「ウエイトを外しなさい!」）、事故者が自分でトラブルから抜け出せるかどうか試みる。

コンタクト – 救助者は自分の浮力を確保し、事故者の正面からアプローチしながら、自分がこれからしようとしていることや、事故者自身にやってもらいたいことを言う。コンタクトサポートのポジション（アンダーアーム・リフトまたはシリンダー・ニー・クレードル）をとって事故者の身体を安定させ、安心させる。浮力を確保する（パワー・インフレーターを使用する）。

事故者を落ち着かせる – 事故者の目を見て話しかけることによって安心させる。水面のコンディションが悪くなければ、マスクとレギュレーター／スノーケルを外させ、水面でしばらく休む。

アシストと移動 – できるだけ事故者に自力でやらせる。曳行するときには、事故者の顔が水面より上に出ていることを確認し、浮力を確保し（救助者と事故者の両方）、状況をコントロールし、コミュニケーションをとり、目と目でコンタクトをとる。

救助者は以下の曳行方法を練習する:

- アンダーアーム・プッシュ (救助者1名と2名)
- 疲労スイマーキャリー
- シリンダー・バルブ・トゥ

器材を取り外す – シリンダーを外して泳ぎやすくするなど、事故者を手助けして器材を取り外す。特に、波が高いなどハードな状況でエキジットする場合には、器材がじゃまになることがある。

レスキュー課題2 – パニックダイバー

アプローチと状況判断 – 疲労ダイバーのときと同じアプローチで、事故者に近づき、様子を判断する。手が届かないあたりでいったん立ち止まり、事故者の様子を判断することが重要である。BCDのインフレーター的位置とタイプを確認し、指示を与え(「BCDに空気を入れなさい!」、「ウエイトを外しなさい!」、事故者が反応をするか試みる。事故者と救助者の体格の差や体力に基づいて、水面からコンタクトすべきか、あるいは水中からコンタクトすべきか考える。

コンタクト – 水面からアプローチする場合は、自分の浮力を十分に確保し、事故者の手が届かないように注意しながら背後へ回り込む。または、事故者の反対の手首(右手で事故者の右手首、左手なら左手首)をつかみ、素早く引っ張って事故者の身体を反転させる。シリンダーのバルブをつかみ、両ひざでシリンダーをはさんでコントロールする「ニー・クレードル」の姿勢をとり、事故者のBCDに空気を入れてウエイトを外す。

水中からのアプローチする方法 – 救助者の体格が事故者より小さかったり力が弱かったりする場合に適している。ひざから足首のあたりにアプローチし、事故者のウエイトを外し、事故者の身体の向きを変えるか、泳いで事故者の背後に回りこむ。コンタクトを維持しながら浮上し、シリンダーのバルブをつかみ、両ひざでシリンダーをはさんでコントロールする「ニー・クレードル」の姿勢をとり、事故者のBCDに空気を入れる(まだウエイトを外していなければ、ここで外す)。

しがみついてくる事故者を引き離す – パニックを起こしている事故者にしがみつかれたら、事故者を振りほどいて状況をコントロールする必要がある。方法のひとつとして、レギュレーターから呼吸をして潜降する。事故者は絶対に水中には行きたがらないため、確実な方法である。その後、水中からのアプローチを継続する。

もうひとつの方法は、救助者と事故者のBCDの両方に空気を入れるという方法で、BCDが膨らんで両者の身体が離れると同時に、浮力の確保もできる。事故者の身体を押し上げたり押し下げたりして、しがみついてくる事故者を振りほどいたら、泳いで少し離れる。

クイックリバースの態勢をとってアプローチする – パニックを起こしているダイバーが手を伸ばしてきたら、すぐに安全な位置まで戻れるようクイックリバースの態勢をとりながら、立ち止まって様子を見る。後ろにそって事故者の方へ足を向け、手を伸ばしてきたらすぐに離れる。

レスキュー課題3 – 浜／ボート／栈橋からの対応 (反応があるダイバー)

ノンスイミング・アシスト – まず、デッキにうつ伏せになり、両足を広げて片方の手だけを差し出す方法を練習する。次に、何か物を差し伸べる方法を練習する。遠くに差し伸べることができ、事故者に水中に引きずり込まれそうになったら手を離すこともできる。

プールデッキ、栈橋、浜、ボートなどから9メートル／30フィートほど離れたところで、トラブルを起こしているダイバーにラインを投げて引き寄せるテクニックを練習する。投げ直さなくてすむように、事故者より遠くに投げる。アンカーをかけたボートの船尾にあるスターンラインやタグラインを利用する方法について話し合う。

エントリー – 少なくともマスク、フィン、スノーケルと、何か浮くものを持ってレスキューに向かう。マスクとスノーケルをつけてエントリーしてからフィンを履くのがよい。深い場所に飛び込む場合には、先にフィンを履き、顔まで沈まないように足を大きく広げてエントリーする。保護スーツを着ている場合は、事故者が沈んだ場合に備えて、潜降できるようウエイトを装着する必要がある。

手順 – 事故者を見失わないよう注意しながら、最も近い場所からエントリーする。誰かに事故者を見てもらい、位置を指し示してもらう。必要に応じて、振り返って、どこを指し示しているか確認する。

スイミング・アシスト – レスキューボードや救命用浮き輪などの浮き具を使って、事故者の身体に直接的に接触せずに助ける。BCDやフェンダーブイなど、浮力のあるものを間に合わせの道具として使うことができる。その場にあるものを利用できるよう心構えをしておくことの必要性を説明する。

何も浮くものがない場合には、状況に合わせて、前回練習したレスキュー方法を使って事故者を助ける。

曳行 – まず、器材をすべて装着した状態で事故者を曳行する練習をする。次に、スクーバユニットとウエイトを取り外した状態で練習する。以下の曳行方法を使用する:

- アンダーアーム・プッシュ
- 疲労スイマーキャリアー
- シリンダー・バルブ・トゥ

反応のあるダイバーのエキジット – ハードなエキジットになることが予想される場合には、事故者をしばらく休ませ、後でいちばん必要になるときに備えて体力を温存させる。また、どの器材を取り外せば楽にエキジットできるようになるか考える。

ビーチにエキジットする場合には、救助者が事故者の脇に立って事故者の腕を肩にかけ、腰のあたりをつかんで身体を支える。その状態で、安全な場所まで歩かせる。事故者が歩けない場合には、這って安全な場所まで行かせる。

ボートや栈橋にエキジットする場合には、事故者を手伝って器材を脱がせ、ラダーを上るのを手伝う。

レスキュー課題4 – 水中でトラブルに遭遇しているダイバー

水中で疲労 – 疲労してトラブルを起こしているダイバーは、呼吸が激しく、目を見開いているなどストレスの徴候を示す。ダイバーに近づいて「ストップ」のサインを出し、身体にそっと触れて安心させ、できれば何かにつかまって休ませ、通常の呼吸のリズムを取り戻すよう励ます。

コントロールできない浮上をしようとしているパニックダイバー – 救助者は水中で、頭を高く上げ、手で泳いで水面に出ようとしているパニックダイバーはいないか目を配る。パニックダイバーの下半身か背後から接触し、パニックによる浮上を抑え、コントロールする。BCDの空気を抜き、手足を広げて抵抗を増やす。

練習では、パニックダイバー役は必ずレギュレーターをくわえておき、浮上速度は1分間に18メートル／60フィートを超えてはならないという点を注意する。この課題の最大深度は12メートル／40フィート。

エア切れ緊急事態と浮上 – ダイバーは互いのバックアップ空気源の形状を確認する。エア切れの緊急事態をシミュレーションしているダイバーが救助者のところへ行く。救助者はバックアップ空気源を差し出し、状況をコントロールする。エア切れダイバーとコミュニケーションをとり、コンタクトを維持して落ち着かせて、通常の呼吸になっていることを確認してから浮上を開始する。

エア切れダイバーは、エア切れのシミュレーションの継続として、水面でBCDにオーラルで空気を入れる。オーラルで空気を入れている間、浮いていられるよう救助者がサポートをする。

レスキュー課題5 – 行方不明ダイバー

行方不明ダイバーの搜索手順 – この課題は、ダイバーがいったん水面に出た後、おそらく何らかのアクシデントが起きて姿が見えなくなるというシナリオとして実施する。救助者が指揮を取り、バディやダイバーを見たかもしれない他の人に話を聞き、最後に姿が目撃された場所を確定する。泡を探し見張り役を配置し、行方不明ダイバーの姿が最後に目撃された場所へ行って、そこをマークするようスキンド이버に指示する。スクーバを装着し、最後に目撃されたエリアでバディと一緒に搜索を開始する。意識を失ったダイバーが潮で流された可能性を考えて、水底へ向かって泳ぐのではなく、水底へ沈むように潜降する。U字パターン、スパイラルサーチ、円形サーチ、水面コントロールサーチなど、その場の環境や状況に最も適しているサーチパターンを使用する。

最初に陸上／ボートでサーチパターンをリハーサルするのがよい。

レスキュー課題6 – 反応のないダイバーを浮上させる

プラス浮力浮上 – 生徒ダイバーはパワー・インフレーターを使用して自分をややプラス浮力にし、上に向かってキックして浮上を開始する。余分な空気は排気しながら浮上速度をコントロールする。膨張した空気が急浮上を引き起こさないよう、少しずつ頻繁に空気をBCDから排気する。プラス浮力になりすぎてしまったら、手足を大きく広げてフレアリングして浮上速度を遅くする。呼吸をし続け、1分間に18メートル／60フィート以上を超えない速度で浮上する。この課題の最大深度は9メートル／30フィート。

反応がないダイバーを浮上させる – 救助者は反応がないダイバーを探す。時間を無駄にせず、素早く状況を記録する。例えば、事故の原因が明らかかどうか、器材を装着しているか、ダイバーと水底の位置関係（うつ伏せか、水底から離れて浮いているか）などを確認する。レギュレーターをくわえていたら、浮上中に外れないよう押さえ、くわえていない場合には、くわえさせようとして時間を無駄にしてはならない。ダイバーを背後から抱えるかシリンダーのバルブをつかみ、頭が通常の位置になるように保持し、ややプラス浮力にして（ダイバーまたは救助者）、練習したようにコントロールしながら浮上する。

救助者が浮上をコントロールできなくなった場合には、課題を中断し、コントロールを確保して、再度トライするよう支持する。水面に出たら、救助者は反応がないダイバーを仰向けにし、ウエイトを取り外して浮力を確保し、救助を求める。

レスキュー課題7 – 水面で反応のないダイバー

コンタクトして呼吸を確認 – 救助者はまず、身体をたたくか呼びかけて、ダイバーが反応しないことを確認する。腕を交差させ、ダイバーの手首をつかんで仰向けにし、顔を水面より上げる。ダイバーのウエイト・ポケットおよび／またはウエイト・ベルトを外し、身体から離してから落とし、BCDに空気を入れて浮力を確保する。助けを呼ぶ。ダイバーのマスクとレギュレーターを外して気道を確保し、ダイバーの口に顔を近づけて胸を見ながら、10秒間ほど呼吸を確認する。

取り外した器材を回収する係りを配置するのを忘れないようにする。

水面でのレスキュー呼吸 – 救助者は、ダイバーの気道に水が入らないように注意し、効果的で適切なレスキュー呼吸を続け、自分自身が疲れきってしまわないようペースを調整するという優先順位を守る。常に効果的なレスキュー呼吸を続けられるよう、まず十分な浮力を確保する。次に、ドー・シー・ドーとヘッド・クレドル方法を使ってダイバーの気道を開き、確保する。(マウス・トゥ・ノーズ呼吸を教えるのはオプション。)

救助者はポケットマスクを取り出し、近づいてからダイバーの顔の上に置く。頭の上に移動し、アゴの骨に指を置き、マスクに親指を置き、頭を後ろへ傾けて気道を確保する。まず、ポケットマスクのインレット近くに2回フルに息を吹き込み(インレットそのものに吹き込んではいけない)、次に5秒ごとに1回吹き込む。親指でインレットを塞いでマスクをシールし、波がマスクに入らないようにする。

救助者はマウス・トゥ・マウスを練習する。開いた気道を確保し、ダイバーが沈まないよう少し持ち上げて自分のほうを向くようにし、2回息を吹き込む。トレーニングでは実際にマウス・トゥ・マウスは行わずに、シミュレーションとしてダイバーのアゴに口を当てるだけにする。5秒ごとに1回吹き込む。水面の状況がよくない場合には、息を吹き込んでいない間はダイバーの口を手で覆う。

オプションのマウス・トゥ・ノーズの方法が一般的に使用されている場合には、この方法を説明する。また、マウス・トゥ・スノーケルの方法についても、使用できるスノーケルのタイプ、スノーケルと手の正しい位置、曳行中の使い方など、必要に応じて説明する。

曳行しながら器材を取り外す – 効果的なレスキュー呼吸を行ない、できる限り素早くダイバーを水から出すことが最優先事項であり、器材を取り外すことはその次だという点を救助者に念を押して伝える。岸まで長い距離を泳がなければならないというシミュレーションとして、救助者は自分の器材とダイバーの器材を段階的に取り外す。取り外した器材を回収する係りを配置するのを忘れないようにする。

手順 – まず浮力のことを考える。必ず一方の手を使ってダイバーの気道を確保しながら、論理的な順序で器材を取り外す。リズムよくレスキュー呼吸を続けながら、呼吸と呼吸の合間に器材をリリースし、取り外す。レスキュー呼吸を中断した場合には、できるだけ早く2回息を吹き込んで再開し、器材を取り外しながら安全な場所まで曳行する。

最初に自分の器材を取り外してから、ダイバーの器材を外すなど、さまざまな方法を練習させる。できれば、器材の形状や体格が異なるダイバーで練習させる。

レスキュー課題8 – 反応のないダイバーをエキジットさせる

呼吸をしながら反応のないダイバーのエキジット – ビーチへエキジットさせる場合には、波をどうくぐり抜けるか、岩でこつこつした場所にどう対処するかなど、その場所に適した方法について話し合う。救助者は環境と救助者の能力に応じて、以下の方法を練習する:

- 引きずりながら上げる
- ファイヤーマンズ・キャリー
- サドルバック・キャリー
- バックストラップ・キャリー

次に、岸へ2人で引き上げるツーマン・キャリーを練習する。

栈橋またはボートへのエキジットを実施する場合には、救助者の状況に応じて、以下のエキジット方法を練習する。

- 標準ライフガード・エキジット
- ラダー・キャリー

次に、栈橋またはボートへ引き上げる方法を練習する:

- ロールアップ
- バックボードや代用品を使う

呼吸をしていないダイバーのエキジット – ダイバーが呼吸をしていない場合には、レスキュー呼吸を継続しながら水から引き上げることが最優先事項であることを説明する。救助者はレスキュー呼吸を30秒間以上中断してはならず、可能であれば、中断する前に2回の換気を行ない、レスキュー呼吸を再開するときも息を2回吹き込む。

救助者は、呼吸をしていないダイバーにレスキュー呼吸をスタートし、最初はアシストなし、もう一度次はアシストありで、前に練習したキャリー方法のいずれかを使って水から引き上げる。呼吸をしていないダイバーを水から引き上げる自信がつくまで、さまざまな方法を試してみるよう救助者に言う。

レスキュー課題9 – 圧力関連事故のファーストエイドと酸素供給

(または、PADIエマージェンシー・オキシジェン・プロバイダー・コースのスキル開発)

呼吸をしながら反応のないダイバーに酸素供給 – 負傷して呼吸をしているダイバーには、呼吸同調式デマンドバルブユニットで100%の酸素を与えることができる。それがない場合には、フリーフロー式マスクでもよい。救助者はまず、酸素キットを開いてユニットを組み立てる。バルブをゆっくり開け、マスクから吸ってみてユニットをテストする。マスクに息を吐かないよう注意する。動かないように酸素ユニットを固定し、負傷したダイバーに、「これは酸素です。気分がよくなると思えます。吸いますか?」と言う。答えがない場合には、同意が得られたものとして、マスクをダイバーの顔に置き、ヘッドストラップを使用し、酸素圧力ゲージをモニターする。

呼吸をしていないダイバーに酸素供給 – 呼吸をしていないダイバーの場合は、酸素インレットバルブ付きのポケットマスクとフリーフロー酸素を使うのがよい。生徒ダイバー (またはスタッフ) に、呼吸をしていないという状況をシミュレーションしているダイバーに対し、レスキュー呼吸用のポケットマスクを使ってCPRを始めるよう指示する。救助者は酸素キットを開き、レスキュー呼吸/CPRを中断せずに、フリーフローの取り付け口からポケットマスクへ酸素チューブをつ

なく、バルブをゆっくりと回して開け、流量を毎分15リットルにセットする。動かないように酸素ユニットを固定し、酸素圧力ゲージをモニターする。

役割を交替して、全員がCPRを行ない、酸素をマスクにつなぐ練習をする。

レスキュー課題10 – 浜／ボートから対応 水面にいる反応のないダイバー (呼吸なし)

水面にいる反応のないダイバー – この課題は、生徒ダイバーがこれまでに学んだスキルを統合したものであり、シナリオ練習へ向けて準備を整えるためのものであることを説明する。まず、呼吸をしていないダイバーと器材回収係りを、浜またはボートから50～100メートル／ヤード離れた位置に配置する。救助者はスクーバ器材なしでエントリーし、反応も呼吸もないダイバーのところまで泳いでいき、レスキュー呼吸を開始する。必要に応じて器材を外しながら、呼吸をしていないダイバーを安全な場所まで運び、誰かいれば手伝ってもらって (他の生徒ダイバーか認定アシスタントにその役割をしてもらう)、レスキュー呼吸を続けながらダイバーを水から引き上げる。

浜／ボートに引き上げたら、弱いもののダイバーに脈はあるが、呼吸はしていないと救助者に言う。救助者は、酸素を与えるなどファーストエイドの措置をとる。全員が救助者役をやるまで課題を続ける。

緊急アシストプラン

シナリオを実施する場所の緊急アシストプランを作成するよう各生徒ダイバーに指示する。十分に時間をかけて作成できるように、前もって場所を指定する。緊急アシストプランについての詳しい情報は、PADIレスキュー・ダイバー・マニュアル第1章を参照するよう言う。

生徒ダイバーが作成した緊急アシストプランは、指定された場所でダイビング事故が起きた場合に、事故を管理するのに必要となる情報が十分に提供されているかどうか、その完成度の高さに基づいて評価する。プランには、緊急医療サービスの連絡先、負傷したダイバーを搬送する際に必要となる関係各機関の連絡先、ダイバー向け緊急医療サービスの連絡先 (その地域にある場合)、再圧チャンバーがある最寄りの場所、通信手段 (携帯電話が使えない場所など)、その他、その地域特有の情報を入れる。

プランが完成したら、各自がコピーを作り、シナリオ練習のときに互いに参考にする。ここで作成した緊急アシストプランは、PADIダイブマスター・コースで必修になっている緊急アシストプランの条件を満たすクレジットになる。

レスキュー・レビュー

PADIレスキュー・ダイバー・コースでは、スキルを定期的に復習して、いつでも使える状態にしておくよう生徒ダイバーに勧めている。以下に示すのは、リフレッシュ・トレーニングを受けたいという認定レスキュー・ダイバーを対象としたレスキュー・レビュー・プログラムの概要である。これは認定コースではない。インストラクターの判断で、その他の内容を追加してもよい。

1. ダイバーは、レスキュー・ダイバー・オンラインに登録して知識開発を復習するか、最新版のPADIレスキュー・ダイバー・マニュアルを読み、PADIレスキュー・ダイバー・ビデオを見て、PADIレスキュー・ダイバー・エグザムを受ける。間違えた問題については、内容を十分に理解するまで復習する。
2. CPR／ファースト・エイドのスキルを維持させることを目的に、レスキュー・レビューと一緒にエマージェンシー・ファースト・レスポンス・リフレッシュャーを実施することが推奨される。
3. レスキュー課題7、8、10を実施する。レスキュー・レビューの参加者とPADIレスキュー・ダイバー・コースの生徒ダイバーを一緒にしてもよい。
4. オープンウォーターのレスキュー・シナリオ2を実施する。できれば、進行中のPADIレスキュー・ダイバー・コースと一緒によい。

レスキューシナリオの実施方法とテクニックについての推奨事項

シナリオ1 - 水中で反応のないダイバー

セッティング

1. このシナリオの最大深度は9メートル／30フィート。
2. このシナリオは、2段階で実施するのがよい。第1段階で行方不明ダイバーを捜索し、第2段階では、意識不明をシミュレーションしているダイバーを、コントロールされたプラス浮力を使って水面へ引き上げる。
3. 行方不明ダイバーの捜索では、隠れていても吐く息の気泡で場所がすぐにわかってしまうため、ダイバーではなく大きな物体を救助者に探させる。救助者が物体を発見した時点で、意識不明ダイバー役が参加する。
4. シナリオを現実的なものにするために、少なくとも4人のダイバーを使う（生徒ダイバー、認定アシスタント、または他のレスキュー・ダイバーの組み合わせ）。
5. 4人のダイバーをそれぞれ以下の役割に割り当てる：
 - 行方不明ダイバー
 - 行方不明ダイバーのバディ
 - 浜／ボートサポート／見張り役／最後に目撃された場所をマークするスキンド이버
 - 救助者
6. 行方不明ダイバーの代わりになる物体を水底に設置するよう、認定アシスタントが行方不明ダイバーのバディに指示する。設置が終わったら、物体からやや離れた水面に行方不明ダイバーのバディを配置する。その他全員を、浜またはボートに配置する。

実施

1. 行方不明ダイバーのバディが浜／ボートに向かって泳いできて、バディがいなくなったと叫ぶところからシナリオをスタートする。
2. 救助者または救助バディチームが指揮を取り、行方不明ダイバーのバディから情報を収集する。救助者／救助チームはその場にいる他の人たちに役割を指示し、行方不明ダイバーの捜索を開始する。
3. 行方不明ダイバーの代わりとして設置しておいた物体を発見したら、救助者はコントロールされたプラス浮力浮上を使って、行方不明ダイバーを水面に引き上げる。これでシナリオは終了となる。
4. 捜索に時間がかかりすぎている場合には、いったん中断し、シナリオを組み立てなおす。
5. 自信がつかまでシナリオを繰り返し練習し、救助者の能力を高める。

デブリーフィング

生徒ダイバー同士で建設的に講評させる一方で、以下の質問をしてディスカッションする：

- 行方不明ダイバーは迅速に発見されたか？発見できなかった場合、その理由は？
- 捜索は素早く効率的に実施されたか？何か足りなかったことがあったか？もしそうなら、どのようなことか？
- 救助者は水底で事故者の状態を記録したか？
- レスキュー活動で何がうまくいったか？何がうまくいかなかったか？
- 救急隊にできるだけ早く通報したか？早く通報した場合の理由と、通報しなかった場合の理由は？
- 違うやり方があったとすれば、それはどのような方法か？

シナリオ2 – 水面で反応のないダイバー

セッティング:

- このシナリオでは、以下の役割を各ダイバーに割り当てる:
 - 反応のないダイバー
 - 救助者
 - 器材回収係り
 - 浜／ボートサポート
- 救助者が使用するファースト・エイドキットと酸素ユニットを準備する
- 可能であれば、CPRマネキンとAEDを準備する。
- 救助者から数メートル離れたところの水面に、反応のないダイバー役を配置する。近くに器材回収係りを配置し、その他全員を浜／ボート上に配置する。

実施:

- 反応のないダイバーが弱々しく助けを呼び、水面にうつぶせに倒れるところからシナリオをスタートする。
- 救助者はダイバーに近寄り、状況を判断してコンタクトする。この時点で、ダイバーは呼吸していない。
- 救助者は水中で人工呼吸を開始し、ダイバーを浜／ボートまで連れて行き、誰かいれば手伝ってもらって、できるだけ効率的に水から引き上げる。
- 浜／ボートのデッキに上がり、救助者が脈拍の有無をチェックしたところ、ダイバーに脈がないことがわかる。この時点で、ダイバーの代わりに、あればCPRマネキンを使う。
- 数分間CPRを続けたら、または救助者がAEDユニットをセッティングして使用したら、シナリオを終了する。
- 自信がつくまでシナリオを繰り返し練習し、救助者の能力を高める。

デブリーフィング:

生徒ダイバー同士で建設的に講評させる一方で、以下の質問をしてディスカッションする:

- 救助者は事故者の状態 (呼吸の有無) を確認したか?
- 助けが来るまでどのくらい時間がかかるか判断したか (5分以上か以内か)?
- 救急隊にできるだけ早く通報したか? 早く通報した場合の理由と、通報しなかった場合の理由は?
- 器材は取り外したか? 取り外したのであれば、その状況で最適な方法で行なわれたか? うまくいった理由と、うまくいかなかった理由は?
- ファースト・エイドは効果的だったか? どのような点を改善すべきか?
- レスキュー活動で何がうまくいったか? 何がうまくいかなかったか?
- 違うやり方があったとすれば、それはどのような方法か?

ダイブマスター・コース

実施方法とスキルについての推奨事項

概要

PADIダイブマスター・コースでは、PADIレスキュー・ダイバー・プログラムで身につけた問題解決能力をさらに伸ばし、事故管理と防止から、実際に生徒ダイバーや認定ダイバーを監督という状況へと拡大する。コースはまた、リーダーとしての適切な姿勢を形成し、正しい判断をする能力を開発する。ダイブマスターのレベルでは、さまざまな解決策を検討し、適切な判断力を用いて、複数の選択肢の中からベストのものを選ぶ問題解決能力に焦点を絞る。ダイブマスター候補生は安全に関連した問題を解決する方法を学び、顧客サービス、ビジネス、運営に関するさまざまな事柄に対する積極的な姿勢を身に付ける。

PADIダイブマスター・コースは、知識開発、水中スキル開発、実践応用のセクションに分かれている。ダイブマスター候補生はこのトレーニングを通じて、レスキュースキルに磨きをかけるなど、模範的なダイブスキルを身に付ける。また、ダイビング理論についてのプロフェッショナルレベルの知識を習得する。これは、問題解決と独創性の基盤となるものである。ダイブマスターは、認定アシスタントおよびダイビングの監督者としての技術を習得する。認定PADIダイブマスターは、責任あるダイビングルールを守り、水中環境を大切にす模範的存在である。ダイブマスターの知識、スキル、そしてダイビングに対する情熱は、ダイバーがそれぞれの興味とスキルレベルの範囲内で楽しくダイビングするのに大きく貢献するものである。

総合的アドバイス

1. 他のPADIコースやプログラムと同様に、ダイブマスター・トレーニングの計画、準備、実施にあたっては、ダイバーの安全が最優先事項である。
2. インストラクターはダイブマスター候補生と「よき助言者（メンター）」としての関係を築く。なぜそのような選択をするのか、何がその判断の基礎となっているのか説明することによって候補生を導く。ダイバーを教え監督することに対する意見を話し合う。このようなアプローチと人間関係は、ダイブマスター候補生の判断力や姿勢を形作ることに、どのように考えるべきかただ単に伝えようとするよりずっと効果的である。(この指導アプローチについては、このマニュアルの「理念とアプローチ」のセクションにある「ダイビングリーダーの育成」を参照)
3. 知識開発セクションについては、事前の学習として、(1) PADI eラーニングの「ダイブマスター・オンライン」を受ける、または (2) PADIダイブマスター・マニュアルを読んでPADIダイブマスター・ビデオを見る、という2つの選択肢がある。最初のプレゼンテーション「PADIダイブマスターの役割と資質」は、インストラクターが実施する。クラスルームセッションのときに、情報を補足してさらなる理解を促進する。ダイブマスター・コース・レッスン・ガイドを使って、クラスでのプレゼンテーションと処方的復習を行なう。
4. ダイブマスター・ファイナル・エグザムはパート1とパート2に分かれていて、エグザムAとエグザムBの2つのバージョンがある。それぞれ60問で、パート1はダイバーの監督と指導活動に関する知識をテストする。パート2は環境とダイブ・セオリーに関する知識をテストする。120問全部を1回で実施してもよいし、2回に分けて実施してもよい。12ヶ月以内にダイブ・セオリー・オンラインを修了した候補生は (eレコード参照)、パート2に対するクレジットを受けることができる。候補生は各パートで75%以上の点を取らなければならない。必要に応じて再試験と補習を実施する。
5. 水中スキル開発セクションについては、数回の限定水域ダイブに分けて実習を行なうというスケジュールにするのがよい。そうすることで、身体的にも精神的にも候補生に負担をかけすぎのを避け、セッションとセッションの間に、各自が自習でスタミナやスキルの向上に取り組む時間ができる。

6. 実践応用スキルとワークショップは、様々な問題解決のシナリオを盛り込んだ能力育成のためのセッションとして実施する。これは、トラブル対処の実践的な経験となり、ストレスの少ない状況の範囲内で間違いから学習する機会になる。
7. PADIサーチ&リカバリー・ダイバー認定を受けている候補生は、スキル4-サーチ&リカバリーのシナリオ修了のクレジットを受けることができる。PADIディープ・ダイバー認定を受けている候補生は、スキル5-ディープダイビングのシナリオ修了のクレジットを受けることができる。
 - a. 参加前条件の40ダイブをまだ満たしていない候補生がいる場合には、ダイブマスター・コースの前に、この2つのスペシャルティ・コースを実施することが推奨される。
 - b. 認定条件の60ダイブを満たしていない候補生がいる場合には、この2つのスペシャルティ・コースをダイブマスター・トレーニングに組み込んで実施することが推奨される。
8. 実践評価1~3は、実際の生徒ダイバーで実施するのがベストである。それができない場合には、ロールプレイでもよい。各評価で、役割を演じる人が少なくとも4人必要である。他のダイブマスター候補生、スタッフ、認定ダイバーに役割を演じてもらう。実践評価4は、実際の認定ダイバーで実施する。ダイブマスター候補生が達成条件を満たすまで、必要に応じて評価を繰り返して実施する。
9. ダイブマスター・コース中は、できるだけ多くダイビングするよう候補生に奨励する。ダイビングする時間が多ければ、それだけ多くのことを学ぶことができる。
10. 認定時、ダイブマスター候補生は過去24ヶ月以内にEFR一次ケアと二次ケアのトレーニングを受けていなければならない。候補生がこの条件を確実に満たし、認定後に指導機会が増えるよう、ダイブマスター・コースの一環としてEFRインストラクター・トレーニングを実施することが推奨される。

順序についての注意事項

1. 実習、ワークショップ、評価、実践応用を含めて、すべての水中セッションの前に、知識開発トピック1「PADIダイブマスターの役割と資質」を実施する。
2. 知識開発トピック2と3「認定ダイバーの監督」と「生徒ダイバーのアシスト」は、実践評価の前に実施しなければならない。
3. 知識開発トピック5「ダイブマスターが実施できるプログラム」は、「ダイブマスターが実施できるプログラムのワークショップ」の前に実施する。
4. 緊急アシストプランと水中地図の作成については、ダイブマスター候補生が十分に時間をかけて取り組めるよう、コースの早い段階で課題を指定する。候補生がPADIレスキュー・ダイバー・コースで作成した緊急アシストプランを、このコースの条件を満たすクレジットにすることができる。
5. スキルとワークショップの組み合わせについては、ダイブマスター・コースのサンプルスケジュールを参考にする。例えば、「スキル3-ブリーフィング」を実施してから、候補生が参加者にブリーフィングをする「ワークショップ5-オープンウォーターでのディスカバー・ローカル・ダイビング」に進むという流れにするのが理にかなっている。

ダイブマスター・コース サンプルスケジュール - 1

以下のサンプルスケジュールを参考にして、ダイブマスター・オンラインにより事前の学習を修了した候補生を対象に、PADIダイブマスター・コースを計画する。これをベースに、運営上の都合や候補生のニーズ合わせてスケジュールを調整する。コース内容の配列については、かなり柔軟に対応できるようになっている。

1日目

準備: 候補生はオンラインでPADIダイブマスター・マニュアル第1章を読む。
ダイブマスター・オンライン修了後、eレコードをプリントアウトする。

クラスルーム: 「コース・オリエンテーション」と「PADIダイブマスターの役割と資質」トピック1のナレッジレビューの答え合わせをする。

限定水域:

- 水中スキル実習1と2
- スキルデモンストレーションの練習 (各スキル5点、24のスキルを復習)
- ワークショップ1 - ReActivateプログラム

課題: 緊急アシストプランと水中地図作成の場所

2日目

限定水域:

- 水中スキル実習3と4
- ダイバーレスキュー
- ワークショップ2 - スキン・ダイバー・コースとスノーケリングの監督

オープンウォーター:

- スキル1 - ダイビングポイントでのセッティングと管理
- スキル4 - サーチ&リカバリーのシナリオ

3日目

限定水域:

- 水中スキル実習5
- ワークショップ3 - 限定水域でのディスカバー・スクーバ・ダイビング

オープンウォーター:

- ワークショップ4 - ディスカバー・スクーバ・ダイビングの追加オープンウォーター・ダイブ

4日目

限定水域:

- ダイブスキル・ワークショップ - 24のスキルの評価

オープンウォーター:

- スキル3 - ブリーフィング
- ワークショップ5 - オープンウォーターでのディスカバー・ローカル・ダイビング

5日目

クラスルーム: ダイブマスター・ファイナル・エグザム

オープンウォーター:

- スキル5 - ディープダイビングのシナリオ
- 実践評価3 - オープンウォーターでの継続教育生徒ダイバー

6日目

限定水域: 実践評価1 - 限定水域でのオープン・ウォーター・ダイバー・コースの生徒ダイバー

7日目

オープンウォーター: 実践評価2 - オープンウォーターでのオープン・ウォーター・ダイバー・コースの生徒ダイバー

8日目

オープンウォーター: 実践評価4 - オープンウォーターでの認定ダイバー

ダイブマスター・コース サンプルスケジュール - 2

以下のサンプルスケジュールを参考にして、PADIダイブマスター・マニュアルとビデオを使って事前学習をした候補生を対象に、PADIダイブマスター・コースを計画する。これをベースに、運営上の都合や候補生のニーズ合わせてスケジュールを調整する。コース内容の配列については、かなり柔軟に対応できるようになっている。

1日目

準備: 候補生はPADIダイブマスター・マニュアル第1章を読み、ダイブマスター・ビデオを見る。

クラスルーム:

「コース・オリエンテーション」と「PADIダイブマスターの役割と資質」

トピック1のナレッジレビューの答え合わせをする。

限定水域:

- 水中スキル実習1と2
- ダイバーレスキュー

課題: 緊急アシストプランと水中地図作成の場所

ダイブマスター・マニュアル第2章と第3章を読み、ビデオを復習する。

2日目

クラスルーム: トピック2「ダイビング活動の監督」とトピック3「生徒ダイバーのアシスト」のナレッジレビューの答え合わせをする。

限定水域:

- 水中スキル実習3と4
- スキルデモンストレーションの練習 (各スキル5点、24のスキルを復習)

オープンウォーター:

- スキル1 - ダイビングポイントでのセッティングと管理

課題: ダイブマスター・マニュアル第4章と第5章を読み、ビデオを復習する。

3日目

クラスルーム: トピック4「ダイバーの安全とリスク・マネジメント」とトピック5「ダイブマスターが実施できるプログラム」のナレッジレビューの答え合わせをする。

限定水域:

- 水中スキル実習5
- ワークショップ1 - ReActivateプログラム
- ダイブスキル・ワークショップ - 24のスキルの評価

課題: ダイブマスター・マニュアル第6章を読む。

4日目

クラスルーム: トピック6「特殊スキルと活動」のナレッジレビューの答え合わせをする。

オープンウォーター:

- ワークショップ2 - スキン・ダイバー・コースとスノーケリングの監督
- スキル4 - サーチ&リカバリーのシナリオ

課題: ダイブマスター・マニュアル第7章と第8章を読む。

5日目

クラスルーム: トピック7「ダイビングビジネスとキャリア」とトピック8「ダイビング環境への意識」のナレッジレビューの答え合わせをする。

限定水域:

- ワークショップ3 – 限定水域でのディスカバー・スクーバ・ダイビング

オープンウォーター:

- スキル3 – ブリーフィング
- ワークショップ4 – ディスカバー・スクーバ・ダイビングの追加オープンウォーター・ダイブ
- ワークショップ5 – オープンウォーターでのディスカバー・ローカル・ダイビング

課題: ダイブマスター・マニュアル第9章を読む。

6日目

クラスルーム: トピック9「ダイブ・セオリーの復習」のナレッジレビューの答え合わせをして、ダイブマスター・ファイナル・エグザムを実施する。

オープンウォーター:

- スキル5 – ディープダイビングのシナリオ

7日目

限定水域: 実践評価1 – 限定水域でのオープン・ウォーター・ダイバー・コースの生徒ダイバー

8日目

オープンウォーター: 実践評価2 – オープンウォーターでのオープン・ウォーター・ダイバー・コースの生徒ダイバー

9日目

オープンウォーター: 実践評価3 – オープンウォーターでの継続教育生徒ダイバー

10日目

オープンウォーター: 実践評価4 – オープンウォーターでの認定ダイバー

ダイブマスター水中スキル開発の 実施方法とテクニックについての推奨事項

水中スキル実習

限定水域で5つの必修水中スキル実習を実施する。プールを使用する場合には、各実習で要求される距離と一往復の回数を必ず確認する。海の限定水域を使用する場合には、距離を正確に測定する手段を確保し、候補生がコースから外れないよう視標を設置する。正確を期すために、スタッフが候補生のラップを数える。

器材交換では最低限の合格点として3点が要求されていることを除いて、それぞれの実習に決まった合格点はない。しかし、候補生は各実習を最後まで終えなければならない(例えば、決められた全距離を泳ぐ)。合計得点が15点以上であることが認定条件になる。各実習で最高得点(5点)を目指すよう候補生に奨励する。初回に合格しなかったダイブマスター候補生には、コースの他の部分を継続しながら、さらに練習して能力を育成する時間を与える。

実習1: 400メートル／ヤード水泳 – 候補生はノンストップで400メートル／ヤードを泳ぐ。どの泳ぎ方でもよく、組み合わせてもよい。水泳用補助具の使用は不可。

実習2: 15分間立ち泳ぎ – 候補生は、水泳用補助具を使わずに水着だけで、溺れないように15分間立ち泳ぎし、最後の2分間は手を水から出して立ち泳ぎする(腕ではない)。身体障害があつて、手を水から出しておくのが困難あるいは不可能な候補生については、手を出しておく評価部分を得点に関係なしに省略できる。

実習3: 800メートル／ヤード・スノーケルスイム – 候補生は、マスク、フィン、スノーケルを使って、800メートル／ヤードをノンストップで泳ぐ。顔を水につけたまま、腕を使わずに泳ぎ、浮き具の使用は不可。脚の動きが制限されているため、普段のダイビングで腕を使って泳いでいる候補生の場合は、腕を使ってもよい。候補生が途中で止まった場合は不合格で、やり直しとなる。

実習4: 100メートル／ヤード疲労ダイバー曳行 – 候補生は水面で、ダイバーをアシストなしで100メートル／ヤードにわたってノンストップで押す(または曳く)。両者ともフル装備。これは泳力評価であり、レスキュー評価ではない。候補生が途中で止まった場合は不合格で、やり直しとなる。

実習5: 器材交換 – この実習は、予測できない困難を伴う状況を作り出すことで、候補生に対し、経験と知識と独創性を応用して、目前のトラブルに対処することを要求するものである。これは、もっぱら能力の育成のみを目的とした問題解決能力評価であり、それ以外の目的はない。限定水域で:

- バディチームを指定し、全員にフル装備するよう指示する。呼吸と呼吸の間は息を止めずに吐き、レギュレーターをやり取りするときにパージボタンを手で覆わないよう注意するなど、1本のレギュレーターのセカンドステージを交互に使用する手順を確認する。
- バディチームは5分以内で打ち合わせをする。足がつかない場所で、1本のレギュレーターのセカンドステージを交互に使いながら器材を交換し、バディブリージングを続けながら浅い場所まで戻る。
- この実習自体、かなり特異な状況であるため、通常のダイビングと異なるやり方でも、器材交換中は許される。

- トラブルを解決しながらストレスをコントロールする候補生の能力を評価する。バディチームのどちらか一方が他方より圧倒的に優れている場合、あるいはどちらか一方が他方より明らかに劣る場合には、それぞれの得点に差をつけてもよい。
- この実習中は、候補生が自分で解決しなければならない問題や不測の事態が自然に発生するので、トラブルの課題は出さない。

ダイバーレスキュー

このダイバーレスキュー評価は、限定水域かオープンウォーターで実施する。緊急時におけるダイブマスター候補生のレスキュー能力と、PADIレスキュー・ダイバー・コースのアシスタントとして模範になれるかどうかを評価する。事故者をボートや岸まで迅速に運んでCPRをスタートすることを重視した適切なテクニックに焦点を絞る。

フル装備の事故者が救助者から約25メートル／ヤード離れたところに沈んでいるという状況でスタートする。器材回収係を待機させる。救助者が水に入り、事故者を探して水面に引き上げる。正しい方法で呼吸をチェックしてレスキュー呼吸を開始し、器材を取り外しながら曳行し、事故者を水から引き上げることができるかどうかを見る。

以下の評価基準に基づいて、救助者が効果的なレスキューを行なったかどうかを判定する。救助者は:

- 適切な方法で事故者と一緒に浮上したか？
- 水面に出た後、ウエイトを引っ張って身体から離してから落とし、事故者の浮力を確保したか？
- 事故者の呼吸を見て、聞いて、感じてチェックしたか？
- 気道を開放し、2回のレスキュー呼吸をしたか？
- 助けを呼んだか？
- 効果的に水面でのレスキュー呼吸テクニックを使ったか？
- 事故者の気道を確保したか？
- レスキュー呼吸を中断せず、あるいは最少の中断回数で、規則正しい換気を維持したか？
- 両方の器材を取り外したか？
- 気道を確保し、レスキュー呼吸を継続しながら、事故者を安全な場所まで曳行することを最優先したか？
- 事故者を連れてエキジットしたか (候補生に身体障害がある場合、あるいはコンディションが不良でその必要がある場合のみ、アシストの使用可)？

ダイブスキル・ワークショップ

デモンストレーションレベルのスキル – デモンストレーションレベルのスキルの特質について、重要なポイントを大きめに強調して見せることが大切である点を説明する。生徒ダイバーがその通りに真似できるような形でスキルをデモンストレーションできるようになることが、このワークショップの目的であることを伝える。洗練された模範的なデモンストレーションは効果的な指導ツールであることを説明する。各スキルをデモンストレーションし、候補生にそれぞれ練習させ、インストラクターはその様子を観察する。候補生が自信を持ってできるようになるまで、必要に応じて補習する。

ダイブスキル評価 – 準備ができたら、各候補生のスキルデモンストレーションを採点する。各スキルで4～5点を指すよう説明する。24種類のスキル (PADIインストラクター・マニュアルのダイブマスター・コース・インストラクター・ガイドにリストされている; 20種類のスクーバスキルと4種類のスキンドайビングスキル) を候補生にやらせ、評価基準に従って採点する。うまくできないスキルがある場合には、そのスキルをデモンストレーションして候補生に見せる。3点より低い得点のスキルがなく、合計で少なくとも82点を取るまで、候補生にスキルを繰り返し練習させる。少なくともひとつの水中スキルで5点を取らなければならない。

ダイブマスター実践応用の 実施方法とテクニックについての推奨事項

実践スキル

スキル1: ダイビングポイントでのセットアップと管理 – 認定ダイバーを監督するときと講習アシスタントとして働くときに、ダイビングポイントで事前の準備を整えて管理する方法をトレーニングする。認定後に候補生がどこで働くことになるかを考慮して、ボートまたは岸から実施する。候補生の人数が多い場合には、何回か場所を変えて練習を行ない、各候補生がそれぞれの場所に応じて事前の準備を整え、管理する方法を考えることができるようにする。候補生はバディチームまたは単独で練習し、他の候補生やスタッフがダイバー役を演じる。

ダイビングポイントに到着したら:

- ダイバーが器材をセッティングするのに適した場所を選ぶよう候補生に指示する。なぜその場所を選んだのか候補生に聞く。例えば、なぜ太陽が照りつける海岸の砂地ではなく、芝生の生えた日陰の場所を選んだのか？
- ファーストエイドキットや酸素ユニットなど緊急用器材の準備をするよう候補生に指示する。どのような緊急用器材が使用可能で、それはどこにあるか説明するよう候補生に言う。ダイバーを呼び戻す場合の手順を説明させる。
- ダイビングポイント／ボートに到着したダイバーに挨拶し、どこに器材を置けばよいか、トイレなどの施設がどこにあるかなどをダイバーに伝えるシーンを演じるよう候補生に指示する。笑顔を絶やさない、進んで手助けする、楽しい経験を約束するなど、ダイブマスターという仕事の社会的な側面を忘れないよう候補生に言う。
- 名簿を準備し、チェックインとチェックアウトの手順をダイバーに説明するシーンを演じるよう候補生に指示する。
- 水の外または水中のどちらでも、ダイバーを監督するのに適した位置を選ぶよう候補生に指示する。なぜその監督位置を選んだのか説明させる。
- ダイビングの前後にダイバーの質問に答え、アシストする準備を整えておくよう候補生に指示する。どのようにダイバーに接し(例えば、お菓子や飲み物を出す、水中の生き物を保護する方法について話し合うなど)、ダイビングの前後にダイバーにはどのようなアシストが必要になると思うか説明するよう候補生に言う。ダイブマスターに手助けを頼むシーンをダイバーに演じてもらう。器材トラブルを起こしているダイバー、器材を忘れてきたダイバー、器材にちょっとした修理が必要なダイバー、船酔いしたダイバー、身体がオーバーヒートしたダイバーなど。
- フロートまたは潜降ラインとダイブフラッグを準備してセッティングするよう候補生に指示する。ビーチダイビングの場合には、フロートとフラッグを準備してからエントリーし、適切な場所にフロートをセッティングするよう指示する。なぜその場所を選んだのか候補生に聞く。ボート・ダイビングの場合には、潜降ラインとダイブフラッグをセッティングするか、チェックするよう指示する。

スキル2: 水中地図の作成 – 候補生は、ダイブプラン、水中ナビゲーション、サーチパターン、データの記録といった様々なスキルを組み合わせ、ダイビングポイントの地図を作成する。バディチームごと異なるダイビングポイントを指定してそれぞれに地図を作成させるか、クラス全員の協同作業で1枚の地図を作成させる。候補生が知りすぎているポイントを選ぶ。水中地図作成の最も基本的な要素として、ダイブ計画の重要性を強調する。測定と記録をできる限り正確

に行なうよう候補生に念を押して伝える。よい地図を作るには、細部に十分に注意を払う必要がある。ダイブマスター・スレートのグリッドが役立つことを伝える。地図作成の前に、必要に応じてサーチパターンを練習させる。

ダイブマスター候補生はオープンウォーターのダイビングポイントを調査し、重要なポイント、おもしろい見どころ、環境の注意点、エントリー／エキジットに適したエリア、施設、危険性などを示した詳しい地図を作成する。

地図が完成したら、何をどのように行なったか、もう一度実施するとしたら何をどう変えたらよいかなど、プロジェクトがどう進んだか分析するよう候補生に指示する。

スキル3: ブリーフィング – ダイブマスターになるとブリーフィングを担当することが多くなるため、この実践応用ではブリーフィングの練習として、ダイブマスター・スレートを参考にしながらダイバー役を演じるグループに話をする。ブリーフィングの重要ポイントについては、PADIダイブマスター・マニュアルを見るよう候補生に指示する。

候補生がよく知っているダイビングポイントで、ダイブマスター・スレートにリストされている10のポイントを取り入れたブリーフィングを実施させる。可能なら、ダイビングポイントの水中地図作成の課題で作った地図を使い、笑顔を絶やさず、リラックスしてダイバーと接するよう促す。うまくできた部分を積極的に褒め、改善が必要な点について簡潔にアドバイスする。

スキル4: サーチ&リカバリーのシナリオ – PADIサーチ&リカバリー・ダイバー認定を受けている候補生は、このスキル修了のクレジットを受けることができる。この必要条件を満たす方法として、サーチ&リカバリー・スペシャルティ・コースをダイブマスター・トレーニングに組み込んで実施することが推奨される。

ダイビングのプロフェッショナルになると、落としたり壊したダイビング器材を探すなど、サーチ&リカバリー活動に関わることも多くなる。このスキルでは、サーチパターンとリフトバッグの使い方を練習する。

まず、数種類のサーチ&リカバリーのシナリオを設定する。最初のシナリオでは、小さな物体を隠して候補生に探させる。おおよその場所を伝え（例えば、ダイブフラッグの半径3メートル／10フィート以内でサングラスを落としたりなど）、候補生はバディチームで搜索する。探す場所と物の大きさに適したサーチパターンを使うよう候補生に指示する。

次のシナリオでは、大きくて重い物体（11キロ／25ポンド以下）を探し、リフトバッグを使って水面に引き上げる。沈んでいると思われる場所を候補生に説明し、それに適したサーチパターンを選ぶよう指示する。候補生は、バウライン、ツーフーフヒッチ、シートバンドなど、リフトバッグを物体に結び付けるのに適した結び方を水中で練習し、さらに正しいリフトテクニックを練習する。必要に応じてシナリオを繰り返して実施し、全員にサーチ方法、ラインの結び方、リフトバッグの使い方を練習させる。

スキル5: ディープダイビングのシナリオ – PADIディープ・ダイバー認定を受けている候補生は、このスキル修了のクレジットを受けることができる。この必要条件を満たす方法として、ディープ・ダイバー・スペシャルティ・コースをトレーニングに組み込んで実施することが推奨される。

ディープダイビングには綿密な計画と準備が必要なので、しっかりとディープダイビングを監督できるよう、候補生はこのスキル練習で経験を積む。まず、緊急用呼吸器材を準備して、安全停止の位置に設置するよう候補生に指示する。

バディチームごとにセッティングして、ボートからぶら下げるか、ビーチダイビングの場合は潜降ラインのところに設置するというやり方をとる。

指標を使って潜降速度をコントロールし、バディまたはグループから離れないよう注意しながら潜降するというディープダイビングの潜降テクニックを簡潔に説明し、候補生に練習させる。

予定した深度まで潜降したら、候補生は指標ラインまたは指定した場所から少なくとも20キックサイクル分の距離を、コンパスを使ってナビゲーションしながら往復する。全員が正確なナビゲーションをマスターするまで、必要に応じて繰り返す。

候補生は、深度計と時計またはダイブ・コンピューターを使って浮上速度を確認しながら、1分間に18メートル／60フィート以下の速度で浮上する。3分間の安全停止の間、指標ラインや緊急用呼吸器材につかまらずにポジションを維持するよう候補生に指示する。

ダイビング後、この場所でディープダイビングするダイバーのグループを監督するとしたら、どのような要素を検討する必要があると思うか候補生に聞く。

ダイブマスターが実施できるプログラムのワークショップ

ワークショップ1: ReActivateプログラム – このワークショップでは、認定ダイバーを対象に単独でPADI ReActivateプログラムを実施できるよう候補生をトレーニングする。まず、PADIインストラクター・マニュアルに記載されているReActivateの規準を説明し、知識評価の方法について話し合う。

ReActivate TouchとReActivate Onlineは認定カードの代わりとして、手続きされることを説明する。ダイバーはReActivateを受けた日付のカードを発行してもらうために、知識とスキル・リフレッシュの両方を修了させる必要がある。ReActivateの目的は、単にリフレッシュさせることだけでなくダイビングライフスタイルを楽しむ人々を水に戻ってきてもう魅力的な方法として活用される。

限定水域もしくはオープンウォーターでは、参加者と器材をどのように振り分けるかを、模範とする。施設について大まかに説明した後、参加ダイバーには他にどのような情報や指示が必要だと思うか候補生に聞く。例えば、エントリーとエキジット方法など。

候補生がダイブマスター・スレートを参照し、ダイバーに話しかけながらスレートの質問を使って、練習するスキルを決める。他の候補生／ダイバー役として参加しているロール・プレイング中のスタッフに、スキルを練習するよう依頼したり、非活動期間や過去のダイビング経験に基づいて特定のスキルを検討するよう要請する。ダイバーのニーズに規範的なダイビングを維持する必要性を強調することで、ダイバーの信頼を築きながら楽しむことができる。

候補生は必要な4つのスキルのうちのひとつ、もしくは要望されたスキルを順番に説明し、参加者役のほかの候補生／スタッフとスキルを実践する。候補生に問題をランダムに与え、候補生が問題解決をしていく。必要に応じて、デモンストレーションを行ない、問題解決をする。

PADIオンライン処理センター（プロセッシング・センター）を通じてReActivateを受けた日付で認定カードを手続きを行なう手順について話し合う。ディスカバー・ローカル・ダイビング体験を通じ、どうしたら参加者がさらにダイビングを続けられるかを、調べる。

ワークショップ2: スキン・ダイバー・コースとスノーケリングの監督 – このワークショップは、候補生にPADIスキン・ダイバー・コースの教え方をトレーニングするか、スノーケリングツアーの実施とスノーケラーの監督方法をトレーニングするかのどちらかに焦点を絞って行なう。候補生がどちらに関心があり、将来的にダイブマスターとして働く場合、どのような機会が多いかに基づいて決める。必要であれば、ワークショップを2回行なう。限定水域とオープンウォーターのどちらかで実施してもよい。

限定水域またはオープンウォーターで、参加者のまとめ方と器材の準備方法のお手本を見せる。施設について大まかに説明した後、参加者には他にどのような情報や指示が必要だと思うか候補生に聞く。例えば、エントリーとエキジット方法など。

ダイブマスター・スレートを見るよう候補生に指示し、スクーバ・ダイビングのブリーフィングとスキンドайビング／スノーケリングツアーのブリーフィングとの違いについて話し合う。PADIスキン・ダイバー・コースのスキルはスレートにリストされていることを言う。

各候補生に異なるシナリオを課題として割り当て、シナリオに基づいてブリーフィングを実施するよう指示する。例えば、スノーケリングツアーの実施方法に焦点を絞っている場合には、20人のスノーケラーが大型のボートから熱帯のサンゴ礁の探検ツアーに出かける、4人のスキンドайバーがビーチから波をくぐってエントリーする、子供連れの2家族が穏やかなラグーンでスノーケリングするなど。

PADIスキン・ダイバー・コースに焦点を絞っている場合には、4人のスキン・ダイバー・コースの生徒ダイバーがプールでスキンドайビングのスキルを練習しているというようなシナリオを作る。生徒ダイバーの年齢や身体能力はそれぞれ異なるという設定にする。水中で、候補生は交代でショートツアーを実施するか、参加者役を演じる他の候補生／スタッフを相手にスキンドайビングのスキル練習を実施する。参加者役にトラブルをランダムに割り当て、候補生には、トラブルに気付いたらただちに対処するよう指示する。必要に応じて、監督テクニックと問題解決の補習を行なう。

最後に、参加者は水面を泳ぐだけで、指導はあまり必要ないスノーケリングツアーを監督する場合と、スキンドайビングに興味があってスキルを磨きたい人を指導する場合の違いについて候補生に説明させる。また、人はなぜスクーバ・ダイビングではなくスノーケリングをするのかについて話し合い、どうすればダイブマスターとして、スノーケラーやスキンドайバーに水中世界を発見する経験をさせてあげることができるかについてディスカッションする。

ワークショップ3: 限定水域でのディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラム – このワークショップは、ノンダイバーを監督するときに必要となる特別な注意と慎重な対処法について候補生に理解させるのに役立つ。まず、PADIインストラクター・マニュアルに記載されているディスカバー・スクーバ・ダイビングの規準を説明し、認定アシスタントしてダイブマスターが限定水域でできることについて話し合う。また、ディスカバー・スクーバ・ダイビング・リーダー・インターンシップの必要条件について説明し、ダイブマスターの認定を受けた後に、どうすればDSDリーダーの資格を得ることができるかについて話し合う。

水中で、お手本となるディスカバー・スクーバ・ダイビングの限定水域セッションを実施する。候補生は交代で、参加者役を演じる他の候補生／スタッフを相手に、認定アシスタント役を練習する。参加者役の器材を手伝い、浅い場所で泳ぎまわる参加者役を監督するよう候補生に指示する。参加者役にトラブルをランダムに割り当て、候補生には、トラブルに気付いたらただちに対処するよう指示する。必要に応じて、アシスタントのポジショニング、監督テクニック、問題解決の補習を行なう。

ワークショップ4: ディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムの追加のオープンウォーター・ダイブ – このワークショップでは、ノンダイバーを監督するときに必要となる特別な注意と慎重な対処法について、引き続き候補生をトレーニングする。まず、ディスカバー・スクーバ・ダイビングでダイブマスターが実施する追加のオープンウォーター・ダイブでの人数比と監督条件に関する規準を説明する。常に参加者の近くで見守り、必要に応じて浮力を調節したり、迅速に対応したりできるポジショニングの重要性を強調する。また、ダイブマスターには参加者の残圧と深度をチェックする責任があることも強調する。

参加者役を演じる2人 (他の候補生／スタッフ) を指定し、各候補生は指定された参加者役を相手にブリーフィングを実施する。ダイビング前に参加者と会話を交わし、親しくなることの大切さを強調する。

水中で、候補生は交代で参加者役を先導する。参加者役にトラブルをランダムに割り当て、候補生には、トラブルに気付いたらただちに対処するよう指示する。必要に応じて、監督テクニックと問題解決の補習を行なう。

最後に、PADIオープン・ウォーター・ダイバー・コースを受けるよう参加者に勧める方法について話し合う。

ワークショップ5: オープンウォーターでのディスカバー・ローカル・ダイビング – 候補生はこのワークショップで、コンディションを評価する方法、ダイビング計画の立て方、環境オリエンテーションを取り入れたブリーフィング、ダイバーの監督方法を練習する。候補生はまた、水面マーカースイッチの使い方を習い、デモンストレーションする。ワークショップで使用する水面マーカースイッチを忘れずに準備しておく必要がある。

まず、ディスカバー・ローカル・ダイビングの規準を説明する。ダイブマスター・スレートに、ディスカバー・ローカル・ダイビング・プログラムの概略が載っていることを候補生に言う。候補生がよく知っているダイビングポイントを選び、その場所で、コンディションを評価して観察した事柄を説明するよう候補生に指示する。

各候補生に異なるシナリオを課題として割り当て、シナリオに基づいてダイビング計画を立て、ブリーフィングを実施するよう指示する。例えば、数年間ダイビングから遠ざかっていて、先日ReActivateプログラムを修了したばかりの2人のダイバー、初めて冷たい海のケルプ群生地域で潜る3人のダイバー、初めてボート・ダイビングに参加する4人のダイバー、初めて水面マーカースイッチを使う2人のダイバーなど。ブリーフィングでは、常に笑顔を絶やさず、リラックスしてダイバーと接し、可能なら、ダイビングポイントの水中地図作成の課題で作った地図を使うようアドバイスする。

水中で、候補生は他の候補生／スタッフが演じる参加者役を先導する。参加者役にトラブルをランダムに割り当て、候補生には、トラブルに気付いたらただちに対処するよう指示する。必要に応じて、監督テクニックと問題解決の補習を行なう。

ダイビング中のいずれかの時点で、水中で膨らませるタイプのマーカースイッチ (DSMB) やシグナルチューブなど、数種類の水面マーカースイッチの使い方をデモンストレーションする。各候補生に使い方を練習させる。

最後に、候補生は指定されたシナリオとダイビング中に観察した事柄に基づいて、短いデブリーフィングを実施する。参加者のログブックに署名することについて話し合う。

実践評価

実践評価1～3は、実際の生徒ダイバーで実施するのが理想的である。そのほうが現実的なトレーニングになるからであるが、候補生はトラブルを起こした生徒ダイバーをアシストするなどの達成条件を満たさなければならないため、実際の生徒ダイバーでトラブルが起きなかった場合には、達成条件をすべて満たすまで、別のクラスの生徒ダイバーをアシストするなど、候補生は実践評価を繰り返して受ける必要がある。

ダイブマスター候補生を使って、生徒ダイバー対インストラクターの人数比を増やすことはできない。インストラクターはまた、生徒ダイバーをアシストしている候補生を直接的に監督し、生徒ダイバーが正しいトレーニングを受けられるよう、必要に応じて補足し、候補生のやり方に間違いがあった場合には、それを訂正しなければならない。

実際の生徒ダイバーで実施するのが困難な場合には、ロールプレイでもよい。また、一部を実際の生徒ダイバーで実施し、それ以外はロールプレイで実施するという形でもよい。ロールプレイの場合には、できる限りリアリスティックにそれぞれの役を演じるよう指示する。現実的であればあるほど、候補生はトラブルに対処する方法について、より多くを学ぶことができる。

実践評価1: 限定水域でのオープン・ウォーター・ダイバー・コースの生徒ダイバー

オープン・ウォーター・ダイバー・コースの限定水域ダイブをスタートする前に、限定水域に到着した生徒ダイバーのダイビング前の活動をアシストするようダイブマスター候補生に指示する。複数の候補生が参加している場合には、各候補生にバディチームを指定する。生徒ダイバーの器材のセッティングをアシストし、エントリーの準備をする生徒ダイバーを監督するよう候補生に指示する。

水中では、複数の候補生が参加している場合には、各候補生が限定水域ダイブのすべての段階に関われるよう、役割をローテーションする:

- インストラクターがブリーフィングしたスキルのデモンストレーション。
- スキル練習中の生徒ダイバーの流れを監督し、取りまとめる。
- インストラクターが直接的に見ていない生徒ダイバーに起きたトラブルに対処する。
- スキルをマスターできない生徒ダイバーを単独でアシストする。

ロールプレイの場合には、生徒ダイバー役を演じる参加者に、セッションの各段階で発生する様々な問題を割り当てる。問題を解決しようと苦心するダイブマスター候補生にマンツーマンで教えてもらう段階になったら、すぐにスキルを習得できる役割を演じるか、あるいはなかなか習得できない役割を演じるか、生徒ダイバー役に明確に説明しておく。役割をローテーションして、もう一度行なう。

実践評価2: オープンウォーターでのオープン・ウォーター・ダイバー・コースの生徒ダイバー

オープン・ウォーター・ダイバー・コースのオープンウォーター・ダイブをスタートする前に、コンディションを評価し、オープンウォーター・トレーニングの場所をチェックするようダイブマスター候補生に指示する。観察したことを報告させ、その場所がエントリー・レベルのダイバーのトレーニングに適していると思うか聞く。さらに、インストラクターが自分で観察したことと、エントリー・レベルのダイバーに適しているかどうかの判断について候補生と話し合う。

生徒ダイバーが器材をセッティングするのに適した場所を選び、緊急用器材を準備してダイビングポイントをセッティングするよう候補生に指示する。また、場所に応じて、フロートまたは潜降ラインとダイブフラッグを準備してセッティングするよう指示する。

生徒ダイバーに挨拶し、ダイビング前の活動をアシストするよう候補生に指示する。複数の候補生が参加している場合には、各候補生にバディチームを指定する。生徒ダイバーの器材のセッティングをアシストし、エントリーの準備をする生徒ダイバーを監督するよう候補生に指示する。

ダイビング中、複数の候補生が参加している場合には、各候補生がダイブのすべての段階に関われるよう、役割をローテーションする:

- スキル練習中の生徒ダイバーの流れを取りまとめる。
- インストラクターが直接的に見ていない生徒ダイバーを監督する。
- 生徒ダイバーのトラブルに対処する、または防止する。
- 水中ツアーで2人の生徒ダイバーを先導し、インストラクターは後ろからついていってやり方を観察し、評価する。

ロールプレイの場合には、生徒ダイバー役を演じる参加者に様々な問題を割り当てる。役割をローテーションして、もう一度行なう。

オープンウォーター・ダイブについてデブリーフィングを実施した後、各候補生に個別にデブリーフィングを行なう。

実践評価3: オープンウォーターでの継続教育生徒ダイバー

PADI継続教育コースの中から、インストラクターによる間接的な監督を許可しているダイブを選ぶ。スペシャルティ・ダイバー・コースのダイブを選ぶ場合は、候補生に経験があるスペシャルティを選ぶ。複数のダイブマスター候補生が参加している場合には、各候補生にバディチームを指定する。

コンディションを評価し、オープンウォーターの場所がトレーニングのレベルに適しているかどうかチェックするようダイブマスター候補生に指示する。観察したことを報告させる。さらに、インストラクターが自分で観察したこと、その場所が適しているかどうかの判断について候補生と話し合う。

生徒ダイバーが器材をセッティングするのに適した場所を選び、緊急用器材を準備してダイビングポイントをセッティングするよう候補生に指示する。また、場所に応じて、フロートまたは潜降ラインとダイブフラッグを準備してセッティングするよう指示する。

インストラクターが後ろからついていくが、候補生はインストラクターが間接的に監督しているかのようにダイブを実施しなければならないことを説明する。ダイビング中は、達成条件に取り組むダイバーに付き添っているよう候補生に指示する。生徒ダイバーが正しいトレーニングを受けられるよう、必要に応じてインストラクターが補足し、候補生のやり方に間違いがあった場合には、それを訂正する。各候補生がダイブのすべての段階に関われるよう、役割をローテーションする:

- トレーニング中の生徒ダイバーの流れを取りまとめる。
- うまくマスターできない生徒ダイバーを手助けする。
- 生徒ダイバーのトラブルに対処する、または防止する。

ロールプレイの場合には、生徒ダイバー役を演じる参加者に様々な問題を割り当てる。役割をローテーションして、もう一度行なう。

ダイビング後、スキルのパフォーマンスや学習に何か問題があった生徒ダイバーがいたかどうか候補生に聞く。オープンウォーター・ダイブについてデブリーフィングを実施した後、各候補生に個別にデブリーフィングを行なう。

実践評価4: オープンウォーターでの認定ダイバー

地元のレクリエーション・ダイバーがよく使うダイビングポイントを選ぶ。この評価では、各ダイブマスター候補生は少なくとも4人の認定ダイバーをつれてダイブを実施しなければならない。

コンディションを評価し、場所をチェックするよう候補生に指示する。また、認定レベルや経験など、ダイバーが提供した情報に基づいてダイバーをチェックするよう指示する。観察したことを報告させ、どのようにダイブを準備して監督するつもりか説明させる。

ブリーフィングを行ない、バディチームを確認し、プレダイブ・セーフティ・チェックをするよう指示し、エントリー／エキジットするバディチームを適切な手順で確認するよう候補生に指示する。

ダイビング中、後ろからついていって、候補生がどのようにダイバーに付き添い、トラブルに対処しているか観察する。ダイビング後、ダイバーにデブリーフィングを行なうよう候補生に指示する。各候補生に個別にデブリーフィングする。

プロフェッショナリズム

ダイブマスターは、態度、外見、人との接し方、ダイビング環境を大切にする姿勢において、プロフェッショナリズムを示すことが求められる。全体評価の一環として、候補生のプロフェッショナリズムも採点の対象となる。各自のプロ意識を測定することにより、ダイビングのプロフェッショナルになるということは何を意味するか、各候補生に明確に示すことができる。プロフェッショナリズム評価採点基準 (PADIインストラクター・マニュアルのダイブマスター・コース・インストラクター・ガイドに記載されている) でいずれかのスコアが1点か2点の場合には、3点以上になるまでカウンセリングし、指導する。

ディスカバー・スクーバ・ダイビング

実施方法と推奨事項

概要

PADIディスカバー・スクーバ・ダイビングは、行き届いた指導と管理によるリラックスした雰囲気の中で、一般の人々にスクーバ・ダイビングを紹介するプログラムである。実際にダイビングを体験してもらうことで、スクーバ・ダイビングにありがちな誤解を解消する。PADIプロフェッショナルの指導のもとで、ノンダイバーは安全に関する基本的な知識を学び、ダイビング器材を装備して、きめ細かな監督を受けながら水中を泳ぐ。PADIディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムは、プール、安全が確保された海の限定水域、またはオープン・ウォーターのダイビングポイントで実施することができる。

ディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムを実施するPADIプロフェッショナルは、プログラムに参加する人の水中での能力や経験の程度はそれぞれ異なるものである、プログラムに対する期待度も異なるという意識を持っている必要がある。前からぜひやってみたくて思っていた人もいれば、その場の思いつきで参加した人もいるかもしれない。また、友人や家族に誘われたので参加することにしたという人もいるかもしれない。そういった参加者に対しては、安全を確保するためだけでなく、プログラムを楽しんでもらうためにも、忍耐と注意と配慮が必要である。

PADIプロフェッショナルにとって、ダイビングの楽しさを発見するというまさに素晴らしい経験の道案内をし、一緒に喜びを分かちあう機会を日々得られるということが、ディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムを開催する真の醍醐味である。

ディスカバー・スクーバ・ダイビングに参加してスクーバにトライした人の中には、すぐではなくても、別の機会にもう一度やってみたくて思う人もいるかもしれない。また、これをきっかけに、PADIオープン・ウォーター・ダイバー・コースに進むことにする人もいるだろう。つまり、ダイビングと水中世界の喜びをノンダイバーに手ほどきする監督の行き届いた楽しい体験をノンダイバーに提供する一方で、さらなる参加を奨励することが、ディスカバー・スクーバ・ダイビングの目的である。

他のPADIコースやプログラムと同様に、ディスカバー・スクーバ・ダイビングの計画、準備、実施にあたっては、ダイバーの安全が最優先事項である。

教材

ディスカバー・スクーバ・ダイビングの参加者は各自がディスカバー・スクーバ・ダイビング参加者ガイドを持っていないことになっているので、それぞれ自分のガイドを見ながら、インストラクターによる知識開発とスキルの説明を聞くよう指示する。また、ディスカバー・スクーバ・ダイビング・フリップチャートはブリーフィングを実施する際の補助教材として役立ち、ディスカバー・スクーバ・ダイビング・キューカードは水中に持って行くことができる。

プール、海の限定水域、オープンウォーターのいずれで開催する場合でも、ディスカバー・スクーバ・ダイビング参加者ガイド（日本ではディスカバー・スクーバ・ダイビング・ログブック）を使ってプログラムの内容を参加者に紹介する。参加者ガイドには、知識とスキルについての説明に加えて、ディスカバー・スクーバ・ダイビングに必要な事務手続きの書類が入っていて、知識と安全ルールが解説されている。参加者は安全ルールに関するインストラクターのブリーフィングを聞き、質問に答える。参加者はスクーバ器材を装着して水に入る前に、安全ルールを完璧に理解しなければならない。プログラム終了後、参加者ガイドに入っているログページにダイビングの内容を記録するよう参加者に言う。

プール体験

ディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムは、限定水域やオープンウォーター以外に、水泳用プールで入門体験として開催することができる。プールは極めて管理の行き届いた場所であるため、参加者が器材を装着するのを手伝い、水面でBCDに空気を出し入れする練習をさせ、最初は浅い場所で、慣れてきたら深い場所で泳ぎ回るのをしっかりと見守るだけでよい。

このプール体験は、生徒ダイバーがオープン・ウォーター・ダイバー・コースの限定水域セッション後に、ダイビングをやってみようという友人を連れてきた場合や、トライダイビングのプロモーションを実施する際に理想的である。

海の限定水域やオープンウォーターでディスカバー・スクーバ・ダイビングを実施する場合には、自然という環境に伴うリスクが高くなるため、「限定水域達成条件」の項（ディスカバー・スクーバ・ダイビング・インストラクター・ガイド、第3章）にリストされている通り、プール体験の場合より多くのスキルを練習する必要がある。

スキルの紹介

海の限定水域またはオープンウォーター・ダイブで深い場所へ行く前に、浅い場所で呼吸方法など基本的な必修スキルを参加者に手ほどきする（ディスカバー・スクーバ・ダイビング・インストラクター・ガイド、第3章、「限定水域達成条件」の項にリスト）。初心者の参加者には十分な時間をかけ、スキルに慣れて自信がつくまで注意深く見守る必要がある。スキルに慣れて水中に安心していられるようになればなるほど、経験を楽しむことができるようになり、教える側にとっても、より多くの満足感につながる。

スキルを教えるにあたっての推奨事項については、このマニュアルの「オープン・ウォーター・ダイバー・コース - 限定水域の実施方法とテクニックについての推奨事項」のセクションを参照。

オープンウォーターの潜降ライン、ハングバー、プラットフォーム

スキル練習に適した浅瀬がない場所でオープンウォーター・ダイブをする場合には、潜降ライン、水平のハングバー、水面に近いプラットフォームを使って必修スキルを手ほどきする。この場合、スキル練習は1:1の人数比で行なう。立ち上がるか、ラインを少し上がっただけで水面に出られるよう、参加者を水面のすぐ下に配置する。ラインやハングバーを使う場合には、ライン／バーと参加者の両方をつかんで確保し、必要があれば参加者と一緒にすぐに浮上できるようにしておく。

注意：ラインを使ってコントロールする方法については、このマニュアルの「オープン・ウォーター・ダイバー・コース」の章の「オープンウォーターの実施方法とテクニックについての推奨事項」のセクションにある「コントロールされた緊急スイミング・アセント」の項にあるイラストを参照。

もし他の参加者がまだ水中にて、なおかつ水面にも参加者がいる場合、認定されたアシスタントもしくは他のインストラクターが直接監督をしなくてはならない。

参加者がスキルの達成条件を満たし、慣れてきたら、オープンウォーター・ダイブに進む。

海の限定水域とオープンウォーターにおけるコントロールと監督

ディスカバー・スクーバ・ダイビング参加者には、行き届いたきめ細かな監督とアシストなしで潜れるスキルと経験はない。そのため、このプログラムを実施するプロフェッショナルは、参加者のために責任を持って、最初から最後まで安全で妥当な決定をしなければならない。

例えば:

- すべての要素 (エントリー／エキジット・ポイント、深度と水底の地形、波、流れ、透視度、ボートの往来など) を慎重に考慮して、適したダイビングポイントを選ぶ。おもしろい見所がある、水中生物が多いなど、経験の幅を広げてくれるような場所を選ぶ。ただし、こんな「いつもの」ダイビングポイントではすぐに飽きてしまうだろうから、溶岩洞をのぞくとか、ドロップオフの近くに連れて行くなど、もっとおもしろいものを見せてあげなければならないと思って無理をするといったような、自分の幅広い経験から来る先入観に惑わされてはいけない。ダイビング初体験のダイバーは、これまで見たこともない風景が目の前にあって生き物が動いている水中にただ、スリルを味わっているのである。
- 現場に着いたら、コンディションを慎重に検討した上で、ディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムを実施すべきか否か決定し、適切な人数比を決める。ぎりぎりのコンディションで実施すると、参加者から楽しさを奪いかねないし、リスクも高まる。また、参加者の安心と安全のために必要と判断される場合には、中止をためらってはならない。慎重な決定と適切な判断をすることが大切である。
- ディスカバー・スクーバ・ダイビング参加者の人数比を決め、監督する方法については、PADIディスカバー・スクーバ・ダイビング規準に詳述されている。ディスカバー・スクーバ・ダイビングの参加者はまだ十分なトレーニングを受けていないため、慎重な監督と管理が必要である。最初から最後まで、参加者の様子をしっかりと観察し、リスクを評価し、正しい判断をすることが、プログラムの成功に必要不可欠である。
- 水中での人の配置に細心の注意を払う。常に参加者にすぐに手が届く範囲内にいて、ディスカバー・スクーバ・ダイビングの監督と観察規準を維持できる位置に自分とアシスタントを配置する。
- 水中で参加者をガイドすることに関して、効率的に観察してコントロールできるよう、全体的な方法とアプローチを考える。さまざまな方法があるが、よく用いられている方法のひとつが、全員に自分のそばから離れないように言ってグループの先頭に立ち、目を離さないよう後ろ向きに泳ぐという方法である。もちろん、進行方向を確認するために、少しの間だけ目を離すことは必要であるが、文字通り少しの間だけである。この方法を用いても、参加者の性格、水中のコンディション、ダイビングポイントの自然の特徴といったような問題が妨げとなって、参加者との距離や適切なコントロールを維持できない場合には、ダイブ計画を変更する、人数比を減らす、認定アシスタントを追加する、方法を変えるなどの対策をとって問題の解決を図る。よく用いられるもうひとつの効果的な方法は、直接的に見守って監督しながらグループ全体を先導し、すぐ後ろに認定アシスタントを配置するという方法である。
- ディスカバー・スクーバ・ダイビング参加者に意識を集中する。リラックスして、すべてがうまく行っているように見えても、即座に緊急事態に対応できる準備を整えておく必要がある。水中にあるおもしろいものを指し示しながらも、参加者を適切に見守るという注意義務を怠ってはならない。十分に目を配り、インストラクターに頼っている初心者だという事実を忘れてはならない。グループの中でいちばん不安を感じている参加者の様子に基づいて判断する。

- 不安の兆候に注意を払い、直ちに対応する。スキルを手ほどきしているときに参加者に不安の兆候が見られ、簡単に克服できなさそうな場合には、エキジットさせる。深い場所やオープン・ウォーター・ダイブへ進む前に、浅い場所でもっと練習して、安心して水中にいられるようになる必要があることを伝える。
- 参加者の年齢と能力を考慮する。参加者が年少、高齢、身体障がい者の場合には、人数比を減らすことを検討する。可能であれば、認定アシスタントを増やしてコントロール対策を追加する。
- ダイビングの前後に器材を装着したままでいる時間をなるべく短くする。エントリーとエキジットをできるだけ効率的に行なって、水面に浮いている時間を最小限にする。
- 参加者は浮力をコントロールするトレーニングを受けていないので、水中ではインストラクターが参加者の浮力を調整する。傷つきやすい水中生物がいない水底に潜降する。
- 参加者は基本的なハンドシグナルを学習するが、意思の疎通を図るために、スレートを携帯して必要に応じて指示を書く。
- 参加者の残圧をこまめにチェックする。十分な空気を残してダイビングを終え、シリンダーから呼吸しながらエキジットできるように計画する。

追加ダイブ

PADIインストラクターによるPADIディスカバー・スクーバ・ダイビングのオープン・ウォーター・ダイブを終えた参加者は、認定アシスタントが監督する追加のダイブに参加することができる。追加ダイブに参加する前にスキルの復習が必要かどうかについては、インストラクターが判断する。例えば、参加者が同じ日に同じダイブショップを使ってもう一度ダイビングしたいという場合には、追加ダイブの前にいくつかのポイントをざっと復習するだけでよく、プログラムを最初から繰り返す必要はない。しかし、参加者が後日戻ってきた場合や、別のダイブショップへ行った場合には、プログラムを最初からやり直し、事務手続きの書類に改めて記入してもらわなければならない。PADIディスカバー・スクーバ・ダイビングはシンプルな入門プログラムで、オープン・ウォーター・ダイバー・コースと違ってスキルのマスターは必修ではないため、前回から間が開いた場合や、別のダイブショップを使う場合には、改めて手ほどきする必要がある。

ディスカバー・スクーバ・ダイビング・リーダー

ディスカバー・スクーバ・ダイビング・リーダーは、ディスカバー・スクーバ・ダイビング・インターンシップを修了したPADIダイブマスターである。このインターンシップでは、PADIインストラクターの直接的な監督のもとで、プールまたは海の限定水域環境で4回のPADIディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムを実施する。認定ディスカバー・スクーバ・ダイビング・リーダーは、限定水域（プールと海の限定水域）でディスカバー・スクーバ・ダイビングを実施することが認められるが、オープンウォーターでは認められない。PADIインストラクター・マニュアルの「プロフェッショナル・メンバーシップ」のセクションにある「ディスカバー・スクーバ・ダイビング・リーダーの手順」の項を参照。

登録と表彰

プログラム終了後、ディスカバー・スクーバ・ダイビング参加者ガイドに入っているカードを使って、その場で表彰する。ダイビング教育を続ける方法や場所として、PADI eラーニングなどのオプションを含めて登録することの利点や、追加ダイブをする方法について説明する。

参加者を登録する方法としては、ディスカバー・スクーバ・ダイビング参加者ガイドにある登録ページを使う、インターネットでオンライン登録する、ディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムの登録用紙を使うなど、いくつかの方法がある。詳しくは所属PADIオフィスに問い合わせること。

PADIシールチーム

実施方法とスキルについての推奨事項

概要

エキサイティングな水中活動が盛りだくさんのPADIシールチーム・プログラムは、子供を対象としたダイビングの世界へのイントロダクションである。限定水域ダイブと対話式ディスカッションを通じて、子供たちはスキルを身につけ、水中世界について学び、純粋に楽しい時間を過ごす。冒険を楽しみながら、水中活動をベースにしたこのプログラムの教育構造がいかにか子供の成長に役立つか、親や保護者の方々にも、そのすばらしさは理解していただけるはずである。

PADIシールチームの正式なメンバーになるには、15のアクアミッションのうち、最初の5つを修了する必要がある。アクアミッション1~5を修了することは、オープン・ウォーター・ダイバー・コースの限定水域ダイブ1のスキルを修了することと同等である。子供たちは、PADIシールチーム・ビデオ、PADIシールチーム・アクアミッション・アクティビティブック、PADIインストラクターによるダイビング前のブリーフィングを通してダイビングについて学ぶ。

スペシャルティ・アクアミッションは、子供たちに新しいダイビング体験や器材を紹介する。PADIシールは、さらに10のアクアミッションを修了し、スクーバ器材のセッティングと取り外しができることをデモンストレーションできるPADIシールチーム・メンバーは、PADIマスター・シールチーム・メンバーの資格を得る。

新しいアクアミッションの楽しいアイデアがあれば、シールチーム・スペシャルティ・アクアミッション申請書 (padi.comのメンバー専用ウェブサイトからダウンロード) を使って、PADIオフィスへ提出する。年齢に適した内容で、タイトル、目的、チャレンジ (知識開発目標)、プールスキル、そのアクアミッションに用いる特別な器材や教材についての説明を記載する。承認を受ければ、オリジナルの新しいアクアミッションをPADIシールチーム・プログラムに新しく取り入れることができる。

PADIシールチーム・プログラムは、PADIジュニア・スクーバ・ダイバーまたはオープン・ウォーター・ダイバー・コースに参加する準備が整うまで、子供たちにダイビングと学習を続けさせ、楽しい時間を過ごしてもらうことを目指すものである。

総合的アドバイス

1. 他のPADIコースやプログラムと同様に、PADIシールチーム・プログラムの計画、準備、実施にあたっては、ダイバーの安全が最優先事項である。
2. 水中活動の前に、参加者と親または保護者にPADIシールチーム声明書に必要事項を記入してもらい、署名させる。この声明書の有効期間は12ヶ月である。PADI病歴／診断書の質問にひとつでも「Yes」と答えた参加者は、水中活動を始める前に、免許を持つ医師の許可を得なければならない。
3. 子供を教えるには、より多くの注意を払い、監督し、指示を出す必要がある。積極的な態度を示し、親／保護者にも活動に参加してもらうことで、非難の余地がないようにすることを心がける。トレーニング中は他の大人に同席してもらい、常にプロフェッショナルな振る舞い、好ましい外見、品位ある態度を維持する。PADIインストラクター・マニュアルの「上を目指す努力 - 責任の実行」にある「ユース・リーダーの義務」に従い、padi.comのメンバー専用ウェブサイトにある「PADIダイブセンター／リゾートのための児童保護ガイドライン」を参照する。
4. 参加者に、自分の都合のよいときかインストラクターと一緒に、PADIシールチーム・ビデオを見るよう指示する。プログラム中にビデオを見るのが求められるのは、この1回だけである。

5. 参加者に、PADIシールチーム・アクアミッション・アクティビティブックの中の該当するセクションを勉強するよう指示し、対話式ブリーフィングで該当セクションを復習する。
6. 子供の年齢を考慮しながらキーポイントについて説明する。内容はできるだけシンプルにするが、好奇心をそそる質問をすることによって参加者をディスカッションに参加させる。興味を引かれるものがあつたら何でも質問するよう言う。
7. スポーツ用品店やプール用品店の水中スポーツコーナーで、プールゲームに使えるおもちゃを探す。インターネットでも、楽しくておもしろい小物を探すことができる。市販のおもちゃやゲーム以外に、自分で簡単な幾何学的な図形のパズルを作ったり、ビニールパイプや継ぎ手部品などを使って、泳いでくぐり抜ける障害物コースを作ることもできる。ウエイトを取り付けたボードゲーム、ラミネートしたトランプやドミノを使って水中で遊ぶ。プールゲームやおもちゃにより、子供たちは楽しみながらダイビングスキルを身につけることができ、自信を持つようになる。詳しくは、padi.comのメンバー専用ウェブサイトにあるアクアミッション・ゲーム・アイデアを参照。
8. アクアミッション5を修了すると、PADIシールチームのメンバーになるので、親、保護者、家族をアクアミッション5に招待する。可能であれば、家族や友人にスノーケル器材を装着してもらい、デモンストレーションを見学してもらうか、ビデオカメラなどを使って、水中で遊ぶ参加者の様子を見もらう。
9. このプログラムは子供用に作られているが、大人にも楽しめるものである。親、兄弟姉妹、祖父母、友人などを招待し、子供と一緒にプログラムに参加させる。

アクアミッションの実施方法とテクニックについての推奨事項

アクアミッション1

最大深度は2メートル／6フィート。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - 今までにスクーバ・ダイビングをしたことがある人はいますか？
 - ダイビングの映画やテレビ番組を見たことがありますか？
 - ダイビングって、どんな感じだと思いますか？
 - みんなは、これから水の中で呼吸します。どうやって呼吸すると思いますか？
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して、PADIシールチーム行動規範、ダイビングの安全ルール、ハンドシグナル、器材について、対話形式で復習する。アクアミッション1の活動について説明する。
3. PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。パディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。
2. 以下のスキルを紹介し、浅い場所で練習させる：(オープン・ウォーター・ダイバー・コース – 限定水域の実施方法とテクニックについての推奨事項を参照)
 - 浅い場所へエントリーする。
 - アシスタントの助けを借りて器材を装着して調節する。

- 息を止めずに普通に呼吸する。
 - 深度と方向をコントロールしながら水中を泳ぐ。
 - 耳とマスクを圧平衡する。
 - 残圧をチェックし、残圧が十分か少ないか伝える。
 - ハンドシグナルを使ってコミュニケーションする。
 - 正しい浮上をデモンストレーションする。
3. 浅い場所で、トス・アンド・キャッチや水中ラケットボールなどのゲームをして遊ぶ。(padi.comのメンバー専用ウェブサイトにあるアクアミッション・ゲーム・アイデアを参照)

デブリーフィング

1. プールダイブについて子供たちに質問し、対話を導きだす。
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーと、その他の表彰アイテムを発行する。
3. 次回のアクアミッションの準備として、PADIシールチーム・アクアミッション・アクティビティブックの中の該当するセクションを読むよう参加者に指示する。
4. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション2

参加者は最大深度4メートル／12フィートの深い水域へ進む前に、浅い水域でスキルをマスターしなければならない。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - レギュレーターが口に入っていないときに、ぶくぶくと息を吐くことがなぜ大切なのか覚えていますか？
 - レギュレーターのパージボタンはどこにありますか？
 - オクトパスのレギュレーターにパージボタンはありますか？
 - ダイビング中に耳抜きをする方法を覚えていますか？
 - 今日もっと深い場所へ行きたい人はいますか？
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して、PADIシールチーム行動規範、ダイビングの安全ルール、ハンドシグナル、器材について、対話形式で復習する。アクアミッション2の活動について説明する。
3. PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。ゲームとおもちゃについて説明する。
2. 以下のスキルを紹介し、浅い場所で練習させる：
(オープン・ウォーター・ダイバー・コース – 限定水域の実施方法とテクニックについての推奨事項を参照)
 - 浅い場所へエントリーする。
 - アシスタントの助けを借りて器材を装着して調節する。
 - パージボタンを使ってレギュレーターをクリアし、呼吸を再開する。

- 耳とマスクを圧平衡する。
 - ハンドシグナルを使ってコミュニケーションする。
 - 正しい浮上をデモンストレーションする。
3. コイン集め、コイン・トス、ダイブ・リングなどのゲームをして遊ぶ。(padi.comのメンバー専用ウェブサイトにあるアクアミッション・ゲーム・アイデアを参照)

デブリーフィング

1. プールダイブについて子供たちに質問し、対話を導きだす。
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーと、その他の表彰アイテムを発行する。
3. 次回のアクアミッションの準備として、PADIシールチーム・アクアミッション・アクティビティブックの中の該当するセクションを読むよう参加者に指示する。
4. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション3

参加者は最大深度4メートル／12フィートの深い水域へ進む前に、浅い水域でスキルをマスターしなければならない。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす:
 - 水面でBCDに空気を入れるのはどんなときですか？それはなぜですか？
 - BCDのパワー・インフレーター・ボタンはどれですか？
 - 水中でマスクに水が入ってしまったら、どうやって外に出しますか？
 - マスクのスクイズを感じたことがある人はいますか？
 - オクトパスのレギュレーターって何ですか？
 - オクトパスのレギュレーターから呼吸する方法を知っていたほうがいいのはなぜですか？
 - スクーバ・ダイビングでもっとも重要なルールは何ですか？
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して、PADIシールチーム行動規範、ダイビングの安全ルール、ハンドシグナル、器材について、対話形式で復習する。アクアミッション3の活動について説明する。
3. PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。ゲームとおもちゃについて説明する。
2. 以下のスキルを紹介し、浅い場所で練習させる:
(オープン・ウォーター・ダイバー・コース - 限定水域の実施方法とテクニックについての推奨事項を参照)
 - 浅い場所へエントリーする。
 - アシスタントの助けを借りて器材を装着して調節する。
 - パワー・インフレーターを使って水面でBCDに空気を出し入れする。
 - 下半分に水を入れたマスクをクリアする。
 - インストラクターのバックアップ空気源から少なくとも30秒間呼吸をする。

- ハンドシグナルを使ってコミュニケーションする。
 - 正しい浮上をデモンストレーションする。
3. ピンポンボールと逆さまスプーンリレー競争、卵とスプーン競争、スノーケルを渡してリレー競争、エア残圧読みリレー競争、組み立てゲーム、パズルゲームなどのゲームをして遊ぶ。(padi.comのメンバー専用ウェブサイトにあるアクアミッション・ゲーム・アイデアを参照)

デブリーフィング

1. プールダイブについて子供たちに質問し、対話を導きだす。
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーと、その他の表彰アイテムを発行する。
3. 次回のアクアミッションの準備として、PADIシールチーム・アクアミッション・アクティビティブックの中の該当するセクションを読むよう参加者に指示する。
4. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション4

参加者は最大深度4メートル／12フィートの深い水域へ進む前に、浅い水域でスキルをマスターしなければならない(ホバリングを除く)。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす:
 - 水中で感じる無重力の感覚は、宇宙にいる無重力の宇宙飛行士と同じような感じだと思いますか？
 - 水中で無重力になるために使う器材はどれですか？
 - BCDに空気を入れすぎるとどうなりますか？
 - BCDから空気を抜きすぎるとどうなりますか？
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して、PADIシールチーム行動規範、ダイビングの安全ルール、ハンドシグナル、器材について、対話形式で復習する。アクアミッション4の活動について説明する。
3. PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。ゲームとおもちゃについて説明する。
2. 以下のスキルを紹介し、浅い場所で練習させる:
(オープン・ウォーター・ダイバー・コース - 限定水域の実施方法とテクニックについての推奨事項を参照)
 - 浅い場所へエントリーする。
 - アシスタントの助けを借りて器材を装着して調節する。
 - 肩越しにレギュレーターホースをリカバリーする。
 - 息を吐く方法でレギュレーターをクリアし、呼吸を再開する。
 - パワー・インフレーターを使って中性浮力を練習する。
 - キックしたり手で水をかいたりしないでホバリングする。
 - 正しい浮上をデモンストレーションする。

3. ウェイトを付けた四角形、ダイヤモンド形、あるいはフラフープなどで作ったビニールパイプ障害物コースを泳いで通過する、両腕を伸ばして飛行機のまねをし、プールの水底に触れないように泳ぐ、足組みをした体勢で水中をホバリングする、などのゲームをして遊ぶ。(padi.comのメンバー専用ウェブサイトにあるアクアミッション・ゲーム・アイディアを参照)

デブリーフィング

1. プールダイブについて子供たちに質問し、対話を導きだす。
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーと、その他の表彰アイテムを発行する。
3. 次回のアクアミッションの準備として、PADIシールチーム・アクアミッション・アクティビティブックの中の該当するセクションを読むよう参加者に指示する。
4. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション5

参加者は最大深度4メートル／12フィートの深い水域へ進む前に、浅い水域でスキルをマスターしなければならない(ホバリングを除く)。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす:
 - スクーバダイバーはなぜスノーケルを使用するのですか?
 - なぜダイバーは、レギュレーターとスノーケルを交換して呼吸するのでしょうか?
 - 深い場所に潜降するときは、潜降ラインを使ったほうが楽に潜降できるのはなぜでしょうか?
 - 潜降スピードが速くなりすぎないようにするには、どうすればいいのでしょうか?
 - 潜降ラインを使って潜降しているときは、どのように耳抜きしますか?
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して、PADIシールチーム行動規範、ダイビングの安全ルール、ハンドシグナル、器材について、対話形式で復習する。アクアミッション5の活動について説明する。
3. PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。ゲーム、おもちゃ、スキルサーキットについて説明する。
2. 以下のスキルを紹介し、浅い場所で練習させる:
(オープン・ウォーター・ダイバー・コース-限定水域の実施方法とテクニックについての推奨事項を参照)
 - プラスト法でスノーケルクリアをする。
 - 水面で顔を上げずにスノーケル／レギュレーター交換を何度か繰り返す。
 - スクーバ器材を装着し、スノーケルを使って呼吸しながら水面移動する。
 - BCDから空気を抜き、次にプラス浮力になるまでオーラルで空気を入れる。
3. アクアミッション1-4でマスターしたスキルで構成されるスキルサーキットを行なう。
4. ゲームをして遊ぶ。(padi.comのメンバー専用ウェブサイトにあるアクアミッション・ゲーム・アイディアを参照)

デブリーフィング

1. プールダイブについて子供たちに質問し、対話を導きだす。
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
3. PADIシールチーム・メンバー・カードの申請書に必要事項を記入し、PADIシールチーム証書と、Tシャツ、帽子、タオルなどの表彰アイテムを渡す。
4. 参加者にお祝いの言葉を述べ、スペシャルティ・アクアミッションをプロモーションする。ぜひ続けて、PADIマスター・シールチーム・メンバーになるよう誘う。PADIジュニア・スクーバ・ダイバーとジュニア・オープン・ウォーター・ダイバー認定について説明する。
5. 表彰式に親／保護者を招待する。

アクアミッション: 生き物の見分け方スペシャリスト

セッティング

1. 可能なら、身近な場所で見ることのできる水中生物の写真、ビデオ、図鑑スレート（ラミネートした写真、色を塗った木製の魚、防水性のおもちゃなど）を用意する。近隣にある水中生物の生息地（池、潮溜まりなど）や、ダイビング／スノーケルサイトに焦点を当てる。
2. 絵を描くのに使うスレートと鉛筆を用意する。
3. 詳しく説明する生物と、参加者に水中で練習させる泳ぎ方（例: ドルフィンキック）をいくつか選ぶ。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - 水中の生き物と聞くと、何を思い浮かべますか？
 - 水の中で生きている植物には、どのようなものがありますか？
 - このように、いろいろな生き物が水の中で生きていることは、なぜ重要なのだと思いますか？
 - 水の中で生き物はどのように動き回っていますか？
 - この生き物（名前）にはどのような特徴がありますか？
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。スレートを配る。
2. 中性浮力の練習をする。
3. 水中生物図鑑スレート／防水写真に載っている生き物を指差し、参加者にその名前をスレートに書かせる。または、スレートに生き物の名前を書き、参加者が水中生物図鑑スレート／防水写真に載っている生き物を指差すか、スレートに絵を描く。
4. 生き物を指差し、参加者に適切なハンドシグナルを見せるよう言う。

- 生き物のように水中を泳ぐ動き方デモンストレーションし、参加者に練習させる。イルカのようなドルフィンキック、ヒトデのようにゆっくり這う、エイのように飛ぶ、アザラシのように泳ぐ、カニのように横歩きする、ウツボのようにくねくね泳ぐなど。水かき付きのグローブで遊ばせる。

デブリーフィング

- 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - どのような生き物を水中で実際に見たいと思いますか？それはどうしてですか？
 - どの生き物のまねをして泳ぐのがいちばん簡単でしたか？いちばん楽しかったのは？
 - どのようなことを学びましたか？
- アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
- 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: 環境スペシャリスト

セッティング

- 水に沈むプラスチック製のパズルを3~4種類用意し(必要であれば重りをつける)、パズルを参加者に見せ、全部のピースを一緒に混ぜてプールにばら撒く。
- 各自に収集用のメッシュバックを用意する。
- ビーチや水中クリーンアップのときに回収した珍しい形のがらくたや、何だか確認しにくい形の物体をいくつか用意する。

ブリーフィング

- 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - 汚染物質やゴミが海や川や湖に流れ込むことは、なぜ悪いことなのでしょう？
 - これは何だと思えますか？(ゴミを見せる。その物体が何なのか、どこで見つけたか話す。)
 - ビーチや水中クリーンアップに参加したことがある人はいますか？(Project AWAREのDive Against Debrisプログラムについて説明する。クリーンアップの参加者は、水中から回収したゴミの量と種類を記録する。これは、ゴミがどこから来るのかという点を解明し、さらに重要なこととして、海や川や湖が汚染されてしまう前に、ゴミの流入を防ぐための対策を講じるのに役立つ。ゴミやがらくたのひとつひとつが、解き明かさなければならない大きなパズルの一部である。)
 - どうすれば環境汚染を止めることができるのでしょうか？
- PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

- プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。メッシュバッグと手袋を配る。
- 中性浮力の練習をする。
- サーチパターンの実施に備えて、足を上げ頭を低くして泳ぐ姿勢をデモンストレーションし、練習させる。
- サーチパターンを泳ぎながらパズルのピースを集める方法をデモンストレーションし、練習させる。

デブリーフィング

1. 参加者にパズルを組み立てさせる。
2. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - パズルは何でしたか？それが何だか突き止めるのは難しかったですか？
 - 汚染がどこから来るのか調査して突き止めるのは、科学者にとってどのくらい難しいことだと思いますか？
3. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
4. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: インナースペース・スペシャリスト

セッティング

1. このアクアミッションは浮力コントロールが目的なので、周囲を迂回したりくぐり抜けたりする構造物や障害物を用意する。ビニールパイプで水中ステーション「Shallow Space Nine」を作る方法については、padi.comのメンバー専用ウェブサイトを参照。
2. フリスビー、ウエイトをつけたプラスチック製の卵とスプーンなど、浮力コントロールを練習しながら遊ぶおもちゃを用意する。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - 浮力とは何ですか？
 - 宇宙飛行の準備をしている宇宙飛行士は、プールでスクーバ器材をつけて訓練を行いません。それはなぜだと思いますか？
 - 浮力をコントロールするには、BCDに空気を少しずつ入れたり出したりするのがいちばんよい方法です。それはなぜですか？
 - ダイバーはなぜ、水の中でホバリングする方法を覚える必要があるのですか？
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。メッシュバッグと手袋を配る。
2. 中性浮力の練習をする。
3. 視標を使用してホバリングする。
4. ビニールパイプ製の構造物の組み立てや、浮力コントロールの障害物を設置するのを手伝うよう参加者に指示する。宇宙飛行士が宇宙空間で作業するときのように、水中ステーション（または同様のもの）を組み立てている間は、水底に触れたり、壁を押ししたりしないよう言う
5. 中性浮力を保ちながら、frisbeeを投げる、ウエイトをつけた卵がスプーンから落ちないように注意しながらホバリングするなど、ゲームをして遊ぶ。

デブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：

- 水底や壁などを使わずに中性浮力を保つことで、どのようなことを学びましたか？
 - 国際宇宙ステーションで働く宇宙飛行士になるのは簡単だと思いますか？テレビで見るより難しそうですね。そう思いませんか？
3. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
 4. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: ナビゲーション・スペシャリスト

セッティング

1. スレートと鉛筆に加えて、参加者用のコンパスを用意する。距離を測定するロープがあると、ガイドラインとしても役立つ。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす:
 - 水中で自分のいる位置がわかっているほうが楽しいのはなぜだと思いますか？
 - 海に出たら、自分がどの方向に進んでいるか、どうすればわかりますか？
 - 進む距離はどのように測りますか？
 - ある距離で泳いで、キックの回数を数えれば、どこまで行ったかわかると思いますか？
2. 参加者にコンパスを見せ、針、ラバーライン、インデックスマークを指し示して教える。
3. コンパスの正しい持ち方、針が常に同じ方向を指すことをデモンストレーションする。針をインデックスマークの間にどのように維持し、身体の向きを変えると、針がマークからどのようにずれるかを見せる。
4. プールサイドに張ったロープなど直線コースをセットし、コンパスを使って直線コースに沿って歩くよう指示する。ロープにそってまっすぐ進んでいる限り、コンパスの針はマークの中にあることを強調する。水中でも、身体をコンパスのセンターラインとまっすぐに合わせて泳ぐ必要があることを説明する。
5. キックサイクルの回数を数えるシミュレーションとして、長さのわかっているロープに沿って、歩数を数えながら歩くよう指示する。バディ同士で歩数を数え、記録する。ある一定の距離を歩くのに必要な歩数の違いを、参加者同士で比べてみる。
6. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。コンパスとスレートを配る。
2. 中性浮力の練習をする。
3. ラインに沿って泳ぎながら、一方のバディがコンパスを使って直線をナビゲーションする。役割を交代し、もう一方のバディがナビゲーションして戻る。
4. キック数を数えながら、一定の距離を泳ぐ。一方のバディが通常のペースで泳ぎ、もう一方がキック数を数えてスレートに記録する。

デブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - ラインにそって泳ぐのに、何回キックしましたか？
 - コンパスを使って泳ぐことについて、何を学びましたか？
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
3. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: ナイト・スペシャリスト

セッティング

1. このダイブは、太陽光が当たるプールの場合には日没後に行ない、照明を落として暗くすることが可能なインドアプールで実施することもできる。
2. 各自が水中ライトを持つ。その他、ケミカル／マーカライト、バックアップ用ライト、水面用の視標ライト、潜降ラインを付けたフロートに取り付けた方向確認用ライトも用意することが望ましい。
3. おもしろいダイブにするために、夜の水中環境のシミュレーションとして、岩の裂け目で寝ている魚、海底を這うエビ、獲物を探すウツボなど、おもちゃの水中動物を置いておく。バケツやプラスチック製の容器を使って、岩や裂け目をシミュレーションする。
4. 岸／水面の視標ライトや方向確認用ライト（ケミカルライト、ストロボなど）のセッティングなど、ダイビングの準備作業に参加させる。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - 日中と夜のダイビング環境の違いは何ですか？
 - ナイト・ダイビングでは、どのような特別なダイビング器材が必要だと思いますか？
 - ダイビング用のライトと普通の懐中電灯の違いはどのような点ですか？
 - 夜間に水中でコミュニケーションをとるには、どうすればいいと思いますか？
 - 夜間に残圧計を読むには、どうすればいいと思いますか？
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。水中ライトを配る。
2. 浅い場所で水中ライトをチェックするよう参加者に指示する。ライトを使ってハンドシグナルを確認する方法を復習し、ライトを互いの目に向けよう注意する。
3. 中性浮力の練習をする。
4. ライトを手で覆って暗さに慣れる。
5. 夜の生き物を探す。

デブリーフィング

- 以下の質問をして、対話を導きだす:
 - 夜にダイビングするのは、昼間と何が違っていましたか？
- アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
- 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: 安全スペシャリスト

セッティング

- ラインやフロートなど、プールサイドから人を助けるための器材を用意する。また、ホイッスルやシグナルチューブなど、水中用の安全器材も用意する。

ブリーフィング

- 以下の質問をして、対話を導きだす:
 - フィンを使うと、ときどき足がつることがありますが、なぜだと思いますか？
 - どのようなときに助けを呼ぶべきですか？
 - 助けを呼ぶには、どのような方法や合図がありますか？
 - バディの近くにおいてコミュニケーションをとることが大切なのはなぜですか？
 - 不安を感じていたり疲れたりしているダイバーを落ち着かせ、リラックスさせるには、どのような方法がありますか？
 - バディと一緒に水面で浮いているとき、疲れてしまったバディを手助けして岸やボートまでたどり着くには、どのような方法がありますか？
 - パートナーが助けを必要としていて、助けてあげることができたら、どんな気持ちになると思いますか？
 - ダイビング中にトラブルが起きるのを防ぐ簡単な方法とは、どのような方法ですか？
- 4ステップ・アシストを説明する:
 - 浮力 - 水面で浮くように、自分のBCDに空気を入れる。次に、助けを必要としている人のBCDにも空気を入れる。ウエイト・ベルトを外す。
 - 落ち着く - 今助けるから、落ち着いて泳ぐのをやめるよう穏やかに言う。
 - 呼吸 - ゆっくり深呼吸すれば、落ち着いて冷静に考えることができるようになると言う。
 - 曳行 - シリンダーのバルブか腕をつかんで曳行する。足のほうから押していく方法もある。
- PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

- プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。
- 一方のバディ (またはアシスタント) はスノーケリング器材をつけてプールに入り、もう一方はプールサイドで救助者役をする。救助者はラインやフロートなどをプールの中にいるダイバーに投げ、ゆっくりと安全な場所まで引っ張る。救助者役とトラブルを起こしているダイバー役を交代して練習する。
- 器材を装着して調節し、プールに入る前にプレダイブ・セーフティ・チェック (BCD、ウエイト、リリース、エア、最終OK) を行なうよう参加者に指示する。

4. 水面または水中で、自分の足がつったときの治し方と、バディの足がつったときに手助けする方法をデモンストレーションし、参加者に練習させる。
5. 水面でトラブルを起こしているダイバーに対し、落ち着いて話しかけ、救助者は自分自身の浮力を確保し、さらにダイバーの浮力を確保することで手助けする方法をデモンストレーションする。バディチームで役割を交代しながら練習するよう指示する。
6. 疲労したダイバーをさまざまなテクニックを使って曳行する方法をデモンストレーションする。バディチームで役割を交代しながら練習するよう指示する。

デブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - ダイビングの緊急時に人を助けることについて、何を学びましたか？
 - いつ助けを呼びますか？
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
3. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: サーチ&リカバリー・スペシャリスト

セッティング

1. 小さくて見つけにくい搜索物 (例: 缶飲料を6本ずつパックするプラスチック製のホルダー、食べ物を包むラップ、ペットボトルなど) を入れるメッシュバッグを用意する。各バディチームがそれぞれ異なる物を探そう、十分な数を用意する。これをプール中にばら撒く。
2. 小さなリフトバッグと、結び方を練習するためのロープ。
3. リフトバッグを使って引き上げる物体は、落下しても危険でないものを選ぶ。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - ボートや栈橋から、またはプールで、誤って水の中に何か落としたことはありませんか？落とした人を知っていますか？
 - 本当は水の中にあるべきではないけど、最終的にそこに行き着いてしまったというようなものとして、他にどのようなものがありますか？
 - リストされたものの中で、どれならダイバーが見つけて回収できると思いますか？
 - ひもの結び方が得意な人はいますか？ (オプション)
 - プールの底を効率的に搜索するには、どのような方法を使用すればよいでしょうか？
2. プールサイドでサーチパターンをデモンストレーションし、パターンに沿って歩いてみるよう参加者に指示する。伸ばした腕を使って方向を変える方法を見せる。バディの協力とコミュニケーションの大切さを強調する。
3. オプションとして、ラインの結び方とリフトバッグに物体を結束する方法を練習させる。あるいは、インストラクターまたはアシスタントがリフトバッグを結束する。
4. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。メッシュバッグを配る。

2. 中性浮力の練習をする。
3. 参加者はそれぞれ指定されたものを検索し、回収してゴミ箱に入れる。
4. リフトバッグを結束し、オクトパスを使って少しずつ空気を入れて膨らませて物体を中性浮力にし、引き上げる前に結び目を確認する方法をデモンストレーションする。厳重な監督のもとで、バディチームごとにリフトバッグを使って小さな物体を引き上げる練習をする。

デブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導き出す:
 - 誰かがプールでイヤリングやコンタクトレンズをなくしたら、捜せますか?どのように捜しますか?
 - 特定の物を探し、見つけることができたことについて、どう思いますか?
 - 物体を引き上げるという練習から何を学びましたか?
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
3. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: スキンダイバー・スペシャリスト

セッティング

1. 人はなぜ、ときどきスクーバ・ダイビングではなくスノーケリングをするのだと思いますか?
2. このアクアミッションはPADIスキンダイバー・コースとして実施できる。達成条件については、PADIスキンダイバー・コース・インストラクター・ガイドを参照。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導き出す:
 - 人はなぜ、ときどきスクーバ・ダイビングではなくスノーケリングをするのだと思いますか?
 - なぜスノーケルが必要なのですか?
 - スノーケルの中に水が入ったらどうすればよいですか?
 - フィンを使って水面を泳ぐには、どのような泳ぎ方が最もよい方法ですか?
 - スノーケリングするときは、なぜパートナーと一緒にのほうがよいのですか?
 - スノーケリングをしていて寒くなったら、どうすればいいですか?
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。
2. スノーケルをクリアする方法をデモンストレーションし、浅い場所で練習させる。
3. 水面でスノーケリングしながら、下半分に水が入ったマスクをクリアする方法をデモンストレーションし、練習させる。
4. 水面で手を使わずに泳ぐ方法をデモンストレーションし、練習させる。必ずバディと一緒にスノーケリングすることを強調する。
5. PADIスキンダイバー・コースを実施する場合には、引き続き追加のスキルを教える。

デブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - スクーバ・ダイビングとスノーケリングの、どちらが簡単ですか？
2. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
3. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: スナップショット・スペシャリスト

セッティング

1. セッティング済みで、すぐに使える状態になっている水中カメラまたはビデオカメラを用意する。
2. 水中生物のおもちゃなど、写真の被写体になるものを小道具としてプールの中に置く。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - バディと2人で1台のカメラを使いますが、それはどうしてだと思いますか？
 - バディがよい写真を撮るには、どのように手伝え方がいいと思いますか？
 - よい水中写真を撮ることについて、どのようなことが重要だと思いますか？
2. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。バディの一方がダイビングの前半に写真を撮り、もう一方は後半に写真を撮るよう指示する。
2. 中性浮力の練習をする。
3. カメラを渡し、機能を簡単にデモンストレーションし、バディチームごとに写真を撮るよう指示する。後半になったら交代させる。

デブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす：
 - 水中でよい写真が撮れたと思いますか？
 - 何を学びましたか？
2. このアクアミッションで撮った写真やビデオを見せ合う会の予定を立てる。
3. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
4. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

アクアミッション: レック・スペシャリスト

セッティング

1. 各バディチーム用に、沈船の輪郭を描いた大きなスレートと巻き尺を用意する。オプションとして、沈船を記録するカメラを用意する。
2. 沈船 (古いボート、ボートの形をしたプラスチック製の子供用プール、ビニールパイプで作ったボートの形、ウエイトを付けたロープでプールの底に作ったボートの形など、ボートかボートの形をしたもの) をプールの底に沈める。沈船をつくるアイデアについては、padi.comのメンバー専用ウェブサイトを参照。
3. 沈船の中かそばに、ヘアブラシ、おもちゃのお金、アクセサリー、プラスチック製の皿やフライパンなどを置く。

ブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす:
 - 沈船とはどのようなものですか?
 - 船が長い間水中に沈んでいると、どのようなことが起きますか?
 - 沈船がばらばらになり、色々な生物が住み始めるようになると、それはサンゴ礁のような環境の一部になりますか?そこでダイビングするときには、何を注意しなければいけないと思いますか?
 - 記念として何か持ち去ったり、置いてある物を動かしたりすると、沈船はどうなりますか?
 - 古い沈船を研究する科学者のことを何と言いますか?
2. スレートと巻き尺を使って地図を作成する方法を説明する。沈船の長さや幅、沈船で発見したものを記入する場所を示す。
3. PADIシールチーム・フリップチャートを使用して対話形式で復習し、PADIシールチーム・アクアミッション・ログブックでチャレンジを復習する。

プールダイブ

1. プールサイドに参加者を集め、器材のセッティングを手伝う。バディを決め、プールと水中の安全ルールを確認する。スレートと巻き尺を配る。
2. 中性浮力の練習をする。
3. 巻き尺の使い方をデモンストレーションし、協力して沈船の大きさを測り、地図を作成するよう指示する。活動を綿密に監督し、必要であれば手助けする。
4. カメラがあれば、沈船を撮るよう言う。

デブリーフィング

1. 以下の質問をして、対話を導きだす:
 - 見つけてグループ分けした備品から、ベッドルームや台所などの場所がわかりましたか?どうやってわかったのですか?
 - 沈船の長さや幅はどのくらいでしたか?
 - 水中考古学者について、何を学びましたか?
2. カメラを使った場合には、このアクアミッションで撮った写真を見せ合う会の予定を立てる。
3. アクアミッション・ログブック用のステッカーを発行する。
4. 子供たちのパフォーマンスに関して、親または保護者に報告する。

REACTIVATEプログラム

実施方法と推奨事項

概要

ReActivateプログラムは、スクーバ・ダイビングに関する基本的な知識とスキルを復習させることで、ダイビングから遠ざかっていた認定ダイバーを呼び戻し、再びダイビングを楽しんでもらうことを目的としたプログラムである。

ReActivateプログラムは、ナレッジレビューとダイブスキル・リフレッシュの2つで構成される。ナレッジレビューを修了したダイバーは修了証を受け取る。ナレッジレビューとダイブスキル・リフレッシュの両方を修了後、PADIダイバーはReActivate修了日が記載された新しい認定カードを受け取る。

総合的アドバイス

1. 参加者はReActivate TouchまたはOnlineを使って知識を復習し、修了証を受け取る。
 - a. 参加者がTouchまたはOnlineプログラムでReActivateクイックレビューを修了したことを確認する。ダイバーがまだクイックレビューを修了していない場合には、クイックレビューを実施し、一緒に答え合わせをする。ReActivateクイックレビューはPADIプロサイトから各国語版をダウンロードできる。
 - b. 学習した事柄をダイバーが理解したかどうか確認し、まだ十分に理解していない場合には、マスターするまで復習させる。
 - c. 必要に応じて、PADI Open Water Diver Touchまたはマニュアルを使って補足説明をする。
2. ダイブスキル・リフレッシュの準備として、各ダイバーと事前に面談する。ダイバーのログブックがあればチェックし、経験本数を聞き、どのような保護スーツを着て潜ったか、使用したシリンダーのタイプ、ウエイトの重さなど、最後にダイビングしたときのことについて質問する。リフレッシュを受けたいと思った理由と、どのような結果を期待しているか聞く。それに基づいて、プログラムを処方的に実施する。たくさんのことを復習し、できるだけ多くのアドバイスが欲しいというダイバーもいれば、スキルに対する自信を取り戻すために、監督者付きでダイビングするだけでよいというダイバーもいる。
3. ダイバーの安心感のレベルとスキルを的確に評価するには、「PADIスキル練習とダイブ・プランニング・スレート」を使うことが推奨される。事前の面談のときに、各スキルに対してどの程度の安心感を持っているか示すようダイバーに言う。練習が必要だとダイバーが指し示したスキルを中心に、水中スキル・セッションを計画する。
4. 水中スキル・セッションのときには、「PADIスキル評価スレート」を使って参加者の達成度をメモするのが便利である。
5. ログをつけるようダイバーに指示し、サインする（デジタルログでない場合）。

水中スキルについての一般的注意事項

1. 人数などの運営条件に応じて、ReActivateの水中スキル・セッションを、それだけを目的とした限定水域またはオープンウォーター・ダイブとして実施することもできるし、一般のファンダイブに組み込んで実施することもできる。一般のファンダイブに組み込む場合には、グループにいるダイバー全員がインストラクター／ダイブマスター1名につき参加者8名という人数比にカウントされる。

2. ダイビングの準備をしている間、プレダイブ・プランニング、器材のセッティングと調整、プレダイブ・セーフティ・チェックをダイバーがどのように行なっているか、様子を観察する。必要に応じて、またはダイバーが聞いてきた場合にのみ、声をかけてアドバイスやデモンストレーションをする。
3. 詳しいプレダイブ・ブリーフィングを実施して、スキルと達成条件を説明する。観察した様子とダイバーからのリクエストに基づいて、一般的なダイブスキルについて処方的にアドバイスする。
4. ダイバーがリクエストしていなくても、復習と練習が必要だと思われるスキルがある場合には、追加して練習させることをためらう必要はない。

認定

1. 知識とスキルの復習を両方とも修了したPADI認定ダイバーには、PADIプロセッシング・センター（オンライン処理センター）を使って、ReActivateを受けた日付で新しいPADI認定カードの手続きを行なう。新しいカードには元の認定年月日も記載される。ダイバーが購入したReActivate製品に付いているReActivateコードを使う。このコードはダイバーのナレッジレビュー修了証にも記載されている。
2. ReActivateの日付は、スペシャルティ・ダイバー資格を含めて、それまでにダイバーが取得したPADI認定カードのどれにでも入れることができる。ただし、水中でのトレーニングを伴うコースでなければならない。例えば、PADI器材スペシャリストは該当しない。
3. どのカードに日付を入れるかは、ReActivate製品使用登録時にダイバーが選ぶ。手続きする前に、登録時に選んだカードでよいかどうかダイバーに再確認する。

ReActivateの他の用途

ジュニアダイバーのアップグレード

成人のPADI認定カードにアップグレードする前に、ReActivateを受けるようジュニアダイバーに勧める。知識とスキルを復習することができ、新しいカードにReActivateの日付が入る（元の認定年月日はそのまま）。

PADIスクーバ・ダイバーのアップグレード

PADIオープン・ウォーター・ダイバー認定へのアップグレードを希望するPADIスクーバ・ダイバーに、復習としてReActivate TouchまたはOnlineを修了するよう勧め、修了後、PADIスクーバ・ダイバー・コース・インストラクター・ガイドに記載されているオープン・ウォーター・ダイバーへのアップグレード手順に従ってトレーニングを実施する。

継続教育前評価

しばらくダイビングをしていなかったダイバー（または初めて担当するダイバー）がPADI継続教育コースへの参加を希望している場合には、まずReActivateプログラムを修了するよう勧める。ReActivateは、継続教育を受ける準備態勢が整っているかどうか評価するのに役立つ。

他団体の認定ダイバー

PADI以外の他団体を通じて認定されたダイバーのために、PADIプロサイト/トレーニング情報/カリキュラムにある指示に従う。

ディスカバー・スノーケリング 実施方法と推奨事項

注意: PADIインストラクター・マニュアルに、このプログラムの規準はリストされていない。

概要

スノーケリングは簡単で楽しく、しかもお金のかからないスポーツであり、年齢に関係なく、どこでもできる。その結果、スクーバよりスノーケリングに興味を持つ人のほうが多いのが実情である。このように潜在的な市場は巨大だが、スノーケラーが求めるサービスは、スクーバダイバーとは異なる。この市場で成功を収めるためには、なぜ人々がスノーケリングをしたがるかを理解し、彼らが水中世界を楽しむための体験や器材、サービスを提供することが大切である。

水中世界を観察する

人は水中世界を見るためにスノーケリングする。水中生物の図鑑、スレート、ビデオなどを使って水中で見かける動植物の名前を知れば、スノーケリングはますます楽しいものになる。

動植物の名前を知ること以外に、写真やビデオを撮影するのが好きだというスノーケラーも多い。スノーケリングで撮った写真やビデオを収集したり、人に見せたりすることで、幅広い多様な体験ができるようになる。浅い水中で宝探しをするのが好きなスノーケラーや、研究調査活動に参加しているスノーケラーもいる。海岸近くに沈んでいる沈船や、半分沈んでいる沈船などは、わくわくする体験である。夜のスノーケリングでは、ナイトダイバーが味わうのと同じスリルを味わうことができる。

海や潮だまり、内陸部の水路などに興味のある人にとって、スノーケリングは魅力的である。スノーケラーには環境への関心が高い自然志向の人が多く、水中環境の保護に取り組もうという姿勢を持っている。スノーケラーはProject AWAREの強力なサポーターとなり、ビーチや浅瀬のクリーンナップなどの活動に積極的に参加してくれることが期待できる。

簡単で最小限のリスク

スノーケリングをする人の大半は正式なトレーニングを受けていない人で、これからスノーケリングをしようという人も、プロによる指導には興味がない場合もあるだろう。水中スキルがほとんどない人でも、水の中でスノーケリングを楽しむことはできる。大半の人がアウトドアでスノーケリングを楽しむが、プールでのスノーケリングも楽しいものである。例えば、スポーツクラブや大学のフィットネスプログラムのひとつとして、スノーケリングを取り入れることもできる。

必ずしもスクーバを勧めるべきではない

スクーバ・ダイビングをする人は、スノーケラーにダイビングを勧めてしまう傾向がある。実際、スノーケリングを通じて初めて水中世界に触れたダイバーも多いので、スノーケリングの次にスクーバに進むのは自然なことに思えるのだろう。

しかし、スノーケリングをけなすようなやり方でスクーバを勧めると、せっかくスノーケリングをしにやってきたお客様を遠ざけてしまう危険性がある。スクーバはしたくないというスノーケラーもいるのである。ダイビングを試してみ、やっぱり自分にはスノーケリングのほうが向いていると思う人もいる。スノーケリングはダイビングの前座に過ぎないというような姿勢をとってはならない。

スノーケリングは十分に価値のある活動である。価値あるものとして尊重する姿勢でプロモーションすれば、お客様は満足し、リピーターとして戻ってくる可能性も高くなる。ときにはスクーバダイバーも、スノーケリングをして楽しみたいと思うものである。

スノーケリング、サブライド・エア・スノーケリング、スキンドайビングの違い

スノーケリングとは、マスクとスノーケルを使って楽に呼吸しながら、水面から水中を眺めることである。スノーケラーが使用する器材としては、他にフィン、浮力ベスト、保護スーツなどがあるが、状況によっては必要ない場合もある。スノーケラーは概して水面で浮いていることが多いが、水中世界をもっと間近に見るために潜ることもある。

サブライド・エア・スノーケリングでは、BCDに似た浮力器材を使用して、シリンダーからレギュレーターを通じて圧縮空気を呼吸する。マスク、フィン、スノーケリング用の圧縮空気ユニットを装着し、シリンダーから供給される空気を、レギュレーターを使って呼吸する。サブライド・エア・スノーケラーは保護スーツも着用することも多い。サブライド・エア・スノーケリング・ユニットを使用しているときは、水中に潜ることはできない。これは、ダイバー認定を受けていない人や、スクーバで潜りたくはないが、従来のスノーケリング器材よりこのユニットのほうが好きだという人にとって魅力的な選択肢である。参加者は5歳以上でなければならない。

スキンドайバーはマスク、スノーケル、フィン、浮力ベストを装着して、水面でスノーケルを行なうか、息を止めて水中に潜る。スキンドайバーは器材や浮力を調整でき、ダイビング中に圧平衡を行ない、スノーケルクリアを行なうことができる。一般にスキンドайバーはスノーケラーより冒険的な傾向があり、頻繁にサーフェスダイブを行なう。

ディスカバー・スノーケリングとPADIスキンドайバー・コースとの違い

PADIスキンドайバー・コースはカリキュラムが組まれたコースであり、特定の達成条件もある。生徒ダイバーは、サーフェスダイブ、圧平衡、浮上のテクニックを習得し、デモンストレーションしなければならない。コースを修了した生徒ダイバーは、PADIスキンドайバー認定を取得する。

一方、ディスカバー・スノーケリングはコースではなく体験型プログラムで、インストラクターの指導の下で実施されるツアーである。スノーケラーはディスカバー・スノーケリングのさまざまなツアーに何度でも参加できる。サーフェスダイブや圧平衡は、アドバイス程度に教えてもよいが、あくまでスノーケラー自身が望んだときに限る。

ディスカバー・スノーケリングの参加者がPADIスキンドайバー認定に興味を示すこともあるし、逆に示さないこともある。いずれにせよ、スノーケラーと認定スキンドайバーのどちらも、ディスカバー・スノーケリングに参加することができる。

ディスカバー・スノーケリングの実施方法とテクニックについての推奨事項

ディスカバー・スノーケリングツアーの引率

ディスカバー・スノーケリングは体験型のプログラムなので、インストラクターの主な仕事はディスカバー・スノーケリングツアーの引率である。インストラクターには、プログラムの内容を各参加者のニーズに合わせることを求められる。

以下のガイドラインを使用する:

1. 他のPADIコースやプログラムと同様に、スノーケリングツアーの計画、準備、引率にあたっては、ダイバーの安全が最優先事項である。
2. 可能であれば、前もってディスカバー・ザ・アンダーウォーター・ワールドのビデオを見て、器材の基本的な使い方、水中の安全、水中生物、スノーケリングエリアなどについて学習しておいてもらう。
3. 見所、水中生物、コンディション、危険などについて、参加者に概略を説明する:
 - スノーケリングでできること
 - 水中生物のウォッチング
 - 写真撮影
 - 探検
 - 環境を大切にする (繊細な水中生物を傷つけない方法)
 - 地域活動
4. 必要に応じてガイダンス (スノーケリングについてのアドバイス) を行ない、以下の各点について教える:
 - マスクのくもり止め
 - マスクとフィンの調節
 - フィンを使って泳ぐ
 - スノーケルで呼吸する
 - エントリーとエキジット - 手順と方法
 - 水の中で楽に気持ちよく過ごす
 - スノーケルとマスクから水を外に出す

ディスカバー・ローカル・ダイビング

実施方法と推奨事項

概要

ディスカバー・ローカル・ダイビングは見慣れない水中生物や環境にダイバーの目を向けるように計画された監督付き水中ツアーです。また、ReActivateプログラムと組み合わせて使用することで、ダイビングの活動期間から遠ざかっていたダイバーをオープンウォーター環境に再度慣れさせることもできます。ダイバーは、自宅に近いダイビングサイトの新しい側面を発見したり、ダイビング休暇中に地元エリアへのオリエンテーションを受けることもできます。提供されているガイダンスを聞くことにより、参加者はさまざまな水中環境を快適に探索し、関心のあるアイテムを見つけたり、潜在的な危険を回避することもできます。

ディスカバー・ローカル・ダイビングはガイド付きレクリエーションスクーバダイビング*とは異なります。それは以下のような異なる特性を持つ環境をダイバーに紹介するように計画された専用のPADIプログラムだからです：

1. 物理的性質 (温度、水の動き、塩分、周囲の光と視界)
2. 生物地理学 (サンゴの生態系、ケルプの生態系、砂底など)
3. 地形 (壁、海底の峡谷、ピナクルなど)
4. 人工水生構造物 (栈橋、レック、大型水槽など)

地域の状況、危険性、関心のある場所について学ぶことに加えて、ダイバーは水中生物についての情報や地域の環境と責任を持って対話する方法についての情報を得ます。

総合的アドバイス

1. ダイバーにPADI Release of Liability/Assumption of Risk/Non-agency Acknowledgment Form-免責同意書 (またはEU版) (日本の場合はPADIコースの危険の告知書) を完成させる。
2. 現地の状況、手順、テクニックに焦点を当てた徹底的なブリーフィングを実施する。
3. ブリーフィングで説明した特徴や水中生物を指摘しながらダイビングのガイドをする。
4. 観察しあったことについて話し合いながら、デブリーフィングを行なう。
5. ダイバーにディスカバー・ローカル・ダイビングのダイブとしてログ付けさせる。

注意: ディスカバー・ローカル・ダイビングはダイビングの意図や提供されるガイダンスのレベルについてダイバーを混乱させることを避けるために、単純なガイド付きダイビングとは違う。

講習テクニック

一般的注意事項



PADI[®]

一般的注意事項

以下の項目はアルファベット順に記載されている。

知識、スキル、準備を評価する

生徒ダイバーのトレーニングを終了させ、知識とスキルの評価を行なった後に、認定ダイバーをPADIコースに受け入れることができる。この評価はダイバーの準備が整っているかを判断する。予備知識の欠如や基礎スキルが達成されていない場合、ダイバーはトレーニングを続ける前に達成を確実にするために改善が必要である。

知識の評価にはこれらのツールが使用できる:

- PADI ReActivate TouchまたはOnline
- PADIスクーバ・チューンナップ・ガイドブック
- PADIオープン・ウォーター・ダイバー・コース・クイズ
- PADIオープン・ウォーター・ダイバー・コース・ファイナル・エグザム
- PADIオープン・ウォーター・ダイバー・オンライン・クイックレビュー

スキル評価は、規範的スキル評価としてReActivate水中スキル・セッションを実施するか、スキルを見直すためのガイドとしてPADIスキル評価スレート、もしくはオープン・ウォーター・ダイバー・コース限定水域キュー・カードを使用して行なうことができる。委託されたダイバーもしくは認定前のダイバーは、すでに限定水域で学んだスキルのみを復習できる。

環境保護

Project AWAREの「10 Tips for Divers to Protect the Ocean Planet (海の惑星を守るためのダイバーとしての10のマナー)」を守り、生徒ダイバーにも奨励し、スキルをマスターすることと責任あるダイビング習慣を守ることを結び付ける。さまざまなPADIコースを通じてダイバーが新しいスクーバスキルを学び習得する中で、常にスクーバダイバーと環境保護に対する責任を関連付けて考えさせるようにする。

ドライスーツの使い方

ドライスーツを使ったことのない生徒ダイバーには、オープン・ウォーターでドライスーツを使用する前に、その使い方のオリエンテーションを行なう。生徒ダイバーはオリエンテーションで、ドライスーツに慣れ、スキルを練習し、トラブルを未然に防ぐことができるようになる。以下のスキルを練習する:

1. ドライスーツの着方と脱ぎ方 (必要な場合のみ助けを借りる)。
2. ドライスーツ、インナー (必要な場合)、フル器材を装着して、水面で浮力チェックを行なう。
3. 中性浮力をデモンストレーションする。
4. 足に余分な気体がたまっている状態から体勢を戻すテクニックをデモンストレーションする。
5. 水中で、ドライスーツの給気バルブから中圧ホースを外し、再び接続する。
6. 通常の浮上速度で水底から中性浮力で浮上する (1分間に18メートル/60フィート以下の速度)。
7. 水面で、スクーバユニットとウエイト・システムの両方を脱着する。

エンリッチド・エアの使用

PADIエンリッチド・エア・ダイバー・コースはいくつかの実用的なアプリケーションとノンダイブの達成条件の理論をベースとしているので、他のPADIコースと並行して教えてもよい。認定されたエンリッチド・エア・ダイバーはPADI継続教育トレーニング・ダイブ中にエンリッチド・エアを使用することができる。

オープン・ウォーター・ダイバー・コースへのリンク – PADIエンリッチド・エア・ダイバー・コースの知識開発、プレダイブ・シミュレーション、実践応用練習は、コース中いつでも実施できる。参加前生徒ダイバーの最低年齢は12歳。オープン・ウォーター・ダイバーの生徒ダイバーは、エンリッチド・エア・ダイバー・コース終了後にエンリッチド・エアをオープン・ウォーター・ダイブ4で使用することができる。あなたの生徒ダイバーは、エンリッチド・エア・ダイバー・コース・ダイブ1を、オープン・ウォーター・ダイブ4の一部として行なうことができる。これは、監督下でダイバーがエンリッチド・エア・ダイブを計画し、実践的な経験をしながらオープン・ウォーター・ダイバー・コース・ダイブ4の達成条件を満たすことができる。

アドヴァンسد・オープン・ウォーター・ダイバー・コースへのリンク – PADIエンリッチド・エア・ダイバー・コースの知識開発、プレダイブ・シミュレーション、実践応用練習は、コース中いつでも実施できる。参加前生徒ダイバーの最低年齢は12歳。ダイバーは、エンリッチド・エア・ダイバー・コース終了後にエンリッチド・エアをアドベンチャー・ダイブで使用することができる。エンリッチド・エア・アドベンチャー・ダイブのためのクレジットを獲得するには、ダイバーが別のアドベンチャー・ダイブと組み合わせられていないエンリッチド・エア・アドベンチャー・ダイブを修了する必要がある。

器材に関する注意事項

指導と監督中にダイバーは様々な種類と構成の器材を使用することができる。これは、ダイバーがサイドマウント・シリンダー、リブリーザーやフルフェイス・マスクまで、異なるバックアップ空気源の仕様の幅が広がる。

講習中、あなたの生徒ダイバーの器材の機能がテクニックの変化についていけるか、コースの達成条件を満たすために使われているか、判断するために役立つ方法を理解することが重要である。これはダイビングの緊急時の管理を効率よく行なえることになる。

ダイバーやツアーを監督する場合、器材の基本的な使い方を理解しておくと便利である。器材の知識が緊急時の対応の準備に役立つ。

それはバディ同士、お互いの器材に慣れる事も重要である。これはプレダイブ・セーフティ・チェック中に起こる;しかしそれは、より複雑な器材構成への対応と、いくつかの異なった話し合いが必要となる場合がある。

様々な器材のタイプや構成について、もう少し学びたい場合は、PADIサイドマウント・ダイバーやPADIリブリーザー・ダイバーなどの適切なPADIコースを受講する。PADIプロサイトでメーカーやリソースの情報を得ることができる。

トレーニングの中断

コースをスタートした生徒ダイバーが、仕事、家族、学校、旅行など何らかの理由で中断し、その後トレーニングの再開を希望する場合には、以下のポイントを考慮する。

同じインストラクターでトレーニングを再開する場合には、期限はない。また、チームティーチングを行なっていて、生徒ダイバーの記録がきちんと残っている場合には、同じダイブセンター/リゾートでトレーニングを続行できる。トレーニングの中断期間が12ヶ月より長い場合には、免責同意書、PADI病歴/診断書、安全潜水実施了解声明書を含めて、改めて各種書類に必要事項を記入してもらう。

生徒ダイバーが、別の場所で別のインストラクターとトレーニングを再開することを希望する場合には、委託照会手続きを適用することになる。手続きは、コース、中断期間の長さ、前のインストラクターから委託照会書類が入手できるか否かによって異なる。例えば、2回のアドベンチャー・ダイブを修了し、ログに記録してあるダイバーは、残りのアドベンチャー・ダイブのコースに申し込むだけで、アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー認定へ向けて、どのインストラクターとでもトレーニングを再開することができる（委託照会書類なし）。一方、オープン・ウォーター・ダイバー・コースの生徒ダイバーの場合は、どのコース部分をいつ修了したかが明確に記載されている委託照会書類が必要である。

生徒ダイバーが中断後にトレーニングを再開する場合には、続行する準備ができていのかどうか必ず評価する。中断するまでに学習した知識とスキルを復習し、必要に応じて補習する。

ナレッジレビュー

ナレッジレビューは、PADI教育モデルの主要な構成要素である。ナレッジレビューが入っているダイバー用マニュアル（またはオンライン／マルチメディアバージョン）は、すべての主要PADIコースと多くのスペシャルティ・コースの必要教材になっている。コースマニュアルが必修になっていて、生徒ダイバーに理解できる言葉に翻訳されたものがある場合には、生徒ダイバーはナレッジレビューを修了しなければならない。

生徒ダイバーと一緒にナレッジレビューの答え合わせをし、必要であれば処方的レッスンガイドなどを使って内容を明確に説明し、質問に答える。実際にトレーニングを実施する場所を念頭に置いて具体的なアドバイスをする。内容を理解したことを証明する生徒ダイバー声明書に署名させる。ナレッジレビューの答え合わせをして修了したことを各生徒ダイバーのトレーニングレコードに記録し、生徒ダイバーの署名が入ったナレッジレビューのコピーをスチューデント・レコード・ホルダーに保管する。

学習障害

学習障害とは、多岐にわたる障害を包括する広義の用語である。一般的に言って、学習障害のある人は、読む、書く、文字、論理的思考、記憶、情報をまとめることなどにある程度の困難を示す。学習障害のある人には、平均的、あるいは平均以上の知能があるが、情報を受ける、処理する、記憶する、対応するのが困難であるため、自分の学習障害を補う方法を知らない限り、学問的に人より秀でることはない。

学習障害の診断を受けている生徒ダイバーが申し込んできた場合、PADI規準は学習障害者を手助けするための配慮をすることを認めている。特殊な設備を必要とする生徒ダイバーの場合には、学習障害の診断を受けているという診断書を医療関係者（医師、精神分析医など）から出してもらうように言う。この診断書は、生徒ダイバーのスチューデント・レコード・ホルダーに保管しておく。どのような学習方法がうまくいくか調べ、それに合わせて指導方法を調整する。

生徒ダイバーが自分で試験問題と解答を読めるほうがよいが、必要であれば、補読器の使用を許可する、声に出して試験問題を読むことを許可する、誰かに問題を読んでもらうことを許可するなど、特別な配慮をしてもよい。客観性を保ちながら、生徒ダイバーが質問と解答を明瞭に理解できるような試験環境を整えることが目的である。

ダイブのログ付け

コースの必要条件を満たすダイブとして数えるには、オープンウォーターで行なわれたものでなければならず、ダイブのデータ（日付、時間、場所、深度、プロフィールなど）をダイバーのログブックに記録する必要がある。インストラクターがそのページに署名して日付を記入し、すべての達成条件を修了したことを証明する。トレーニングを証明する手段として、署名の代わりにゴム印、ハンコ、シールなどを生徒ダイバーのログブックに使用することはできない。

生徒ダイバーがダイブの必修スキルを一部しか修了できなかった場合には、コース限定のログページではなく、通常のログページにダイブを記録させてもよい。こうすることにより、生徒ダイバーはすべてのダイブをログに記録することができる一方で、すべての必要条件を満たすまで、トレーニング・ダイブに対するクレジットを間違えて受けてしまうことがなくなる。

PADIレスキュー・ダイバー・コースの場合には、オープンウォーターでの2回のレスキューシナリオもダイブとしてログに記録させる。これらのダイブは、PADIダイブマスターとインストラクター認定に必要な最小限ダイブ本数に数えることができる。

連署

PADIインストラクターの指示の下でPADIアシスタント・インストラクターがピーク・パフォーマンス・ボイアンシー・コースを教える場合は、インストラクターはすべての達成条件が満たされていることを確認した後、生徒ダイバーのログブック／トレーニングレコードに連署しなければならない。ピーク・パフォーマンス・ボイアンシー・ダイブがアドベンチャー・ダイバー認定またはアドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー認定に必要な最後のダイブだった場合には、ログブックに連署したインストラクターが生徒ダイバーを認定する。

PADIダイブマスターまたはアシスタント・インストラクター (PADIデジタル・アンダーウォーター・フォトグラファー・スペシャルティ・インストラクター資格を有する) がデジタル・アンダーウォーター・フォトグラファー・スペシャルティ・コースを実施する場合は、PADIデジタル・アンダーウォーター・フォトグラファー・スペシャルティ・インストラクターの認定を受けているPADIインストラクターが、すべての達成条件が満たされていることを確認した後、生徒ダイバーのログブック／トレーニングレコードに連署しなければならない。ダイブ2がアドベンチャー・ダイバー認定またはアドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー認定に必要な最後のダイブだった場合には、ログブックに連署したインストラクターが生徒ダイバーを認定する。

ダイビングに適した健康

生徒ダイバーは水中活動を伴うPADIコース／経験を開始する前に、PADI病歴／診断書 (RSTCメディカル・フォーム) を読み、必要事項を記入し、署名しなければならない。生徒ダイバーが質問表の項目にひとつでも「Yes」と答えた場合には、水中活動をスタートする前に、医師から文書による承認を得なければならない。一部の国では、医師の承認を得ることが生徒ダイバー全員に義務付けられている。詳細は国によって異なるため、慣れない地域で指導活動をスタートするときには、PADIオフィスに確認する必要がある。

健康状態についての質問は医師の専門分野である。生徒ダイバーが医師の場合には、自分で自分のPADI病歴／診断書に署名する、あるいは自分自身に許可を出すことはできない。医師の承認があったとしても、誰をスクーバコースに受け入れるかについての最終的な決定する権利はインストラクターの側にある。希望者全員を受け入れなければならないという義務はない。

注意: 病歴に関する質問表が入っている継続教育専用書式は、PADIアドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー、レスキュー・ダイバー、マスター・スクーバ・ダイバー、スペシャルティ・ダイバー・コースを含めて、12ヶ月以内に受けたすべての継続教育コースをカバーする。

新しいPADI病歴／診断書

PADIコースに申し込んだ生徒ダイバーが、その後病気になったり、ケガをしたりした場合には、新たにPADI病歴書に必要事項を記入し、病歴の変更を書類に記録しておかななければならない。健康状態が一時的に変っただけなら、新たに病歴書に記入したり、健康診断を受けるまでの必要がない場合もある。病歴書の質問を使って、生徒ダイバーの健康状態が変わったことで、新たに別の項目が「Yes」になるかどうかを見る。いずれかの項目が「Yes」になった場合には、水中トレーニングを再開する前に、ダイビングをしてもよいかどうか医師の承認を受けなければならない。

生徒ダイバーが次のコースに申し込み、PADI病歴／診断書のいずれかの項目に「Yes」と答えた場合には、以前にPADI病歴／診断書に記入してから健康状態が変わった場合のみ、医師の承認を得る必要がある。同じ「Yes」に対して過去1年以内に医師の承認を得ている場合には、新たに承認を得る必要はない。しかし、新たに別の項目に「Yes」と答えた場合や、承認を得てから1年以上経過している場合には、水中活動をスタートする前に、医師の承認を得なければならない。

身体障害

ダイビングに必要な運動能力が阻害される身体的な障害を持っている生徒ダイバーがいる。スキルによっては達成条件を満たすのは困難かもしれないが、適応性のあるテクニックを用い、無理のない便宜を図ることにより、身体障害者がダイビングのスキルを習得し、ダイビングを楽しむ手助けをすることができる。

本人が希望し、ダイビング業界およびダイビング医学を専門とする医師によって定められたスクリーニングガイドラインを満たせるのであれば、スクーバ・ダイビングに関心を持っている人なら誰でも歓迎するというのが全体的なアプローチである。医師の承認があれば、障害ではなくダイビングしたいという本人の希望に焦点を絞ることにより、多種多様な障害者をトレーニングすることは可能である。

規準そのものを変えることはできないが、さまざまな方法を駆使して、生徒ダイバーが達成条件を満たせるよう手助けすることができる。規準を満たす無理のない独創的な方法を工夫するのがよい。詳細について学びたい場合は、PADI アダプティブ・テクニック・スペシャルティ・コースを修了する。

また、PADIシステムに設定されている各種のオプションを検討する。例えば、オープン・ウォーター・ダイバー・コースの達成条件を部分的にしか満たすことができない場合には、PADIスクーバ・ダイバー認定であれば取得できるかもしれない。ディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムも選択肢のひとつで、慎重にきめ細かく管理されたダイビング体験になる。PADIシールチーム・プログラムも成人の身体障害者や高齢者に対応でき、管理の行き届いた体験を通じて、水中を楽しんでみたいという希望を満たすことができる。達成可能な無理のない目標を設定することにより、運動機能の制限に対処し、持っている能力を最大限に活用する方法を習得する手助けをすることができる。希望する人なら誰にでもスクーバを手ほどきするのに必要な選択肢は用意されている。

情報

多くの国に、差別から障害者を守る法律が存在している。障害がある人は受け入れないという選択をするのであれば、それは、スノーケリングやダイビング活動から障害者を不当に締め出すという方針の下での選択であってはならない。

障害者を歓迎し、コースに受け入れるのであれば、能力に基づいて特別な配慮をすること以外に、ダイビングに伴う一般的なリスクを告知するという責任がある。すべての達成条件が満たされない限り、参加しただけでは認定は取得できないということを、コース参加者全員にきちんと伝えることが大切である。

すべてのコースに言えることだが、コースを開始する前に、費用とサービスの内容を生徒ダイバーに明確に伝える。追加セッション、特殊器材、手話通訳など特別な手配が必要になることが予想される場合には、すべての項目をきちんと書き出し、事前に同意を得ておく。すべてのコースで生徒ダイバー全員にサービス方針を配布し、同意を得る必要がある。

たいいていの場合、通常のコースの中で障害者ダイバーに対応できるが、障害者に必要とされる追加項目がすべて入った特別トレーニングパッケージを作ることを検討してもよい。

健康上の配慮

脊柱を損傷した人は体温調節機能が正常に働かない場合があり、低体温症や熱中症になりやすい。暑い日は、日よけ、水スプレーボトル、濡れタオルとうちわなどを用意して熱中症を予防する。身体が冷えすぎるのを防ぐには、例え熱帯の気候でも、身体にきちんと合った保護スーツを着用させる。エントリーしたらすぐに活動を開始するようにする。

身体の機能障害によって血流が減少している人は、治癒能力が低下しているため、ちょっとした打撲や切り傷でも治るのに何ヶ月もかかり、悪ければ入院という事態になってしまうこともある。そのため、プールやビーチにいるときや、ダイビングボートに乗っているときには、障害者に必ず、保護スーツ、運動靴、ブーツ、ズボンなど身体を保護するものを着用させる。可能であれば、プールサイドやボートのステップにパッドを当て、さらに保護するのがよい。

変更

標準的なダイビング器材は多くの人に対応できるが、身体障害を補うために、ちょっとした変更が必要な場合もある。例えば、手足がない人の場合は、保温と保護のために、ウェットスーツの不必要な部分はカットして縫い合わせておいたほうがよい。足が動かないダイバーの場合は、水かきのついた手袋を使ったほうが効率的に泳げる。右手または左手が使えないダイバーの場合は、ゲージ類やホースの位置を入れ替えて、動くほうの手で使えるようにする。視力が弱いダイバーの場合は、ゲージの文字を読むように、マスクに虫メガネを取り付ける。

足が動かない人の場合は、浅い場所で立っていることができないかもしれない。限定水域セッションでは、ブロック、踏み台、プラスチック製の椅子など、身体を支えるものを使って対応するのがよい。

アシスト

身体を自由に動かせない参加者の場合は、プール、限定水域、あるいはオープンウォーターのポイントにエントリー／エキジットするときに、アシストが必要である。楽にエントリー／エキジットできるよう、認定アシスタントを使って、車椅子、杖、松葉杖などを配備し、必要に応じて身体を持ち上げたり、支えたりする。

身体を持ち上げるときには、必ず正しい方法を用いなければならない。両足を開いて安定した体勢をとる。一方の足をやや前にしてバランスを維持し、持ち上げるときの安定した足場を作る。必要であれば、足を動かして安定させ、背中を真っ直ぐにして自然の湾曲を維持し、持ち上げるときに身体をひねらないよう注意する。楽に持ち上げられる以上の力が要求されるときには、絶対に無理をしてはならない。必要であれば、手助けを呼ぶ。

委託照会

委託照会元

知識開発セッション、限定水域ダイブ、あるいはオープンウォーター・ダイブなどコースの一部のみ修了したダイバーが、別の場所でトレーニングを継続することを希望する場合は、別のPADIインストラクターへ委託照会を受け、そこで残りの認定条件を修了することができる。委託照会された生徒ダイバーを受け入れるPADIインストラクターは、生徒ダイバーに次のトレーニングステップに進む準備ができていないことを確認しなければならない。

委託照会の手続きでは、まず、修了済みのトレーニングを記録した委託照会レコードを生徒ダイバーに発行する。この書類には、各セッションの修了日を記載し、インストラクターの署名が入っていないなければならない。受け入れ側のインストラクターのところで改めて医師の許可を取らなくてもすむように、必要事項が記入されている生徒ダイバーの病歴書(医師の許可)のコピーを添付する。

委託照会を受けた生徒ダイバーは、PADI規準、トレーニング方法、あるいは手順についてほとんど知識がないということ考慮に入れておくことが重要である。ダイバーは、委託照会元のインストラクターと受け入れ側のインストラクターを信頼し、トレーニングを修了するための手続きをとってくれるものと思っている。

委託照会レコードの有効期間は、最後のトレーニング修了日から12ヶ月間である。ただし、委託照会を受けたダイバーはできるだけ早くトレーニングを修了することが望ましい。生徒ダイバーがコースの新しいセグメントを終了させるか、以前のトレーニングセグメントを繰り返し行なうか、ダイバーの継続教育の知識とスキルの評価を行なうことで、委託照会をさらに12ヶ月延長することができる。ダイバーがセグメントや知識とスキルの評価を終了するごとに、さらにそこから期限は12ヶ月延長する。

トレーニングを引き継ぐダイブセンター／リゾート選びについて生徒ダイバーにアドバイスし、出発前に必要な手配を整える。質問がある場合や問題が発生した場合に備えて、選んだダイブセンター／リゾートに自分の連絡先を伝える。フォローアップとして、認定を取得したら知らせられるよう生徒ダイバーに伝える。そうすることで、生徒ダイバーにお祝いを言い、継続教育や各種ダイビングサービスについての話をするチャンスが生まれる。

受け入れ側

委託照会の生徒ダイバーを受け入れる場合には、委託照会書類の内容を確認し、生徒ダイバーに事務手続きの書類に必要事項を記入してもらい、署名させる。生徒ダイバーのスキル、水中での安定度、ダイビングについての知識を評価する。必要であれば、オープンウォーター・ダイブの前に補習を行なう。

生徒ダイバーが達成条件をすべて満たしていることを確認しなければならない。オープン・ウォーター・ダイバー・コースやダイブマスター・コースなど一部のコースでは、水中能力評価、ダイブ・フレキシブル・スキル、あるいは実習をトレーニング中のさまざまなタイミングで実施してもよいことになっているため、生徒ダイバーの委託照会書類を入念にチェックし、生徒ダイバーがすべてのスキルをきちんと修了するよう準備を整える。

最後のオープンウォーター・トレーニングを終えたら、PIC(またはオンライン)または申請書をPADIオフィスへ提出する。生徒ダイバーが自分のところでトレーニングを修了できない場合には、修了したトレーニング部分を委託照会レコードに記録し、生徒ダイバーを別のPADIインストラクターに委託照会する。

他の認定団体からエントリー・レベルのダイバーを受け入れる

PADIではない認定団体でトレーニング(知識開発と限定水域)をスタートしたエントリー・レベルの生徒ダイバーについては、以下の手続きに従って受け入れることができる:

- 委託照会書類をチェックして、生徒ダイバーがエントリー・レベルのスクーバコースの知識およびスキル開発部分を修了していることを確認する。
- 生徒ダイバーが水中能力評価を修了していることを確認する(200メートル/ヤード水泳またはマスク、フィン、スノーケルを使用して300メートル/ヤード泳ぐ、10分間の立泳ぎ)。
- 委託照会書類に記載されているトレーニング修了日から12ヶ月以上たっていないことを確認する。
- 生徒ダイバーは事務手続きの書類に必要事項を記入する。
- 生徒ダイバーはReActivateクイックリビューもしくはオープン・ウォーター・ダイバー・コース・ファイナル・エグザムを修了し、オープンウォーター・トレーニング・ダイブの準備として、オープン・ウォーター・ダイバー・コースのスキルの復習を限定水域で行なう。オープンウォーター・ダイブの前に、ダイバーの知識とスキルを必要に応じて修正する。オープンウォーター・ダイブを開始する前に、必要に応じて知識とスキルの補習を行なう。
- 4回のオープンウォーター・ダイブを実施する。
- PIC(封筒またはオンライン)をPADIへ送付し、生徒ダイバーの委託照会書類と事務手続きの書類を保管する。

シグナルチューブ(水面マーカーブイ)

フロートとダイブフラッグを引っ張りながらダイビングする、あるいは水中で膨らませるシグナルチューブを使用するのが一般的な場所では、PADIオープン・ウォーター・ダイバー・コースのダイブ4か、その他のPADIコースやプログラムのトレーニング・ダイブで、この器材の使用方法を紹介することが推奨される。

シグナルチューブやマーカーブイを引っ張ってダイビングする場合には、必要に応じてすぐに放せるよう、リールを手で持つよう生徒ダイバーに注意する。ダイビング器材に結び付けてはいけない。またラインをピンと張った状態に保ち、緩まないように注意することで、絡まってしまうトラブルを防止することができる。

シグナルチューブを使用するときには、以下の手順に従って、12メートル/40フィートより浅い深度から静止状態で打ち上げる:

1. ダイビング前にスキルについて生徒ダイバーに説明し、エントリーする前に岸(またはボートの上)で使用手順を復習するようアドバイスする。
2. 水温や透視度を含めてコンディションを評価し、オクトパスを使う、オーラルで吹き込む、別の専用シリンダーを使うなど、シグナルチューブを打ち上げるのに適した方法を選択する。
3. ダイバーに練習させる前に、シグナルチューブの打ち上げ方をデモンストレーションする。
4. フロートを打ち上げるダイバーを直接監督する。

講習テクニック

準備



PADI[®]

準備

以下の項目はアルファベット順に記載されている。

認定アシスタント

認定アシスタントは、グループコントロールの維持と生徒ダイバーの監督をアシストする役割を担う。運営手配をサポートし、ビーチやボートでの活動を取りまとめる。認定アシスタントの手助けなしにPADIコースを教えることはできるが、認定アシスタントがいたほうが仕事になるだけでなく、全体を効率的にコントロールでき、緊急事態にすばやく対処できるようになる。特に、誰もダイバーを見ていない状態にできないエクスペリエンス・プログラムやエントリー・レベルのコースでは、認定アシスタントの存在が重要である。

認定アシスタントを最大限に活用するには:

- 生徒ダイバーに聞かれたときに答えられるよう、ダイビングエリアにある各種施設の場所などに関する情報も含めて、ダイビング中の各自の役割について、徹底的にブリーフィングする。ファースト・エイドキット、酸素ユニット、AED、電話／無線など、緊急器材の保管場所と使い方を知っているかどうか確認する。認定アシスタントは、予備の器材やウエイトなどを置いてある場所も知っていなければならない。
- ダイビング前、ダイビング中、ダイビング後に、生徒ダイバーにどの程度のアシストやアドバイスをすべきか話し合う。
- 予定されている活動の順序と、水中での各自の位置について確認する。
- 練習時間を増やすために、認定アシスタントに生徒ダイバーの練習を見守らせる。生徒ダイバーがインストラクターの前でスキルをパフォーマンスした後、さらに繰り返し練習するのをアシスタントに監督させる。

PADIスペシャルティ・ダイバー・コースのトレーニングで認定アシスタントを使う場合、アシスタントがそのスペシャルティ資格を持っていることは必要条件ではないが、特にアイス、カバーン、レックといったような上級のスペシャルティ・コースでは、資格を持っていることが強く推奨される。

コースのリンク

あるPADIプログラムを別のプログラムにリンクさせることは、ダイバーに継続教育をプロモーションするのに大いに役立つ。次のレベルのコースやトレーニングの一部を体験することで、続けようというモチベーションが高まる。コースをうまくリンクさせるには、計画と準備が必要である。リンクのオプションについては、PADIインストラクター・マニュアルに入っている「一般規準と手続き」の「書類と事務手続き」セクションに詳しいリストが載っている。以下の点を参考に計画と準備を行なう:

ディスカバー・スクーバ・ダイビングからオープン・ウォーター・ダイバーへ – ディスカバー・スクーバ・ダイビング参加者がオープン・ウォーター・ダイバー・コースに関心を持っているように思われる場合には、限定水域の時間を増やす。ディスカバー・スクーバ・ダイビング・プログラムを規準通りに実施し、参加者が水中を泳ぎ回って楽しんだ後、オープン・ウォーター・ダイバー・コースの限定水域ダイブ1のスキルを教えるという提案をする。参加者が限定水域ダイブ1のスキルをすべてマスターしたら、オープンウォーター・ダイブ1も実施してよい。こうすることで、参加者はオープン・ウォーター・ダイバー・コースの必要条件に向けて、両方のダイブ修了のクレジットを受けることができる。知識開発を修了するための便利な手段として、オープン・ウォーター・ダイバー・コース・オンラインをプロモーションする。

オープン・ウォーター・ダイバーからアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバーへ – 生徒ダイバーがオープン・ウォーター・ダイバー・コースのダイブ4を修了したら、その日の3回目のトレーニング・ダイブとして、アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー・コースからアドベンチャー・ダイブをひとつ選んで実施し、生徒ダイバーを楽しませる。このダイブは、アドベンチャー・ダイバーまたはアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー認定と該当するスペシャルティへ向けてのクレジットになることを説明する。

注意: ダイブ4と同じ日に行なったアドベンチャー・ダイブは、オープン・ウォーター・ダイバー・コースの事務手続き書類でカバーされる。アドベンチャー・ダイブを実施する予定の場合には、生徒ダイバーが書類に記入して署名する際に、そのことを説明しておいたほうがよい。

オープン・ウォーター・ダイバーからスペシャルティ・ダイバー、さらにアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバーへ – オープン・ウォーター・ダイバー・コースと同時に、スペシャルティ・ダイバー・コースを実施することができる(そのスペシャルティ・ダイバー・コースのインストラクター資格を持っていることを条件とする)。実施できるコースはPADIインストラクター・マニュアルにリストされている。アドベンチャー・ダイブとしてカウントされるのは、4回の必修オープン・ウォーター・ダイブ後に実施されたスペシャルティのダイブ2である。これにより、スペシャルティ・ダイバー認定を取得しただけでなく、アドベンチャー・ダイバーまたはアドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバー認定へ向けて、ダイブ1回のクレジットも得たことを生徒ダイバーに説明する。

マルチレベル・トレーニング

マルチレベル・トレーニングとは、異なる種類のコースを同じ日に同じ場所で開催する方法である。インストラクター、認定アシスタント、生徒ダイバーの全員が、ダイブセンター／リゾート、限定水域ダイブを実施する場所、あるいはオープン・ウォーター・エリアに集合するので、極めて効率的に運営できる。また、ダイバー同士が交流し、次のレベルのコースについて見聞きする機会になるので、継続教育をプロモーションするのに格好の手段となる。

全員の時間を最大限に有効活用し、各コースのニーズを満たせるよう、入念にスケジュールを組む。この方法は、複数のインストラクターと認定アシスタントがいたほうがうまく行く。

まず、ダイブセンター／リゾートで各コースのオリエンテーション・セッションを同じ時間帯に開催するというスケジュールを立てる。全員に向けて歓迎の言葉を述べ、施設について説明する。最初に全員で事務手続きの書類に記入し、次に各コースに分かれて、それぞれのプログラムについての説明を受ける。インストラクターまたは認定アシスタントが各グループを取りまとめ、オリエンテーションを完了する。

最後に1ヶ所に全員を集めて、ダイバーとスタッフが交流する時間を作り、生徒ダイバー同士を紹介する。そうすることにより、ダイバー同士で同じ経験を分かち合い、インストラクターが特にプロモーションしなくても、互いに他のコースについて聞くことができる。

大きなプールや限定水域エリアを使用でき、複数のインストラクターがいるのであれば、ディスカバー・スクーバ・ダイビング、オープン・ウォーター・ダイバー、ReActivate、アドヴァンスド・オープン・ウォーター・ダイバーとスペシャルティ・ダイバー・コース(実践応用セッション)、レスキュー・ダイバーとダイブマスター候補生を含めて、複数のコースを同じ時間帯に実施するというスケジュールを組むことができる。

限定水域エリアが小さい場合、あるいはインストラクターが1人しかいない場合には、15分ずつスケジュールを重複させて、最初のコースが終わってグループが水から出ようとしているときに、別のコースのグループが水に入る準備をしているという形になるようにする。入れ替えのときに、ダイバー同士が交流する時間を作る。

マルチレベル・トレーニングは、ダイバーが他のコースのさまざまな側面を実際に見ることのできるオープン・ウォーターのダイビングエリアで実施するのがベストである。まず、当日の全員のスケジュールを計画することからスタートする。各活動の開始と終了予定時間をリストしたスケジュール表を認定アシスタントに渡す。各ダイバーが当日に必要な情報のみを記したダイバー用のスケジュール表も作る。

サンプルスケジュールについて、以下の点に留意する:

- バディチームのダイブマスター候補生は、インストラクターの直接的な監督なしで地図作成実習を修了できる。
- 飲み物やお菓子、ランチを食べながら交流する機会を設けている。
- 午後は、ランチが終わる頃に、スペシャルティの生徒ダイバーまたはアドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー・コースの生徒ダイバーが到着するようにする。
- ピーク・パフォーマンス・ボイアンシー・スペシャルティを実施するには、3人目のインストラクターまたはPADIアシスタント・インストラクターが必要である。
- 遅れが生じる場合もあるが、全体を概観して調整することができる。

シグナルチューブ (水面マーカースイ)

- 7:00 am – スタッフミーティングと現場のセッティング
 - 7:30 am – ダイブマスター候補生到着
 - 7:45 am – ダイブマスター候補生が地図作成実習の準備をする
 - 8:00 am – オープン・ウォーターとレスキュー・ダイバーが到着
 - 8:15 am – 全員にダイビングエリアのブリーフィング
 - 8:30 am – ダイブマスター候補生がエントリーし、レスキュー・ダイバーがトレーニングセッションを開始
 - 8:45 am – オープン・ウォーター・ダイバーがエントリー
 - 9:30 am – 全員が最初のダイブを終了
 - 10:00 am – お菓子を出す
 - 10:15 am – 2回目のダイブのコースブリーフィング
 - 10:30 am – 2回目のダイブを開始
 - 11:30 am – 全員が2回目のダイブを終了
 - 12:15 pm – デブリーフィングとログ付け
 - 12:30 pm – ピクニックランチ
 - 1:00 pm – スペシャルティの生徒ダイバーが到着
 - 1:15 pm – スペシャルティ・ダイバーのブリーフィング
 - 1:30 pm – スペシャルティ・ダイバーがエントリー
 - 1:45 pm – オープン・ウォーター・ダイバーのスキンダイブをアシストするダイブマスター候補生のブリーフィング
 - 2:00 pm – オープン・ウォーターとレスキュー・ダイバーのブリーフィング
 - 2:15 pm – 3回目のダイブを開始
 - 2:30 pm – スペシャルティ・ダイバーがダイブを終了
 - 3:00 pm – その他全員が終了
 - 3:15 pm – 午後のお菓子を出す
 - 3:30 pm – スペシャルティ・ダイバーのブリーフィング
 - 3:45 pm – スペシャルティ・ダイバーが2回目のダイブを開始
 - 4:00 pm – オープン・ウォーター、レスキュー、ダイブマスター候補生のデブリーフィングとログ付け
- 注:** 午後7時にナイト・ダイバー・コースの生徒ダイバーがエントリーするので、見に来よう誘う。
- 4:30 pm – スペシャルティ・ダイバーがダイブを終了
 - 5:00 pm – デブリーフィングとログ付け

理念と アプローチ



PADI[®]

PADIの使命

目的

PADIは、世界各地でのレクリエーション・スクーバとスノーケル・ダイビングに対する一般の人々の関心を高め、期待に沿うプログラム開発に取り組むことを目的として存在している。

スローガン

PADI – *The Way the World Learns to Dive.*®

ビジョン

PADIは、スクーバ・ダイビングのプロフェッショナルと熱心な愛好者の教育的な開発における世界のリーダーとなることをめざす。

使命

世界中のより多くの人たちにスクーバ・ダイビングを教えて、その素晴らしさと楽しさを知ってもらおう。

Who is PADI?

PADI (Professional Association of Diving Instructors) は世界最大のレクリエーション・ダイビング・メンバーシップ組織である。メンバーは、ダイブ・ショップ、リゾート施設、教育機関、インストラクター・トレーナー、ダイビング教育者、ダイバー、スノーケラー、その他のウォータースポーツ・ファンなどで構成されている。プロフェッショナルPADIメンバー (ダイブセンター、リゾート、教育施設、インストラクター、アシスタント・インストラクター、およびダイブマスター) は、世界のレクリエーション・ダイバーの大多数を指導しており、認定証の発行枚数は毎年90万近くに達している。PADIのプロフェッショナルは、大勢の人がアンダーウォーター・アドベンチャーを手軽に楽しめるようにする一方で、ダイビング・トレーニング、安全性、顧客サービスに対し、業界で最高のレベルを保っている。

PADIは国際的な規模の組織で、オーストラリア、カナダ、スイス、日本、イギリス、および米国にサービス・オフィスがある。本部であるPADIワールドワイドは米国カリフォルニア州にある。PADIリージョナル・ヘッドクォーター (地域のオフィス) は、世界183以上の国と地域で135,000人を超える数の個人プロフェッショナル・メンバーと、6,100を超える数のダイブセンターおよびリゾートにサービスを提供している。また、世界中のダイバーのニーズに答えて、PADI教材は数なくとも24カ国語に翻訳されている。

PADIワールドワイドは、PADIメンバーやダイビング業界に各種サービスを提供している企業や財団とも提携している。企業の提携先としては、ツアー・サービスを行なっているPADIトラベル・ネットワーク、教育やプロモーション用の製品やプログラムを開発しているダイビング・サイエンス・アンド・テクノロジー (DSAT) 社、海洋科学教育プログラムを開発し発行するカレント・パブリッシング社、CPRとファースト・エイドの指導団体であるエマージェンシー・ファースト・レスポンス社がある。Project AWARE財団とPADI財団はPADIによって設立された非営利団体で、助成金プログラムなどを通じて環境や教育活動を支援する。

PADIの価値

リーダーシップ

我々が関わっているビジネスのあらゆる側面、製品の設計および開発、レクリエーション・スクーバ・ダイバー、インストラクター、リテイルおよびリゾート・オペレーター、トレーニング、ダイビングの安全と教育の分野でプロフェッショナル・メンバー（インストラクター、アシスタント・インストラクター、ダイブマスター、リテイル施設、リゾート）に提供する各種サポートおよびサービス、水中環境に関する教育と保護、スクーバ・ダイビングの冒険性を世界的規模でマーケティングすることにおける経営実績、そしてあらゆるレベルでのスキル開発において、世界クラスのリーダーであることをめざす。

誠実

私達は約束を守り、私達の行動について個人として責任を負い、最高レベルの倫理基準に基づいて行動し、信頼と尊敬の念をもってすべての人に接する。

チーム

我々は、国際的に多様なメンバーとスタッフの能力、長所、そして物事の見方を尊重する。我々のチームは、意思決定に関わる権限をスタッフに与え、あらゆるレベルでリーダーシップのスキルを育成する参加型の職場を促進する。社内のあらゆるレベルで、協力的な努力を奨励し続ける。

クオリティ

我々は最高レベルのクオリティと効率性を達成するために、何事にも適正かつ正確に取り組んでいることを誇りとする。レクリエーション・ダイビングのトレーニングと教育における世界第一位の組織になるべく、あらゆる行動において継続的な質の向上に向けて努力する。

顧客の満足と維持

私達が成功するには、常にお客様に満足頂き、メンバーやダイバーの気持ちをつなぎ止めておくことが不可欠である。お客様が何を欲しがっているかを理解し、その期待に完璧に沿うことによってトータルな顧客の満足を達成する。

環境

私達は水中環境の将来のために、あらゆる活動を通してその保護に積極的に取り組む。

水中文化遺産

未来の世代のダイバーやノンダイバーのために、水中文化遺産を保護することを明言する。

核となる力

最高の顧客サービスと知識

私達は充実した顧客サービスを行ない、優れたプログラムや商品を開発しているPADIの人材こそが私達の強さであり競争力であると認識している。市場のニーズに耳を傾け、その期待を上回る努力をすることを誇りとするものである。

国際的なプログラムの統合性

私達は、多種多様な文化、風習、習慣、言語などを取り入れながら、PADIダイバー教育システムを開発し、首尾一貫した最新技術のアプローチにより世界中の国や地域に広めることを継続的に取り組んでいる。世界中にあるPADIオフィスは、極めて質の高い教材、出版物、サポート・サービスを、信頼性の高い首尾一貫した方式でメンバーに提供している。

他にはない教育的有効性

PADIの各コースは、アメリカ教育審議会 (ACE) によってそれぞれ個別に評価され、大学単位と同等として承認されている。PADIの教育コースは、ACEの承認を得た最初のダイバー指導プログラムである。ACEの認可はPADIの各コースの教育的有効性を確認するものとして、我々はこれを誇りにしている。PADIの認定を得たダイバー全員が、この特典を受ける資格を有する。PADIの各コースは、世界の他の教育組織からも同様の承認を得ている。なぜPADIがこの承認を得た最初の指導団体なのか、違いの分かるダイバーならきっとわかるだろう。

多様なプロフェッショナル・メンバー

183以上の国と地域で135,000以上のプロフェッショナル・メンバーが活動しており、PADIのインストラクターは、民族的、文化的、人種的に世界で最も多様なダイビング教育者のグループである。つまり、ダイバー教育を受けたいと思っている消費者は、自分の国で自分と同じ文化的背景を持ち、自分と同じ言葉話すインストラクターからPADIコースを受けられる可能性が高いということである。我々はPADIのプロフェッショナル・ダイビング教育者と、国際的に一貫性があり、多様かつ文化的に適合したPADIの指導システムを誇りに思うものである。

PADIの環境とコミュニティへの保護

PADIのプロフェッショナルたちは、1966年以来水中世界の不思議な光景を人々に紹介し続け、それ以来、PADIは、組織が世界的な利益のためになるということより深い目的のために成長し続けてきた。PADIインストラクターは人々をダイバーになるように誘い、水中世界への愛を教え、彼らの生活を永遠に変える。一緒に、ダイビングのプロフェッショナルとダイバーのPADIネットワークは彼らのコミュニティと環境のために前向きな変化を推進するために位置づけられている。PADIのグローバルネットワークを駆使し、PADIは海が抱える重要な問題と我々の生活品質の改善に大きな影響を与えることを目標としている。PADIファミリーは、世界で最高の存在であるために献身的に活動している。

PADIの保護に向けての柱

PADIは企業の社会的責任プログラムである変化へ向けての4本の柱を通して、グローバルな取り組みを支援し、変化の促進剤になることを約束し、社会的・環境保護のブランド活動のプラットフォームとして機能し、PADIにとって有効的な持続可能プログラムを開発する重要なステップと言える。PADI組織は、ダイビングコミュニティや環境に影響を与える重大な問題に積極的に取り組むことを誓約し、PADIダイバーにも同じことをするよう求める。

海の健康の柱: PADIはより多くの海洋保護区 (MPAs) の設立を支援する組織と、海洋ゴミなど、地球の未来を脅かす問題の解決に取り込む組織とパートナーシップを結んでいる。また、これからもProject AWAREと共に海洋ゴミの回収に取り組み、Dive Against DebrisなどのProject AWAREスペシャルティ・コース及びプログラムを通して、ダイバーを動員していく。

海洋生物保護の柱: サメやマンタの保護の声を広め、人々の海の問題に対する意識を高めることで、生物多様性保護を後押しする。Project AWAREのサメとマンタの保護に関する取り組みを支援し、ダイバーがAWAREサメの保護スペシャルティ・コースに参加することを推奨する。

人とコミュニティの柱: 世界最大のスクーバ・ダイビング教育機関として、ダイビング・インフラストラクチャーとダイバーの教育に力を注ぎ、持続可能を優先した考え方を育み、地域社会の発展を促進する。持続可能性へ取り組んでいる地元の団体と、地元の成長と繁栄を促進するインフラの構築を支援する。

癒しと健康の柱: 逆境、病気、苦難を克服し、ダイビングの癒しの力を証する素晴らしいストーリーを伝える。PADIはもっと多くの人に精神的及び身体的に、同様な変化と癒しをもたらす影響を与えることを目指している。多くの人がダイビングによって未来への希望を見出している。



PADIの果たすべき任務

教育・探検・コミュニティ・保護

教育

ダイバー教育のリーダーとして認められているPADI組織は、最良のダイバー・トレーニング教材を開発し、それらをPADIダイブセンター、リゾートおよびプロフェッショナルの世界的ネットワークに提供することを約束する。それらは、順番に、世界で最も人気のあるダイバー認定を提供し、人々が私達の水の惑星を自信を持ってそして有益に探検できるようにする。

PADI地域本部は、PADIプログラムを実施して販売するあらゆる種類の教材、トレーニング教材、販促資料および表彰資料を会員に提供する。これらの教材は、最先端の技術と学習理論を使用して質の高い製品を製造され、教育の専門家と教育デザイナーによって開発されている。

生徒ダイバーがPADIコースを修了すると、PADIダイバーであることを証明する認定カードを受け取れる。教材と認定カードに加えて、PADI地域本部は、現在の指導方法と手順で相談サービスを提供することによって、メンバーの指導努力を支援する。

PADIダイバー教育システムは達成ベースで、スキル、安全関連情報、地域の環境知識を段階的に生徒に紹介する革新的なトレーニングで構成されている。PADIコースは生徒中心で、最大限の実践と応用を提供する。生徒ダイバーは自習方式で基本を学び、そして次に達成条件が習得されるまで彼らのインストラクターによる追加の開発を通して学習する。目標は、できるだけ早く生徒ダイバーを水中に連れて行き、彼らのダイビング能力に自信をつけるのに必要な指示を生徒に提供することである。

教育的に有効で卓越した品質のPADIコースおよび教材は、国際的な教育および職業訓練施設によって独自に承認されている。PADIコースはISOに準拠していると認定されており、WRSTC (World Recreational Scuba Training Council) の基準を満たすか、それを超えている。

PADIのエントリー・レベルのスクーバ認定はオープン・ウォーター・ダイバーである。一度認定されると、ダイバーはアドヴァンスド・オープン・ウォーター、スペシャルティ、そしてレスキュー・ダイバーになることで彼らの教育を続けることができる。ダイブマスター・コースやアシスタント・インストラクター・コースなどのさらなるトレーニングにより、興味のあるダイバーがダイビング・リーダーになることができる。

認定を受ける前に、興味のある人はディスカバー・スクーバ・ダイビングプログラムを通してスクーバ・ダイビングを試すことができる。オープン・ウォーター・ダイバー・コースを受けるには年齢が達しない、または未成年の子供は、バブルメーカーまたはPADIシールチームのプログラムを通じてダイビングを体験できる。ディスカバー・スノーケリングやPADIスキンドイバー・コースは、若者や、スノーケリング器材を使って水中の世界を眺めるのを好む人のためのオプションでもある。

すべてのダイバーは、特に活動しない時期でも、自分の状態を最新の状態に保ち、知識とスキルを更新することを勧める。PADI ReActivateプログラムは、ダイバーが水中に戻る準備をするために最適なアップデートの方法である。

PADIフリーダイバー・プログラムは息ごらえをして行なうダイビングで、アドヴァンスド・フリーダイバーとマスター・フリーダイバーに進むこともできる。

PADI TecRecコースでは、ダイバーにレクリエーション・ダイビングの限界を超えてダイビングするために必要なテクニックやスキルを教える。豊富なコースにより、水中での探検の機会を広げるための追加のリスクトレーニング、およびコミットメントを受け入れなければならない。

PADIパブリック・セーフティ・ダイバー・プログラムは、レスキュー、リカバリー、水中捜査などの水中サービスを提供するために地元当局と協力するようダイバーを訓練する。この特別なトレーニングは、パブリック・セーフティ・ダイバーが仕事で必要とするかもしれない技術的スキルを教える。

生涯にわたるキャリアのための数多くの機会を探求したいダイバーは、PADIオープン・ウォーター・スクーバ・インストラクター、PADIフリーダイバー・インストラクター、エマージェンシー・ファースト・レスポンス・インストラクター、PADIパブリック・セーフティ・ダイバー・インストラクターおよび/またはPADI TecRecインストラクターになることができる。

PADIインストラクター開発プログラムは、スクーバ・インストラクター・トレーニングの基準となる。包括的なカリキュラムを通して、ダイビング・リーダーは監督スキルを強化し、PADIコースを教えることを学ぶ。新しいPADIインストラクターは、それぞれPADIインストラクター試験(IE)中に特定の評価基準を満たすことによって、PADIシステムについての十分な知識とPADIプログラムを実施する能力を実証している。PADIインストラクター開発プログラムは、資格のあるPADIコース・ディレクターのみが実施できる。コース・ディレクターは、インストラクター開発プログラムの実施においてトレーニングを受け、経験を積んだ経験豊富なマスター・インストラクターである。PADIインストラクター試験は、認定されているPADIスタッフによって行なわれる。認定されたPADIスタッフのみがIEを実施することで、評価プロセスは客観的、公正かつ一貫性のあるものになる。

すべてのPADIプログラムは、初級からインストラクターへのトレーニングを通じて、世界規模での一貫性と品質を維持するための厳しい教育基準に該当する。PADI地域本部は、PADIプログラムを監視し、それらがPADIの高い基準を満たしていることを確認するためにPADIダイバーを調査する専任部署とともに、品質保証に積極的に取り組んでいる。徹底した品質保証プロセスに対するこの取り組みは、ダイバーの安全性に貢献し、教育の誠実さを維持し、継続的に顧客満足度を高める。

探検

地球の70%以上が水で覆われており、無限の可能性を冒険にもたらす。PADIダイバーは、水中での発見のための無限の機会が待っている最後のフロンティアを探検するパスポートを持っている。

PADIトレーニングは探検と冒険への欲求を満たす。PADIメンバーが提供するユニークなダイビングサービスは、彼らが水中を見学するのに必要な道具を使い、何百万ものダイバーを準備させる。

この探検を促進するために、誰もがダイビング情報のハブとなるPADIのウェブサイトを訪ねることをお勧めする。このサイトへの訪問者は、今後のイベントやコースの説明から、ダイビング旅行やダイビングサイト先など、さまざまな情報を見つけることができる。彼らはまた、PADIダイバーやプロフェッショナルとしての役割を通して世界を変えることに熱心に取り組んでいる個人についてそれぞれのPADIの物語からインスピレーションを得ることができる。

PADIのウェブサイトにはリンクされているのはPADIトラベル™で、これはPADIメンバーとダイバーが専門のサポートを受けながらオンラインのダイビング旅行予約サービスにアクセスできるようにする究極の旅行サイトである。旅行は常に本質的にダイビングを通じた探検と冒険に結びついており、そしてPADIの世界的な旅行サイトは何百ものダイビング旅行を提供することによってこの関係を強化する。PADIトラベルが世界で最高のものになるという使命の一環として、PADIトラベルはダイバーに新しい場所への挑戦を促し、ダイバーとして活動し続け、そして最終的には世界の海洋資源の保護にもっと集中するようになる。

コミュニティ

コミュニティ構築プログラムはPADIを市場で差別化し、PADIを最も人気のある認定にするために不可欠で、なぜなら、それらは世界で最大かつ最も活発な部類と専門家の部類を結び付けるからである。ダイバーとPADIメンバーの関わりを保つことで、誰もが好きなことをやり続けることができる。

PADIアンバサ・ダイバー™プログラムは、水中の世界を探検し、保護し、体験するために情熱を追求し、夢を追いかけるために、より多くの人々を刺激することによって、グローバルコミュニティでのダイビングを高める。各アンバサ・ダイバーは、それぞれの分野で優れており、ダイビングを始めたり、ダイビングを続けたり、ダイビングを教えるよう他の人にやる気を起こさせるブランドの代表である。それらはPADIの価値を表し、PADIファミリーにダイバー、海洋支持者、探検家を迎えるのを助ける。

PADIブログには、最新のPADIのニュースとダイビング関連の記事が含まれている。PADIのさまざまな非常に魅力的なソーシャルメディアは何百万ものファンを魅了し、それはPADIダイバーとプロがダイビングと水中の世界を探求することへの情熱を話しながら写真、ビデオを共有することを通して相互作用することを可能にする。

PADIの出版物は、重要な潜水問題、安全性、トレーニングのテクニック、そしてビジネス情報に関してPADIメンバーを最新に保つ。アンダーシージャーナル(ダイビング業界のプロ向けの刊行物)には、ダイバーの教育、安全基準、ダイビングの販売、旅行、業界ニュース、科学、環境に関する情報が掲載されている。

PADIメンバーはまた、PADI地域本部から、トレーニングや教育の問題について最新の情報を得ることができる。Surface Interval eニュースレター、PADIダイブセンターとリゾートのニーズに特化した情報などの特別なニュースレターを受け取る。

トレーニング・ブルティンとトレーニング・ブルティンLIVE! ウェビナーは、トレーニングの提案や要件、およびPADIのコースやプログラムに対する重要な変更に関して、メンバーに最新情報を提供する。

PADIメンバーが貴重な時間を節約し、効果的な教育者であるために必要なツールを見つけるのを助けるために、PADIのプロサイトはトレーニングの最新情報、ダイビングのビジネスを提供するオンライン情報ハブの役割があり、マーケティングツールと一緒にウェビナーやフォーラム、PADIダイブセンターやリゾートの求人掲示板も掲載されている。

PADIメンバーが個人的にも職業的にも成長するのを支援するために、PADI地域本部は、さまざまな教育、マーケティング、およびリスク・マネジメントのトピックをカバーするセミナーを毎年実施する。セールストレーニングおよび事業開発プログラムも提供されている。毎年PADIスタッフは、地域の問題について話し合い、ダイビングの現在の傾向に関する情報を参加者に提供するために、地域セミナーやメンバーフォーラムに参加している。PADIリージョナルマネージャーはPADIダイブセンターとリゾートを訪問して、販売、商品化、マーケティングおよびスタッフトレーニングに関してメンバーと相談する。小売業者およびリゾート運営者はまた、PADIリテイル&リゾートアソシエーションを通じてさまざまなビジネスサービスにアクセスできる。

PADIメンバーとして、個人でもダイビング事業でも、職業上の責任および他のいくつかの種類の事業保険を取得することができる。PADI地域本部は、PADIメンバーおよびダイビング全般に影響を与える法的、保険および立法上の問題に取り組む専門家スタッフを配置している。PADIスタッフは国内外のダイブコミュニティの最低限のトレーニング規準の開発にも関わっている。法律顧問の援助と他のグループとの交流により、PADI組織は地域社会において、メンバーとダイバーの利益を代表する。

保護

PADIは環境保護に長年取り組んでいる。PADIダイバー教育では、コース提供やProject AWAREなどの組織との連携を通じて、絶滅危惧種の海洋生物や繊細な水生生物を保護するための行動を起こすようダイバーに促す。

世界で最高になるためには、PADI組織は社会的および環境的責任を奨励する世界的なプログラムの実施を通して変化のための触媒でなければならない。

海洋の健康と保護の取り組みを支援するために、PADIは伝説の海洋学者Dr. Sylvia Earleが率いるミッションブルーと正式なパートナーシップを結んでいる。ミッションブルーは、海の健康に欠かせない特別な場所であるホープスポットの保護に対する国民の支持を築いている同盟である。もう1つのパートナーシップは、ゴーストギアとして知られている漁具の紛失や放棄の問題を解決するために活動している世界的な同盟であるグローバルゴーストギアイニシアチブ(GGGI)とのものである。GGGIはゴーストギアの量を減らし、それを分解してリサイクルし、そしてそれに絡まった動物を救助するために働いている。

何千人ものプロフェッショナル・メンバーと何百万人ものダイバーがいるPADIは、水中環境を守る力を増している。ダイバーに情報を与えることによって、多くの人は目に見える方法で彼らが気にする原因に巻き込まれることを知る。ダイバーの声は、壊れやすく、脅かされている海の住民のために大きくすることができる。

PADIコースでは、ダイバーは壊れやすい水生生態系を保護することの重要性を学び、保全活動に参加するよう奨励されている。この持続可能な考え方を促進することは、行動を起こすように促されている海洋管理者のプールを増やすのに役立つ。海洋への情熱を共有することで行動を促し、水の惑星に良い影響を与えている組織とのパートナーシップを築くことができる。

Project AWAREの努力とプログラムを支持して、PADIダイバーは運動に参加して、きれいで健康的な海洋惑星のためにあらゆるダイビングをカウントするよう促す。Project AWAREのウェブサイト - projectaware.org - は彼らの環境への焦点、成果と行動を概説している。

PADIダイバー教育システム

PADIシステムは、ディスカバー・スクーバ・ダイビングなどのイントロダクトリー・プログラムからダイブマスターなどのリーダーシップ・レベルのトレーニングまで、様々な体験プログラムや認定コース向けのカリキュラムやトレーニング教材をメンバーに提供している。PADIスペシャルティ・インストラクターは、ダイバーが各々の興味の対象をより深く追求することを目的とした各種のコースを開催することができる。エマージェンシー・ファースト・レスポンス・インストラクターの資格を有するPADIメンバーは、応急手当の基本的スキルを学びたいダイバーや一般の人を対象に、CPRとファースト・エイドのコースを開催できる。

PADIプログラムは達成ベースであるため、生徒ダイバーは自分のペースで進むことができる。生徒ダイバーはPADIの自習用教材を使ってダイバー・トレーニングを開始し、その後はインストラクターのガイダンスの下で学習を続ける。PADIプログラムは有効性と指導の一貫性が広く認められており、世界各国で大学および専門学校の単位として推奨されている。

以下は、資格を有するPADIメンバーが開催できるプログラムのリストである:

- エマージェンシー・ファースト・レスポンス
 - ディスカバー・スノーケリング
 - PADIシールチーム
 - バブルメーカー
 - ディスカバー・スクーバ・ダイビング
 - ディスカバー・ローカル・ダイビング
 - ReActivate
 - スキンダイバー
 - PADIスクーバダイバー
 - オープン・ウォーター・ダイバー
 - アドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー
 - レスキュー・ダイバー
 - マスター・スクーバ・ダイバー&デディケイテッド・マスター・スクーバ・ダイバー
 - ダイブマスター
 - アシスタント・インストラクター
 - インストラクター
 - マスター・スクーバ・ダイバー・トレーナー
 - IDCスタッフ・インストラクター
 - スペシャルティ・インストラクター
 - EFRインストラクター
 - Tec Rec
 - ガス・ブレンダー
 - トライミックス・ブレンダー
 - Tec 40
 - Tec 45
 - Tec 50
 - Tec 65
 - Tecトライミックス
 - リブリーザー・ダイバー
 - アドバンスド・リブリーザー・ダイバー
 - Tecサイドマウント・ダイバー
 - Tec 40 CCR
 - Tec 60 CCR
 - Tec 100 CCR
 - ガス・ブレンダー・インストラクター
 - トライミックス・ブレンダー・インストラクター
 - リブリーザー・インストラクター
 - Tecサイドマウント・インストラクター
 - Tecインストラクター
 - Tecディーブ・インストラクター
 - Tecトライミックス・インストラクター
 - Tec 40 CCRインストラクター
 - Tec 60 CCRインストラクター
 - Tec 100 CCRインストラクター
 - Tecスペシャルティ・インストラクター
- PADIフリーダイバー
 - フリーダイバー&ベーシック・フリーダイバー
 - アドバンスド・フリーダイバー
 - マスター・フリーダイバー
 - フリーダイバー・インストラクター
 - アドバンスド・フリーダイバー・インストラクター
 - マスター・フリーダイバー・インストラクター
 - PADIパブリック・セーフティ・ダイバー
 - サーフェス・サポート・スペシャリスト
 - アンダーウォーター・クリミナル・インベスティゲーター
 - パブリック・セーフティ・ダイバー・インストラクター
 - スペシャルティ・ダイバー
 - アダプティブ・サポート・ダイバー
 - アダプティブ・テクニク
 - アルティチュード・ダイバー
 - AWARE Dive Against Debris®
 - AWARE サメの保護ダイバー
 - ボート・ダイバー
 - カバン・ダイバー
 - サンゴ礁の保護
 - ディーブ・ダイバー
 - ディレイドサーフェスマーカーブイ (DSMB)
 - デジタル・アンダーウォーター・フォトグラファー
 - ダイバー・プロパルジョン・ビークル (DPV)
 - ドリフト・ダイバー
 - ドライスーツ・ダイバー
 - エマージェンシー・オキシジェン・プロバイダー
 - エンリッチド・エア・ダイバー
 - 器材スペシャリスト
 - 魚の見分け方
 - フルフェイス・マスク
 - アイス・ダイバー
 - ナイト・ダイバー
 - ピーク・パフォーマンス・ボイヤンシー
 - Project AWAREスペシャリスト
 - サーチ&リカバリー・ダイバー
 - セルフ・リリアント
 - サイドマウント・ダイバー
 - アンダーウォーター・ナチュラリスト
 - アンダーウォーター・ナビゲーター
 - アンダーウォーター・フォトグラファー
 - アンダーウォーター・ビデオグラファー
 - レック・ダイバー
 - その他のスペシャルティ・ダイバー・コース

達成ベースの学習

PADIコースは、達成ベースの学習というコンセプトに基づいて設計されている。つまり、生徒ダイバーは学習目標を満たしていることをデモンストレーションしながらコースを進んでいく。各コースの学習目標は、単純なものから複雑なものへ進むという順序に配列されているため、生徒ダイバーは前に学習した事柄を基礎にして次の段階へ進むことができる。前段階の目標をマスターせずに次の目標を学習しようとするのは難しく、学習プロセスが複雑になり、進歩の妨げになる。そのため、生徒ダイバーは知識開発の学習目標と水中スキルの達成条件を、決まった順序で満たさなければならない。落ち着いてデモンストレーションできることが「マスター」ということである。

柔軟性

統合された指導システムを使うことの利点は、教育上の有効性を維持しながら、学習スタイル、個人的な好み、ニーズ、運営方法などに柔軟に対応できるという点である。かなり自由にコースを組み立てることができる。オプションとしては次のものがある:

1. ダイビングから始める。大半のPADIプログラムで、生徒ダイバーの指導を知識開発から始める必要はない。すぐに潜らせてよい。例え浅い限定水域だったとしても、それもダイビングである。そうすることにより、よりの確にダイビング活動に焦点を絞る。ダイビングから始めることで生徒ダイバーの気分が高揚し、モチベーションが高まる。熱意を持った生徒ダイバーは積極的に自習をし、集中心も高まり、楽しんでコースを受けるようになる。
2. 簡単な説明。PADIダイバー用教材とオンラインの学習オプションを使った自習が効果的なので、知識開発のレクチャーをする必要がない。レクチャーの代わりに、ナレッジレビューを復習し、クイズとエグザムを行なうことによって学習のレベルを判断することができる。詳しい説明が必要と思われる部分や、生徒ダイバーからもっと詳しく聞きたいという要望があった部分だけに焦点を絞って説明する。そうすることにより、身近なダイビング環境にスキルを応用する方法の説明にもっと時間を使えるようになり、器材の選び方やダイビングツアー計画など、他の興味の対象についてアドバイスをする時間ができる。
3. やり方は無限。自習が効果的な理由のひとつとして、学習のやり方は人によって異なるという点が上げられる。頻繁に休憩が必要な人もいれば、中断せずに集中したほうが効率的だという人もいる。自習はこういった違いに対応することができ、生徒ダイバーはより効果的に学習でき、より多くのことを学ぶことができる。また、インストラクターにも柔軟性が与えられ、ウィークエンド・コースなど独自のスケジュール作りが可能になる。指導システムである限り、ある程度の順序は設定されているが、順序の条件を満たしている限り、トレーニングの構成には多くの選択肢がある。
4. いくつものやり方。ある課題を達成するための方法がひとつしかないという状況はめったにないというのが基本的な考え方である。スキルのやり方に「これが絶対に正しい」という方法はなく、さまざまな方法で同じ目標に達成することができる。ほとんどのコースが、ダイバーの能力といったような、どのような方法が最も効果的かを判断する目安になる要素に基づいて、柔軟性のあるアプローチをとっている。スキル開発では、自分の長所を生かしながらさまざまな方法を試し、自分の限界を認識し、トラブルが生じた場合には、そのことを念頭において行動するようダイバーに奨励する。生徒ダイバーは、まず止まって、使える選択肢について考えてから、学習した事柄を応用することによって行動するということを学ぶ。

法的責任と リスク・マネージメント

概要

ダイビングのプロフェッショナルとして、自分の責任を理解し、どのようにリスク・マネージメントを行えば問題を回避できるか、あるいは最小限に抑えることができるかを知ることが重要である。コースを教える、アシストするなど、プロフェッショナルとして仕事をしているときに何か問題が起きるとは思っていないまでも、常に適切なリスク・マネージメント対策を講じるべきである。それは、プロフェッショナルであることの印である。しっかりとしたダイビングのリスク・マネージメントに備わっている姿勢、判断、テクニック、ツールは、事故の予防に役立つだけでなく、万一事故が起きた場合に、正当な行為を行なったことの証明となり、法的な保護になる。全般的に見て、しっかりとしたリスク・マネージメントは、自分が担当する生徒ダイバーやダイバーの安全を確保するためのベストの対策としての役割を果たす一方で、万一事故が起きた場合に、法的責任からの免責手段を提供してくれるものである。

しっかりとしたリスク・マネージメント対策を取ることが重要である理由は:

1. **ダイバーの安全確保** - これは、リスク・マネージメントが必要である第一の、そして最も重要な目的である。
2. **法的保護** - 最大限の努力をしたにもかかわらず問題が生じた場合に、リスク・マネージメントは法的保護において重要な役割を果たす。実績のある標準的なやり方に従い、自分の行動を文書に記録することにより、かなりのレベルの法的保護を確保することができる。
3. **保険継続** - ダイビングのプロフェッショナルには、信頼できる保険による保護が必要である。適切な保険に加入していることは、ダイビングのリスク管理の有効性に直接的に関連している。事故を予防して賠償問題を起こさないようにすることが、第一の、そして最も重要なステップである。第二が、訴訟になってしまった場合に、しっかりとした弁護により賠償要求の額を少なくすることである。
4. **広報活動とイメージのコントロール** - 産業としてのダイビングのさらなる発展は、責任を持ってプロフェッショナルなやり方で実施されていて、相応の安全実績のある活動というイメージが存続することに直接的に関連している。

自分の健康と安全

担当する生徒ダイバーの安全を確保するということは、プロフェッショナルとして自分自身の安全を確保することから始まる。PADIメンバーは職業として頻繁にダイビングをするため、減圧症にかかるなど、事故が起きる可能性は一般ダイバーより高いといえる。しかし、統計を見ると、ダイビングのプロフェッショナルが作務中に事故を起こす確率は非常に低いことがわかる。以下の方法にしたがってリスク・マネージメントを行ない、安全を確保する:

1. 1分間に18メートル/60フィート以下の浮上速度、あるいはダイブ・コンピューターがそれより遅い速度を指示している場合には、その速度を守る。トレーニング中、インストラクターは何度も浮上しなければならぬことが多いため、慎重であることが賢明である。
2. 複数回のダイビングをするときには、徐々に浅い深度になるようにする。
3. 他のPADIメンバーとチームで教える。
4. ダイブ・テーブルやダイブ・コンピューターの限度内、また自分自身の限度内で慎重なダイビングを心がける。

5. 自分の健康については、常識と慎重さと思慮分別をもって正しく判断する。ダイビングに適していない健康状態のときには、潜ってはいけない。
6. ダイバー保険に加入する。

どんな活動や職業でも危険は避けられないものだが、思慮分別を持ち、慎重であることによって、危険を最小限に抑え、管理することができるのである。

規準と指導システムの役割

規準と指導システムは、ダイビング教育に携わる者が効果的なコースやプログラムを計画し、実施するのに役立つ。また、法律上の危険を減らすのに役立つ。

規準

教育およびプロフェッショナル規準は、適度に思慮分別のあるダイビング・プロフェッショナルに求められる行為、つまり行動規範の大半を規定するものである。これらの規準を作る責任は、PADIおよびダイビング業界にあり、個人にあるものではない。一般に是認されている規準を守っていれば、自分の教え方を弁護する必要が生じた場合に、実績があって弁護できるやり方に従ったという根拠があるので、はるかに対応しやすくなる。反対に、規準から逸脱していると、個人としての行動が分別のあるものであったかどうか証明するという難題に責任の所在が移ってしまうため、教え方を弁護するのがかなり困難になってしまうのである。

指導システム

指導システムは、指導設計に対する責任からダイビングの教育者を解放するものである。コースやプログラムの内容および順序に対する責任はPADIにある。指導システムを用いていけば、教えた事柄の明確な証拠になる。つまり、PADIマニュアル、ビデオ、キューカード、インストラクター・ガイドなどに記述されている通りに、必要かつ適切な内容を生徒ダイバーに提示したということの証明になるのである。

また指導システムは、ひとつのトピック、特に安全に関連した情報を、生徒ダイバーに何回提示したかの証明にもなる。さらに、クイズ、エグザム、ナレッジレビューは、生徒ダイバーが内容を理解したということの証拠書類になる。指導システムの有効性と規準によって確立された体系を組み合わせることにより、教育の一貫性と生徒ダイバーへのリスク保護が改善されるだけでなく、ダイビング・プロフェッショナルが生徒ダイバーに対して行なう指導は、適度に思慮分別のある教育者としての指導であるということの証明になる。

実績のある有効な指導システムに従わなかった場合や、自分で作ったプログラムを使用した場合には、例え規準を守っていたとしても、教え方を弁護することが困難になる。能力のある「指導設計者」として行動することの信用が疑われることになるのである。内容を適切に提示し、繰り返し、生徒ダイバーが理解したことを複合的に証明するという各要素を結び付け、明確に確立できるのは、本物の指導システムだけである。

事務処理の役割 (書類作成)

各種の書式、ファイル、ログブックは、ダイビング・プロフェッショナルが規準を守り、指導システムを用いたことの証拠になる。事務処理はまた、様々な法律制度において、ダイビング・プロフェッショナルが適切に行動したことを証明するのに必要な証拠書類になる。

PADIコースやプログラムで生徒ダイバーまたは参加者が記入を義務付けられている各種の書類は、スクーバ・ダイビングに関連したリスクと必要条件を生徒ダイバーが理解したことを記録に残すものである。免責同意書（危険の告知書）は、生徒ダイバー／参加者がリスクを負うことについて理解し、インストラクターが免責されていることを確認する（日本ではスクーバ・ダイビングの危険性を伝えること）。PADI安全潜水実施了解声明書は、ダイバーが適切なダイビング方法を理解していることを確認する。PADI病歴／診断書は、健康状態に関連したリスクの可能性について生徒ダイバーに警告するもので、生徒ダイバー／参加者自身がそのリスクを負う、あるいはダイビングできる健康状態かどうか決定する責任を医師が負うことを確認する。

各生徒ダイバーの書類は、法令で定められた年数、または7年間のいずれか長いほうの期間に従って保管しなければならない。義務付けられているすべての書類を正しく用いなかった場合には、QAの対象になることに加えて、ダイビング教育者の教え方を弁護することが困難になる。

リスク・マネジメントにおける保険の役割

国によっては、ティーチング・ステータスのPADIインストラクターに専門職業責任保険への加入が義務付けられていない場合もあるが、加入することを勧める。同様に、大多数の国で、PADIアシスタント・インストラクターとダイブマスターに対しても、PADIエクスペリエンス・プログラムやPADIスキン・ダイバー・コースを実施するには、保険加入が条件となっている。認定アシスタントとして働く場合や、監督活動に従事するだけの場合でも、保険に加入することを勧める。PADIインストラクターが加入している専門職業責任保険は、認定アシスタントはカバーされない。

ダイバーのトレーニングや監督活動に従事するプロフェッショナル・メンバーは、どんなレベルでも、自分自身に保険をかけるべきである。また、指導や監督活動から引退した後も、前の生徒ダイバーやお客様が損害賠償請求を起こした場合に備えて、数年間は保険を続けることを考えるべきである（日本の場合は指導や監督活動を行なった時点で保険に加入していればよい）。

保険の種類は国によって様々だが、責任保険には多数のメリットがある。訴訟ということになると、勝訴しても多額の費用がかかるもので、責任保険はこの費用をカバーしてくれる。また、裁判で決定された賠償額を保険限度額までカバーする場合もある。

ダイバー傷害保険

ダイバー傷害保険は、エントリー・レベルのトレーニング（PADIディスカバー・スクーバ・ダイビングからオープン・ウォーター・ダイバー・コースまで）中に生じた事故をカバーする（一般的に日本の場合はコースの限定はない）。これらの保険は、ダイビングトレーニング中の事故をどこまでカバーするか、タイプによって異なる。耳のトラブルや骨折など、ダイビング関連の事故をすべてカバーするものもあれば、減圧障害だけしかカバーしないものもある。この保険に入っていれば、事故が起きて医療費が担保されるため、ケガをした生徒ダイバーは費用を取り戻すための支払請求をしなくて済む。

認定ダイバーを対象としたダイバー保険もある。この保険は、ダイビング事故に関連した医療費と搬送費を担保する。ダイバーがこの保険に入っていれば、医療費は担保されるため、損害賠償請求が起こされる確率は少なくなる（日本の場合はこの限りではない）。また訴訟になったとしても、費用は支払われていて、治療を受けたことによりケガの状態が長期に及ぶ可能性が低くなっている場合もあるため、損害賠償額が少なくなる可能性がある（日本の場合はこの限りではない）。保険の担保範囲は何段階もあり、テクニカル・ダイビングに従事するダイバー向けのものもある。

法的リスクとダイビング・プロフェッショナル

法的リスクとは、プロフェッショナルとしての行動あるいは過失によって引き起こされた損害に関し、賠償金の支払いを命じられる法律上の決定が下される可能性のことを言う。国によっては、法的リスクに民事だけでなく刑事上のリスクも含まれる。このリスクに関する状況および法律は、国や地域によって異なる。

大まかに言って、ダイビングのプロフェッショナルに対する法的リスクとは、生徒ダイバーやプログラム参加者を受け持っているときには、適度に思慮分別のある人間として行動しなければならないという義務から発生する。同様に、生徒ダイバーを適切に教えなければならないという義務から発生する。さらに、法令、業界規準、PADI規準といったような、プロフェッショナルとして実績のある確立された行動規範に従わなかったことから発生する。

法的リスクを減らすためのステップ

1. 根拠が確実で有効な指導システムにしたがう。
2. 規準や指導システムから逸脱しない。これが第一に事故が起きる確率を最小限に抑えることにつながり、それが最善のリスク・マネジメントになるのである。
3. 思慮分別を用いて正しい判断をする。コンディションがよくないときには、人数比を減らす、別の場所へ移動する、ダイビングを中止するなど、慎重な決定をする。
4. 以下の通りにすべての書類作成を行なう：
 - a. 免責同意書（危険の告知書）（免責同意書－EU版）－必ず水中トレーニングの前に署名しなければならない。
 - 各コースで同意書（危険の告知書）に記入する。－これは規準で義務付けられており、これによって書類が確実に最新のものになり、生徒ダイバーが、リスクを自分で負うつもりであることが確認される（日本の場合はリスクを参加者に認識させることに使用される）。免責同意書はまた、ダイブ・プロフェッショナルや企業を免責し、生徒ダイバーが特定のプログラムの責任を負う。リスクと責任に関する同意書のフォームは、生徒ダイバーがリスクを理解し、生徒ダイバー自身の過失による責任からダイブ・プロフェッショナルや企業を解放することを確立する。

例外： 継続教育専用書式は12ヶ月以内に受けた複数の継続教育コースに有効。

 - 生徒ダイバーに対し、個々のプログラムに関連した具体的なリスクを説明する。
 - 書類には必要事項をすべて記入し、免責される関係者全員の氏名を記載する。
 - 免責同意書（危険の告知書）の言い回しを変えてはならない。
 - b. 非代理人の公開および確認の同意書－水中トレーニングの前に署名する必要がある。（免責同意書（日本の場合はPADIコースの危険の告知書）に組み込むことができる。）
 - * PADIのダイバー・トレーニング・プログラムの規準はPADIが定めるものである。
 - * PADIメンバーがPADIの代理人、従業員、フランチャイズ加盟者であるという、一般人の間違った認識を受けることを避けることに役立つ。
 - * PADIメンバーは独立したプロフェッショナル・ビジネスとそのビジネス活動を行なう人々で、ダイバー活動の日常的な管理を担当することを明確にしている。
 - c. PADI病歴／診断書－水中トレーニングの前に生徒ダイバーが署名しなければならない（必要であれば、医師にも署名してもらう）。
 - 健康状態について生徒ダイバーが意見を求めたら、医師に聞くように言う。健康状態に関して生徒ダイバーにアドバイスしたり、意見を言ったりしてはいけない。

- 健康状態について心配な点があるかもしれないと言う生徒ダイバーには、水中トレーニングを開始する前に、必ず医師の許可を得てもらう。
- d. スチューデント・レコード・ホルダー – オープン・ウォーター・ダイバー・コースの場合は、知識開発、限定水域、オープンウォーターの各セッションを修了後、生徒ダイバーに名前のイニシャルと日付をそれぞれ該当する欄に記入させる。他のPADIコースの場合は、該当する欄に署名して日付を記入する。
 - e. クイズとエグザム – 各クイズで答えを間違えた問題を復習した後、生徒ダイバーに署名させ、間違えた問題にはイニシャルを記入させる。修了後、集めて他のスチューデント・レコード・ホルダーと一緒に保管する。
 - f. ナレッジレビュー – インストラクターが目を通した後、生徒ダイバーに署名させる。修了後、集めて他のスチューデント・レコードと一緒に保管するか、スチューデント・レコード・ホルダーに記録する。
 - g. ログブック – ログ付けされた生徒ダイバーのダイブとトレーニング・レコードに目を通し、規準で指示されている通りに署名する。自分自身の指導内容も書面で証明できるよう、自分のプロフェッショナル・ログを付け、限定水域およびオープンウォーターのウォータースキル・チェックリストに記入する。
 - h. 安全潜水実施了解声明書 – 各コースまたはプログラム専用の書式に必要事項を記入させ、署名させる。ほとんどのPADIマニュアルやログブックに生徒ダイバー用のコピーが入っている。
 - i. 親／保護者の許可が必要な場合には、必ず許可を得る。
5. 書類に使われている言い回しを変えたり、生徒ダイバーに変えることを許可してはならない。心配な点がある場合には、所属のPADIオフィスに問い合わせる。
 6. その他、自分自身を法的に守るのに必要な手段については、各地域の法律専門家に相談すること。

事故が起きた場合

適切な準備をして計画を立て、思慮分別を用いて正しい判断をすることが、リスクを減らし、トラブルを未然に防ぐ最も効果的な方法であるが、それでも時には事故が起きることがある。事故が起きた場合の手順を以下に示す：

1. 準備段階として、規準、法規、一般的なやり方などに従って、適切な装備を整える。
2. 事故あるいは緊急事態が生じたら、適切かつ徹底的な救急処置をすることが最優先事項である。事故者（および救助者）の安全を第一とする。必要であれば、できる限り急いで救急車などの手配をする。
3. 減圧症の疑いがあるダイビング事故の場合には、ダイバーズ・アラート・ネットワーク (DAN) やダイビング・エマージェンシー・サービス (DES) など、ダイビング関連の事故を扱う緊急サービスに連絡する。
4. 事故者にはいたわりをもって接するが、過失を認めるようなことを自発的に言うてはいけない。自分に非はないのかもしれないので、そう思い込む必要はない。
5. 事故者のダイビング器材が他の人の器材と混ざらないようにし、セッティング、残圧、レギュレーター、ゲージなど、器材がきちんと機能していたかどうかを誰かに確認してもらう。ただし、手を加えずにそのままにしておくこと。器材は洗わずに長期間保管しておいてもさしつかえなく、正しく機能していたかどうかについて後で詳しく調べることができる。当局から器材を提出するようにとの要請があったら、協力すること。
6. 時間、天候、うねり、波、流れ、水温、透視度などのコンディションをメモしておく。
7. 目撃者を探し、名前と連絡先をメモしておく。
8. 当局から事故について質問されたら、事実だけを述べ、意見や推測を言うのは控える。自分が言ったことについては、コピーをとっておくこと。報道関係者、当事者、当事者の代理人（家族）などに言明をする義務はない。この人たちに何かを言う必要があると感じるかもしれないが、そうしないほうがよい。
9. 現代は訴訟社会と言われており、事故が起きると損害賠償請求が起こされる可能性がある。そのため、訴訟になることを想定して、所属のPADIオフィス、保険会社、弁護士に連絡して、PADIダイビング事故報告書を提出する。報告書には事実だけを記述し、意見や推測は控える。ダイビング事故またはダイブ・オペレーション関連の事故を目撃した場合や、自分自身が事故に関わった場合には、水の中で起きた事故か水の外で起きた事故か、トレーニング関連の事故かレクリエーション関連の事故かに関わらず、また、たいして重大な事故のように見えない場合でも、ただちにPADIオフィスへ必ず報告書を提出する。報告書には次の事柄を記載する：
 - a. どんな活動の結果として事故に至ったか。
 - b. 時間経過をおった事故の状況。
 - c. 関わった人物が事故後に取った行動。
 - d. 人から聞いた情報を報告している場合には、人から聞いた情報であるという点を必ず明記する。
 - e. スチューデント・レコードや免責同意書（危険の告知書）など、関係がありそうな書類はすべて添付する。
 - f. 報告書と添付書類のコピーを自分用にとっておく。
 - g. 報告書は、PADIオフィスと、保険会社や弁護士などPADIオフィスが指定した相手にだけ提出する。ダイビング事故報告書は訴訟を想定して作成されたものである。

PADIに送られてきたダイビング事故報告書は、法律業務部で処理する。当事者のPADIメンバーがPADI公認の賠償責任保険に加入している場合には、法律業務部がメンバーの代理人として保険会社に連絡する。法律業務部はさらに、1) 報告書を受け取ったことを通知し、必要に応じて追加情報の提出を求め、2) 保険会社に全面的に協力するよう求め、3) 知らない人には誰にも情報を漏らさないよう当事者のメンバーにアドバイスするなどの対応策を取り、4) 報告書およびその他の文書を法務部に提出する。PADIメンバーがPADIの賠償責任保険に加入しているのならば、メンバーのために法務部から保険会社に書類が送られる。

トレーニング関連の事故の場合には、クオリティ・マネージメント部も報告書を調査し、PADI規準を守っていたかどうかを確認する。必要であれば、当事者のメンバーに詳しい説明を求めるなど、適当と思われる措置をとる。死亡事故の場合には、事故の状況に関してPADIが行なう調査が終了するまで、PADIインストラクターのステータスはノンティーチングに変更される。

PADI公認の保険を扱っている保険会社は、メンバーの補償範囲を決定した後、場合によっては、弁護士や調査員を雇い、メンバーの代理人として法律関係の書状に返答し、メンバーの責任範囲と他の関係者の責任範囲を決定するなど、事故の取り扱いに対して先を見越したアプローチをとる。

自分が事故に関わり、保険会社が調査員を雇った場合には、できるだけたくさんの情報を集めることが調査員の目的であり、それにはメンバーの協力が必要だという点を忘れてはならない。調査員は事故を調査しているのであって、人物を調査しているのではない。正直に事実を述べ、できる限りの詳細を伝えること。情報はすべて、保険会社または弁護士に直接報告され、調査員は判断を下さない。

すべての事故に対して損害賠償請求が起こされるわけではない。しかし、事故が起きてから何ヶ月、あるいは何年もたつてから損害賠償請求が起こされることもある。当初の調査で収集した情報が弁護の準備に役立つが、さらに準備をする必要があり、訴訟が終わるまでにはかなりの時間がかかる。ただちに却下される、あるいは和解に至るケースもあるが、多くが終結までに何年もかかる。

事故における関わりについて質問がある場合には、所属のPADIオフィスへ問い合わせること。

クオリティ・マネージメント, アシュアランス 表彰制度

概要

PADI組織の成功は様々な要素に由来するものだが、そのうちの少なからぬ部分が、PADIメンバーが実地に示すプロフェッショナルリズムと質の高さである。首尾一貫した第一級のダイバー・トレーニングを行なうことに対するPADIメンバーの長年に渡る献身的な姿勢が、PADIといえば質の高いダイバー教育のことだという名声を確立したのである。そういったPADIメンバーの努力によって達成された高いレベルの顧客サービスを認め、それを保つことが、クオリティ・マネージメント／アシュアランス／表彰制度の礎石である。

PADIのクオリティ・マネージメント・プログラムは、生徒ダイバーやお客様に質の高いサービスを提供しているメンバーの功労を認める。PADIメンバーが教育システムをその意図通りに活用していることに対し、その努力を認めるものである。メンバーがPADI規準を守ることは、すべての人にとって利益となる。生徒ダイバーは効果的なトレーニングを受けることができ、メンバーは実績のある教育システムを使うことで、自分自身を法的に守るとともに収益を上げることができる。また、質が高いというPADIの評判も損なわれない。PADIダイバー教育システムの使い方に関してメンバーを教育し、手引きし、カウンセリングすることがクオリティ・マネージメント・プログラムの仕事である。

クオリティ・マネージメント・プログラムは、PADIの教育システムを使うことの重要性をPADIメンバー全員に理解させ、PADI規準を厳守することに対する各自の責任を認識させることを主な目的としている。この目的を達成するための手段は、単に懲罰的なものではなく、先を見越した救済的なものである。質の高いサービスを実地に示し、生徒ダイバーから高い評判を得たメンバーに対しては、クオリティ・マネージメント・プログラムがその努力を表彰する。PADI規準から逸脱したメンバーに対しては、軌道修正するよう働きかけ、再び問題を起こさぬよう助言する。一方で、故意に繰り返して規準違反を犯す者には厳しく対処し、資格停止処分、再トレーニング、追放処分などの措置をとる。

優秀者表彰制度

優秀者表彰制度は、お客様に質の高いサービスを提供しているメンバーを認める制度である。生徒ダイバーやお客様、あるいは同僚のPADIメンバーが、あるPADIメンバーの努力を高く評価し、感謝する内容のファックス、手紙、EメールなどをPADIへ送ってることがあるが、クオリティ・マネージメント・プログラムはそういった賞賛の声をメンバー本人に転送する。功績を認める手紙や賞状が贈られることもある。これはメンバーのプロフェッショナル・ファイルにも記録される。さらに、メンバーの功績はアンダーシー・ジャーナルのコラムやpadi.comでも発表される。

クオリティ・マネージメント

クオリティ・マネージメント部では、PADIメンバーが各種サービスを首尾一貫したレベルで提供できるようにするために、質の管理とリスク・マネージメントを目的として各プログラムを監視している。

その手段のひとつとして、PADIコースとプログラムの参加者を対象に、定期的にコース評価アンケート調査を実施している。このアンケート調査には、トレーニングの内容や、どのような指導を受けたかについての質問が記載されている。参加者からの回答の中に、PADI規準違反があった可能性を示す内容のものがあつた場合には、調査を開始する。

生徒ダイバー、お客様、ダイビング業界関係者などから文書による苦情の申し立てがあつた場合や、PADIメンバーからQA報告書が送られてきた場合にも、クオリティ・マネージメント部は調査を開始する。また、PADI事故報告書の内容を

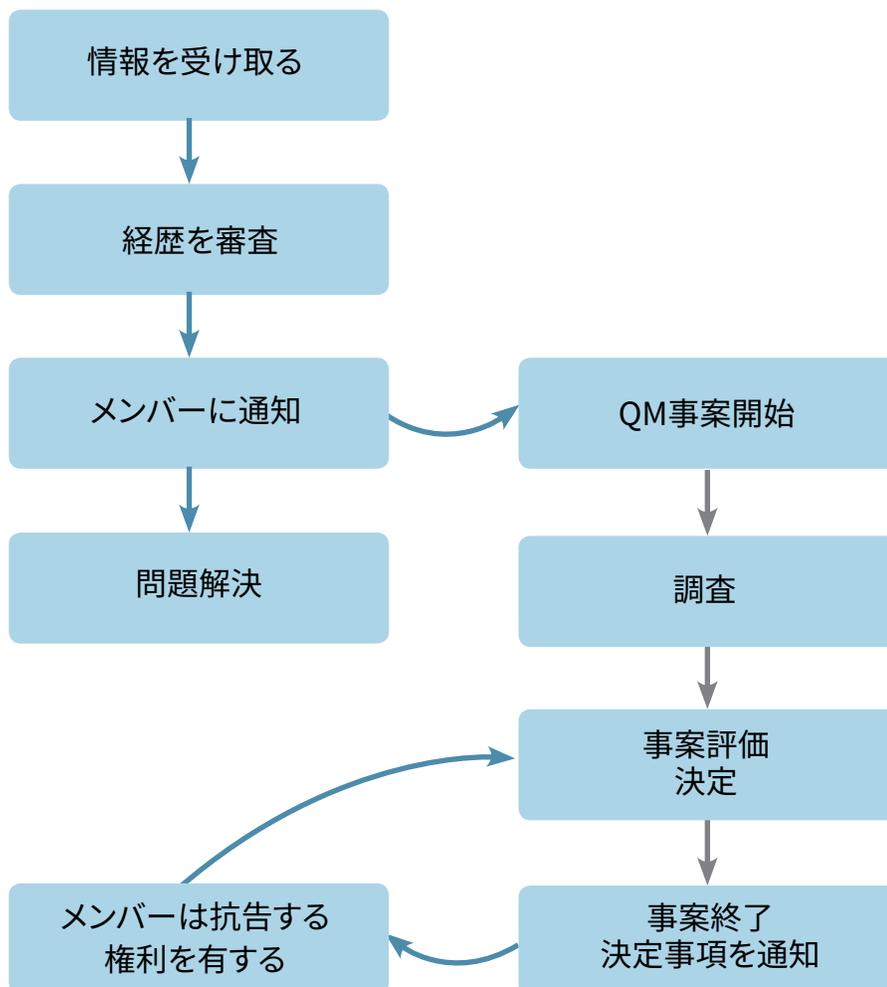
検討し、その情報に基づいて調査を開始することもある。暴力や性犯罪といったような重大な犯罪行為の報告を受けた場合にも、調査が開始される。

PADIクオリティ・マネージメント部は、単なる噂に基づいて調査を開始するようなことはなく、またメンバーを「支配下に置く」ことを目的としているのではない。PADIダイブマスターからコース・ディレクターまで、すべてのプロフェッショナル・メンバーに対し、道徳的な行動を取り、ライセンス同意書で同意している通りにPADI規準を守るといった協力的姿勢を求めているのである。

PADIクオリティ・マネージメント部は、平等の適用と正当な手続きに基づく標準化している手順ですべての調査を行なう。この手順は、クオリティ・マネージメント部とPADIの顧問弁護士によって決定されたものである。可能な限り秘密厳守が原則であるが、より徹底的な調査を行なうために必要と見なされる場合には、ある程度の情報公開はやむを得ないものとする。例外的あるいは予見できなかったケースの場合、必要に応じてクオリティ・マネージメント部が調査手順を調整することがある。

すべての調査において、状況の重大性からただちに何らかの措置を取る必要があるとPADIが判断した場合には、調査中でもメンバーに対してノンティーチング・ステータス処分が適用されることがある。

クオリティ・マネージメント決定



クオリティ・マネージメント決定

PADIによる決定事項、およびQA調査の結果として行なわれるいかなる処分も、拘束力があるものと見なされる。以下はPADIによる決定事項をリストしたものであるが、これ以外の決定が下される場合もある:

1. 調査終了、処分なし。
2. PADI規準と手続きに関してメンバーをカウンセリング。
3. 規準遵守同意書に署名することを命じ、場合によってはレビュー・ステータスに置く。
4. 再トレーニング・プログラムへの出席を命じる。
5. 資格停止処分。
6. 追放処分。
7. 永久追放処分。

PADIメンバーは、以前にはなかった別の関連情報を提示できる場合のみ、決定を上訴することができる。上訴するには、決定が通知されてから1ヶ月以内に、新しい情報を文書で提示しなければならない。PADIは、これらの条件を満たしている上訴のみを取り上げるものとする。

QA決定の内容は、年に4回、アンダーシー・ジャーナルとpadi.comに記載される。この中で、資格停止処分と追放、永久追放処分を受けたメンバーの氏名が発表される。資格停止処分が解除されたメンバーの氏名も発表される。

嘘の申告をしたメンバーの氏名も、アンダーシー・ジャーナルとpadi.comに「特別勧告」として発表される。

顧客サービスについての苦情

人はひどいサービスを受けたと感じると、文句を言うか、二度と戻ってこなくなる。お客様を満足させ、繰り返し来てもらうための重要な決め手となるのが、ニーズにどう対応するかである。PADIオフィスに寄せられる苦情の多くは、クオリティ・マネージメント問題ではなく、顧客サービスのトラブルに関連している。

よくある苦情は:

認定カードのトラブル – 例えば、認定カードが届くのを楽しみにしていたのに、PICオンラインもしくはPIC封筒の記入ミスにより、届くのが遅れるというケース。よくあるのが、日付が間違っている、あるいは署名が入っていないというミスである。カードが届くのが遅れてお客様をがっかりさせないよう、PICオンラインもしくはPIC封筒には正確に記入しなければならない。(このマニュアルの「メンバーシップ手続き」セクションの「認定カード請求」の項を参照)

もうひとつのよくある苦情が、認定カードが届かず、問い合わせしてみたら(数ヶ月後という場合もよくある)、記録が不備であることが判明したという場合である。ダイブセンター/リゾート、あるいはインストラクターから希望するサービスを受けられなかったお客様は、PADIへ苦情を言う。迅速に対応することを心がけ、記録はきちんと整理しなければならない。

規準違反が認定カードのトラブルの原因になる場合がある。ダイバーが最低年齢条件を満たしていない(若すぎる)場合や、インストラクターがメンバー資格を更新していない、あるいはコースを教える許可を受けていない場合は、顧客サービス問題に加えて、クオリティ・マネージメント問題が発生する。

委託照会の混乱 – 例えば、どこでトレーニングを受けたとしても、最初に支払ったコース費でトレーニング費用の全額がカバーされているとダイバーは思っていたが、委託照会を受けて行なった先で、そうではないことがわかって驚き、苦情を申し立てるというケース。委託照会の手続き、必要条件、発生する料金などについて、明確に説明しておく必要がある。

金銭上の方針をめぐるトラブル – 例えば、器材購入、レンタル料、トレーニング・ダイブ料金、返金など金銭をめぐるトラブルが発生するまで、ダイバーはショップの方針について何も知らなかったというケース。情報を十分に知らされていないお客様は、ショップにだまされて裏切られたと感じることになる。コースの必要条件、料金、方針について、前もって十分な情報を伝えておく必要がある。きちんと情報を知らせておけば、当てが外れてお客様が嫌な思いをするというようなトラブルは起こらない。

プロフェッショナリズムの欠如 – 例えば、インストラクターやショップのスタッフが、ライバル店、他のインストラクター、他のスタッフ、さらにはお客様の悪口まで言っているのをダイバーが聞くというケース。そのような下劣な行為に生徒ダイバーは不快感を覚え、苦情を申し立てる。すべてのダイビング活動に対し、前向きな態度とプロフェッショナルな姿勢を見せることが好まれる。

ダイビングリーダーの育成

上級レベルのトレーニング

PADIダイブマスター・コースといったようなプロフェッショナルレベルのコースでは、レスキュー・ダイバー・コースから始まり、ダイビングリーダーの育成へ向けて展開する上級レベルのトレーニングが実施される。PADIダイブマスター・コースでは、PADIレスキュー・ダイバー・プログラムで習得した問題解決能力をさらに伸ばし、事故管理と防止のシナリオから、実際に生徒ダイバーや認定ダイバーを監督するという状況へと拡大する。ダイブマスターのレベルでは、特定の状況下で可能な多数の解決策を検討し、その中からベストのものを選ぶ能力に焦点を絞る。ダイブマスターには、安全関連の問題を解決する能力だけでなく、顧客サービス、ビジネス、運営に関連した問題を解決する能力も求められる。

このコースでは、「姿勢」と「判断力」にも焦点を当てる。「姿勢」とは感情的影響力であり、プロフェッショナルとしての振る舞い、模範となること、自分自身の健康維持、安全なダイビングの実践といったようなことから、誠実といったような極めて基本的な価値観まで、どのような行動を選択するかを形作る。「判断力」とは、姿勢、経験、理論的知識、推理、直感を応用し、場合によっては白黒はっきりしない状況下で、変動するさまざまな要素に基づいて問題解決を図り、決定を下すことである。

その点において、ダイブマスター候補生を教えるのは、エントリー・レベルのダイバーを教えるのより難しい。例えば、マスククリアを教える場合、きちんとできているかどうかは見ればわかる。一方、ダイブマスター候補生の場合は、さまざまな場面で模範的な行動を示している様子を目にしたとしても、状況が異なる場合やコース後に、はたして同じような模範的行動を取るかどうか、あるいはその方法を知っているかどうかを判断することは不可能である。

コースが終われば、その後に候補生がどのような選択をするかに対してまでインストラクターが責任を持つことはできないが、正しい選択をするのに必要な知識とスキルをしっかりと身につけさせることはできる。賢明な意思決定をするよう働きかける努力をしなければならない。

よき助言者としての立場

PADIダイブマスター・コースに至るまでのクラスでは、インストラクターは生徒ダイバーと「教師」の関係にある。ところが、PADIダイブマスター・コースでは、候補生の「判断力」と「姿勢」を育成するには、「よき助言者(メンター)」という関係のほうが効果的である。

よき助言者としての関係では、上級レベルのトレーニングとPADIダイブマスター・コースの理念に沿って、なぜそのような選択をするのか、何がその判断の基礎となっているのか、自分や候補生のしたことやしなかったことが他者にどのような影響を及ぼすか、さまざまな物事についてどのような意見を持っているかなどについて話し合うといったようなパーソナルな交流を通じて、候補生を直接的に導く。胸襟を開いて信頼関係を築き、ダイビングのプロフェッショナルとしてのそれぞれの目標に向けて候補生を導くのである。これは、大学教授と大学院の学生との関係、あるいは親方と弟子の関係に似ている。

よき助言者は単なる教師ではなく、候補生をダイビングのプロフェッショナルのレベルまで導くガイドである。友であり、アドバイザーであり、コーチであり、教師であり、そのすべての役割を果たさなければならない。

よき助言者としての関係は、候補生にとってメリットがあるだけでなく、インストラクターにも利点がある。PADIシステムという枠組みの中で、自分と同じようなやり方で物事を行なう講習アシスタントを育成することができるので、生徒ダイバーのトレーニングに対する自分の取り組み方をすんなりと理解してもらえる。他のインストラクターのところからやって来たダイブマスター候補生は、自分の勉強になる新しいテクニックやアイデアをもたらしてくれる。なぜそうするのかについての背景的な考え方を話し合うことは、新しいテクニックの理論的根拠を学ぶチャンスになる。

よき助言者としての役目をしっかりと果たすことにより、多くのPADIダイブマスターが、オープン・ウォーター・スクーバ・インストラクター、IDCスタッフ・インストラクター、マスター・インストラクターへとランクアップした後になっても、アドバイスを求めて以前のよき助言者のところへやってくるようになる。PADIダイブマスターのよき助言者として、候補生一人ひとりをPADIのリーダーシップレベルまで育て上げるという信念をもって育成しなければならない。実際において、ダイブマスター・コースに候補生を受け入れるということは、その人にPADIダイブマスターとして成功する資質があると認めることであり、その目標へ向けて候補生を導くことに尽力しなければならないのである。

指導アプローチ

PADIのリーダーシップレベルのコースには、使用する講習場所／ダイビング環境や候補生の個々のニーズに合わせた最も効果的なコース構成を可能にする柔軟性が組み込まれている。コースの指導理念に基づき、次のアプローチを用いる:

- 自分自身の行動において手本となり、候補生にも模範的な行動を求める。ダイバーがそれぞれのインストラクターの指示に従うように、よき助言者としての役割をしっかりと果たすことにより、候補生はインストラクターの指導に追従するようになる。物事に対する姿勢、価値、判断に最も強い影響を与えるものの一つが模範である。模範的な手本となるには、ダイビングのプロフェッショナルとして候補生に尊敬され共感される存在でなければならない。そして、候補生にどのようなリーダーになってもらいたいのか、その理想像を明確に描き出さなければならない。一方、積極的に学んでもらいたい姿勢だけでなく、意図していない姿勢も候補生が身に付けてしまうことがあるということを忘れてはならない。「私のするとおりにではなく、言うとおりにやりなさい」というアプローチが、指導方法としてしばしば失敗するのはそのためである。
- 事前の学習と研究を取り入れたコース構成にする。そうすることにより、クラスルームでの時間を短くすることができるとともに、候補生は必要な情報を自分で探すということを学ぶ。これは、リーダーシップレベルのダイバーにとって必要不可欠なスキルである。コーススケジュールに自習を組み込むことで、候補生はクラスセッションと実習の間の空いた時間をうまく利用することができる。教育学の調査からも、事前に学習することにより、候補生はしっかりと準備を整えて講習を受けるので、その効果がより一層高まることが示されている。また、クラスの時間を基礎的な事柄の勉強に使わないですむので、インストラクターは知識を実際の状況に応用することに、より多くの時間を割くことができる。
- 独創性と想像力に富んだ視点を奨励する。物事の正しいやり方がたった一つしかないという状況はめったにないので、ユニークなアイデアのよい点を話し合い、候補生がそれぞれ独自のやり方というものを適切に追求することを認めることで独創性を奨励する。インストラクターも、教えるだけでなく学ぶことができる。
- 候補生が自分の長所と弱点を認識し、自分自身を精神的に強化する能力を育成する。精神的な強さというのは、何かがうまくできたときに、インストラクターに言ってもらわなくても、自分でそれがわかるということを意味する。精神的な強さは、点数にあまり重きを置かないようにし、候補生が自分のパフォーマンスと能力のレベルを自分で認識することの大切さを重視することによって強化する。そうすることにより、候補生は単に点数を取るのではなく、自分自身に対する期待に基づいて目標を設定するようになる。パフォーマンスが不十分なのは能力が欠如しているからだというような指摘は避け、パフォーマンスが不十分なのは、もっと練習や勉強をするなど努力を必要とする部分があるからだというように表現する。カウンセリングのときに、自分のパフォーマンスをどう思うか候補生に質問し、答えに基づいて強化策を実施する。
- 好奇心を奨励する。ダイビングのプロフェッショナルには、幅広いダイビング知識を持っていることが求められる。情報そのものを候補生に追求させることで、知識ベースを強化する。すべての情報が学習目標に直接的に関係しているかどうかは、さほど重要なことではない。候補生がおもしろいと思うことで十分である。そのトピックについてもっと知りたいと言ってきたら、手軽に利用できる情報源を教える。常に、情報を候補生のニーズや興味の対象に関連付ける方法を模索することが大切である。候補生にとって情報に価値があればあるほど、候補生はそれを求めるようになる。

- 指導方法としてディスカッションを活用する。事実を伝えるだけなら講義が効果的であり、講義の中で候補生に質問をするのは、候補生の理解度を評価する総合的なツールとして役立つ一方で、ディスカッションは、より効果的に問題解決能力を促進し、姿勢を形成する。
- 何がうまくできたか、どうすればもっとうまくできたか、あるいは違ったようにできただろうか候補生に考えさせ、自分自身にフィードバックさせる。練習後に、インストラクターが自分の視点でデブリーフィングをするのではなく、練習中に起きたこと、学んだこと、自分のパフォーマンスはどうだったかなどについて、候補生自身に話をさせる。そうすることにより、問題解決能力がさらに育成され、候補生がどのように考えているのか候補生自身から聞くことで、なぜ候補生がそのようなパフォーマンスをしたのか、理由をより明確に把握することができる。うまくいかなかったパフォーマンスについて、どのような点が悪かったか、なぜうまくいかなかったか、次はどうすればもっとうまくいかなどについて、インストラクターの指示がなくても自分から話すようになる。ただし、この方法で注意しておかなければならないのは、候補生の中には、自分自身への期待度が高く、インストラクターが思っているより自分に対して厳しい傾向がある人がいるという点である。このようなタイプの人には、誠実で建設的なコメントをして、前向きな姿勢を保つようにする。

期待

ダイビング界において、PADIダイブマスター資格を有する人は、以下の資質を備えていることが求められる:

- ダイバーの安全を最優先する。
- 模範となるダイビングのスキル。生徒ダイバーにデモンストレーションができるレベルのスキルであること。
- レスキュースキル。事故を予防して管理することができ、トレーニング中の生徒ダイバーに対して模範的なレスキュースキルを示すことができる。
- ダイビング理論についてのプロレベルの知識。その理論的知識の範囲は、技術的側面ならびにプロとしての自覚の高まりとともに深まっていく。これは、ダイブマスターの任務における問題解決能力と独創性の基盤となると同時に、PADIインストラクターへと成長していくためのステップとなる。
- 認定アシスタントとしての適性。ダイブマスターは、インストラクターの指揮のもとで準備運営、監督、限定的講習任務などを担当することにより、指導活動をサポートするノウハウを持っていることが要求される。
- ダイビング活動の管理と監督能力。ダイブマスターには、ダイビング活動の進行管理において、認定ダイバーに対して適切な限定的責任を担う。これには、ダイビング環境と活動についての知識と同時に、人との接し方がうまく、優れた判断力の持主であることが求められる。有能なダイブマスターは、リスク・マネージメントの全体的な取り組みにおいて、重要な一角を担う。
- 道徳的な模範的行動。ダイブマスターには誠実で礼儀正しい行動を示し、一般に認められた責任あるダイビング慣習に従うことが求められる。ダイブマスターの行動は、自分自身だけでなく、自分が働いているショップ、さらにはPADI組織全体に影響を及ぼす。
- 情熱的で楽しい。人は、興奮、アドベンチャー、チャレンジなど、楽しさを求めてダイビングを習う。それぞれの興味や技術レベルの範囲内で楽しい時間を過ごすために、そのお手伝いをしてくれることを期待してダイブマスターのところへやってくる。ダイバーはダイブマスターに対し、楽しくて人付き合いのよい和やかな人柄を期待する。その面でも、ダイブマスターはダイビング業界のダイバー維持の取り組みにおいて、重要な一角を担っている。
- 環境に対する配慮。ダイブマスターは環境保護の取り組みにおいて模範となり、環境保護に関するダイバー向けの情報を取り入れたブリーフィングを実施する。

参考資料

PADIリテイル&リゾート・アソシエーション・メンバーシップ

PADIリテイル&リゾート・アソシエーションは、PADIダイブセンター、リゾート、教育施設、およびレクリエーション施設のプログラムを管理する。メンバー施設の各種マーケティング活動、ビジネスサービス、ビジネス教育プログラム、セールストレーニングプログラムをサポートすることが主な目的である。メンバーはダイビングに関する指導とビジネスの規準に従うことで、ダイビング消費者に向けて高いレベルの安全性やサービスの質を維持するよう努める。

注意: 詳しいメンバー規準、申請手順、更新条件については、所属PADIオフィスのPADIリテイル&リゾート・アソシエーションに問い合わせるか、padi.comのメンバー専用ウェブサイトを参照のこと。

PADI ダイブセンター

PADIダイブセンターは、レクリエーション用のスクーバ・ダイビング器材の小売販売および講習を業務とする専門の事業者である。PADIの認定コースおよび体験プログラムを提供することによって、PADIダイバー教育システムを支持していることを表明する。PADIダイブセンターが提供するその他のサービスとしては、レクリエーション用スクーバ器材のレンタル、修理点検、圧縮空気の充填、レクリエーション目的のスクーバ・ダイビングとスノーケリング活動、ツアーなどがある。

PADI 5スター・ダイブセンター

PADI 5スター・ダイブセンター・メンバーシップは、すべてのPADIダイバー教育プログラムを提供し、各種器材を取り揃え、様々なダイビング体験の機会を提供する一方で、水中環境保護の意識を高めるための活動を積極的に展開している進歩的なPADIダイブセンターに対し、年間ベースで授与される。ダイバーに質の高いサービスを提供することに優れ、プロフェッショナルなイメージがあり、レクリエーションを目的としたスクーバ・ダイビング、スノーケリング、ダイビングツアー、環境保護などを積極的に推進していると認められたダイブセンターである。外観および実績ともに、地域のダイビング業界の水準と比べて遜色なく、概してそれを上回っている。

PADI 5スター・ダイブセンターは、レクリエーションを目的とした安全なスクーバ・ダイビングやスノーケリングの素晴らしさを推進する一方で、PADIダイバー教育システムを全面的に採用し、定期的に継続教育プログラムを実施することにより、スキルや知識をステップアップする機会をダイバーに提供する。地域社会に積極的に関わり、顧客に満足してもらえるダイビング体験、教育、安全、環境保護活動を提供することに尽力している。

PADI 5スター・インストラクター・ディベロップメント・センター

PADI 5スター・インストラクター・ディベロップメント・センター (IDセンター) は、PADI 5スター・ダイブセンターとしての規準をすべて満たし、さらにPADIインストラクター・レベルのトレーニングも提供するダイブセンターである。スタッフとして少なくとも1名のPADIコース・ディレクターを擁し、インストラクター開発プログラムやプロフェッショナルを対象とした継続教育を提供することに尽力している。PADIインストラクター・レベルのトレーニングを実施することにより、高い資質のPADIインストラクターを育成するという責任を担い、PADIメンバーや一般のダイバー、さらにはダイビング業界全体に貢献している。

PADI 5スター・キャリア・ディベロップメント・センター

PADI 5スター・キャリア・ディベロップメント・センター (CDC) は、通常のインストラクタートレーニングの域を超えた高度なプロ育成を行なうPADI 5スターIDセンターに授与されるステータスである。ダイビング業界に職業を求める人を対象に専門的な職業教育とトレーニングを提供し、職業紹介を行なう。優秀なプロ育成へ向けてのPADI 5スターCDCの様々な取り組みは、PADIメンバーだけでなく、資質の高い人材を求めるダイビング業界全体にとっても、大きな恩恵になっている。

PADI ダイブリゾート

PADIダイブリゾートは、ダイビングやスノーケリングを楽しむ旅行者にサービスを提供する事業者で、レクリエーションを目的としたスクーバ・ダイビングとスノーケリングの講習、ディスカバー・スクーバ・ダイビング、レクリエーションを目的としてビーチまたはボートで行くガイド付きのスクーバ・ダイビングやスノーケリングツアー、ダイビング器材のレンタルなどを行なう。その他、ダイビング器材の販売や各種ウォータースポーツも行なう。ダイブリゾートは主としてリゾート地域で営業し、ダイバー向けの宿泊設備がある施設と直接的に提携関係を結んでいる場合もある。

PADI 5スター・ダイブリゾート®

PADI 5スター・ダイブリゾート・メンバーシップは、すべてのPADIダイバー教育プログラムを提供し、各種器材を取り揃え、様々なダイビング体験の機会を提供する一方で、水中環境保護の意識を高めるための活動を積極的に展開している進歩的なPADIダイブリゾートに対し、年間ベースで授与される。ダイビングのツアー客に質の高いサービスを提供することに優れ、プロフェッショナルなイメージがあり、レクリエーションを目的としたスクーバ・ダイビング、スノーケリング、ダイビングツアー、環境保護などを積極的に推進していると認められたダイブリゾートである。外観および実績ともに、地域のリゾート業界の水準と比べて遜色なく、概してそれを上回っている。

PADI 5スター・ダイブリゾートは、レクリエーションを目的とした安全なスクーバ・ダイビングやスノーケリングの素晴らしさを推進する一方で、PADIダイバー教育システムを全面的に採用し、定期的に継続教育プログラムを実施することにより、スキルや知識をステップアップする機会をダイバーに提供する。地域社会に積極的に関わり、顧客に満足してもらえるダイビング体験、教育、安全、環境保護活動を提供することに尽力している。

PADI 5スター・インストラクター・ディベロップメント・ダイブリゾート

PADI 5スター・インストラクター・ディベロップメント・ダイブリゾート (IDダイブリゾート) は、PADI 5スター・ダイブリゾートとしての規準をすべて満たし、さらにPADIインストラクター・レベルのトレーニングも提供するダイブリゾートである。スタッフとして少なくとも1名のPADIコース・ディレクターを擁し、インストラクター開発プログラムやプロフェッショナルを対象とした継続教育を提供することに尽力している。PADIインストラクター・レベルのトレーニングを実施することにより、高い資質のPADIインストラクターを育成するという責任を担い、PADIメンバーや一般のダイバー、さらにはダイビング業界全体に貢献している。

PADI 5スター・キャリア・ディベロップメント・センター

PADI 5スター・キャリア・ディベロップメント・センター (CDC) は、通常のインストラクタートレーニングの域を超えた高度なプロ育成を行なうPADI 5スターIDダイブリゾートに授与されるステータスである。ダイビング業界に職業を求める人を対象に専門的な職業教育とトレーニングを提供し、職業紹介を行なう。優秀なプロ育成へ向けてのPADI 5スターCDCの様々な取り組みは、PADIメンバーだけでなく、資質の高い人材を求めるダイビング業界全体にとっても、大きな恩恵になっている。

PADI ダイブボート

PADIダイブボート・メンバーは、ダイビングボートを使ってレクリエーションを目的としたスクーバ・ダイビングやスノーケリングのツアーを行なう事業者である。PADIダイブボート・メンバーになるのに当たって、所有または使用している船舶の数は関係なく、日帰りツアー用の小型ボートから船に宿泊できるクルーズ船まで、大きさや定員にも幅がある。PADIダイブボート・メンバーが提供するサービスは、レクリエーションを目的としたスクーバ・ダイビングやスノーケリングの講習、ディスカバー・スクーバ・ダイビング、レクリエーションを目的としたガイド付きのスクーバ・ダイビングやスノーケリングツアーなどである。その他、ダイビング器材の販売またはレンタル、各種ウォータースポーツも行なう。

PADI レクリエーション・ファシリティ・メンバーシップ

PADIレクリエーション・ファシリティ・メンバーは、レクリエーションを目的としたスノーケリングやダイビングに使用可能な施設を運営している、あるいは、スポーツクラブや専用のダイビング施設など既存のレクリエーション施設でPADIコースを提供している事業者である。スクーバ・ダイビングに携わる地域の事業者、レクリエーション・ダイバー、スノーケラーなどを対象に各種のサービスを提供する一方で、酸素ユニットや緊急時の対応に関する情報などダイビングをサポートするサービスや、トイレや更衣室などの施設も提供している。その他のサービスとして、圧縮空気の充填、ダイビング器材のレンタルと修理、トレーニング用水中プラットフォームの設置、ピクニック設備、宿泊施設などがある。

PADI エデュケーショナル・ファシリティ

PADI教育施設プログラムは、PADIコースやプログラムを実施している教育事業や学校などを対象に、PADI組織との提携を提供するプログラムである。スクーバ、スキンドайビング、スノーケリングのトレーニングをメインのビジネスとしている施設も一部にはあるが、大多数の教育施設がダイビングのトレーニングをカリキュラムのひとつとして行なっている。教材、器材、ダイビングの機会を生徒ダイバーに提供するために、教育施設メンバーの多くがPADIダイブセンターやリゾートと密接に協力している。

カレッジ&ユニバーシティ・スクーバ・プログラム・メンバー

PADIのカレッジ&ユニバーシティ・スクーバ・プログラムは、単位に含む、含まないに関わらず、学内で各種PADI認定コースを提供している高校より上の教育機関を承認するプログラムである。学内で提供されるPADIプログラムは、PADIダイブセンターやリゾートと提携している場合もあれば、契約したPADIインストラクターまたは大学職員のPADIインストラクターが提供している場合もある。PADIダイバー教育システムに基づくスクーバ・ダイビングやスノーケリングの講習、PADIスペシャルティ・ダイバー・トレーニング、PADI体験プログラム、継続教育カウンセリング、器材カウンセリング、ダイビングツアー情報などのサービスが提供されている。

カレッジ&ユニバーシティ・スクーバ・プログラムは、大学主催のプログラムを通じて、学生や地域社会を対象に質の高いレクリエーション・スクーバ・プログラムを行なっている教育機関を承認し、サポートや各種のPADIサービスを提供することを目的としている。これらのプログラムは、生物学、海洋学、考古学、物理学などの学位分野で単位になるコースとして実施されている場合もあれば、単位として数えられる選択科目や、単位にならない純粋なレクリエーション目的のコースとして提供されている場合もある。

PADI フリーダイバー™センター

PADIフリーダイバー・センターとは、PADIフリーダイバー・インストラクションを提供し、フリーダイビング市場に応えるプロフェッショナルなビジネスを行なっている。その他の活動には、フリーダイビング用の器材販売やレンタル、フリーダイビングツアーや小旅行の計画などがある。

AFFECTIVE EFFECTIVE Instruction

カール・シュリープス
技術開発部副部長

PADIのインストラクターなら、「足がつかない深さのところに沈み、全体に水が入ったマスクをクリアする」とか、「ある深度で柔軟な容器の中に入っている空気の体積を1とした場合、その容器を別の深度へ持っていったときの体積をボイルの法則を使って計算する」といったような学習目標についてよく知っているはず。ロバート・ガーニュの学習条件にあてはめると、最初の例は運動スキルの達成目標で、2番目の例は知的スキルの達成目標です (Gagné and Medsker 1996, 68, 98-99)。こういった学習目標は、インストラクター用と生徒用のPADI教材のあちこちにリストされていて、PADIインストラクターにとっては見慣れた部分です。

でも、ほとんどのPADIコースでも、リストされていない目標があることをご存知でしょうか？ そんなこと今まで考えたことないという人でも、おそらく直感的に知っているはず。それは、あえて文章にすれば、こんな風になる目標です：

「生徒はダイブ・テーブルの限度以内で十分に余裕を持って控え目なダイビングをするようになる。」

「生徒は水中環境の価値を尊重し、ダメージを与えないようにダイビングするようになる。」

「生徒は学習プロセスに価値を見出し、さらにダイバーとしての教育を受けることを望むようになる。」

あるいは、コースを受けている過程で「生徒はクラス・セッションの前に、マニュアルの中から課題の部分を読んで学習するようになる。」

これらは情緒的な学習目標と呼ばれるものです。情緒的な教育では、姿勢、選択、価値を選び取る方向へ生徒を導きま。となると、皆さんのご想像のとおり、そういった指導目標に到達する過程は、生徒本人の感情、先入観、意欲、現在の姿勢といったもので複雑に変化することになります (Gagné and Medsker 1996, 112)。教育界における情緒的指導とは、子供をよい市民に育てることから、自分の健康に責任を持つことや、充足した実り豊かな暮らしを送ることまで広範囲に及びます。教育を通じて道徳感を身につけ、自己開発をし、自尊心を育て、自分のライフスタイルを作り、集団の中での力関係を学び、自己実現を図るなどは、やはり情緒に訴える領域です (Martin and Briggs 1986, 12, 25-48)。

教育界の主流では、生徒の達成度を測定する場合、どれだけ学んだかを評価することに重点が置かれており、学習体験そのものについて生徒がどう感じたかや、学んだことについてどう感じたかは、ほとんど顧みられていません。ところが、そういった情緒的な面は、教育者が意識的に与えたものではなかったとしても、教育の真の成果であることが多いのです (Sonnier 1989, xi)。このことは、PADIインストラクターにとって特に重要な点です。スクーバはリクリエーションであって、ダイバーになるためのトレーニングが楽しくなかった生徒は、ダイビングを続けられないだろうし、ましてダイバー教育を続けるはずがありません。ですから、生徒が達成目標を満たせるようにすることも重要ですが、楽しくトレーニングできて、よい印象が持てるようインストラクターが手助けしてあげることも、また同じように重要な点です。

情緒的領域における指導の特徴

情緒的領域に取り組む方法の具体的なテクニックについてお話する前に、認知的領域 (例、ダイブ・セオリー、テーブルの使い方、運動スキルなど) を教えることとどう違うのかを見ておく必要があります。

1. 情緒的指導では、学習目標が明記されていないことがよくあります。一般に、何かを学習するときは、どの程度までできるよくなればよいかといったような目標を生徒が事前に理解していたほうが、学習効果が高まります (Gagné et al 1992, 189-190)。そのため、PADIの生徒用教材には学習目標が明記されています (学習を方向付ける質問の形になっています)。また、皆さんがIDCで限定水域やオープンウォーター・トレーニングの目標を明確に述べるトレーニングを受けたのも、この理由からです。

一方、情緒的な目標の場合、明確に述べると、かえって学習の妨げになることがあるため、生徒に目標を知らせ理解させることは、必ずしも適切なやり方だとは言えません (Gagné and Medsker 1996, 142-143)。例えば、スクーバ・トレーニングのゴールのひとつは、生徒がダイビングを楽しむようになることです。でも、「このセッションの終わりまでにダイビングが大好きになる」などと言うのは滑稽です。

2. 外からの影響が情緒的指導の効果を左右することがあります。スクーバ・トレーニングを通じて、インストラクター情緒的指導は様々な情緒的領域を形作るわけですが、中でも大きいのが姿勢です。姿勢とは、ある行動に向かって前向きに進む、あるいは遠ざかる傾向のこと

を言います (Gagné and Medsker 1996, 111)。姿勢には、認知面、情緒面、行動面という3つの要素があります。認知面とは、ある主題について本人が知っていること。情緒面とは、その知識について本人がどう感じるか。そして行動面とは、認知と情緒に基づいて本人がどう行動するかです (Baron and Byrne 1987, cited in Gagné and Medsker 1996, 113)。

本人が前から強い姿勢を持っている場合、新しい姿勢を作る妨げになることがあります。

例えば、ダイバー教育の目標のひとつに、水中環境に敬意を払い、保護することを教えるというのがあります。でも、生徒の側に環境問題は大きさに取り上げられ過ぎていてという考えがあれば、生きたサンゴにさわってはならないとインストラクターがいくら言っても、「環境保護の誇大宣伝」と受け取られかねません。逆に、環境問題はすでに絶望的なレベルまで進んでしまっているから、もはや何をしても無駄という考え方を持っている生徒もいるでしょうし、目の前の欲求を充足させることしか考えず、未来のことは顧慮しないという社会的風潮の中で育った生徒もいるでしょう。そういった姿勢を持っている生徒には、サンゴにさわらないよう注意してダイビングするように言っても、たいした効果は期待できそうにありません。

でも、節度あるダイビングをすることや、環境を守ることなどに対する前向きな姿勢を育てようとするのは無駄だと言っているのではなく、インストラクターが一生懸命努力したとしても、コースを終えたダイバーがその後どのような選択をするか、インストラクターが保証することはできないし、責任を持つこともできないという点を指摘しているわけです。ただ、前向きな姿勢を育てることは、多くの生徒にとってためになることなので、努力する価値はあります。

3. 情緒的領域を育てる指導は、議論になることも多く、また自由に論争すべきものです。教育界の主流では、価値、道徳、姿勢といった情緒的領域に属する事柄について教えることは「洗脳」ではないかと言う教育者も少なくないというデータがあります。また、情緒的目標は長期的過ぎて、効果が測りにくく、現実的な価値に欠けると言う教育者もいます (Martin and Briggs 1986, 13)。したがって、情緒的目標を念頭において教えるにしても、何を教えるべきなのか、そもそも教えるべきことなのかという点が議論的とな

ります。さらに、どんな主題であっても、自分なりの考え方(偏見)を持っているのは当然なので、どのような姿勢が自分の指導の背後にあるかを自分自身で把握していれば、自分の考え方が生徒にどのような影響を与えるか少なくとも認識することはでき、そうすれば自分の考え方、つまり偏見を補う努力はできるはずだという人もいます。

教育界の主流では、薬物乱用や飲酒運転は絶対しないといったような姿勢を育てることについての議論はほとんど交わされていませんが、妊娠中絶や宗教といったような主題について特定の見解を生徒に教えようとする、間違いなく攻撃的になります。そういった主題での教育プロセスは、道徳的な理論付け、つまり何らかの見解を持つ方法を教えることを重視するのであって、どのような見解を持つべきか教えることではないからです (Martin and Briggs 1986, 156-160)。

ダイバー教育に関わっている人にとって幸いなことに、節度あるダイビングをするとか、環境を守るなど、私達がダイバーに教えようとしている価値や姿勢に関して、ダイビング界に議論はほとんどありません。しかし、議論の余地がある面もあります。文化的背景、以前から持っている価値観や姿勢の違いが、どのようなことを生徒ダイバーに教えるべきかに関して異なる視点を生み出すのです。

例えば、PADIシステムにスパフィッシングやテクニカル・ダイビングを取り入れるべきかとか、インスリン依存型糖尿病などの疾病がある人をコースに参加させてもよいかといったような問題です。こういった問題について、皆さんも強い意見を持っているでしょうが、PADI組織の内部にも外部にも違った意見を持つ人がいて、どの意見にもそれぞれ根拠があるのです。

4. 情緒面の学習効果を確実に測定することは、しばしば不可能です。たいいていの場合、生徒がコースを楽しんでいるかどうかを判断することはできますが、姿勢といったような情緒的教育の側面は、判断が難しい事柄です。どのような選択をする傾向を持っているかを判断しなければならぬからです。したがって、ダイバーの選択能力を推測し(選択をするのに必要となる知識とスキルをテストする)、どのような姿勢を持っているか行動から判断する(例えば、どのように感じているか生徒に聞く)というのが、インストラクターにできる最善の方法です (Dick and Carey 1996, 145, 163-164)。それでも、

コース後に生徒がどのような選択をするか、確信することはできません。

ダイバー教育には、そういった問題が確かにあります。実例として、私が数年前にオープン・ウォーター・ダイバー生徒に行なったトレーニングについてお話ししたいと思います。場所は、片側に洞穴がある湧水地でした。エントリーする前に、正しいトレーニングと器材がなくては、洞穴に入ることは危険であること、絶対に入ってはならないことを生徒全員に伝えました。私が言った注意事項は全員がはっきりと聞き、理解していました。理解できないレベルの話ではなかったもので、メッセージの内容は理解してもらえたと確信していました。その後、グループ全員でダイビングをし、私自身も洞穴から十分に離れた位置を守るというお手本を示しました。私達はトラブルなくトレーニング・ダイブをすべて無事終了し、生徒全員がすべての達成条件を満たしたので、最後に私はテンポラリーの認定カードを発行しました。

次の週末、私は同じ場所で別のクラスを教えていました。前の週末のクラスにいた若い男の生徒が友人を伴って現れ、私の目の前で(しかも明らかに意図的に)洞穴に入っていました。自分の行動がどのような結果を招く危険があるか、この生徒が知っていることは疑いようもないことで、前回は安全ルールをしっかり守っていたのに、この時に彼が示した姿勢は期待を裏切るものでした(この時点で認定を取り消すことはできましたが)。トレーニング・ダイブの時には、安全にダイビングするための知識やスキルをきちんとデモンストレーションしていたのですから、知らなかったという問題ではありません。このダイバーは、ともかく洞穴ダイビングを無事に終え、その週末中、あちこちのトレーニング場所に現れては、自分自身を危険な目に追い込んで、他人の言うことを聞く耳は持たないという強烈的な姿勢をちらつかせる振る舞いを見せたのでした(どんな振る舞いだったか、ここでは詳しいことにはふれないことにします)。

つまり、インストラクターとしては、生徒に選択能力があり、その選択をしたことの結果を予想し、理解できる能力があることを確認できるだけなのです。このことも、ダイビングに取り組む姿勢に関する情緒的目標をPADIコースにリストできない理由のひとつです。そういった目標を満たすことを規程で義務付けたい

ところですが、満たしたかどうか確認する手段はありません。結局は、何らかの選択をしたことの責任は、あくまでも生徒にあるのであって、インストラクターではないのです。

情緒的領域は広範囲に及ぶため、どのような分野に取り組みたいかによって、指導方法も異なります。ここでそのすべてを取り上げることは不可能なので、姿勢と意欲という、ダイバー・トレーニングに最も関連性があると思われる2つの分野について述べることにします。

姿勢を育てる指導方法

姿勢というものの本質については、様々な理論があります。BaronとByrneの見解については前述しました。姿勢とその特徴を分類した研究者もいます。KatzとStotland (1959, MartinとBriggsが1986年に引用)は、異なるレベルの情緒と認知要因がどのように行動に影響を及ぼすかに基づき、変えられるかどうかも含めて特定の特徴を持つ5種類の姿勢を定義付けしました。

情緒的連想 - 主として情緒的。過去にあった出来事との連想によって形成される。変えにくい。例えば、蛇が嫌いといった姿勢。

知的分析に基づく姿勢 - 主に認知構造によって形成される。情緒的な面は少ない。価値観と複雑に絡みあう。知的姿勢に基づく行動は予測が難しい。関連する信念が変わると変化することがある。例えば、政治的な姿勢。

行動型姿勢 - 主に情緒的。単純な直接的行動によってニーズを満たそうとする。認知的要素はほとんどない。他にニーズを満たす手段がない限り、変えるのは難しい。例えば、対決姿勢(説得に対する攻撃姿勢)。

バランスのとれた姿勢 - 試行錯誤を重ねたことで学んだ姿勢。認知的要素と情緒的要素の両方が強く働く。見返りがある方向へ行動を導く。見返りが変わる、認知的要因が変わる、あるいは目標に合った別の手法が見つかるとう変化することがある。例えば、住む場所を選ぶとき(通勤距離、文化、経済力などに関する姿勢)。自己主張型姿勢 - やはりバランス型だが、内面の葛藤と自己主張が原動力になっている。その行動は非生産的な方向へ向けられ、実際には葛藤の解決にはならない。人間的な成長、つまり自分自身を理解するについて変わっていく。例えば、前述の洞窟に入っていった生徒。指導とは、

行動に影響を与えるような姿勢を育てることを望んで行なうものですが、そもそも姿勢そのものが、行動によって形成されたものだという点があります。つまり、個人個人は、選択した行動の結果は体験しますが(他人がやっていることを観察した、親から受け継いだ、あるいは直接的に体験した事柄)、原因は内的に推測しているに過ぎないのです。見返りがあった行動は、その行動自体を一層強いものにするだけでなく、その行動につながる姿勢や認知的要因も強化することになります(Gagné and Medsker 1996, 116)。

研究者は、姿勢に変化があったとき、その人の内部で何が起きているのかについて、実践的な見地から様々な考え方を提案していますが、私達は主として、心理的なベースがどうであれ、ダイバーを教えるにあたって、姿勢に影響を与えるような指導をするにはどうすればよいかという面に関心を持っています。

生徒が行動を選択できるだけの知識とスキルを取得したら、次は実際のお手本を見せるのが、望ましい姿勢を作り出すための最も信頼できる方法だと思われま。生徒は、自分が尊敬する模範、例えばインストラクター、仲間、エキスパートなど、望ましい姿勢を反映する行動を体現している人物から学びます(Gagné and Medsker 1996, 116-117)(Dick and Carey 1996, 195-196)。お手本は、信頼できる、エキスパート、パワフルなどと生徒が思う人物でなければなりません。つまり、信頼できない人では、何のメッセージも伝えられないことになります。また、生徒が共鳴できる人である必要があり、その場にはいない人でもかまいません。ビデオやテキストの中に出てくる人でも、望ましい効果が得られます(Gagné and Medsker 1996, 117-118)。

だからこそ、インストラクターとしての皆さんの行動が重要な意味を持ち、「私がやったとおりではなく、言ったとおりにすること」というような口先だけのアプローチは役に立たないのです。インストラクターとアシスタントは、ダイビングのビデオに出てくる役者と同様に、常に模範でなければならぬのです。

A Deceptively Easy Way to Die (愚かな死)は、カースト・プロダクションズ、全米洞穴学会ケープ・ダイビング部会(NSSCDS)、DSAT、PADIが共同制作したケープ・ダイビングの安全キャンペーンビデオです。このビデオは、模範を使って姿勢を育てることの一例です。NSSCDS議長で模範的なエキスパートであるラマー・ハイヤーズ氏が登場します。

2人の若い男性(ケープ・ダイビングの事故で最も多い年代と性別)の間違った選択が悲惨な結果(洞穴内で死亡)を招いたというシーンを描き、正しい選択をすれば、楽しい結果(楽しいダイビングができて、無事に妻や恋人のもとに帰れる)が得られることを訴えています。ケープ・ダイビングに関心を持っているダイバーにやり方を教え、行動型とバランス型の姿勢に焦点を当てています。

もうひとつは、お手本が望ましくない姿勢を育ててしまう例です。例えば、スノーケルは装備しなければならない標準器材であることはわかっているのに、認定後、スノーケルをしなくなってしまうダイバーがいるのをたまに目にします。この場合の「お手本」は、スノーケルをしていないダイバーを写したダイビング雑誌の表紙の写真(おそらく、スノーケルがあると写真うつりがよくないという理由)や、スノーケルを使う必要がない理想的なダイビング環境で働いているインストラクターやガイドでしょう。

PADIダイブマスターを教える場合には、姿勢に関連した指導上のアドバイスがもうひとつあります。教育学の研究によると、ディスカッションは講義よりも、姿勢や信念を育てるのに効果があります。講義は、事実を学んだり、全体像を見たり、主題を方向付けたり、まとめをすることに適しています(Conrad 1982, MartinとBriggsが1986年に引用)。したがって、姿勢を育てようとするときには、望ましい行動とはどのようなものであるかを単に説明するより、選択、利点、結果などについて生徒にディスカッションさせたほうがよい結果が得られます。

話し合うことが効果的なのは、自分の現在の姿勢と新事実、つまり社会が認める姿勢との間に不一致があることを知ったときに、本人の姿勢が変化するからです。ディスカッションには、現在の姿勢と新事実との差を際立たせ、自由な選択ができるようにし、新たな望ましい姿勢を受け入れるための許容範囲を広げるという効果があります。グループ全体で受け入れれば、そこに社会的な推進力が生まれます(Martin and Briggs 1986, 137-138)。

意欲を育てる指導方法

PADIインストラクターにとって、意欲と指導に関していちばんよくある問題点は、学習と継続教育に関することではないかと思います。つまり、インストラクターとしては、テキストを読み、ビデオを見て、ナレッジレビューをやるという課題

をきちんとこなしてもらいたいし、コース後は次のレベルやスペシャルティを受けてトレーニングの幅を広げて欲しいと思っています。

学習に対する意欲は人それぞれ違うし、同じ人でも、テーマによって違ってきます。意欲は、好奇心や自己啓発といったような内面的な要因から発生することもあれば、昇給や同僚から認められるといったような報酬を得るための手段として、外的な要因から生まれることもあります (Gagné and Medsker 1996, 169-173)。

つまり、2人の生徒が同じスクーバのクラスに参加していても、ダイビングを習う動機はそれぞれ違っている可能性があり、そうなれば当然、学習に対する姿勢も違ってきます。内面的な動機を持っている生徒は、ダイビングの知識を得ることは価値があり、おもしろいと思っ

ているので、学ぶことに対する意欲が強くなります。一方、他の生徒たちは、クラスに出席するのは、認定カードを手に入れてダイビングできるようになるためには、どうしてもやらなければならないことに過ぎないと考えていて (外的要因)、最小限のことだけやればいいという姿勢を持っているかもしれません。また、動機は外的でも、安全にダイビングするにはルールを理解することが必要だと認識した結果、学習に取り組む意識が高くなる生徒がいるかもしれません。こういった違いが、よくある2つの極端な例の説明になります。ひとつの例は、オープン・ウォーター・ダイバー・コースの知識開発セッション4にやってきて、RDPをよく理解しているばかりか、その起源をボール・パートまでさかのぼれる生徒。もうひとつの例は、CD-ROMやマニュアルを持ってクラスにやってきますが、どれもまだビニールをかぶったままで、出席しただけで認定がもらえると思っている生徒です。

他にも意欲に影響を及ぼす要因があります。学んでいることが自分にとって利益になると信じているかどうか。学習過程で要求されるスキル、知識、課題をマスターできると信じているかどうか。今やっていることが確実に成果になると思っているかどうかなどです (Gagné and Medsker 1996, 172-173) (Martin and Briggs 1986 202-203)。

J.M.ケラーは、やる気にさせる指導としてARCSを提唱しました。ARCSとは、Attention (注目)、Relevance (関連性)、Confidence (自信)、Satisfaction (満足)の頭文字です (Gagné et al 1992, 117)。

注目とは、指導のスタートに際して

好奇心をかき立てることを意味し (IDCでコンタクトとして学んだこと)、指導媒体を変えることによって注意を引きつけることを意味します。デモンストレーション、補助教材、ディスカッションなどをプレゼンテーション織り交ぜることによって、興味を失わせないようにし、意欲を持続させます (Gagné and Medsker 1996, 174-175)。また、実際の人物や実際にあったトラブルの例を使ったり、学習内容を生徒の個人的な関心事と結び付けたりして注意をひきつけます (Martin and Briggs 1986, 206)。そのひとつの例が、RDPを教える場合です。適当な深度や潜水時間を使うのではなく、生徒がこれから行なうダイブを例題にして、実際のダイブのデータを使ってRDPの使い方を練習しているのだという点を強調します。

関連性とは、いま学んでいる事柄は自分にもあてはまることだと実感させることを意味します。これはスキルの向上につながり (内的な動機)、様々な収穫として戻ってきます (外的な動機) (Gagné and Medsker 1996, 175)。IDCでは、この関連性を価値と呼んでいます。知識を説明するときには、馴染みのある事柄に結び付けたり (人は知っていることについてさらに学習するのが好きなものです)、生徒の目標や動機に結び付けたりすることによって、価値、つまり関連性を持たせるようにします (Gagné and Medsker 1996, 175-176)。例えば、勉強して自分を伸ばしたいと考えるタイプの生徒には、RDPの使い方をしっかり勉強しておけば、将来、よりいっそう実力のあるダイバーになれると言え効果があります。コースは認定を得るための手段に過ぎないと思っている生徒には、RDPの使い方を学ぶことは、認定を受けるためのテストに合格するのに必要だと言えよいのです。

自信とは、学習目標を達成できると生徒自身が信じなければならないということの意味です。信じていなければ、トライしてみようとは思わないでしょう。まず、やらなければならないことを生徒が明確に理解しているかどうかを確認し、次に、ひとつひとつ成果を楽しみながら進めるように学習段階が設定されているかどうかを確認します (Gagné and Medsker 1996, 177)。

生徒に自信をつけさせるには、学習内容を易しくするのではなく、難度を高めたほうが効果があります。易しくし過ぎると、何かを達成しているという実感がなくなってしまいます。ただし、難しくし過ぎると、失敗につながります。ど

ちらも自信とやる気をなくさせます。一般的に言って、何かの課題に取り組んでいるときには、練習中にインストラクターが手を貸すのを徐々にやめていくようにすると、生徒は達成感を覚え、自信が培われます (Gagné and Medsker 1996, 177)。

また、うまくいくかどうかは100%自分自身の努力によるもので、自分の力の及ばない外的な要因によるものではないということを、生徒にしっかりと理解させることも重要です。自分の力ではコントロールできないと考えていたら、そこに意欲は生まれません。生徒が上手くやれるようにできるだけペースを合わせ、課題も生徒の能力に合わせるようにすれば、能力と成功との間に確固とした関連性を確立することができます。うまくできない生徒を手助けするときには、失敗は練習不足によるもので、能力不足によるものではないことを強調するようにします (Bar-Tal 1978, MartinとBriggsが1986年に引用) (Gagné and Medsker 1996, 177) (Gagné et al 1992, 117)。

IDCでは高得点を取っていたPADIインストラクター候補生でも、IEでしばしば不安感を感じるのには、能力はあるのに、それを自分ではコントロールできないと恐れていることが理由のひとつだと思われます。合格、不合格を決めるのは自分自身の能力ではなく、インストラクター・エグザミナー次第と思っているのかもしれませんが、ですからIEでは必ず、達成ベースで公平に評価を行なうことに関して、冒頭でかなりの時間を使います。

満足とは、学んだことの成果と生徒の期待が一致することです。生徒には、学んだことを実際に応用してみる機会が必要です。そのような機会がなかったり、あったとしても学んだことが具体的な成果をもたらさなかったりすると、これからも学びつづけようという意欲を失ってしまいます (Gagné and Medsker 1996, 178)。

PADIオープン・ウォーター・ダイバー・コースでは、学んだことを応用する機会であるオープンウォーターでのトレーニング・ダイブのときに、満足感が得られるようになっていきます。しかし、ダイバーになって (認定を受けて) 自分でダイビングに行き能力を試したときに初めて本当に満足感を感じるという生徒もいるようです。

このように満足感を得る段階が異なることが、オープン・ウォーター・ダイバ

ー・コースを修了してすぐにアドヴァンスド・オープン・ウォーター・プログラムに進む生徒もいれば、コースはもういいという生徒もいることを説明しています。内的な動機を持つ生徒は、学習すること自体から満足感を得ていると言えるでしょう。エントリー・レベルのコースを終えて期待に沿う結果が得られたことで、もっと続けようという態勢ができるのです。

一方、前述したように、外的な動機を持つ生徒は、オープン・ウォーター・ダイバー・コースはダイバーになるという目的への手段に過ぎないと考えている可能性があります。そのような生徒の場合、続けてアドヴァンスド・オープン・ウォーター・プログラムに進んでも満足感は得られません。認定ダイバーとしてダイビングをするまで、期待は満たされないからです。アドヴァンスド・オープン・ウォーター・プログラムに進むのは、さらにトレーニングをすることであり、「ダイバーである」という目的を満たすものではありません。そのような生徒には、トレーニングではないダイビングができる機会を作ることが、エントリー・レベル認定後に最も必要なことです。そうすることによって初めて、オープン・ウォーター・ダイバー・コースを受けているときから求めていた結果が得られ、満足感を体験できるのです。いったん満足感が得られれば、次のレベルへ進むことに対して、もっと積極的な姿勢を見せ

るかもしれません。

認定、トレーニングではないダイビング、お客様の満足感という3つの要素の相互関係については、さらに研究が必要だと思います。

満足感の中には快い刺激というものもあり、それは学習過程と直接的に結び付いています。そういった点で、言葉で誉めることは、人をやる気にさせます。ただし、生徒がやっていることを具体的に誉めるものでなければなりません。また、心からの誉め言葉であり、学習したことで能力が高まったときに誉めるべきです。言い換えると、下手でも「よくできたね」と手当たり次第に言ったり、生徒がすでにマスターしていることを誉めたりするのは、かえって意欲をそぐ結果になってしまいます。生徒が上達したときだけ誉めるとするのが正しいやり方ですが、上手にできないからといって皮肉を言ったり、脅したりするような行為は絶対にやってはいけません (Martin and Briggs 1986, 381-382)。

ダイビング指導における情緒的指導とは、主として姿勢を育成し(節度あるダイビングをする、環境を守るなど)、生徒の意欲を高く保つことです。インストラクター、スタッフ、PADIビデオに出てくる人物といったようなお手本役を上手に使うことによって、結局は生徒自身のためになる正しい姿勢を身につけることを奨励します。また、ARCSを応用することによって、生徒の意欲を保ち、ダイバー教育を続けたいという気持ちにさせることが理想的です。

参考文献

- Baron, R.A. and Byrne, D. (1987) *Social Psychology: Understanding Human Interaction* (5th ed). Boston: Allyn and Bacon.
- Bar-Tal, D. (1978) Attributional analysis of achievement-related behavior. *Review of Educational Research*, 48, 246-271.
- Conrad, C.F. (1982) Undergraduate instruction. In H.E. Mitzel (ed) *Encyclopedia of Educational Research* (fifth ed) pgs 1963-1973. New York: The Free Press.
- Dick, Walter and Carey, Lou (1996) *The Systematic Design of Instruction* (4th ed) New York: HarperCollins Publishers.
- Gagné, Robert M., Briggs, Leslie J., Wagner, Walter M. (1992) *Principles of Instructional Design* (fourth edition). Fort Worth: Harcourt Brace Jovanovich College Pub..
- Gagné, Robert M., and Medsker, Karen L. (1996) *The Conditions of Learning Training Applications*, Fort Worth: Harcourt Brace College Publishers.
- Katz, D. and Stotland, E. (1959) A preliminary statement to a theory of attitude structure and change. In S. Koch (ed) *Psychology: A Study of Science* (vol 3, 423-275). New York: McGraw-Hill.
- Martin, Barbara L., and Briggs, Leslie J. (1986) *The Affective and Cognitive Domains: Integration for Instruction and Research*. Englewood Cliffs, New Jersey: Educational Technology Publications.
- Sonnier, Isadore L. ed. (1989) *Preface, Affective Education: Methods and Techniques*. Englewood Cliffs, New Jersey: Educational Technology Publications.

PADIダイブセンター&リゾートのための 児童保護

概要

周知の通り、世界的な規模で児童虐待が深刻な社会問題になってきている。コミュニケーションのレベルと経路が増え、見知らぬ人と接触する回数が増えたことにより、虐待が発生する機会も必然的に増えていると考えられている。

一般に、「児童」は法定年齢未満の者と定義され、大半の国で、法定年齢は18歳である。この年齢層はスクーバやスノーケリング活動に活発に参加するグループであるため、事業活動に関与する児童の扱い方に関して品行方正を心がけることが、PADIメンバーにとって懸命な選択である。

児童虐待に関与する可能性がある活動に関わっている組織にとって、組織の活動中に虐待が発生することに対する適切な保護と予防対策を目的として、入念に考えた方針と手続きを導入することが、これまで以上に重要なことになってきている。危険にさらされる可能性のある者を保護するという主題に加えて、組織はその活動に関連した形で虐待が生じた場合に発生する法的責任ならびに社会的信頼の喪失から自分たち自身を守る必要もある。

保護におけるPADIの役割

PADIのトレーニングと倫理規準は、メンバーを前もって選別し、虐待の報告があった場合にはクオリティ・マネージメント・プロセスにより迅速にフォローアップし（ただちにノンティーチング・ステータスに変更する場合もある）、PADIメンバーを対象とした行動規範を規定することにより、児童保護に対処している。PADIはまた、ダイビング事業や学校で保護ガイドラインを導入して遵守し、正しい行動についての情報を広めることの重要性について、メンバーに教育を行なっている。さらに、「子供とスクーバ・ダイビング: 親とインストラクターのためのノウハウガイド」で、インストラクター、ダイブセンター、親にも教育を行なっている（第6章「子供との交流におけるプロフェッショナルとしての行動」を参照）。

PADIメンバーシップの義務 - 行動規範 (PADIインストラクター・マニュアル、プロフェッショナル・メンバーシップ・ガイドより):

PADIメンバーとして以下に同意してください:

- **PADIメンバー資格を受けてから、またはそれ以前に未成年者虐待に関わる刑事上の有罪判決を受けたことがある場合には、PADIメンバー資格の拒否または打ち切りの根拠となる。**

PADIは、次のようにPADI個人メンバー資格申請書で、有罪判決歴のある者を選別して取り除いている:

「私は、PADIのメンバー資格を受けてから、またはそれ以前に、私自身が未成年者虐待に関わる刑事上の有罪判決を受けたことがある場合には、PADIメンバー資格が自動的に拒否または打ち切られる根拠となることを理解し、それに同意します。」

PADIダイブセンター&リゾート・メンバー申請書:

「私は、本事業者がPADIのメンバー資格を受けてから、またはそれ以前に、本事業の事業主または株主が未成年者虐待に関わる刑事上の有罪判決を受けたことがある場合には、本事業者のPADIメンバー資格が自動的に拒否または打ち切られる根拠となることを理解し、それに同意します。」

世界規模のPADI組織は、子供の健康、安全、幸福が最も重要なことであり、年齢、文化、障害、性別、言語、人種、宗教に関わらず、絶対に妥協されるべきものではないという信念を持っている。PADIでは、PADIプロフェッショナルが開催するスクーバやスキンドайビング活動に子供が参加するときには、この点を確実に保証すべく、必要な対策を取っている。怠慢や責任放棄などの疑いや申し立てについては、重大に受け止めてただちに調査し、迅速かつ適切に対応するものである。

子供を教えたり監督したりするのは、楽しい特権であるとともに、責任を伴うことでもある。したがって、子供が参加している指導活動において、PADIメンバーは以下の義務を守らなければならない (PADIインストラクター・マニュアル、プロフェッショナル・メンバーシップ・ガイドより)：

ユース・リーダーの義務

1. 子供の健康、安全、幸福に注意する。
2. すべての指導活動において、適切な監督を行なう。
3. 可能な限り、子供の親または保護者に会い、プログラムの目的や目標について話し合う。
4. 進み具合などについて、できる限り頻繁に口頭で報告することによって、親または保護者にも関わりを持たせ、情報を伝えておく。
5. 年齢、人種、性別、宗教に関わらず、子供、親、保護者には敬意を持って対応する。
6. 子供に約束したことは守る。
7. しつけ上の問題がある場合には、親または保護者と話し合う。
8. 子供の身体に不適切な形で触れてはならない。
9. 子供のプライバシーを尊重し、健康や安全が脅かされる場合にのみ介入する。
10. 可能な限り、常に2人の大人が子供と一緒にいるようにする。

子供に対する怠慢や責任放棄が疑われる場合には、当局に問い合わせる適切な対策を取ること。

保護におけるPADIプロフェッショナルの役割

年齢、文化、障害、性別、言語、人種、宗教に関わらず、すべての生徒ダイバーおよびお客様の安全と幸福を最優先のものとするために、PADIプロフェッショナルは自らの行動を厳しく律しなければならない。PADIプロフェッショナルは人に大きな影響を及ぼす立場にいるものであり、特に子供を教える場合、その影響力はさらに大きなものとなる。したがって、高い道徳的基準を行動で示すことに対して重大な責任を負っている。

子供を扱う活動に定期的に関わっている者は、危害を受けた子供やその危険にさらされている子供を発見することに、重要な役割を果たすことができる。自分の国や地域に、虐待の徴候や症状を見分けるのに役立つだけでなく、そのような徴候に気づいた場合に、どうすれば適切に対応できるかについて規定した行動規範が制定されているかどうかを調べる。児童虐待を防ぐには、ダイブオペレーションがそれぞれ、すべての生徒ダイバーとお客を危害から確実に守り保護するという方針を取り、手順に従う必要がある。虐待の懸念がある場合にどうすべきか、またその場合の手順を規定したマニュアルがどこに保管されているか、スタッフ全員が知っているしなければならない。その責任を全うするために、このガイドラインについては、ダイブオペレーションの個々のニーズに合わせて使うことが推奨される。

自分の国や地域に、子供を扱うことに関する規則や法律があるかどうか調べ、ある場合には、それに従うことが最も重要である。例えばイギリスでは、Child Protection in Sport Unit (www.thecpsu.org.uk) から詳しい情報を得ることができる。オーストラリアでは、州と地域ごとに児童保護に関連した法律が制定されており、詳細はAustralian Sports Commissionのホームページ (www.ausport.gov.au/ethics/legischild.asp) で確認できる。特定の法律が制定されていない州や地域の場合には、www.kids.nsw.gov.au/check/intro.htmlおよびwww.childcomm.qld.gov.auに子供の扱いに関するガイドラインがあるので、これを参考にするのがよい。

PADIダイブオペレーション 児童保護に関するガイドラインと方針

児童への接近を管理する

誰が何らかの形で児童を虐待しかねないか予測するのは不可能なので、不適切な人物が子供に接近するのを防ぐ対策を講じることが大切である。子供が参加する活動を担当する人は、子供に身近で接触する立場の人間として適任かどうかについての基準を満たすべく、あらゆる対策を講じなければならないというのが基本的な原則である。したがって、子供と直接的に関わることになる人を雇うときには、厳密な採用手順を導入し、それに基づいて就職希望者を審査する必要がある:

- 雇用法ガイドラインに沿って、子供を扱う適性に関連した刑事上の有罪判決を受けたことがないかどうかに関する情報を要請する。
- 履歴書や求職申請書が揃っていることを確認し、職歴に空白期間がある場合には、その理由が説明されていることを確認する。
- 以前に子供を扱ったことがある場合には、そのときの仕事に関する身元保証人を含めて、少なくとも2カ所の信用照会先を要請する。その信用照会先が信頼できるかどうかを調べる。
- 必要であれば、就職希望者の同意を得てから、前科を確認する。
- 従業員および就職希望者のプライバシー、合法的に聞くことのできる質問の種類などに関する地域法と国内法を確認し、熟知する。

厳密な雇用方針を導入すると同時に、正しい行動を実践し監視することが、最終的には最も信頼できる児童保護の手段になる。

担当スタッフ

適任の管理スタッフを児童保護担当者として指名し、ダイブオペレーションの方針を従業員に伝えて徹底させ、定期的に検討するのがよい。この担当者は、コミュニケーションに長けていて(特に子供とのコミュニケーション)、児童虐待に関するさまざまな問題を理解し、法律や適切な行動についての最新情報を把握していて、落ち着いて然るべき手順を踏むことができ、決定を下す権限を持っている者でなければならない。

適切な行動

児童の安全と幸せを促進し、あらぬ疑いをかけられる可能性を減らすために、優れた模範的行動を実践するようスタッフ全員に奨励する。適切な行動の常識的な例を以下に列記する:

- 敬意と威厳を持ってすべての人を平等に扱う。
- 子供を担当しているときには人目にふれる場所にいることを心がけ、完全に2人きりになる状況は避ける。

- 手で支えるなどの動作が必要な場合には、前もって言ってから行なう。
- 可能であれば、子供が更衣室で着替えるときには、その子供の親に監督役を引き受けてもらう。更衣室で複数の子供を監督するときには、必ず他の監督者と2人1組で担当する。
- 人目につかないスペースがない場所を使用する。
- 男子と女子が混ざったグループをツアーなどに連れて行くときには、スタッフとして男性と女性の両方が同行する。
- 乱暴なゲームや身体がぶつかり合うゲーム、あるいは性的に挑発的なゲームは絶対にしてはならない。
- 子供と同じ部屋に宿泊してはならない。
- むやみに子供の身体にさわることを許したり、自分でさわったりしてはならない。
- 子供が申し立てたことを、そのままにしてはならない。
- 私的な物事で子供が自分でできることは、絶対にしてあげてはならない。
- 2人きりになるような状況で自宅や職場に子供を連れてきたり、一緒にいてもよいと言ったりしてはならない。

子供が年少の場合や障害がある場合には、私的な性質の物事を子供にしてあげることが必要な場合もある。その場合には、親と子供の十分な理解と同意を得た上で行なうべきである。子供の反応に注意する必要がある、子供が完全に依存している場合には、何をしているかを伝え、選択肢がある場合には、子供に選ばせるのがよい。特に、服を着せたり脱がせたりするときや、何かをするために子供を抱いて持ち上げたり、手を貸したりするときに必要である。

自分しかいない状況で子供を自宅や職場へ連れて行ったり、他の人から離れた場所で子供と長い時間を過ごしたりしてはならない。また、例え短い距離であったとしても、子供だけ車に乗せて行くのは避ける。どうしてもそのような状況になる必要がある場合には、職場の責任者または子供の親に知らせ、同意を得た上で行動すべきである。

誤って子供を傷つけてしまった場合や、子供が困っているように見える場合、あるいは自分がしたことを子供が誤解しているように見受けられる場合には、できるだけ早急にそのことを報告し、起きたことについて簡単に書き留めておく。親にもそのことを伝える。

写真、撮影、出版

子供がいるところで写真やビデオのコースを実施する場合や、公共の場やプールなどで開催されるダイビングのイベントで写真撮影を行なう、または許可する場合には、さらなる責任が加わることを認識する必要がある。

- 所定の書類を使って、画像を使用することに関して親の承諾を得る。
- 画像を使うことに関して本人の承諾を得る。
- 写真に付ける説明文に子供の氏名は入れない。名前を挙げる場合には、その子供の写真は使用しない。写真を使う場合には、子供の名前を入れない。
- 不適切に使われるのを防止するために、適切な背景で適切な服装している子供の画像のみ使用する。ダイビングおよび関連活動を背景とした画像は、活動全体に焦点を当てたものでなければならない。何が適切かを判断する際に、子供の年齢も考慮する必要がある要素のひとつになる。

- 公共の場では、受け持っている子供が無許可で写真やビデオに撮られてしまうことのないよう十分に注意する。
- 関係者全員 (スタッフ、他の生徒ダイバー、親、許可を受けたカメラマンなど) が、写真撮影についての決まりを理解し、苦情に対する対処法を知り、適切な行動を遵守するよう徹底する。
- 関係者全員 (他の親を含む) が、互いの写真やビデオを撮ることについての承諾を得るよう徹底する。
- 画像／フィルムはすべて、安全な場所にしっかりと保管する。

トレーニング

児童保護 – 可能であれば、虐待が起こる可能性がある状況を認識し敏感に対応できるよう、スタッフを対象に児童保護に関するトレーニングを行なう。トレーニングのプログラムについては、自治体の関係機関から入手でき、インターネットでも探すことができる。

ファーストエイド – スタッフ全員が、エマージェンシー・ファースト・レスポンス一次ケアと二次ケア・コースに加えて、子供のためのケア・コースで最新のトレーニングを受けていることを確認する。ケガなどの事故については文書に記録してダイブセンターに保管し (PADI事故報告書を使用)、PADIへ提出する。子供がケガをした場合には、必ず親／保護者に報告し、どのようなファーストエイドを行なったか伝える。緊急事態の場合には、即刻、専門の救急隊を要請する。

児童虐待とは？

児童虐待とは、意図的な行為または常軌を逸した怠慢行為によって引き起こされた子供への危害と定義され、身体的虐待、性的虐待、精神的虐待、怠慢の4種類がある。虐待者は、家族の場合もあれば、スポーツやレジャー活動中を含めて、子供が公共の場で遭遇した他者の場合もある。子供を直接的に虐待または放置する場合と、別の人が子供を傷つけるのを防止するのを怠ったことにより、虐待に対する責任があると見なされる場合がある。

- 身体的虐待 – 殴る、強く揺する、投げる、毒を盛る、焼く、噛む、熱湯につける、窒息させる、溺れさせるなどの行為を含めて、大人または若い人が子供の身体を故意に傷つけることを言う。
- 性的虐待 – 大人または若い人が、子供を使って自分の性的欲求を満たすことを言う。子供にポルノ (本、ビデオ、写真) を見せたり、性的に露骨な言葉遣いで子供と話をしたりすることも、性的虐待と見なされる。
- 精神的虐待 – 子供の感情を執拗に傷つけることを言い、精神的発達に深刻で永続的な影響を及ぼす可能性がある。お前は価値がない、愛されていない、能力がない、あるいは、他者の必要を満たすということに関してだけ価値があるというようなことを子供に言うという行為も、精神的虐待と見なされる。また、子供の年齢や発達段階に適さない期待をかけることも精神的虐待である。常に怒鳴られ、脅され、なじられることで、子供は怯えたり危険を感じたりし、緊張して人と目を合わせることができなくなる。どのような形であれ、子供の虐待には、必ずある程度の精神的虐待が関わっている。
- 怠慢 – 子供の健康や発達が深刻に阻害される結果を引き起こすほどまでに、大人が子供の基本的な身体的および精神的ニーズを満たすことを怠ることを言う。例えば、十分な食べ物、住まい、衣類を与えない、子供を身体的な危害や危険から守らない、あるいは適切な医療や治療を受けさせないことを言う。子供に愛情や思いやりを与えること拒否することも怠慢と見なされる。

虐待の徴候

子供が虐待を受けているかもしれないことを示す徴候:

- 打撲、切り傷、火傷など、説明できない、あるいは疑わしい傷。特に、普通ならそのような傷はできない場所にある場合。
- なぜ傷を負ったのかについての説明が矛盾しているように思われる。
- 虐待行為を受けたのではないかと思われるようなことを子供が言う。
- 行動に説明できない変化が見られる (例、引っ込みがちなる、子供に不釣り合いな性的意識など)。
- 明らかに性的な行為をする。
- 大人を信頼しない。特に、普通なら子供が親しい信頼関係を持つ相手に対してそうである場合。
- 友達を作れない。
- 他の子供と遊ぶことができない。
- 過食や食欲を失うなど、食べ方が変わる。
- 明らかな理由がないのに体重が減少する。
- 子供の外見が次第に汚れ、服などがよれよれになっていく。

虐待が疑われる場合にどうすべきか？

スタッフはダイブオペレーションの経営者に報告し、経営者はただちに警察当局に連絡して適切な対策を決定する。人に対する虐待行為は刑事問題なので、即座に関係当局に報告し、そのアドバイスに従うべきである。第二に、PADIメンバーが虐待に関わっている場合には、クオリティ・マネージメント・アシュアランス・レポートをPADIリージョナル・ヘッドクォーターに提出する。

ISO規格とPADIコース

国際標準化機構 (ISO) 加盟諸国により、レクリエーション・ダイビング・サービス規格が作成され、承認されている。

PADIはこの規格策定において主導的役割を果たしている。これは何年もかかるプロセスであり、最終的に策定されるISO規格をPADIコース規準にできる限り近いものにすべく、世界各国からPADI代表者が参加している。世界各国のPADI代表者が開発に関わっている。

ISO規格はなぜ重要なのか？

理由:

- 各ISO規格は、ダイバーのレベルまたはサービスに対して最低限期待される力量を表すもので、ダイビング業界を代表する国際的グループにより同意されている。この規格を順守していることを表明することにより、法的責任保護が強化される。
- ISO規格を参考にすることにより、消費者は製品 (この場合はダイバートレーニング) を比較し、独立した基準と比べることができるようになる。
- ISO規格は、ツアー業者といったような企業が、どの指導団体や事業者とパートナーを組めばよいか決めるのに役立つツールとして利用できる。
- ときに国や地方自治体が、スクーバ・ダイビングに規制をかけるという決定をすることがある。この場合、規制のベースとして新たに規格を作成するより、ISO規格を導入する可能性のほうが高く、規制をかけなければならないのであれば、意味のある有効な規制を導入するほうがはるかによい。

ISO規格とそれに相当するPADIプログラム／メンバー:

ISOタイトル	ISO番号	PADIプログラム／メンバー
スクーバ・ダイビングの入門トレーニング・プログラム	ISO 11121	ディスカバー・スクーバ・ダイビング
ダイバー・レベル1 - 監督者付きダイバー	ISO 24801-1	PADIスクーバ・ダイバー
ダイバー・レベル2 - 自立ダイバー	ISO 24801-2	オープン・ウォーター・ダイバー
ダイバー・レベル3 - ダイブ・リーダー	ISO 24801-3	ダイブマスター
エンリッチド・エア・ナイトロックス・ダイビングのトレーニング・プログラム	ISO 11107	エンリッチド・エア・ダイバー
インストラクター・レベル1	ISO 24802-1	アシスタント・インストラクター
インストラクター・レベル2	ISO 24802-2	オープン・ウォーター・スクーバ・インストラクター
レクリエーション・スクーバ・ダイビング・サービス・プロバイダー	ISO 24803	ダイブセンター／リゾート

これらの規格は、それぞれ特定のPADIプログラムまたはメンバーレベルに相当する。つまり実質的に言って、これらの資格のいずれかを持っているダイバーまたはメンバーは、該当するISO規格の条件を満たしていると言うことができ、一度に2つの資格認定を取得したことになる。

これは、PADI認定に対する国際的な認知度がますます高くなるということを意味する。すでにPADIの資格認定はダイビング業界で最も認知度が高いが、ISO規格のおかげで、さらに国際的に理解されやすくなる。ISO規格は、ダイバーの資格を比較するのに用いることのできる国際的な基準である。つまり、ダイバーにとっては海外へダイビングツアーに行きやすくなり、PADIプロフェッショナルにとっても、海外で仕事がしやすくなる。

ISO規格のコピーは各国の標準化団体で入手できる。連絡先については、www.iso.orgにあるメンバーリストを参照。

メンバーシップ 手続き



PADI[®]

認定カード申請

手続き

以下の手続きに従って、遅れや処理上のミスを防止する。

1. PADIオンライン・プロセッシング・センターは、PADIスクーバ・ダイバー、ジュニア・スクーバ・ダイバー、オープン・ウォーター・ダイバー、ジュニア・オープン・ウォーター・ダイバー、アドベンチャー・ダイバー、アドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー、ジュニア・アドベンチャー・ダイバー、ジュニア・アドヴァンスト・オープン・ウォーター・ダイバー、レスキュー・ダイバー、ジュニア・レスキュー・ダイバー、スペシャルティ・ダイバー、スキン・ダイバー、PADIフリーダイバーとTecRecなどの各コースで、生徒ダイバーをノンメンバーシップ・レベルに認定するのに使用する。
 - a. ほとんどのPADIデジタル教材には認定カード処理が含まれている。PADIオンライン・プロセッシング・センターを使用して、デジタル教材のアクセスコードを管理し、認定カードを処理する。
 - b. ダイバー教材に認定処理が含まれていない場合は、PIC Onlineを使用して認定カードを請求する。PICは他のオプションです。
2. PADIオンライン・プロセッシング・センターを通じてエマージェンシー・ファースト・レスポンス (EFR)の認定カードを請求する。エマージェンシー・ファースト・レスポンス (EFR) 修了カードの申請には、写真を付ける必要はない。
3. 生徒ダイバーが個人のアドレスとEメール情報を必要とする部分を提出、または完成させる
4. 認定インストラクターは、PADIダイブセンター／リゾート情報などの必要事項をインストラクター記入欄に記入する。すべての情報が正確に記入されていることを確認する。PADIダイブセンター／リゾート名は、現在のダイブセンター／リゾート番号が記入されている場合のみ、ダイバーの認定カードに記載される。また、番号を記入しておけば、生徒ダイバーの認定は確実にダイブセンター／リゾートのファイルに登録される。
5. 生徒ダイバーの顔と肩までが鮮明に写っている3cm×4cm／13/4×21/4inの写真と同封する。カードは本人であることを証明するためのものなので、サングラス、変色レンズ、帽子、水中写真などは不可である。背景がベージュ色、黄色、薄茶色のものは避ける。
 - 生徒ダイバー側の事情で遅れた場合を除いて、コース修了後7日以内に認定カードを申請しなければならない。期限内に写真を入手できない場合には、とりあえず写真無しでプロセッシング・センターに提出しておけば、PADIオフィスはダイバーの認定情報を保管するが、写真を受け取るまでCカードは発行しない。このようにしておけば、インストラクターは認定に対するクレジットを得ることができ、PADIオフィスはダイブ・チェックで認定を確認できる。後日、生徒ダイバーが写真を提出してカードを請求すれば、カードは発行されるが、もし12か月以上たってしまうとカード再発行手数料がかかる。
6. 認定カードの送り先として、インストラクター宛て、PADIダイブセンター／リゾート宛て、または生徒ダイバー宛てのいずれかを指定する。特に指定がない場合には、認定カードは自動的に生徒ダイバー宛てに送付される。
7. 認定カードを受け取るまでの間、ダイバーにテンポラリーカード (PICおよびPICオンラインの一部として含まれている) を発行する。

- もしPICを郵送する場合は生徒ダイバーが個別に送るのではなく、インストラクター、ダイブセンター／リゾートがまとめて郵送したほうがよい。正確に発送されたかどうかの確認や、PADIメンバーの認定クレジットも確実に受けることができる。地域により配達記録付きでPICを送ったほうがよい。
- カードの処理には数日かかる。ある程度の期間が経過しても認定カードが送られてこない場合には、PADIオフィスに問い合わせてください。個々のスチューデント・レコードを保管する以外に、生徒ダイバーの氏名、コース日付、連絡先、認定情報が記録されたトレーニング修了記録も保管しておいたほうがよい。そうしておけば、行方不明の認定カードについて調べる必要が生じた場合に、調査がしやすくなる。
- 認定カードと一緒にPADIバリデーション・カードが郵送されてくる。バリデーション・カードは、認定カードを紛失したり汚したりした場合の再発行に必要で、安全な場所に保管するよう生徒ダイバーに伝える。

事前登録認定手続き

生徒ダイバーを事前登録しておく、コース修了時に認定カードを手渡すことができる。ただし、生徒ダイバーにこのサービスを提示する前に、コース期間の都合上、事前登録することが実際に役立つか、生徒ダイバーが自分のところでコースを修了しそうかどうか（委託照会を受けて別の場所でトレーニングを修了することにならないか）などの点を検討する。生徒ダイバーの事前登録は以下の手続きに従って行ない、PADI認定カードを取得する：

注意：生徒ダイバーの事前登録が所属PADIオフィスで実施されているかどうかを確認する。

- PICオンライン、もしくは郵送で、ノンメンバーシップ・レベルの認定カードを申請する。該当欄に、事前登録ダイバー認定カードを申請していることを明記する。
- 住所とEメールアドレスを含めて、生徒ダイバー本人が生徒ダイバー記入欄に必要事項を記入する。認定インストラクターは、PADIダイブセンター／リゾート情報などの必要事項をインストラクター記入欄に記入する。
- 生徒ダイバーの顔と肩までが鮮明に写っている3cm×4cm／1³/₄×2¹/₄inの写真と同封する。
- 認定カードの送り先として、インストラクター宛て、PADIダイブセンター／リゾート宛てのいずれか指定する。事前登録カードを生徒ダイバー宛てに送ることはできない。
- 必要事項をすべて記入し、認定処理をPADIオフィスへ送信する。カードの処理には最低2週間ほどかかる。
- 事前登録認定カードが届いても、コース認定条件をすべて満たすまで生徒ダイバーには渡さない。
- 認定インストラクターは、添付のPADIバリデーション・カードに署名して日付を記入し、認定カードと一緒に生徒ダイバーに渡す。
- PADIオフィスに事前登録した生徒ダイバーの認定がいつ頃になるか予測できなくなった場合は、その生徒ダイバーの認定カードとバリデーション・カードを破棄し、認定削除通知書を使って、生徒ダイバーの事前登録認定記録を削除するようPADIオフィスへ届け出る。後日トレーニングを修了することになった生徒ダイバーの認定カードは、インストラクターが保管し、認定条件をすべて満たした時点で発行する。

カード再発行手続き

ダイバーはpadi.comを通じて交換用カードを入手することができます。紛失などによる認定カードの再発行、あるいは名前が変わったダイバーに新しい認定カードを取得するアシストを行なう場合は、以下の手続きに従う：

1. PADIオンライン・プロセッシング・センターとPICオンラインを使用して、新しい認定カードを処理する。
2. PICに紛失または名前変更のためのカード再発行依頼だという点を明記し、PADIオフィスへ送付する。認定の日付、トレーニングのレベル、ダイバー番号など、できる限り当初の認定情報を書き込んでおく。ダイバー本人に現住所など必要事項を生徒ダイバー記入欄に記入させ、写真を同封する。
3. 認定カード再発行申請書をPADIオフィスへ送付する。ダイバーのPADIバリデーション・カードがあればコピーを同封し、できる限り当初の認定情報を書き込み、写真と手数料を同封する。

記入した情報があいまいだったり不正確だったり、記入漏れがあったりすると、照合ができない場合がある。その場合には、カードの再発行はできない。

ジュニア・ダイバー・アップグレード手続き

ダイバーはpadi.comを通じて新しいカードを入手することができます。しかし、15歳になったジュニア・ダイバーのアップグレードをアシストするには、以下の手続きに従って行なう。

1. PADIオンライン・プロセッシング・センターとPICオンラインを使用して、新しい認定カードを処理する。アップグレードされたカードは、ダイバーの生年月日に基づいて発行される。
2. PICにジュニア認定レベルのアップグレードのためのカード再発行依頼だという点を明記し、PADIオフィスへ送付する。認定の日付、トレーニングのレベル、ダイバー番号など、できる限り当初の認定情報を書き込んでおく。ダイバー本人に現住所など必要事項を生徒ダイバー記入欄に記入させ、写真を同封する。
3. 可能であればダイバーのPADIバリデーション・カードのコピーを同封し、写真と手数料を添えて、認定情報を可能な限り記入した認定カード再発行申請書をPADIオフィスに提出する。

注意：アップグレード申請者がジュニア認定を受けてから1年以上経過している場合には、ReActivateプログラムを受けることが推奨される。

申請手続き

各種PADI認定申請書を提出する際には、以下の手続きに従って遅れや処理上のミスを防止する:

1. 各認定レベルに対し、最新の申請書式を使用する。申請書は、マスター・スクーバ・ダイバー、ダイブマスター、アシスタント・インストラクターの認定、ならびにインストラクター・レベルの継続教育認定を申請するのに必要である。
2. 住所とEメールアドレスを含めて、申請者本人が申請書の生徒ダイバー記入欄に必要事項を記入し、署名する。
3. 認定または証明インストラクターは、インストラクター記入欄に必要事項を記入して署名する。すべての情報が正確に記入されていることを確認する。文字ははっきりと読みやすいように注意して書く。訂正箇所にはイニシャルを記入する。PADIダイブセンター／リゾート名は、現在のダイブセンター／リゾート番号が申請書に記入されている場合のみ、ダイバーの認定カードに記載される。
4. 申請者の顔と肩までが鮮明に写っている3cm×4cm／1³/₄×2¹/₄inの写真と同封する。カードは本人であることを証明するためのものなので、サングラス、変色レンズ、帽子、水中写真などは不可である。背景がベージュ色、黄色、薄茶色のものは避ける。写真の裏側にダイバーの氏名を明記する。
5. 申請料については、最新の価格表を調べるか、PADIオフィスに問い合わせる金額を確認する。
6. 申請書に記載されている要求事項に従って、各種書類を添付する (PADIへ提出する前に、申請書と添付書類のコピーをとっておいたほうがよい)。
7. 必要事項をすべて記入した申請書をPADIオフィスへ送る。
8. カードの処理には最低2週間ほどかかる。ある程度の期間が経過しても認定カードが送られてこない場合には、PADIオフィスに問い合わせる、申請書が届いているかどうかを確認する。

